

リコリス・ラジャータ

暇を司りし神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは小さな吸血鬼の皆と仲良くなる……はずの物語だった。  
全てはある現人神のせいだった。

これは全てを1度失った小さな吸血鬼の復讐の物語である。

# 目次

始まりのイチイ

ワクワク

アダマス

壊される前

崩壊

真の崩壊

白のアネモネ

私は…

練習

まだ練習

白のアネモネ

美しき黄色のスミレ

彼岸花を挿した幼女

忙しいアツサ

雪合戦

死の桜

なぜ教えない？

喧嘩に始まり勝負に終わる

はて？煽りましたっけ？

え、もう集めてたんですか？

煽るの無しです！

やってあげましょう

酒呑み達のサイネリア

夢も宴会も儂いもの

お酒呑みたい

59

52

46

39

29

21

15

8

1

141

134

128

121

115

108

100

93

86

78

69

意識外からこんにちは	148
つつい……	155
旧地獄内部	161
動き	167
犯人	174
何故そうなったのか	184
強い○	190
強い	195
その後	201
相見えるその時まで	207
どうして	213
バカ三人組	219
恐怖の言葉	219

虚しく響く	225
妻バカ	231
スノードロップを贈る者	237
動き出す	244
歴史	250
永遠を生きる者	256
聞きたくなかった	262
災害をもたらす薬	269
来てしまった最強	276
壊れた後	282
夾竹桃な代償	287
あのですね……	287
一方的	287

ええ……	294		
変態共め	299		
クローバーの為			
ブラックコーヒー	305		
いくらなんでも……	311		
何故？	318		
社畜さん	324		
修練好き	331		
【人】についての設定	337		
ロベリアには注意せよ（コラボ）			
連れてこられたのは……？	345		
目覚めたのは	351		
目覚めたのは（禍津神砕過君視点）			
恐ろしい怪物	361		
恐ろしき自然の力……？（禍津神砕過			
君視点）			
ヒント	377		
無縁塚に行こう（無理矢理）【禍津神砕			
過君視点】	386		
閻魔	395		
なんでもお見通し（禍津神砕過君視点）	402		
罪と罰	410		
お手合わせ（禍津神砕過君視点）	417		
	426		

リコリスラジアータが咲く頃に

始まり

飛ばれ、咲いて

本当の話

死んだ最強

リコリスラジアータ

432

441

449

457

465

# 始まりのイチイ

## ワクワク

? 突然ですがどうも、私の名前は愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットです。

? はい、私はレミリア・スカーレットお姉様とフランドール・スカーレットお姉様の妹です。

? 今、私はフランお姉様の部屋よりも更に奥の地下室にいます。何故かって?? 簡単です。私が能力を上手く使いこなせていなかったからです。

? 私の能力はありとあらゆるものを殺す程度の能力つていう物騒にも程がある能力です。まあ、フランお姉様の能力も大概ですけど……。

? 因みに今はレミリアお姉様と、パチュリーさんが協力して紅い霧を出しているところです。

「お姉様達……大丈夫かな?」

? 咲夜さんから聞いた話ですが、どうやらここ幻想郷には、妖怪退治を生業とする博麗の巫女という人がいるそうな。

? レミリアお姉様程では無いかもしれないけれど、腕が立つらしいのでどうしても不安

に感じてしまうのです。

?ドカーン!!

「……確か、スペルカードルールってというのは綺麗な弾幕を出すっていうルールとかかなんとか。なら今の爆発は何なんでしょうか?」

?流石に、そこまで高威力の弾幕になると綺麗とは程遠いはずですが……。まあ、よっぽど威力を重視したんでしょね、博麗の巫女は。それ程までにレミリアお姉様が強いってことですね!?妹ながら、少々嬉しくなるものです。

?そう言えばフランお姉様はどうしているのでしょうか……。私の部屋には結界が張られているので、簡単には外には出られません。まあ、私が結界を破ろうとしてないっていうのもあるんですけどね。

?破ろうと思えばこのくらいの結界は破れますよ、多分。

?……あれ??外に蔓延していた筈のレミリアお姉様の妖力が消えた……ってことは、紅い霧は消えてしまった?

?なるほど、博麗の巫女はそれなりにやるみたいですね。

「もし、戦うのであれば、楽しそうですね。ワクワクしてきましたよ……♪」  
?ワクワクどころか殺意まで溢れてきたのは内緒ですけどね。



?その後、レミリアお姉様は何処かへよく出掛けるようになりました。

?因みにですが、妖力をたどって何処へ行ってるかまでは特定して無いですよ??流石にそれはストーカーってやつですからね。

?更に言うなら、私はレミリアお姉様やフランお姉様、後は美鈴の妖力とか、パチュリーさんの魔力なら分かっています。咲夜さんのは、霊力ってやつなのでよく分かりませんでしたね……。それに咲夜さん、時間止めたりして急に移動するから感じにくいんですよね。

「……?こちらに向かつてきている魔力と……これは、霊力ですかね?」

?明らかにおかしい。何故紅魔館に向かつてきているのだろうか?

?そう言えば、フランお姉様が自分の部屋にいない……。

?ところで、レミリアお姉様、誰かに私とフランお姉様のこと、伝えたのかな??もしそうなら、前レミリアお姉様を倒したと思われる博麗の巫女も来るのかな?

?楽しくなるかもしれない。きつとフランお姉様も一緒に楽しみたいハズだ。

「じゃあこの結果、破りますか」

?そう言つて私は能力を発動する。大丈夫だ、450年間も練習してきたじゃないかと自分に言い聞かせる。

?やはり、自分の能力が暴走してしまうのは怖い。もし本当になってしまったらと、つい考えてしまう。

?いや、今はそんなことを考えるな、自分は失敗しないだろう??と心の中で言った後、境界を壊した。いや、正確には境界を殺した。と言うべきだろう。

?まあ、あくまでも境界は張った人の気持ちが入っている。それを殺すのだ。

?別に能力を使わなくとも力技で壊すことはできるのだけど、今日は出血大サービスだ。

「取り敢えず、早く図書館に出ますか……」

?パチュリーさんがよく居る——どこるか住んでいると言っても過言ではない図書館?  
?そこは地下ということもあり、ちよつと埃っぽいとか……。おそらくあんなところ  
ろにいるから、パチュリーさんは喘息なんじゃないですかね。

「出れたはいいいけど……つてパチュリーさん倒れてるじゃないですか。大丈夫です?」

「むきゅー……つてアツサじゃないの。結界は……壊したのね。取り敢えず、フランが向  
こうで博麗の巫女とその辺の魔法使いと戦ってるから行ってみれば??そのつもりで出  
てきたんでしょ?」

「み、見破られてる……。流石はサトリ妖怪。パチュリーさん。ところでパチュリーさん、  
結界を殺したの怒らないんですか?」

「もう十分に能力を扱えてると思つたからよ。多分レミイも同じことを言うと思うわ」

「パチュリーさんの太鼓判があれば、私も自信が持てます……。兎も角、向かいますねフ  
ランお姉様の所へ(倒置法)」

「ええ、行つてらっしゃい」

?パチュリーさんに見送られて、フランお姉様の所へ急ぐ。

?なにしろ、ちよつとだけフランお姉様が押されているからだ。

?こうなつてくると、かなり期待をしてもいいのかもしれないと思ひ始める。

?その辺の魔法使いも気になる。おそらく人間だろうから対話するのも楽しみだ。ま

あ、その前に戦うつもりなのだが。

「行かれるのですか、アツサ様」

「咲夜さんか。うん、そうするつもり」

「左様でございますか。止めるつもりはありません。私も彼女らにやられたのでその憂さ晴らし……ですかね？」

「つて、こんな話してる場合じゃないです!?! フランお姉様がやられそうなんです!」

「フラン様もですか……。取り敢えずあんな二人組、蹴散らして来てくださいね!」

「う、うん!?! 頑張る!」

? 咲夜さんとそんな会話をした後、やられかけているフランお姉様の元へと急ぐ。

? 急ぎつつも、咲夜さんと話していると精神年齢が下がるのは何故だろうかと考えた。

咲夜さんはもしや、相手を幼児退行させる程度の能力を具有しているのかもしれない。

? 今は図書館を出て、我が家ながら長すぎると感じる廊下にいる。廊下は吸血鬼である私達が住んでいるだけあって、少し暗め。

? 外は雨が降っていた。ただ少しだけ遠くを見ると、何故か晴れやかな空が広がっている。

? 少し考えてみれば分かることだが、パチュリーさんが魔法で雨を降らしていたのである。フランお姉様かもしくは私が外に出ないようにだろう。

? 少しずつ、物音が大きくなってきている。もう少しでフランお姉様の所に着くだろう。

? それにしても、図書館の外でやっているとは……あまり狭いところで戦うのはどうかと思ってしまう。

「そんなことを考えていると、さつきよりも物音が大きく、そしてよりハッキリと聞こえるようになりましたっね!」

実際、もうすぐそこだろう。二人分の人影が見えた。

「へえ、これが弾幕。実際に見てみると綺麗だなあ……。本当、なんでこの前ドガンッってあんな大きな音がしたんだろう。謎が謎を呼ぶぜ……」

? なんて言っているうちに、ハッキリとフランお姉様の姿が見えてきた。

? それに、何故か脇が見えている恥ずかしい巫女服姿の人や、いかにも魔法使いといった感じの、白黒の衣装を装った人もいる。

「巫女服着ている方が博麗の巫女だよね。戦うの楽しみだなあ……」

? これから起こる戦いを前に、ワクワクしてきた私であった。オラわくわくすつぞ。

## アダマス

「アレ??アツサじゃない!」

「フランお姉様……思ってた以上に服ポロポロですね」

「何??まだいるの?」

フランお姉様思ってたよりもコテンパンにやられてるなあ……狭くてやりづらいつてもあったのかな?

それと、あきららかに飽き飽きしてるのが博麗の巫女だろうか?

「あなたが博麗の巫女?」

「紅白のが博麗霊夢、つまり博麗の巫女。それでその白黒が霧雨魔理沙っていうらしいよ。」

「……フランお姉様が答えるんですね」

「久しぶりに話すからね!?!妹との関係は良好に保たなくちゃね!」

「そ、そうですね」

「というか、お前もレミリアの妹なのか??そのフランってやつの妹ってことは」

「まあ、そうなりますね。にしてもフランお姉様も倒しましたか……」

流石にフランお姉様まで倒されたとなると、この二人は相当な実力者とみて良さそうである。ますますワクワクしちゃうね。

それにしても、博麗霊夢と霧雨魔理沙かあ……レミリアお姉様を倒したのもこの二人ってことでいいんだよね……うん。ひよつとしたら負けるかもしれない。

「でも楽しくなりそうだなあ……」

「あんだ、早く名乗りなさいよ……」

「え?? ああ、ごめんなさい。私は愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット、レミリアお姉様やフランお姉様の妹ですよ」

「名前が長い上にミドルネームとは……恐れ入ったわね」

「なんで日本名が入ってるんだ?」

「あー……、話すと長いです多分」

「アツサツ?なんで最後で自信なくすのき……」

「フランお姉様……。正直、そんなに長くない気がする……簡単に言えば日本で人間に拾われてたってだけですから」

まあ、拾われたからってだけではないけれど。

「日本で拾われていた、ねえ……。なんだか、信じられない話ね」

「取り敢えず……、弾幕で勝負だ!」

「おつ、いいですね。私も……そうしたいと思っていたところだよ？」

「あ、これアツサのスイツチ入っちゃったやつだ。逃げよ」

フランお姉様が逃げていく。まあ、それが正解かな?? 私もこれ以上は抑えられないし。

「じゃア、始めようかな？」

不征服【アダマスの鎌】



「面倒ね、こうも周りに鎌があるってのは。構って欲しいのかしら、鎌だけに」というか、姉達に比べて圧倒的に避けにくいな……」

少し弱音を吐いているのは、友人(?)の魔理沙だ。

正直、私もこのスペルカードは少し避けにくいと思っている。

どこから取り出したのか分からない鎌をアイツが振り始めたら、振ったあたりから鎌状の弾幕がはられていくのだ。それに加えてその鎌状の弾幕は壁などに当たると跳ね返る。

また、はね返る時に周囲に小弾をばら撒く。それが少し厄介なのだ。

「いやあ避けにくいって言って貰えると嬉しいね!」

「なんであんたはあんたで少し性格が変わってるのよ!?!さっきまでなら話し合いで何とか出来そうだったのにね!」

「霊夢う……それは冗談だろ?!元よりボコボコにする気満々だったろうに……」

「へえ、そうするつもりだったんだ……。まあ、私モあなた達と戦うつもりだったかライイけどね!」

アイツはそう言ってすぐに鎌をしまい、また別のスペルカードが宣言される。

「じゃあ、もっと楽しもうかな！

困い【監禁され続けた450年】

宣言した直後、私と魔理沙は別の空間に飛ばされたような感覚に陥る。

そこにアイツはいない。……耐久スペカってやつだろう。コイツの姉もやってきた。

「監禁……ね。確かに今の状況が正しく監禁に近いわね」

「お、おい霊夢!?!そんなこと言ってる場合か?!」

確かにそんな暇はない。自分の周囲を弾幕で囲われている現状は心持ちがいいとは言えない。

それに、時々囲んでいる弾幕がこちらに向かって来る。それを避けつつも周りの弾幕にも当たらずに、といった感じでかなり神経を使う。

「な、中々長いぜ……」

「耐えなさい。もうしばらくすれば反撃のチャンスってやつが来るわよ」

そんなことを話しているうちに、元の薄暗くかつ紅い廊下に戻ってきた。

「へえ、カスリもしなかったかあ……ちよつとシヨック」

「そう言いながら全然シヨックを受けてるような様子じゃないわね?」

「あ、バレた?!?これ位でシヨック受けてたら身が持たないよね!」

「それにしてもさっきのスペルカードの監禁され続けた450年って本当なのか?」

魔理沙がそういうと、アイツは少しかだけ顔を歪めて頷いた。

「まあ、いい記憶ではないよね。さて、そんなことを言ってる暇があったらスペルカードを放ってね。」

不殺【450年もの意味】

今度のスペルカードはこちらをとことん狙ってくる弾幕を張るようだ。避けやすくはあるが、魔理沙は時計回りに、私は反時計回りに避けているからこのままでは必ず被弾してしまう。

「魔理沙！」

「分かっているぜ！」

そう言って互いに避ける速さをあげていく。

魔理沙と被った時に同じ方向に避けていくようにしたが、そのタイミングで少し掠ってしまった。

「痛ッ！」

少しかだけ掠ったとはいえ、かなりの威力があったようで、服が破れてしまった上に、腕にかんりの傷を負ってしまった。

その上、何故か傷口を伝って殺意を感じ、身震いを起こしてしまった。

「……………」までの殺意を感じるのは初めてかもしれないわね」

「ああ、私もかなり感じてる。こんなにも怖いなんて思つて無かつたぜ」

魔理沙もこの濃密な殺意を感じ取つたらしく、身震いを起こして青ざめていた。そんな中、スペルカードの効果時間が切れた。

「よーし!?!じゃあ次は……」

「アツサ、いい加減にやめなさい」

「あつ、パチユリーさん……」

本気の殺意を感じ、身の危険を感じていたその時、それを止めに入ったのは図書館にいた紫もやしだった。

## 壊される前

アツサside

「アツサ、いい加減にやめなさい」

パチユリーさんに言われて、私は我に返る。

どうやら戦いに夢中になって、少し力を使い過ぎたようだ。

「あつ、パチユリーさん……」

こうなってしまうことは予想できていたが、ちよつとした自己嫌悪に陥ってしまう。

よりにもよって、自分が好きだと思っている《人間》を傷付けてしまったのだから。

「ご、ごめんなさい!?!戦いつてなるとつい熱くなってしまうて……怪我は深くないですか?」

「え、ええ。大丈夫よ、不覚にも受けた傷は深くないわ」

「私は怪我はしてないぜ。心に深い傷を負ったが」

「よ、良かったあ……。ああなってしまうと、自分じゃ止められないんです……」

良かった、思っていたよりは力を使いすぎていなかったようだ。これで能力を使ってしまう人を殺したとなれば、今頃私は絶望に陥っていただろう。

「えっと……改めまして、私は愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットです。多分、暴走する前に一回言ってると思いますけど、レミリアお姉様とフランお姉様の妹です。

つと……紅白の巫女服が博麗霊夢さんで、白黒の古風な魔女つて感じのが霧雨魔理沙さんでいいんですね？」

「あ、ああそうだけ」

「ええ、そうよ……それにしても、さつきとは随分な変わりようね」

「さつきも言ったんですけど、戦いつてなるとついつい熱くなつて自分を見失うんです。

それに加えて、能力も勝手に使つてたりする時もあるんですよ」

「へえ……で、その能力つてどんな能力なんだ？」

「ありとあらゆるものを殺す程度の能力です」

「……随分とまあ物騒な能力ね。地下に閉じ込められていたのはその能力のせいかしら？」

「ちよつ、霊夢流石に深入りしすぎじゃ……」

「ええ、そうよ。能力を上手く使いこなせていなかったから、閉じ込められていたのよ」  
パチュリーさん、勝手に人の事情を喋らないでくださいよ。恥ずかしいったらありや

しないってやつですよ。

それにしても、博麗霊夢さんは結構人の深そうな事情をあつけらかんと聞くんですよ……。もつと躊躇ってくださいよ、霧雨魔理沙さんを見習ってくださいよ……」

「アツサ、途中から口に出てるわよ」

「え!?!マジですか?!?ち、ちなみにどの辺から……」

「それにしても、からね」

「……私の初対面の印象最悪な状態じゃないですか!」

「あら?!?今さら気がついたの?!?私達と戦ってる時なんて殺意マシマシで結構怖かったのよ?」

「霊夢が怖がつてるなんて珍しいわね。」

「ってちよつと待ってください、そのお祓い棒こっちに向けなくてくれ!」

「…プツ……アハハ!?!面白い人達ですね。あなた達となら私の性格とかもどうにか出来るですよ」

「見ているだけで吹き出してしまうほど、霧雨魔理沙さんと博麗霊夢さんのやり取りは面白かった。」

「あの人以上の人間なんだ。こんな性格ではあるが、これからも仲良くしていきたい。それに、これからもつと人間の友達を増やしていきたい。」

そう思っていると不思議と笑顔が溢れてきた。

「……さっきまでの獰猛な笑みとはまったく違う笑みね。そっちの方がアンタには似合ってるわよ、多分」

「ちよつ、霊夢!? そんな獰猛とか言つてやるなって。私もその笑顔の方が好きだし、お前に似合つてると思うぜ!」

「……そうね、私もアツサのその笑顔、かなり久しぶりに見たわ。……これからはその笑顔が増えていくといいのだけどね」

「博麗霊夢さん、霧雨魔理沙さん、パチュリーさん……」

「さん付けはやめてちょうだい。それに苗字で呼ぶのもなしね。体が拒否反応を起こして蕁麻疹が出るから」

「私も下の名前で、かつ呼び捨てでいいぜ!」

「アツサ、私のことも別に呼び捨てでもいいわよ。今まで……ちよつとばかり距離を感じてたしね」

「み、皆さん……」

「あ、アツサ元に戻つたの!?!良かったあ……」

「こんな、いかにもといったタイミングでフランお姉様は戻ってきた。

「フラン……?!?!もしかしてアツサをほっぽつといていたの?」



「ギクツ。そ、そんなことないよ〜？」

「声が震えているわよ。ハッキリ言ってみなさい？」

「(ぎぎぎ)、ゴメンなさい〜！」

「…………ふふ、やれやれですね。パチュリーもフランお姉様も」

私はそんなお約束といったフランお姉様がしばかれる場面を見ながら、こんな感じにちよつとしたドタバタがありながらも、これからは楽しく皆と過ごせたらなあと思つていた…………。

「まあ、そんなの続けさせるわけないんだけどねえ！」

アイツの手によって、それが壊されるまでは。

## 崩壊

さて、今まで語ったのは、まだ私がおかしくない時の話であった。

そう、最近の私は何かがおかしい。春を集めていた亡霊の所へ行つた時も、ずっと宴会をしていた時も、月が偽物になつた時も e t c ……。

兎に角、私はおかしかつた。前よりも力が増してきているような気がして、能力の制御も日増しに難しくなつてきていた。まあ、まず使うことがほぼないですが……。

使う機会は少ないが、家の中で能力の制御を高めようとして、間違えて妖精メイドを殺しちゃつたことがあつた。

だけど、あの時はお姉様達が無とあしてくれろと思つていた。心の中では、まだ大丈夫だと楽観視していた。

そう、あの時までは――。

私がいつものように、地下にある自分の部屋で能力の制御の練習をしている時だった。

今日はいつもとより力が溢れてきているような気がするな、と思っていたその時。

「アレ??なんでまた妖精メイドを……え?」

何故か、その場にはいないはずの妖精メイドを殺したという感覚が、ふいに分かってしまった。

その妖精メイドのことを、特に思い浮かべていたわけではないにも関わらず、だ。

ここ最近、遠くにいる相手でも殺せるようになったとはいえ、無意識で殺したことは

無かったので、流石に焦りを覚える。

「と、取り敢えず落ち着かないと……」

「アツサ??さつきから妖精メイドがばったばった死んでるんだけど……最近、能力の制御が出来て無さすぎじゃないかしら?」

私に小言を言いに来たのはレミリアお姉様だ。

レミリアお姉様がわざわざ地下室にまで来たということは、すでに相当な量の妖精メイドが死んでしまっているのだろう。少し制御出来てないどころでは無いのかもしれない。

「……レミリアお姉様」

「どうしたの??そんなに深刻そうな顔をして……もしかして、今ほとんど制御が効かない状態なの?」

「うん……はつきり言って、危ない。せめて、今からでもみんなを連れて外に逃げて欲しいってくらいに、危ないの」

「——そんなことはしないわ、アツサ。あなたは私の……いえ、私たちの家族なのよ。家族の危機を、そう易々と見逃せるもんですか!」

「レミリアお姉様……」

でも実際、レミリアお姉様達だけではどうにもならないのが事実だ。

ただ、一縷の希望もある。妖怪の賢者と呼ばれている八雲紫さんに頼れば、なんとかしてもらえるかもしれない。私はそう思ったが、すんでのところで思い留まる。

安易に借りを作るのはマズいのではないか??というのと、単に家族間でなんとか出来ないだろうか??と樂觀視してしまったからだ。

今思えば、これが間違いだった。

「レミリアお姉様、運命はどうなってる?」

「そうね……、正直、あまり良くないわ。でもまだなんとかかなりそうね」

「良かった……」

そう安堵したのも束の間、次の瞬間であった。

レミリアお姉様が、一瞬にしてバラバラになったのは。

その細切れになったレミリアお姉様から、血溜まりができたのは。

「……………え?」

あまりの出来事に、私の思考は完全に停止した。だが、もうレミリアお姉様ともとれない肉片が運ぶ血の匂いを嗅いで、そして目の前に広がった赤色で、脳は残酷に現実を受け止めた。

「嫌、嫌アアアアアア!!」

そうだ、目の前で、姉が死んでしまったのだ。普通ならバラバラになる前に、驚異的

な再生力で元通りになるハズの吸血鬼の体が、バラバラになったまま動かない。

それはつまり、死んだということであった。

「アツサ!??何があつた……の……???ねえ、アツサ、この肉片は何?」

図書館からパチュリーがやって来たのだろう。困惑した声が聞こえる。だが、今はそれどころではない。私は声を張った。

「逃げて!?パチュリー!!?私の能力が——」

暴走し始めてしまった。言い終えるより先に、パチュリーはさながら竹のように真っ二つになってしまっていた。

「そ、そんな……どうすればいいの……?」

あまりの出来事に、考えが巡らない。頭が嚙下した惨劇を受け止めきれないと、何度も何度も戻してしまっているかのようだった。しかし、現実はあまりに残酷で、時間は、もう止まらない。次々に紅魔館の住人は私の能力のせいで殺害され、今残っているのは私とフランお姉様だけだった。

「アツサ……もう、みんな死んじやったんだよね」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

もう私は謝ることしか出来なかった。もうこれ以上、親しい人が死んでいくのを見なくなかった。だから私はずっと下を向いていた。

けれど、私とフランお姉様が居る地下室の床は血塗れだった。それが、私の罪を自覚させるように見えた。

「大丈夫…アツサは悪くないよ……。悪いのはアツサの能力なんだから。

謝らなくてもいいよ……。ゴフツ」

「……フランお姉様」

もう、フランお姉様の方は向けなかった。どんな死に方をしてしまうのか皆目見当もつかないが、想像もしたくなかった。

「皆に代わって言うけど……。皆、アツサのことは家族として大好きだったし、今も変わらない。それだけは…忘れないで……。ね」

「フランお姉様……。分かりました。覚えておきます」

そう言った方がいいが、それでも恨まれているんじゃないかと、不安に思ってしまった。

そんなことを考えていたら、フランお姉様に頭を撫でられた。

「アツサは…一人で思い詰めちゃうところがあるから、気を付けてよね……。」

私達に…相談して欲しかったよ……。」

そう言ったつきり、フランお姉様から声を聞くことは出来なかった。

思えば、昔っから私のことをレミリアお姉様以上に気にかけてくれていた。

そんな、心の支えだったフランお姉様を、自分の能力のせいで殺してしまったのだ。



もう私は……

「うわあああああああ!!!!ああ!!アアアア……」  
泣き叫ぶことしか出来なかった。

気が付いたら、泣きつかれて眠ってしまったようだ。

さっきまで地下室にいたはずなのに、風が私の頬を撫でる。見上げてみれば、紅魔館が崩れていた。

けれど、もう何もかもどうでも良くなってしまった。

私はもう一度寝ることにした。

これ以上は何も失いたくないと思いつつ。このことは夢なんだと思いつつ。静かに目を閉じた。

# 真の崩壊

三人称 s i d e

アツサツスイーノが眠りについて、しばらく。紅魔館が存在していた場所は瓦礫の山となっていた。

加えてその近くにあつた霧の湖も、常にかかっていた霧は晴れ、さながら海のように溜まっていた水も乾いてしまい、もはや見る影がない。

その様子を遥か上空から境界を操って覗いていた八雲紫は、スキマを一旦閉じ、紅魔館に近づけようとしたところ、開いた瞬間にそれはあっけなく壊れた。

今までこのようなことはなかつた為、目をぱちぱちと瞬かせ驚いた表情をした。

「もしかして、吸血鬼姉妹の末っ子か次女がやった事なのかしらねえ……」

「紫様、どうかなさったのですか？」

今回の事件の黒幕を頭の中で思案している時に、後ろから八雲紫の式神である八雲藍が話しかけてきた。

一応、今の状況を八雲藍に伝えたと、吸血鬼姉妹の次女であるフランドール・スカーレットがやったのではないかと八雲藍は進言する。

「でも、どうにも引つかかるのよねえ……。次女だとしてら能力が暴走するような素振りは一切無かったから。それを考えると、ここ最近暴走気味だった末っ子ちゃんの仕事な気がするのよ」

「だとしても……彼女の能力はありとあらゆるものを殺す程度の能力。壊すことは出来ないのでは？」

八雲藍の言っていることは確かに正しい。殺すだけなのだから、ありとあらゆるものを壊す程度の能力を持つフランドール・スカーレットの方が今回の事件の黒幕の可能性が高いのだ。

だが、八雲紫はだけどと切り出して、末っ子である愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットを犯人だと推定する理由を述べる。

「今回の事件、さっきも言ったけど、犯人は末っ子ちゃんな気がするのよ。いくらなんでも壊せるからって僅か数分で紅魔館の中の住人と紅魔館を壊せると思う？」

「ですが、壊すだけなら次女でも出来るのでは？」

「まあ、それもそうなんだけどね。でも普通なら紅魔館壊してからのの方が手っ取り早いでしょ？」

それに、最初に死んだのは長女であるレミリア・スカーレットよ。普通、仲のいい姉を能力を使って殺すのかしらね？」

「そ、それは……そうですけど」

「それに、死に方もそれぞれ違ってたのよ。それを加味すると末っ子ちゃんがやったのかなあつてね」

「……というか、そこまで見ていたのなら紫様が」

「多分それは出来なかつたわ。あそこに行ったら私も死んでると思うから」

「それはどういう、——ツ!？」

突然飛び込んだきた光景への驚きのあまり、八雲藍は言葉に詰まる。主人である八雲紫の左腕が無くなっていたのだ。まるで、そこには元から何もなかつたかのように。人体錬成に失敗でもしたのだろうか。

「さつき、紅魔館の近くにスキマを開こうとしたら、左腕を持っていかれたわ。咄嗟にスキマを閉じたからよく見えてなかつたけど、多分末っ子ちゃんは今眠っているわね」

「ね、眠ってるって……眠っていることと、紫様の左腕は関係してるんですか!？」

「関係は無いけど……せめて言うなら、彼女の殺す程度の能力はただ殺すだけじゃなくなってきたるかもしれない。」

「それに加えて、殺せる範囲も広がってるわね」

「そ、そんなことが……範囲が広がっていると、もし幻想郷の外まで広がってしまつたら——」

「まあ、その前に幻想郷が無くなるわね、確実に」

八雲藍からしたら、八雲紫の発言はどこか諦めているように聞こえた。だが、八雲紫の能力なら何とかできるのでは無いか?と、どこかで淡い希望を抱いている八雲藍であったが、次に紡がれた言葉により、その希望はあっさり打ち砕かれた。

「それに、私の能力じゃ出来ても生と死を曖昧にするしか出来ない。つまり、末っ子ちゃんに殺されちゃうのは確実つてところね」

あまりにも平然と、諦観した様子で言う八雲紫。それに対して八雲藍は動揺しか生まれない。

「な、なら別の場所でまた幻想郷を作り直せば……」

そんな、訳の分からないことを口走ってしまうくらいには八雲藍は動揺していた。

我が式の支離滅裂な発言に対して、八雲紫は冷静にぴしゃりと返した。

「それは無理ね。末っ子ちゃんの能力の範囲、少しずつだけど、確実に広がっているもの」

八雲紫はちやつかり、愛杉・アッサツスイーノ・スカーレットを犯人にしている。

その上、能力の範囲が広がっていると突き止めている。そう考えると己が主、八雲紫

やはり恐ろしいものだど認識させられた八雲藍である。

「それにしてもですよ??為す術が無い訳ではないですよね?」  
「まあ、その方法は結構単純なだけ——」

「まさか能力の範囲外から集中攻撃……なんて言いませんよね？」

八雲紫はそれを聞いて、目を見開いた。その様子を見ていた八雲藍は呆れた顔をしながら話す。

「なんとなくそんな気はしてましたが、まさか本当にそうだとはい……」

「正直、現状これしか末っ子ちゃんを攻撃出来る方法がないのよ。もつと言うなら——」  
「能力でその攻撃すら無効化……いや、殺される可能性もあるつてところですか？」

「よく分かったわね。でも、今はこれしか殺れる方法がないのよ」

八雲紫は一瞬おどけた様子を見せたが、その後真面目な顔になった。

それほどまでに愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットが幻想郷を揺るがす、非常にまずい状態にあるということだろう。

八雲藍は渋々といった様子で、八雲紫の策に賛同したのだった。



「それにしても、本当にやるのか??こんな無茶苦茶な作戦を……幻想郷に残ったほぼ全員で、あのアツサを攻撃するなんて」

「仕方ないでしょ、魔理沙。愛杉が暴走したんなら、妹分みたいなもんだから私達で止めてあげないと」

「なんで霊夢がアツサにそこまで情を向けてるのか分からんな……もつと私にも情をよこせー」

「そういうところよ」

今この場が集まったのは、幻想郷に残った数少ない有力者ばかりである。

その顔ぶれは八雲紫は勿論、摩多羅隱岐奈もいる。西行寺幽々子等の霊界組も、古明地さとり等の地底組も、本当に様々な重鎮が揃っている。

その中でも異色なのは、やはり博麗の巫女である博麗霊夢と、普通の魔法使いこと霧雨魔理沙だろう。

二人はそんなことなど知ったことかと言わんがばかりに、口喧嘩をしている最中であるが。

なんなら、いつ手が出て本当の喧嘩なつてもおかしくないほどだった。

「第一な!? 私がアツサのことを妹分だと思っただけだぜ?? 霊夢より先になー!」

「なによ!? 私はそんな愛杉のことを考えてないような考えはしてないわよ!」

「はんツ!? そっちはどうせ大した理由は無いんだろ?」

「そっちこそ、単純すぎる理由じゃない?」

「ぐぬぬ……」

「ま、まあまあ……今はそんなことで喧嘩しなくても……」

「「そんなことだつて!」ですつて!」

「……」愁傷さまでず、紫様」

一発触発の雰囲気には八雲紫が止めに入ると、今度は霊夢と魔理沙に、愛杉・アツサ・スィー・スカーレットがどれだけ素晴らしい妹なのかと説明を食らう羽目になってし

まった。

周囲はその様子を見て、笑ったり温かい眼差しを飛ばしているのが殆どであった。だが、これによって周りの緊張感は取れたも同然になったわけである――。

「さてと、いい加減いいかしら？」

「……はい」

「……すいませんでした」

その後、八雲紫にこつてりとお灸を据えられた霊夢と魔理沙は、今回集められた理由を再度八雲紫に問いかけるのであった。

「……本当にやるのね？」

「勿論、やらなきゃ末っ子ちゃん的能力で私達が死んじゃうから」

「まあ、こうなつたら一種の腕試しだな。私の新しいスペカが効くかどうか――」

「今回、スペカでどうのこうのはなしよ？」

「な、なんでだよ!?!……つてことは殺す気でやれつてことか？」

「残念ながら……ね」

魔理沙の問いに、残酷とも言える返答をした八雲紫。事実、それほどまでの力が暴走しているのだ。

「事実は受け止めるしかないのよ……それじゃあいくわよ」

「わ、分かった……せ」

「気を落とさないで魔理沙。それもこれも、能力を暴走させたやつのをせいよ」

「それもそう……か」

そして、全員の力が一点に募る。海を蒸発させ、山一つは優に消し飛ばせるほどの、明らかにやり過ぎな光が解き放たれた。

それは確実に愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットを殺せるレベル——いや、明らかにオーバーキルな……はずであった。

その攻撃がある範囲に入った途端、光が吸収され、範囲が明らかに広がったのを全員が感じた。

瞬間、全員は死を覚悟した。

そして……後には肉片と血しか残らなかった。

## 白のアネモネ

私は…

アツサ side

ここは何処だろう……。眠りに落ちてからの記憶があやふやだ。とりあえず周りを探索って、陽が出てる!?

「えつと……。どこか影がある所は——」

周りをざつと見渡す限り、不毛の大地と化していた。そういえばさつきから妖精を見ていない。一体どこに消えたというのかサツパリだ。

「妖精って確か……。生き返りますよね?? なんてどこにも見当たらないんでしょうか」

というか、さつきから日が当たっていて熱い——いや、暑い。そう、暑いだけなのだ。肌が焼けるかのような熱さを一切感じない。自分は吸血鬼でなくなってしまったのだろうか?

「というか能力が暴走していたんでしたね……。とりあえず、博麗神社にでも行ってみますか、ね?? あれは——」

気付かなかった方が良かったのかも知れない。それほどまでの凄惨な光景だった。

私が立っている場所の反対側によく目を凝らすと、肉片や血の海が見えた。

それを見るだけで、吐き気がする、恐怖が心を支配する。

こんな光景見ていられないと目を背けたくなるが、それをなんとか堪えた。

これは眠っている間に自分がやった可能性がある。いや、やつたに違いない。ならばせめてもの償いだと思い、目の前の光景から目を背けないようにした。

「とはいえ…どうすればいいんでしょうか…：ウプツ」

犯したことの償いは、見届けるだけで済まないのは勿論分かっている。けれど、もう何もかもを殺してしまった今、これからどうやって生きていけばいいのか分からない。

というか、この状態だと、食べるものも何も無い。血はその辺りに広がっているが、地面に染み込んできているため——というよりも、地面に付いた血は流石に飲みたくない……。

「本当にどうしたらいいんでしょうか……」

「コツチに来るかい？」

「ツ!?!」

不意に後ろから声をかけられた。後ろを向くと、黒の燕尾服が最初に目に入る。顔は童顔で、髪型はオールバック。その組み合わせになんとも似合っていないと思うが、見

上げるほどの身長が、少しだけ違和感を薄めていた。

こんな混沌とした状況の中、突然現れたのだ。ひよつとして、私が殺してしまった人たちの怨霊が集まり、鬼の姿を象ったのかと思ったが――、

「危なっかしいこと考えるね……。まあ、僕は存在がおかしいんだけども。

取り敢えず、それだけのこと考えられるなら大丈夫そうだね。答えてもらおうか、さっきの質問に」

考えが読まれた…ッ?!まさか本で読んだことのあるサトリ妖怪か??と一瞬疑うが、サードアイ3つ目がない。ならこの人は一体……と思案をしていると、

「ねえ、まだ??君を消すことなんて簡単だけどさ、やるのが面倒なんだよね。早く決めてよ」

なんて急かされてしまった。一瞬消してもらおうかと思ってしまうが、それでは償いにはならないと思いとどまった。もしかすると私の能力をどうにかしてもらえるかもしれないと僅かな期待を胸に、頷いた。

「そっか、来てくれるか……良かった来てくれるようでボソツ」

何が良かったのかさっぱり分からなかったが、取り敢えずどうすればいいのか聞いてみた。

「あー…取り敢えず、服を握ってもらえば。シワがつかない程度にね?」

「あっはい」

「お、やつと喋った……で、君の名前は？」

「愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット」

「長いね……。アツサツと呼べばいいかな？」

「う、うん」

「よし、じゃあ行こうか」

そう彼が言った瞬間、辺りが真っ白な景色に切り替わった。



「ここは……」

「僕が創った場所——取り敢えず、ようこそ」

「創ったって……大丈夫なんですか？」

「ん??大丈夫大丈夫。僕の力はそんじよそこらの人間よりも強いからね」

「い、いえそうではなく……」

「それじゃあ、早速やっていくよー!」

(この人話聞かない……)

「聞こえてるよーアツサ君や」

「うへえ……」

いきなりやっていききたいと思いますとか言われても、よく分からないから出来ない。というか、何をやるのか全くもって検討が……いや、もしかすると能力の制御とかやつてくれるかもしれない。

「そのとーおり!」

「うわあ!」

突然顔を近付けてきたので驚いた。私と彼の距離かなりあったと思うんだけど、紫さ  
んみたいな能力があるのかな？

「その紫って人は知らないけど、僕は君達に合わせて言えば、全宇宙を司る程度  
の能力を持つているよ」

「全宇宙を司る……??え、宇宙って何個もあるんですか?」

「んー、まあそうだね。なんかよく分からないけど、何個もあるね」

「……とんでもない人にあつてしまった気分です」

「あれ??今更過ぎない??って話が逸れたね。兎に角、君にはその広がりすぎた能力の範  
囲を縮めてもらうよ」

「……なんかいきなり無茶を言われたような気がします。というか広がった能力の範  
囲……??私の能力は、範囲内の敵全員殺すとかではないはずですけど。」

「それがそうじゃないんだなあ。君、気が付いてないみたいだけど、僕が来たとき既に  
周りの自然を殺してたんだよ?」

「周りの自然を??いや、でも自然は私の能力じゃ殺せない……ツ?!まさか能力が暴走し  
たせいで……?」

「そういうこと。ちなみに能力を暴走させたのは、うちの管轄内の現人神がやつちやつ  
たみたいなんだよね……。本当にごめんね……」

「そ、そんな簡単に謝られても……。私が殺してしまった人達はもう帰ってこないし、殺してしまつた人達になんて言えば——」

「はい、ストップ。言いたいことは分かるけど、最悪僕の能力で復活させるし……。まあ、そんなことはしないけど」

「なら……。どうすればいいんですか!?!私は!」

「能力をちゃんと操れるようにすること……。そこからだよ」

「そう、ですか。……。そうですね。少し熱くなりすぎました」

「大丈夫」

彼はそう言つて、頭を撫でてくれました。

あまり他人から撫でられるのは好きじゃないのですが、その時は不思議と気持ちがいいので、心地よい穏やかな気分になりました。

もしかして私ってチョロイのかな……。

私が落ち着きを取り戻した後、能力を操れるように……。とりあえず、まずは範囲を狭める練習を始めることになりました。

## 練習

能力の範囲を狭めると言っても、そう簡単なことではなかったです。

妖力を抑えるとかと同じようにやっても、範囲が狭まる様子がなく……。

「うーんとね……。能力を抑え込むにはね、願うといいよ〜」

と、彼から言われたんですが……。願うってなんででしょうか？

意味は分かりませんが、なぜ能力を使うのに願う必要があるんでしょうか?? 神様お願い!?! って感じでしょうか？

妖力を抑えるのは勝手に出来るようになってましたけど……。

「分からないか〜、まあ、しょうがないか……。願うって実は、妖力とかを抑えるのにもしてるんだよね。それを君は無意識でやってたってわけ。なんで君は無意識で出来るのか僕には分からないね」

なんて言われてしまいました。……。え?? 願う必要あったんですか?!?! 知らなかった……。それを勝手に出来た私はある意味才能あるんですかね？

まあ、その辺はどうでもいいとして……。願うってある意味、吸血鬼とは程遠いもののような気がしますね。吸血鬼は十字架が少し苦手ですから。まあ、私効かないんですけ

どね十字架。なんならレミリアお姉様はスペカとして十字架扱ってますし。

「……十字架って吸血鬼に効果ないんだね。そう設定してないんだけどなあ……」

「私達が特殊なだけですよ……って設定して……」

「ん?! まあ、気にする必要は無いよ。さあさあ、サクッと出来ちやいなよ!」

「むう……はぐらかされてあげますよ、仕方なく」

ちなみにどうやって能力の範囲が分かるようになってるかというところ、範囲ギリギリのところでは彼の人形が立ってるんです。

それを殺さないように、範囲をどんどんと狭めようってわけですね。

「まあ、それが上手く行ったら楽でしたけど……」

「そんな簡単にはいかないか……君なら出来る気がしたんだけどなあ?」

「むっ、言ってくれますね。私だってスカーレット家の名を背負っているんですから、楽勝ですよ」

「おっ、言うねえ。まあ、取り敢えずさっき言った願うことを忘れずにね」

「分かってますよ。願うくらい簡単ですよ」

と、言って数時間……いや、数日後……。

何とか範囲が狭まってきた!? とはいえ、まだ数キロ範囲を狭めなければならぬらしい……。長すぎでは?」

ちよつと私寝てた間になにしてんの!?! って気分ですよ。なんでこんなに範囲広くなってるんですかね私は……。

「どーやら君を倒そうとして、幻想郷の人達が総出で力を君に向かって放つたらしいよ。それで君がその力を吸収して、より範囲を広げたってわけだね」

「……なんとも言えない気分なんですけど」

「流石に哀れ……とも言いづらかったよ、うん」

私を倒そうとするとは……もしかしてそれほどまでに能力が暴走していた？

そう思うと申し訳ない気持ちと、より能力を制御出来るように頑張らなくてはと思う。

とはいえまだ何日、何ヶ月とかかりそうなので、我慢して欲しいところではあるけども。

「この数日で半径3キロメートル縮めたかあ……これは本当に素質あるねえ」

「え……?? 私って元々どのくらいの範囲——」

「地球全体☆」

「……はっ」

私は今何を聞かされてるのでしようかお母様。私の能力は地球全土にまで広がっているということを伝えられたような気がしますますが気の所為で——

「気の所為じゃないし、現実逃避しちやダメだよ?」

「ああ、お母様。私は悪い吸血鬼になってしまいました」

「人間からすれば吸血鬼って基本的に悪く見えるってそんなことよりも!?!ほら!?!早く!?!練習!?!するの!?!」

「ああ、お母様——」

「犯人教えるから!」

「え?」

「ん??え??僕変なこと言った?」

「犯人って……え??犯人マジでいるんですか?」

「そうだよ??あれ??予想とかしてなかったの?」

「何故か力が付いてきて、そのせいかと思ってきました……」

「……なんというかお気楽??まあ、いいや。犯人今度教えるから、今は練習しようね!」

「はーい……」

そんな訳で私は犯人を教えてもらえるという約束が出来たので、より一層範囲を狭める練習に力を入れはじめた。

お蔭で数カ月後には半径40キロメートル位まで縮まりました。まあ、まだまだ広いんですが……。地球全体と比べたらまだマシですかね?

「大分狭まってきたねえ……。いや本当、よくやっているとと思うよ」

「なら、そろそろ犯人を教えてくれても……。いいんじゃないですかね？」

「そうだね、教えよう。僕らもちよつと危険視してるんだよねそいつは」

その語りから始まったそいつの話は、とんでもなかった。

曰く、イタズラである宇宙全土の生き物を一度殺し尽くしたこと。

曰く、イタズラである人の能力を暴走させてその地域を滅ぼした。

曰く、イタズラである宇宙の神を全員を焼き尽くした。

彼は死を司り、人の能力を暴走させる能力があるという。そして、大のイタズラ好きとまで来た。彼も……。闇乗式一護さんもかなり手を焼いているということだった。

ちなみに、闇乗式さんの名前は練習中に尋ねて知りましたとき。

そして、彼の名はタナトス。

様々な神がいるらしいが、タナトスほど周りの神から嫌われている神はいないらしい。

「まあ、この位しか知らないけど……。取り敢えず僕が犯人でないってことが分かればいいよ」

「ですが……。なぜあなた達はタナトスを放っているんですか？」

「うーん……。彼は新参者だね。神界に来てから僅か3000年しか経ってないからなん



だよ。それに現人神だし」

「でも、だからといって……」

「そうなんだよねえ……。そろそろやりすぎの域も超えそうだし、もし今度会うようなことがあつたら、少し懲らしめておくよ」

「私も……会うようなことがあればですけど、能力を叩き込んでやりたいです」

「まあ、まず君は能力の範囲を狭めることを続けるんだね！」

「うッ!?わ、分かりました……」

そんな会話をして十数日後……。やっと範囲を自分の体のちよつと外側まで狭めることができました。

そして言い渡されたのは……、

「よし、次は範囲を自由に操れるようになることと、範囲内全員を殺さないようにする訓練ね！」

今まで以上に厳しい訓練でした。

## まだ練習

「範囲を自由に、ですか。それ自体は簡単な気がしますが……範囲内全員を殺さないようにするってのが難しすぎやしませんか？」

「とりあえずは範囲を自由に操れるようにしとけばいいよ。まあ、簡単だろうけ——」

「もう出来ますけど？」

「……ちよつと優秀すぎない??僕びつくり」

闇乗式一護さんを驚かすことに成功して、私が喜んでいると、彼は急に怒ったような顔をして、

「よーし、じゃあ追加で君のもう一つの能力を操れるようにと、範囲内全員を殺さないだけじゃなく、範囲内の特定の物を殺せるようにしようか」

意外と闇乗式一護さんは短気なのもかもしれません。というか訓練の内容、ストレイツオかつてくらい容赦なさ過ぎやしませんか??それにもう一つの能力って……。

「訓練の内容は元々そうする気だったからいいの。それともう一つの能力は自分で気づくこと——」

まあ、分からないようならヒントは出すから」

闇乗式一護さんがどういう人なのか掴めたようで掴めないのが、ここ最近の悩みなような気がします。

というか早く訓練しないと……。

また数ヶ月後……。何とか範囲内全員を殺さないようになりました。ですが、中々特定の人だけを殺すつてのが難しいです。

……昔は出来てたんですけどね。おかしいなあ……。能力が変化したのかな??と思つて闇乗式一護さんに聞いてみたら、

「あれ??言つてなかったっけ??タナトスに暴走させられた能力は勝手に昇華するんだよ」

と、言われました。何故か一瞬だけタナトスが可哀想に思いましたが、まずそれをど

うやって観測したのかが分からなかったです。

まあ、その後また闇乗式一護さんによるタナトス講座が始まりましたけど……。簡単な言うのと、能力をキチンと使いこなせてる人にはタナトスの能力が効かないらしいんです。その代わり、能力昇華はされるそうです。哀れ、タナトス。

まあ、やってきたことの的にそのくらいは何か得がないとダメかな……と私は思いましたはい。

「んー……これでタナトスのある種、弱点とも言えるところは教えられたかなあ？」

「おそらくは……。レミリアお姉様なら、もしかするとタナトスの能力効かないかもしれないですね」

「そーなの??それなら安心だけど……。ま、あくまでも能力を暴走させるのが効かないだけで、死を司ってる方のは効いちやうから気を付けてよね？」

「分かりました。なるべく……。ですけどね」

「なるべくって……。まあ、気をつけようもないか。あ、そうそう因みにタナトスは女だよ」

「へー……って、ええ!??女なんですか!?!」

「女だよ??それもそれなりに大人っぽい」

「なんか……。想像つきませぬね」

「しようがないでしょ、あんなことしてれば。とりあえず、ほら!? 練習、練習!」  
「わ、分かりました」

練習とはいえ、殆ど願ってるだけですけど。

問題がもう1つの能力……、それが全く分からない。どうすれば分かるんだろうか  
……。

数カ月後……。

やはりというか、まだまだ訓練は足りないみたいで……。全員とまではいかないにしても、やはり複数人殺してしまう。

? まだまだ願うことが足りないのだろうか?

「うーん……、本当は願ってるくらい、無意識のうちにでも出来るようにしなきゃダメなんだよね……。そうでもしないと、寝ている間にまた同じこと繰り返すでしょ」

「うっ、そんなですよね……。でも中々それが出来なくて……」

「……とりあえず一つずつ課題をクリアしていこうか。眠っている時もつてのは最終課題だね。まずは誰も殺さないようには——」

「出来ませぬ」

「よし、なら一人ずつの方から取り掛かるうか。多分その方がいいでしょ」

闇乗式一護さんがそう言つて、お嬢様が使用人を呼ぶ時のように手を叩く。するとゴゴゴという地響きの後、滝がその場に現れました……。滝？

「なんで??つて思つてるでしょ??滝行はいいよ。願うことが強く出来るから」

「かと言つて、滝にうたれに行くのは私ちよつと……」

「まあまあ、やってみなつて。ちゃんとそれっぽい服も用意してあるから」

そう言つて闇乗式一護さんが取り出したのは白装束でした……。私この後首がゴキツとか言つて死なないですよね??いや、妖怪だしそんなことないか。待つて、流水はマズい。

「大丈夫大丈夫、君なら出来るよ」

そう言つて聞かない闇乗式一護さんには困つたものです。しょうがないので今回も折れてあげますよ。まったくう」

「途中から声出てるよ」

「えっ!?!どっ、どこから……」

「そう言つての辺りからかな」

「サイシヨカラジヤナイデスカヤダー」

そんな茶番もありつつも、結局、私は滝にうたれることになった。

数分後……。

白装束に着替えた私は今、どうやって滝にうたれようか考えていた。

というのも、流水は吸血鬼の中でもかなり厄介なもの。霊夢 a n d 魔理沙と初めて逢った日も雨が降っていたが、あれはフランお姉様が外に出ないようにとパチュリーが魔法で降らせていたのだ。

とまあ、流水は吸血鬼にとってかなり危険……それも全く効きやしない十字架より

も、ということが分かっていただけたでしょうか。

「必死になって滝にうたれまいとしているのは分かったけど、君の能力で弱点も殺せるよ??初めて会った時も、太陽が出てたのに君は平然と歩いていたじゃないか」

それもそうだった。だけど、あれは無意識でやってたからなあ……。やり方からないなくチラツチラツ

「……君ねえ声に出さないとダメだからね?」

「そう言いながらも最終的に教えてくれるあたり優しいですよね闇乗式一護さんって」

「なんかムカついたからやり方教えてあげなくていいかな?」

「やめてください死んでしまいます」

そんなやり取りの後、闇乗式一護さんにやり方を教えてもらい（考えてみたらなんで知ってるのかが分からないけど）、なんとか滝行に入ったのだった。



## 白のアネモネ

「いだだだだ……！ 滝行ってこんなに痛いものなんですかねっ!？」

「そんなこと言っていないでほら!?!能力をちゃんと操れるように願う!」

「わ、分かっていますよ……!」

今、私は閻魔式一護さんにやり方を教えてもらったので、滝行にいそしんでいるところです。

こんなことで、本当に願いは強くなるのでしょうか……。

「ん?!だって今、君は弱点を殺すことだけに集中してるから、周りの人形が死んでないだろう?」

「い、言われてみれば確かに——ってイテテっ」

「ほら、集中を崩さないの!?!今の状態をしばらく保つ!」

中々キツイです……。とはいえ、前よりもだいたい集中することが出来るようになってきているのを実感するので、ここに来てからの約一年間の修行は無駄ではなかったように安心してました。

「ほら!?!集中集中!」

「はっ、はいいー」

何故か闇乗式一護さんが厳しくなってきたのは気の所為でしょうか……。

二時間後……。

「さ、流石に首が痛いです……」

「うーん……、君妖怪だよね??普通に耐えられるでしょ?」

「痛いものは痛いんですよ!」

「……はあ、分かったよ。じゃあやめようか滝行」

「やった……!」

「今を通して、なんとなくでも一人だけ殺せるようになってるといいね」

「はい！」

その後、見事に一人だけを殺せるようになっていたので、私と闇乗式一護さんは一緒に  
なつて喜びました。

「じゃあ次の問題にいこうかな」

「……そういえばその形式でしたね。で、次の問題とは？」

「次は二つ目の能力を操れるようになること！」

「……私に本当に二つ目の能力があるんですか？」

「ある……と思うよ??前までの自分がおかしかったことを思い浮かべてごらんよ？」

「そう言えば……、あの時は時々殺意に吞まれそうになつていたりしていたような」

「なるほどねえ。てことはもしかすると殺意を操れるんじゃない？」

「そんなこと出来るんですかね……」

「そんなことを言っていると段々と、日頃の恨みからか、闇乗式一護さんのことを急に  
殺したくなつてきた。」

「この一年間そんなことがなかったために正直驚いている。なんで今更??今までは能  
力を使つてると勝手になつたりすることが多かつたけど……。」

「まあ、出来るでしょつて……、既に出てるじゃん。ほら、操れるように願う……必要も  
無いかな？」

「何ですか??というかコロサセロ」

「普通におさまれ〜って願ってみなよ」

私は言われた通り、殺意が収まるように願うと、すぐにその衝動は引いていった。

「本当だ……でもどうして」

「さっきの滝行が効いたんじゃない??僕の思っていた以上の効果だね」

「私の能力って他人に対して効果あるんですかね?」

「うーん……、僕には効かないけど、きつと普通の人妖には効果あるんじゃないかな??使わないと思うけどね」

「ですよー」

なんとなく、闇乗式一護さんには効かないような気はしていたから、そんなに落ち込んでいない。

それにしても確かにこの能力、まず使わない。まあ、使う機会が無いのなら、それに越したことはないのだが。

「そんなこと思ってるを使う機会来ちゃうよ?」

「フラグってやつでしたっけ?」

「そうそう。ま、気にしないで行こうか、最後の問題に」

「確か……、寝ている間でも能力を抑えられるようにでしたっけ?」

「そうそう。まあ、滝行であれだけ出来てるんだから、多分大丈夫でしょ？」

「……取り敢えず、寝てみますね」

「うん。そうしな〜」

その後眠つてみると、どうやら意識が落ちたと同時に範囲がまた元の地球全体まで広がり、人形が全部殺し尽くされたそうです。

何故ここまでしか出来ないんだ私は……!?寝ている間でも、いつだって出来なきやどうしようもないっていうのに……。

「まあまあ、そう焦りなさんなつて。今までが出来杉くんだったんだと思うよ」

「……だといいんですけど」

「寝てる間に滝行する？」

「ごめんなさい、意味が分かりません」

「あ、ごめんごめん。まあ、気楽にね……今まで出来すぎてたんだ、さつきも言ったけどね」

「……は〜」

「ここまで何も出来ないとなると申し訳なく、惨めな気持ちにもなつてくる……つてダメダメだ、こんな心持ちじゃ出来ることも出来なくなる。」

まずは普段通りの事をやっつけていこう。

「普段通り、願うことを意識しながらやっていきますね」

「そうだね、うーん時間が……まあ、大丈夫かなボソツ」

「??今なんて言いました? (鈍感系主人公)」

「いや、なんでもないよ」

闇乗式一護さんはニコニコしながらなんでもないよと否定する。それじゃあ、何か言ってみたんじゃないですか……それにニコニコするのやめてくださいよ、笑ってるのに笑ってないようで怖いですよ。

「怖くないよ〜」

「やめてくださいよ!?!怖いんですから!」

涙目になりながら闇乗式一護さんにそう伝えるとちえつ、と言ってニコニコするのをやめてくれた。

こ、怖かった……と、とりあえず、気を取り直していつも通り練習していこう。

二年後……。

「や、やっと眠っている間も、殺すようなことが無くなった……」

「いやあ、ここまで係るとは思わなかったなあ……。今までが上手くイキスギイってたつてことがよく分かったね……」

「それにしても、まともな修行をしていたのは全然でしたね……」

「しようがない、本当に強い能力っていうのは願うことでは操れないからね……」

「困ったものですね……。もしかして、闇乗式一護さんも？」

「もう僕は願う必要を無くなったね。それほどに使い潰したから」

「そこまで出来るまで私もやりたかったですよ……」

「でも、君は殆ど無意識下で願うことが出来るようになった。だから寝ていても能力を抑れる」

「それもそうですね……。自信を持っていきます」

私はここに来てから、だいぶ昔よりも自信がついたと思う。それのお蔭か、少しだけ話し方も前向きになった、気がする。

それもこれも闇乗式一護さんのお蔭だ。

「なんか照れるなあ……。それで、これからどうする?」

「時間を戻して貰えませんか?」

「……やり直すのかい?」

「はい。まだまだ皆と……仲良くしたかったから」

「そっか。あ、ちゃんと皆の記憶は残しておくからね」

「えっ、それやったら私殺されませんかね……」

「……多分平気ですよ」

「なんて無責任な……」

私は幻想郷に戻ることを決意した。彼処が私の帰る場所だし、紅魔館の皆とも、もつと一緒にいたかったのだから尚更だ。

「じゃあ、真実は教えたからね」

「はい、タナトスのことも頭に入れますね」

「いざとなったら助けるから、安心してね」

「はい!?!では、私は行きます。今まで、本当にありがとうございました」



「ああ、どういたしまして。そして行ってらっしゃい」

そう言って闇乗式一護さんは見送ってくれた。私は闇乗式一護さんに手を振りながら、前に歩いていく。だけど、段々と前に進む感覚が無くなっていき――  
気が付いたら、目の前に霊夢と魔理沙が立っていた。

### 闇乗式一護 side

見送ったはいいけど、これから大丈夫かなと心配しながら、アツサの将来について考えていた。

………直近の問題は、妖怪絡みかな？

「………直接手を出しすぎると問題になってしまうのも困ったものだね」

「闇乗式一護様、そろそろよろしいでしょうか？」

「いいよ……。はあ、また面倒な仕事に戻らなきゃいけないのが残念だ」

「仕方ないですよ……。それにタナトスは彼女達に任せたのであれば大丈夫です」

「君もそう思う??ならいいか」

そんなことを秘書に言つて、僕は溜まりに溜まった、膨大な仕事に戻る。

まあ、やらなきゃいけない事が沢山あるだけにタナトスの問題を放棄した僕の責任でもあるから、アツサ達には色々やってあげなきゃね。

手向けは贈った。さて、これから頑張つてよ、《征服されない吸血鬼》さん。

美しき黄色のスミレ

彼岸花を挿した幼女

霊夢 side

さつきまで目の前の吸血鬼に対してなんの感情も……強いて言うなら、殺されると恐怖を抱いた相手に対して、いきなり懐かしいと感じるのは、おかしなことだろうか？

いや、明らかにおかしい。おかしいのだが、そのおかしさも、泣き出したくなるほどの懐かしさと嬉しきで、押しつぶされてしまった。

どうやら隣の魔理沙もそう感じたようで、気づけば私と魔理沙は目の前の吸血鬼……いや、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットに抱きついていた。

「愛杉！」

「アツサ！」

「霊夢！ 魔理沙！」

抱き合っているうちに、様々な愛杉と過ごした記憶が蘇ってくる。その中に、愛杉の

能力が暴走して倒そうとしていた記憶も混ざっていた。

……となると、今の愛杉はまずい状態なのではないか？

「ねえ愛杉。もしかして、まだ能力が暴走してるとか……無いわよね？」

「えっ、うん。大丈夫だよ。暴走してるならとつくに霊夢と魔理沙は死んでるし。そのことについて詳しく話したいから、レミリアお姉様の帰りを待ちたいんだけど……」

「え、ええ。いいわよ」

「そういえば私たち死んだんだよなあ……実感つてのがないなあ」

「あ、あはは……魔理沙は相変わらずだね。取り敢えずありがとう」

そう言つて、愛杉は彼岸花が挿さっている髪を揺らすことなく突然振り返り、虚空に向かつて、

「紫さんも出てきてください。あなたにも——いや、幻想郷の皆さんと話がしたいんですよ」

そう告げた。すると、愛杉の後ろから、相も変わらず趣味の悪そうなスキマがすつと開く。そこから普段の不真面目でどこか胡散臭そうな雰囲気は一切消した、警戒した様子の紫がニョキつと生えてきた。

「気付いていたのね……まあ、好都合。私も末っ子ちゃんに話があるもの」

紫は警戒を解くことなく、なんなら今にも愛杉を攻撃しそなくらいの殺意を放つて

いる。が、一切臆することなく、むしろ予測通りであったかのような余裕を見せる愛杉。「とりあえず落ち着いてください、紫さん。カツカしてると、綺麗な顔も台無しですよ？」

もはや挑発すらしている。少々余裕を持ちすぎでは無いかと不安にもなるが、愛杉が余裕を持つて相手に接する時というのは、決まって本当に勝算がある時だけだったのを思い出す。

「……はあ、なんだか疲れちゃったわ。いいわ、少しは警戒を解いてあげる。ただし未っ子ちゃんのことはずうっと見てるわよ」

「いいですよ。それが身の潔白を証明するために必要ならば、喜んで」

現に、あの八雲紫に対して白旗を上げさせたのだから凄く吸血鬼である。

姉達も姉達で凄いのだが、なんと言うか、凄いの方向性が違う……気がする。

「それにしても挨拶抜きとは失礼ね、紫。いきなり出てきたと思ったら、愛杉とばかり話してるんだもの」

「あら、霊夢もしかして嫉妬かしら？」

「そういうのじゃないわよ！」

やっぱり紫には調子を狂わされる……が、なんだかその調子が狂わされることにすらひどく懐かしさを感じて、偶にはいいかもしれないと思っている私がいる。

……ただ、さすがに毎度の如く調子を狂わせられるのは、やっぱり勘弁願いたいが。

アツサside

こ、怖かったあ……。紫さんが殺意をマシマシで出てきた時には、もうどうしようかと……。

能力を使つてある程度殺意を弱らせたなら、思つてた以上に話がトントン拍子で進んだのが僥倖だった。

私のチャームポイントでもある彼岸花も、力なくしおれている。また後で妖力を注がないと……。

あくまでも私の髪に挿さっている彼岸花は飾りである。しかし、枯れないようにと妖力を注いでるため、いつの間にか妖怪化していた。が、そこは問題ない。別に大した妖怪でもないし、ずっと私の髪に挿さっているままなので悪さはしない。そんなに私の髪って居心地いいのかな??別に今までシャンプーとか気にしたことないんだけど。

髪を洗う時だけは離れるのだが、その時や妖力を使い過ぎて、注いであげる分がなくなってしまうたりすると枯れそうになる。それだけは注意ポイントだ。

さてと、関係ない話を心の中でしちやった。

問題は……目の前にいる姉二人だった。

さつきから、ずっと私に抱きついたまま泣いている。それも、かれこれ三、四時間くらい泣いている。あまりにも泣くものだから、私や周りの霊夢や魔理沙が慰めているのだが、それでも全然泣き止んでくれない……どうしよう。

「お、お姉様達、そろそろ——」

「いやよ!?また、どつちかが死んだりして離れ離れになったら嫌なのよ!?もう絶対にこの手を離さないわ!」

「そっすだよ!?私だってまだまだアツサと一緒にいたかったのにつ!」

「……本当にずっとこの調子ね」

「涙って枯れないのか?? ずっと出てるぞ?」

「末っ子ちゃんも愛されてるわね」

紫さん?? 羨ましいわあ、うふふみたいな目で見ないでください。というか離してくださいよ貴方の能力で。私そろそろ離して欲しいんですよ。

霊夢?? 呆れてないで、お姉様達はがすの手伝ってよ。もはや顔にベツタリ面倒くさって書いてあるよね?

それに魔理沙?? 変なところで変な好奇心出さないで?? このまま枯れてしまうんじゃないか?? みたいな感覚で観察しないで。

「お姉様達……、大丈夫だよ、もう能力は暴走しないから。もう離れ離れにならないから」

「ぐすつ、本当に?」

「フランお姉様、本当だよ?? 大丈夫」

「本当に大丈夫なのね?」

「レミリアお姉様も、大丈夫だから。私を信じて」

「うわああん!?! アツサッ!!」

安心させるつもりがより泣き出してしまった……。えっ、どうすればよかったです



か私は。

二人のこと好きだけど、そろそろウザったいって思っちゃうよ私?? 思っているの?? いや、いいなら離れなくていいんだけど。

そんな風に考えていたら、殺気が漏れていたのか、お姉様達がぱつと泣き止んだ。

あ、最初つから殺意出せばよかったのか……つてそんな問題じゃない。姉に殺意出すとかヤバいつて。

案の定、お姉様達も不安そうな顔をしている。だ、大丈夫だつてば……。

「お姉様達、大丈夫だよ。だから……」

「本当に?」

「うん、本当だよ」

「……なら私にキスしてよ」

「そうね、私にもキスして欲しいわね」

お姉様達、本当に頭大丈夫かな?? いきなりキス求めるとかあんまり無かったよね?? いや、幼い時は確かによくあったけどさあ……。

……まあいつか。

「じゃあいくよっ!」

「うん。来て……」

そう言って、フランお姉様の桜色の小さな唇に、そつと口を当てる。レミリアお姉様にも口が触れ合う程度の、短い口付けを交わした。

は、恥ずかしい……。見物人もいるんですよ??妖怪も混ざってますけど。

「恥ずかしがつちやって……。アツサは可愛いね」

「そういう所、私達は大好きよアツサ」

わ、私はお姉様達とゆりゆりする為に戻ってきた訳じゃないよ……。まあでも、久しぶりだしいいのかな……。って良くないって!?私皆と仲良くするんじゃない!

少しして、紅魔館に沢山の妖怪らが集まった。

綺羅星のごとく並ぶ、各勢力の長たち。その顔ぶれは、どれもとんでもない重鎮ばかりだった。

「コホン!?えーつと……。それでは私からお話させてもらいます」

その中で説明したのは、私の能力のことが主だ。

闇乗式一護さんという人に出会ったこと。その人?との修行により、私の能力が暴走しなくなったこと。そして、その暴走させた犯人は現人神のタナトスであること。

あまり深い内容までとはいかなかったが、それなりに濃い時間になった。

それに当然、本当に能力は暴走しなくなったのかや、その闇乗式一護さんが嘘をついている可能性があるんじゃないか等々。

それらの質問に丁寧に答えていった。……まあ正直、闇乗式一護さんが嘘をついている可能性は微粒子レベルで存在するんだけどね……。

けど、あの時みせた真剣な表情は嘘をついていないはずだ。

「……………ふう。では皆さん、これで質問は無いですか?」

その問いに対して皆が頷いた。ふいー…、これでやつとみんなと和解できた……。良かったと胸を撫で下ろすと同時に、これからどうやって皆と仲良くなるうかと考え始めた。

これからが本当に楽しみだ。そんな矢先、西行寺幽々子さんがとんでもないことを言い放ったのだった。

「また、春を集めようかしら」

## 忙しいアツサ

当たり前だが、その場が騒然とした。

それもそうだ。また同じ異変を起こすと言っているのだから。異変を起こされるのは困るっちゃ困るんだよね……、主に紫さんが。

だけど、春を奪った時の異変って確か紫さん関わってたしなあ……。

「えっと……幽々子さん??どういうことですか??マジで」

「簡単よ。戻ってきたお祝いの異変みたいなものよ」

「お祝いって……。もうちよつと気遣いというものをです……。考えてくださいよ……。」

「アツサツスイーノさん。心の声、聞こえてますからね」

「あつ、そういえばそうでしたね……。騒がしくて申し訳ないです」

「いえ、大丈夫ですよ。思っていたよりも愉快な方と分かって……。少しうんざりしてたところですよ」

「本当に申し訳ないです……。」

古明地さとりさんから注意を受けたところで、私は改めて考えてみる。

これ、もしかなくても、面倒なことになってしまふのでは?!と。

「あの、幽々子さん——」

「いいのよ、そんな遠慮しなくても。来年の春に起こすから紫もまたよろしくね」

「ちよつ、幽々子!?!本当にまたやるの?!」

「やるわよ?!なにか悪いこと言ったかしら?」

「なにか悪いどころじゃないわよ!?!とんでもなく悪いことよ!?!」

「まあまあ、そんなカツカせずにく」

「誰だつて怒るわよ!?!」

そんな感じで幽々子さんと紫さんの言い合いはかなり長い時間続き、みんなうんざりし始めたところで終わった。

しかし、結果的にまた異変を起こすとの事。こりやダメみたいです……。

もうこうなったら受け入れるしかないのかな……うん。

もういいや、お姉様達とじゃれ合おう。うんそうだ、そうしよう。

といった感じで夏が終わり、秋になった。

とはいえ、今のところ特にやることがあるわけでもなく……。

「レミリアお姉様、何かしようよ」

「……最近、アツサが甘えん坊になった気がするわ」

「ん？？別にいいじゃんレミリアお姉様。私だってまだまだ甘えたりなんだからさ  
」

「理由になつてないわよ!？」

そんなことを言われて、確かに最近甘えん坊気味になつている自分がいるなあと思つた。

しかし、かれこれ三年ぐらい会えなかつたんだから別にいいじゃん!？みたいな思考に陥っており、開き直っている節がある。

……アレ??これ??これ??大丈夫なのかな私。

「……考えてみると確かにまずいかも」

「あれ??アツサ、どうしたの?」

「レミリアお姉様ごめん!?! やっぱり自立します!」

「えっあつちよっ、アツサ!?! 自立しますってどういうことよ!?!」

私は唐突に思い立ち、レミリアお姉様の部屋から、ダツシユで自室に戻った。

いつものように本を読んでも気が紛れるかと思ひ、図書館で大量の本を借りた。その時パチュリーになんか心配されたけど平気平気!?! 多分、きつと、m a y b e ……。

そしてまた月日が流れ、冬。

私は冬になるまで、寝ている時とご飯を食べている時以外は自分の部屋に籠って、ずっと本を読み耽っていた。

そして途中から思い始めていた。違う違う、そうじゃない……と。

そして今、その違う、そうじゃないが爆発しそうなのだ。

パチュリーが心配してたのはこれかあ。

「パチュリー……。やっぱりお姉様達に甘えたいです」

「……なんとなく、そろそろ言うんじゃないかって思ってたわ」

うぐツ……読まれてる。パチュリーはよく、私の考えてることとか言おうとしたことを先読みしてみせる。

その読心力たるや、実はパチュリーは古明地さんと同じサトリ妖怪なのではないかと疑ってしまうほどである。

「はあ……。あのねアツサ。あなたの威厳のために今まで言わないでおいただけど、あなたかなり顔に出る性格よ。今なんてサトリ妖怪かって疑ったんじゃないの?」

「ウグツ?! 当たってる……。そ、そんなに顔に出てる?」

「ええ出てるわよ、顔に文字が書いてあるんじゃないかって疑うほどにね」

「そ、そこまで……」

ガツクシと肩を落とす私。だって仕方ないじゃないですか! 今まで考えてることがダダ漏れだったなんて思わないじゃないですか!?

本当にどうしよう……。

「もうここまで来たら個性と言っても過言じゃないわね……。とは言っても、アツサはちゃんとその辺を無意識にみただけ調節できてるみたいだから大丈夫よ」



「そう……なの？」

「ええ、そうよ。だから大丈夫。後は——」

「良かったあ!?!じゃあ闇乗式一護さんに考えがバレてたのは顔に出てるからじゃなかったのか!」

「ちよつとアツサ、話を最後まで聞き——」

「取り敢えず、このままお姉様達に会いに行こう!」

「ちよつとアツサ!?!……全くもう」

パチュリーが呆れていたが、お構いなしに私はお姉様達のところに向かうのだった。

お姉様達は普段、あまり一緒にいない。

さすがに食事は一緒に取るが、特にフランお姉様なんかは自由奔放で神出鬼没なのだ。それが、今はまだ飯時ではないはずだが、たまたまお姉様達と一緒にいるのが妖力を伝ってわかったので、そこに向かう。

「レミリアお姉様!? フランお姉様!」

「わつとと、危ないわよアツサ」

「アツサだろ!? 久しぶりにアツサから来たね!」

レミリアお姉様が走ってくる私を優しく抱きとめてくれた。その様子を見ていたフランお姉様が、嬉しそうな顔をして話しかけてくれる。

ああ…幸せだなあ…お姉様達も幸せって感じてくれるかな?

「お姉様達、今幸せって感じてる?」

「勿論よ。籠り気味だった妹が元気に走ってこつちに向かってきて話しかけてくれるんですもの。嬉しいに決まってるわ」

「当たり前だよ!? ずっと本ばかり読んで構ってくれなかった妹が構ってくれてるんだもん!」

レミリアお姉様は優しい母のように、フランお姉様は元気な妹のように答えてくれた。

良かった…。二人とも幸せを感じてくれている。

……でも、もしかしたらまたタナトスのせいでこの幸せが壊されるかもしれない。そう考えると殺意すら湧いてくる。

……いけない。そんなことは考えなくていいんだ。

いくらタナトスでも、二回も壊したりはしないはず。だから大丈夫。

「アツサ??どうしたの??なにか考え事?」

「ううん。フランお姉様特には——」

「ダウト」

「え?」

「なにか辛いことを考えてたんじゃないかしら?」

「レ、レミリアお姉様。そんなことは……」

「あるんでしよう?」

「……はい、実は少しだけ」

やっぱりレミリアお姉様とフランお姉様にはかなわないなあと思いながら、私はタナトスのことをもう少し詳しく話したのだった。

## 雪合戦

「ちよつと咲夜!?!時を止めて雪玉を大量に作るのやめなさい!」

「いいじゃないですかレミリアお嬢様。そちらは三姉妹でこちらを潰そうとしているんですから!」

「美鈴!?!雪玉作るの遅いよ!?!このままだと私勝つちゃうよ!」

「ウグツ……:そうなんですけど、私は精密動作性がDくらいで、いまいちこういう力をセーブしながらの作業が苦手です……:」

「はあ……:なんでこんなことになってるんだらう」

「アツサ、そう言いながら大量の雪玉をこつちに投げるのをやめなさい。私の喘息がまた悪化するかもしれないじゃない」

「あわわ、ちよつとアツサ様!?!こつちにも雪玉投げるのをやめてもらえますか!?!私は後片付けやるだけなんですから!」

突然ですが、私達紅魔館メンバーは雪合戦をしています。

……:なんでですか?

「アツサ、もう忘れたの??!さつきレミイが急に言い出したことよ!」

「そうだった……。いきなりレミアお姉様が」

「アツサ様!?!? 私に投げるのをやめてください!」

「あ、ごめんねこあ。ついつい投げちゃった」

「アツサ様ア!?!? 可愛いお顔で小首をかしげるのはやめてくださいよ!?!? 押し倒しますよ!?!?」

「ちよつ、本当にごめんって……。つてこあ!?!? 弾幕張るのは無しでしょ!?!?」

「それでもしないとやめる気ないですよね!?!?」

そんなこんなで雪合戦から弾幕勝負になったが、普通にフランお姉様の圧勝だった。というかそもそもその原因だが……、

「全員集まったわね。これから雪合戦をするわよ」

レミリアお姉様に外に集合してちようだいと言われたので集まってみたら、雪合戦をすると言われた私達。

勿論、インドア派の私達は誰一人として賛成することなく――

「やるやる!?!私やりたい!」

「私も賛成です」

「私も賛成、です」

「私も賛成よ。誰かさんとは違ってね」

「パチュリー様がやると言うなら私もやります!」

私以外全員が賛成してしまった。というかパチュリー、その言い方は流石に酷いです

よ……傷つきました。

「ちよつとパチエ……、その言い方はないんじゃないかしら?」

「そうだよパチュリー。アツサが可哀想だよ」

「そうだそうだ!?!レミリアお姉様もフランお姉様ももつと言って!」

「やるならもつと酷い言葉を使わないとねえ?」

「そうだよ! もつと可哀想だっと思える言葉を使わないと!」

レミリアお姉様もフランお姉様も酷かった!?!?っていうかパチュリーより酷い!?!?嗜虐的な笑みを浮かべて冗談とも取れないよ!?!

「とうかレミリアお姉様、なんでいきなり雪合戦するって言い出したの？」

「それはね、アツサあなたの——」

「アツサの為だよ!? なんせ最近籠りっぱなしで運動してなかったってのもあるけど——」

「コホン!? 後はアツサの心のケアってところかしらね。みんなと楽しいことが出来ればより不安もなくなるんじゃないかなって思ったのよ」

レミリアお姉様が私のことを思ってたのか……嬉しいなあ。心遣いに、胸の奥がほんのり暖かくなる。

「……そっか、ありがとうレミリアお姉様、フランお姉様」

「いえいえ、いいのよこれくらい」

「家族なんだし、気にすることないよ!」

「思い出したけどさ……お姉様達が盛り上がりすぎるのも、どうかと思うんだよね」

「原因はアツサ様じゃないですかあ!？」

「ま、まあそうなんだけど……」

こあの鋭い指摘に思わず顔をしかめてしまう。

でもそんな顔は私には似合わないかと思い、すぐに顔を元の笑っている顔に無理やり戻そうとする。

「……まあ無理に笑おうとするものでもないわよ、アツサ。今すごい顔になってるから」

「えっ!?!ど、どんな顔になってる?」

「無理に笑ってますってバレバレな上に、いつもの感情が表に出る顔のせいで正直笑っちゃうわよ」

「ちよっ、笑わないでよ。パチュリー!」

パチュリーもこういった部分では少し酷いと思う。なんでみんなしてサデイスティックな、優しくない時があるんだ。

思わず頬をふくらませていじけてしまう。

「あらアツサ、リスにでもなったつもりかしら?」



「あはは!?!アツサつたら頬をふくらませて可愛い!」

「レミリアお姉様とフランお姉様までえ!」

お姉様達が意地悪なことを言うから、私はもつと頬をふくらませる。

「まあまあ、そんなハリセンボンみたいな顔をしないで、落ち着いてくださいアツサ様。お嬢様達はアツサ様のことが愛しいからいじめてしまうのですよ」

「そうですよ、皆アツサ様が可愛らしいからやつてるんですよ」

「そ、そうです!?!つまりアツサ様が可愛いからいけないんですよ!」

咲夜さんや美鈴さんの励ましの言葉で、私はふくらませていた頬を、さながら穴の空いた風船のように思いつき息を吐き出して元に戻した。

その代わり、後でこあには新作のスペカの実験台になつてもらおうけど。

「ちよつと!?!私の扱ひも酷いんですけど!?!」

「それもこあが可愛いからいけないんじゃないかしら?」

「ちよつとパチュリー様!?!ここにきて裏切らないでくださいよ!?!」

こあに対してのその発言、私は好き。なんて心の中でふざけていると、

「別にいいじゃない。ゴホツゴホツ」

「ああ、パチュリー様!?!無理をなさらず!」

いつになく動き過ぎたからか、パチュリーの喘息の発作が始めてしまった。

「平気よゴホツ、そこまで今日は酷くないしゴホツゴホツ」

「酷くなってきてるじゃないですか!?!お嬢様、私達はお先に失礼しますね!」

「分かったわ、パチエの容態が悪くなってしまったのなら仕方のないことよ」

「ありがとうございます!?!では、パチユリー様」

「ええ、ありがとうございますゴホツゴホツ」

こあがパチユリーに肩を貸しながら、紅魔館の中に戻っていく。

私は時折咳き込んで体を揺らすパチユリーのことを、あんまり容態が酷くならないといいけど……と心配げに見送った。

## 死の桜

なぜ教ええない？

あの後、パチュリーは一命を取りとめた。

いや、今のは大袈裟に言い過ぎたかもしれないけど……まあ、実際危なかったことは変わりないから、いつか。

「それにしても、パチュリー助かってよかったよね〜」

割とマジで危なかったパチュリーが、今のフランお姉様の発言を聞いたらどう思うでしょうか？

私は殺意マシマシでフランお姉様を殺しにかかると思います。分かりませんけど。

「パチエは平気……とはいえ、そろそろ春。あの亡霊が異変を起こすまであと少しっていうのが、考えものね」

そうなのだ、もう少しで春……にも関わらず、外は相変わらず雪がどつさり積もっている。

あの美鈴さんも門番する時、寒いと小言を漏らしていたくらいだ。ちなみに美鈴さんがそんなことを言った後に、咲夜さんが時間を止めてマフラーをかけてあげていたのは

秘密だ。

「でもなんで今更、また春を集めようとしたんだろう……」

「なんとなくだけど、アツサのことを殺しに来てるんじゃないかなって、思ってた……あ、アツサ。大丈夫そんな震えなくてもあくまでもなんとなくだからあ！」

フランお姉様の発言で思い出したが、私は過去に皆を殺してしまった張本人だ。

確かに、そんな奴がいきなり皆と仲良くしたいだなんて烏滸がましいのかもしれない。そう考えていると、レミリアお姉様が優しく頭を撫でてくれた。

「大丈夫よ、アツサ。いざって時は、私が文字通り体を張ってアツサが安全だってことを証明するわ」

「わ、私だってやるよ!?アツサがまたみんなを殺すことなんて無いんだからー」

レミリアお姉様とフランお姉様からありがたい言葉を貰えて私は心の奥が暖かくなっていた。

な、なにか気の利いた言葉を返さなくちや……えつと、ええつと……

「ふふ、無理に返さなくてもいいのよ?!その反応だけで十分ですもの」

しどろもどろになっていると、レミリアお姉様にそんなことを言われてしまい、私はよりどうしたらいいか分からなくなる。

その時、フランお姉様の顔が不意に近付いてきた。そして、私がなんだろうと疑問に

思うより先に――、

口が塞がれる。唇と唇が重なったのだ。

「大丈夫だよ、アツサ。そんなに慌てなくても。いつか、お返ししてもらおうけど、今は落ち着いて……ね？」

「フ、フランお姉様……ありがとうございます。それにレミリアお姉様も」

「ええ、大丈夫よ。それにしても、フランも随分大胆になってきたんじゃないかしら？」

「そ、そうかな??でもお姉様ともたまにするでしょ??キスくらい」

「まあ、そうだけど……。アツサにキスなんて、ここ最近全くしてなかったじゃない?」「そうだね……。アツサが自分から引きこもったりしてたから」

「うぐッ」

一時期引きこもったりしてたのは、ちよつと私の中でも忘れたかった記憶だ。何せ混乱していたのもあったから、黒歴史みたいなものだ。

それに、ちゃんとレミリアお姉様やフランお姉様と触れ合えるようになってから、ただそんなに経っていない。なんせ、私は今まで幽閉されていたようなものだから、まあ、それすらも年が経つにつれ、ただの引きこもり生活みたいになつていたが。

「……とりあえず私が引きこもったりしてた話は蒸し返さないでください。ちよつと恥ずかしいです」

「そ、そう。分かったわ」

後でレミリアお姉様にそのときの私の様子を聞いたら、髪に挿している、彼岸花もちよつと萎れ気味になっていたようで……笑うのを堪えるのが大変だったそうです。

……ちよつとそれは酷いなあと思いました。

時が経ち、今や卯月となった。

毎日毎日雪ばかりが降って、もう見飽きてしまったほどです。いくら子供とはいえ、雪合戦もしたし、かまくらも作つたし、流石にもういいです。

……どうやらチルノっていう妖精さんはまだまだ飽き足りないようで、毎日はやぎ回っているようですが。

「そろそろ行っても良いんですかね……」

「行ってもいいんじゃないかしら？」

「私もそう思う！」

斯くして、私とレミリアお姉様、それからフランお姉様は、幽々子さんたち待つ冥界に向かうことになりました。

「それにしてもよかつたのフラン？」

「お化けが出るからなんて古典的な理由で驚かないよお姉様！」

「え??死ぬかもしれないってことを伝えようかなと」

「え、死んじゃうの!？」

「アツサ……、伝えてなかったの？」

「え??だつて分かつてるものだと思つてたから……」

まさかのここに来て、フランお姉様が幽々子さんの能力を知らないという事態が発生。

慌てて説明する。下手をすれば本当にフランお姉様が殺されかねない。

……そんなことは無いと思うけど、あり得るからなあ。何言うか分からないのがフランお姉様だから。

「まあ、取り敢えず私達でもちよつと油断しただけで殺されるわ」

「なんだか、アツサの能力に似てるね」

「確かに似てるわね」

「うーん……でも向こうは幽霊も操れるからなんとも言えないです」

「えっ、そうなの？」

「いや、多分ですが……」

正直自信はない。まあ、でも出来ないことは無いはずだから出来るってことにしておこう。

そんなことを考えていると、冥界の中のがーい階段が目の前に。さらにそこには魂魄妖夢さんがいました。

「あ、アツサさん……とフランさんとレミリアさんですね。どうぞこちらへ」

「あら、意外とあっさり行けるのね」

「……なにせ主人が起こしたことなので従者的にはなんとも言えないんです。なので、来た人たちには皆さん通ってもらってます」

「え？！皆さん？」

妖夢さんの言葉に困惑していると、妖夢さんが察してくれたのか、すぐに説明をしてくれました。

まあ、簡単に言うと、流石に今回のことを知って、霊夢は面倒くさがりながらも今日来て、魔理沙も面白半分で今日来て……何故か今日来てる人が多いな（二名）。だそうで



す。

まぐれが多いなあ……。

そんなことを考えながら階段を昇っていくと、そこには言い争いをしている霊夢と魔理沙、そして幽々子さんがいたのです。

## 喧嘩に始まり勝負に終わる

「だーかーらー！　なんでこんなことしてるのよ！　どうせなにか別の良からぬことも企んでるんでしょ!？」

「そうに決まってるぜ！　絶対変なことでも企んでるんだろ?!　私達にも教えてくれよ!」

「だくめくよくこれは決して、遊びじゃないのだから」

「そりやそうでしょうねえ!？」

思いつきり喧嘩してますねえ……。え、どうしよう私困惑って心の中で思うくらいには困惑してるのか……。 (自己分析力ウ……。ですかね)

さて、落ち着いて……。本当にこれ収まるのかな？　なんかみんな脳筋だったりするから、案外弾幕勝負に落ち着きそうだけど。

「もー！　本つ当に埒が明かないわね!」

「こうなったら……。弾幕で勝負だ!」

「いいわよく、今度は負けないから」

ほら、こうなった。やっぱりみんな弾幕が好きなんですな! (適當)

それにしても、最近私の心の中の言葉遣いがかかなり変になってきたんですけど……も  
しかして、闇乗式一護さんにかき乱されたりしましたかねこれ？

まあ、いざとなったらお姉様達がいるから平気平気……。多分、きつと、maybe.

霊夢 s i d e

全く……なんでいつもあの亡霊はこうもハッキリしないのかしら。

正直イライラするのよね、そういう態度。

「紫わざわざ、顔にシワが増えるわよ? とか言いに来たりしないわよね?」  
「しないに決まつてるじゃない。ここまで霊夢に近づいたのは警告のためよ」

紫も紫でハッキリしない……というか胡散臭い言い方ばかりだから、これまたムカつく要因ね。能力自体、曖昧さの象徴みたいなものだし。

というか紫が警告ってあまりないわね、何かあったのかしら?」

「幽々子の弾幕を避けながら考えごとなんて、相変わらず凄いわよね霊夢は。そんな夢に警告なんだけど、また幽々子は咲かせようとしてるわよ」

「あの桜を?」

「ええ、そう。西行妖を……ね」

あの桜……西行妖はこの冥界でも特に大きな桜。妖怪らしいけど、特に今のところ悪さらしい悪さはしていない。

けど、かつてあの亡霊はその桜を咲かせようとした。ただ、満開を見たいがために幻想郷中の春を集めるといってもない事をしてかしながら。

それには紫も関与していたが、紫は西行妖を咲かせるのにはあまり良い反応を示さなかったらしい。恐らく、あの桜には何かがある。

「で、わざわざそれを伝えに来ただけかしら?」

「そんなことないわよ。ただ、「万が一」があったら面倒なことになるから来た。それ

じゃダメかしらね？」

「……はあ、相つ変わらず遠回りなことしかしないやつだこと」

「私はそういう妖怪よ、勘弁してちょうだいな？」

そう言いながら紫がいかにもぶりつ子がやっていそうな、瞳から星を散らすウイंकをしてみせるが、あまりにも痛々しすぎる。

正直見ているこつちが恥ずかしくなってくるレベルだ。

「……霊夢、せめてなにか反応をちょうだい。流石に恥ずかしいわ」

「恥ずかしがるくらいなら、もう二度とやらないことね」

「……はい」

紫が珍しく、私に弱みを見せた瞬間であった。

魔理沙 side

「おいおい……霊夢のやつ、紫となんか話し込んでるぜ？ 全く……真面目にやって欲しいもんだぜ」

「あら、それは私と対峙する時は真面目にやらないと負けるって意味かしら」

「あーそーだな、褒めてるぜある意味」

「嬉しいわね。じゃあもつと本気を出しちゃおうかしら」

「ちよつと、それはやめて欲しいぜ」

いつものように、フワフワしてるのはいいがそのせいでこっちが被害を被るのはごめんだぜ……。

全く、アツサが見えたと思っただけならすぐこうなる……。別にアツサが厄を持ってきてい  
る訳じゃないが、いつもアツサが来るとすぐ誰かと弾幕勝負になる。

アツサがついていうよりも……、もしかしてあの彼岸花が怪しいかもしれないな。なん

かアツサ曰く、あの彼岸花も妖怪らしいし……。

いや、こんなこと考えてる暇なんてないな。目の前には大量の蝶弾があることだし、避けるのに集中しますか。

「あらく、そんな真剣な目になつて……やつと危ない状況だつてことを理解したのかしら〜?」

「え? つてええ!? ここまで追い詰められてたのか」

「うふふ。気付くのが遅すぎよ? まあ、その調子だと……簡単にはやられてくれなさそうね?」

「あつたり前だぜ! この魔理沙様がそう簡単にはやられるわけが無いんだぜ! なんつたつてあのアツサの姉貴分だからな!」

「あらく、それじゃあ私もそれなりに頑張っちゃおうかしら〜」

「おう! 今度は油断してないし、構わないぜ!」

私は鼻を鳴らして、堂々と宣言するのだった。

アツサ side

……? おかしい。明らかに何かおかしい。さつきもそうだ。お姉様達と冥界に向かつて飛んでいる時も、お姉様達が遅く感じた。

今もそうだ。霊夢や魔理沙は……なにか考え事をしていたり話していたりしているから、ある程度飛ぶのが遅いのは当たり前だ。

だけど、飛んでいる弾や、散りゆく桜までもが遅く見えるのはさすがにおかしい。どうして遅く見えるのだろうか? 私は今まで何かしていただろうか……? ん? 今まで……今まで……、

神様よりも強い人と鍛錬してましたねえ! そういえば! 絶対そのせいだ! そうに決まってる!

え? じゃあ私つよつよなんですか!? もしかしてたまに小説で見た私TUEE!  
!つてやつですか!?

……すっごい困りましたね。それなりたくなかったです(困惑)



私今回、すつごい困惑してますね。まあそりやそうなんですけど。

まあ、取り敢えずは霊夢と魔理沙、そして幽々子さんの弾幕勝負でも見届けましょうかね。

はて?・煽りましたっけ?

私がこういうのもなんだが、霊夢と魔理沙、そして幽々子さんの戦いは少々つまらないものであった。

3!<sup>スリー</sup> まあ、とりあえず一部始終を見てもらった方が早いかもしれない。(メメタア) 1、2、<sup>ワン、トゥー</sup>

最初から説明していくと時間がかかっちゃうので始めの部分は簡潔に……まず霊夢が面倒くさそうに幽々子さんの弾幕を避けて、魔理沙が少しやりづらそうに避けていたのを覚えてます。

その後、霊夢はスキマから出てきた紫さんと、魔理沙は幽々子さんと話し始めて、その後からですかね。

魔理沙も霊夢も、急に目の色を変えてやる気を出し始めたんですね。

「さて、幽々子！ こっからは私も本気でいかせてもらうぜ！ まず景気付けにこいつを喰らえ！」

恋符【マスタースパーク】

「私も少しやる気を出してあげるわ。あんたをとつちめなきやいけなくなつたしね。

夢符【二重結界】

「あらあら、これは私も少し力を出さなきやね」

桜符【桜吹雪地獄】

魔理沙からは十八番の高火力ビームが、霊夢からは結界が幽々子さんに向かっていく。

そして、まるで桜の花びらが舞うように儂く綺麗な幽々子さんの弾幕がそれらを相殺した。

幽々子さんの力は相も変わらず底知れない。本人がその気でなくても、わざと隠しているようにしか思えない。

……正直、幽々子さんの普段の態度から考えると絶対にその気だろうけど。

「むう……いくら景気付けの一発とはいえ、あつさりと防がれるのもなんか気に食わないぜ」

「そうね、というか前に会ったそんなスペカあったの?」

「最近、何となくで作ったのよ。じゃあ私からも攻めようかしら?」

亡舞【生者必滅の理 — 魔境—】

そういうと幽々子さんから蝶弾の列が四つ現れ、それらが時計回りに回転し始め、遠くになればなるほど偶数弾、奇数弾とかなり避けにくいものとなっている。

その上、大弾が発射されている。それは最初こそ、誰も狙っていないように見えるが、少しすると魔理沙や、霊夢を直接狙って飛んでいく。

魔理沙は幽々子さんの周りを回転することで、かなりギリギリではあるが避けている。　霊夢は少し遠くにいなながらも、涼しい顔をして躲していく。

「私にはこれは避けにくいな……綺麗ではあるけど」

「そうね、美しさって意味じゃこの亡霊が一番かもね。認めたくないけれど」

「あらあら、褒めてくれて嬉しいわね。だからと言って手を抜くつもりは無いけれど」

華霊【バタフライデイルージョン】

最初に、周りにあったと思われる霊魂が霊夢がさっきまでいたところに集まったと思ったら、まるで花火のような弾幕が現れた。その後も霊夢を狙ったり、魔理沙を狙ったりしている。

また、十六方位にまるで矢印のような形をしている小弾の塊が一回だけ発射される。

更に、奇数弾、偶数弾、奇数弾の三つの弾で構成された中弾位の大きさの弾が何回も何回も発射される。

魔理沙も霊夢も、これは割と難なく避けている。

「これも余裕だね。　相も変わらず綺麗な弾幕なのがイラつくけど」

「ふう、これなら私にとっても簡単だな。　綺麗だからそれについつい目を奪われて、うっかり当たりそうになるが」

「綺麗ってよく言われるのよね、私が綺麗だからかしら〜」

幽々子さんがそう言うのと、魔理沙がイラツときたのかよく分からないが、少し避けるのが雑になってきた気がしたけど、多分気のせいではいい。(白目)

ちなみに私はなんとなく幽々子さんに母親の面影のようなものを感じてました。なんででしょうね (すつとぼけ)

……というか、何故こんなにも遅くて、軌道が読みやすい弾幕を魔理沙や霊夢は手こずりながら避けてるんですかね本当に。

「ま、魔理沙??なにムキになってるのよ」

「何となくだが癪に障るんだぜ!」

「……そんなアンタは美に執着してないでしようが」

「最近は家の掃除とかも頑張ってるんだぜ? こう見えても」

「こう見えてもとか言ってるじゃない……。全く、呆れたものね」

「ふふふ、話している最中に悪いけど、これで終わりにさせてもらうわね?」

蝶符【花蝶風月】

幽々子さんがスペルカード宣言をすると、霊夢と魔理沙の背後に大量の蝶弾が現れ、その後霊夢と魔理沙に向かっていく。

その様子はさながら大量にあるタンポポの綿毛があちらこちらへと飛んでいくかの

ごとくの自由さであった。

そんな霊夢と魔理沙にとっては避けにくいであろう弾幕は、見事に二人に直撃したのであった。

……とまあ、そんな感じで最後はあまりにもあっけなく終わったのが、霊夢と魔理沙、そして幽々子さんの戦いでした。

いやあ正直に言つて、見ているあまり面白くはなかつたです。 どうしてこんなのが避けれないのか?? っつて疑問に思ってしまうほどには。

ついつい霊夢と魔理沙を煽ってしまうほどに謎でしたね。

「……愛杉、アンタそんな性格だったっけ？」

「そうだぜアツサ。あまり人を煽るのは良くない。なんなら今この場でその精神、叩き直してやろうか?」

「魔理沙、そんなボロボロの体じゃ動くのも大変なんだから…あんまり無理しないでよ。」

「霊夢も、今はあんまり動かないこと……分かった?」

「さつき煽ってきた人物とは思えない、変貌ぶりね」

「そんなこと言っていると、回復魔法かけないよ?」

「私は別に自分でかけられるから平気だが……、霊夢はどうかな?」

「魔理沙はここにきて、霊夢を見ながらニヤニヤしている。……明らかに煽ってらっしゃる。さつき私に煽るなって言った人のやることです?」

「まあ、いいわ。取り敢えず私に回復魔法でもなんでもかけてちょうだい」

「うん、分かった。ちなみに私は魔法がすごい苦手だから失敗したらごめんね」

「ちよつ、愛杉!? 今それ言うの?! ま、待って。お願い——」

「えい!」

そんなこんなで、霊夢はよくなりましたとき。



え、もう集めてたんですか？

はてさて……とりあえず霊夢は治しました。これからどうしましょう？ 別に私単  
 体で幽々子さんに挑んでもいいんですが……。

「アツサ、やりたくないなら別にいいんだが……私達の仇を討つてくれないか？」

「そうね、やられっぱなしってのも悔しいし。愛杉、アンタに頼んでもいいかしら？」  
 そんなことを言われてしまったらやるしかないなあ。

霊夢と魔理沙に言われちやアねえ……人間だし、その上姉貴分だし。

よし、それじゃあやってあげましょう！

「……今、愛杉のやつ。私がやってあげましょう、エツヘン。みたいな顔してるわ  
 ね」

「なんか、ふふん！ みたいな感じだよな分かるぜ。ちよつと可愛いよな」

「あーなんかやる気なくなってきたなー」（棒読み）

「わ、分かったから！ 早く仇を……」

別にそう言われなくてもやるけども……。可愛い可愛い言われるとなんかむず痒く  
 なるというか、恥ずかしい？

まあ、お姉様達とはもっと恥ずかしいことしてるけど……あー！ 思い出すともっと  
恥ずかしくなってきた！

幽々子さんには悪いけど八つ当たりさせてもらおう！

「やいやい、幽々子さん！ 仇を討つ為、そしてなによりも八つ当たりの為！ これから  
私は攻撃を行う！」

「吊い合戦は分かるけど、なんで八つ当たりまでされなきゃいけないのかしら？ と  
りあえず勝負つてことでいいのね？」

「そういうことになりますね！ じゃあやると決めたらやりましょうか！」

恥ずかしくて、なんか熱いキャラみたいになっちゃったけど私はそんなキャラ  
じゃないので！ ……私は一体誰に話しかけてるんでしょうかね？ 闇乗式一護さん  
にでしょうかね？

まず、勝敗の方から言うのと私の圧勝でした。

幽々子さんが色んなスペルカードやら弾幕やら張つてきましたけど、全て避けきりまして……その後私が一発弾幕を当てただけであつさりとポロポロに。

……ついついスペルカード中に胸を揉みしだきましたけど○なんか母性に当てられましてはい……（などと犯人は供述しており）

「……アツサ、いくらなんでも胸を揉みしだくつてのは無いだろ」

「そうですね、いくらなんでも無いですよね」

「魔理沙、責めるところが違うわよ。なに一発で終わらせてるのよ。頭おかしいんじゃないの？」

「わ、私も一発で終わるとは思わなかったんですよ!？」

「などと犯人は供述しており……」

「ちよっ!! フランお姉様?!」

まさか、フランお姉様に心の中で思っていたことを言われるとは……いやあやつぱり

心の声顔に丸出しなんすね（すつとほけ）

「それで……地味にメンタルブレイクしたのかずつと動かないぞ？ 幽々子のやつ」

「結果がフルブレイクしたんでしょ？」（東方ロストワード感）

「え？ どういうこと？」

「とりあえず、アツサお前のせいって訳だ。それは分かってるだろ？」

「え？ あ、うん。それは分かっている」

「ならすべき行動は分かっているじゃないかしら？」

「……うん。 そうだね。 レミリアお姉様」

レミリアお姉様にお礼を言つて、すぐに私は幽々子さんの近くに寄る。

……気のせいなら幽々子さんに「ヒエツ……」つて言われたような気がしたけど気にしない気にしない……やっぱりにしますよオ!? 正直、こっちの方がメンタルブレイクしそうなんですけど!?

「え、えつと……幽々子さん？」

「な、なにかしら？」

「さつきは胸を舐めるように羞恥的に揉みしだいた上に、一撃で終わらせてしまつてすいませんでした」（土下座）

ちなみに土下座した理由ですがそうした方がいいと思つたからです。だからこそ、土

下座したんですね（〇）

「ふふ、土下座までされたら……許すしかないわね（寛大）」

「本当ですか!!」「ただし!」「ただし?」

「今度の宴会場所は、紅魔館にしてみらおうかしら?」

「そ、それで許されるなら……」「ちよつと、本気で言ってるの!」「レミリアお姉様!!」

「そ、それだけはやめてちょうだい!うちの食料が無くなるわよ?!」

「そ、そんなんですか?レミリアお姉様」

「そういえばアツサは宴会に出たことが無かったわね。幽々子の胃はブラックホール

よ」

「そ、そうなんですわね……」

正直、あの細く美しい体のどこに入っていくのか気になるものだが……まあ、変な詮

索はやめておきましょう。

「とりあえず……これで異変は終わりだな」

「あら?まだ終わってないわよ?」

「ん?どういうことだ?」

「まだあの桜が咲いてないじゃない。あの西行妖が」

西行妖って確かあの、すごく……大きいです……な桜のことでしたっけ?でもあ

れってそんなに……いや、確か幽々子さんからすれば大切だって話を紫さんから聞いたよ  
うな……

「アツサ、大切では無かったよ。確か……」

「幽々子自体がどうなるか分からない、よ」

「そうそう……って八雲紫!？」

「あ、紫さん」

スキマからいつもの胡散臭い雰囲気醸し出しながら、紫さんがでてきた。

今はフランお姉様に対して、ある意味奇襲が成功したようで少し笑みを零しながらでてきた。それがとても妖艶で……つとこれ以上はいけない（戒め）

「それで、幽々子さん。咲いてないからなんなんですか？」

「簡単よ。咲かせるのよ？」

「ま、まあそうでしょうね。で、集まってるの？ 春度は」

「え？ とつくのとうに集めたわよ？」

「……え？」

「え？」

「ええええええんだああああああ!？」

# 煽るの無しです！

「紫さん、えんだあああああつてなんですか？」

「え？ あ、いやなんでもないのよ、うん」

「すっごい怪しいんですけど……怪しいので殴つてもいいですか？」

「なんで殴るのよ!? も、もちろん私も抵抗するわよ!? 弾幕で！」

そんな訳の分からない、意味不明な言葉を交わし合つて、紫さんとの弾幕勝負の火蓋が切つて落とされました。

紫さんとの弾幕勝負に、レミリアお姉様とフランお姉様も加わりたいと何故か言い出

した。

「レミリアお姉様にフランお姉様、良いんですか??紫さん、かなりやり手だとは聞いていますけど……」

「いいのよ、私もあの八雲紫の本気つてのを見てみたいの。なんだから、ワクワクするじゃない?」

「私も気になつてたんだもん! あの妖怪と遊んでみたい!」

「あの妖怪つて……。一応、私は妖怪の賢者とも呼ばれてるのだけれど……。まあいいわ。本気を見せてあげる。理不尽を味わいなさい!」

紫さんが右腕を振ると、私たちの目の前の空間がいきなり裂けて、いっぱいギョロリとした眼球が姿を現しました。それから、夥しい数の弾幕が襲いかかってきます。

「ツッ! お姉様たち避けてツ!!」

咄嗟に叫びはしたものの、レミリアお姉様とフランお姉様は避け切ることができず、直撃してしまいました……。ですが吸血鬼なだけあって、平気な顔をして煙から出てきます。

まあ、私は避けれたんですけどね、初見さん（ウザい）

「痛た……。遊びじゃないから避けられないような弾幕でもいいって訳ね。じゃあ私は

……「キュツとしてドカン」



「ちよつとフラン!? それはやり過ぎよ!」

「別にいいわよ、既に避けてるから」

「!? なんで私の手に『目』が無いの!?」

「簡単よ、スキマで私の貴女の言う『目』を移動させたのよ。まあ、境界を曖昧にして、そもそも出現させないって方法もあつただけだよ」

流石、妖怪の賢者と呼ばれているだけのことはあるようで、フランお姉様の能力を封じることが出来るようだ。

私にはとてもじゃないけど出来ない。 第一『目』ってなんですかフランお姉様……。

「それじゃあ運命を…運命を…って、運命が見えない!? (ジャジャジャーン!) 一体どうして」

「運命と意思の境界を曖昧にしたのよ。 このくらいはちよちよいのちよいね」

「クツ、流石は八雲紫と褒めるべきところね」

レミリアお姉様の能力まで……。 とうか、その境界って本当に表裏一体みたいな感じなんですかね？

まあ、いつか。 じゃあ私も失礼して……。

「それじゃあ、そろそろ私も少しだけ力を出しますよ」

「あら、末っ子ちゃんか? まあいいわ、来なさい!」

私は少し小さい、威力を重視した弾幕を放った。

紫さんは少しだけ、肩透かしをくらってガツカリしたような顔をしている。

「あら、残念ね。少し張りきっていたから、どんな攻撃が来るかと思っただけ……」

「それはどうですかねえ？」

「……? まあいいわ。スキマで末っ子ちゃんのお姉さん達に当たるように……ッ!?

スキマが消えた?!」

私は威力を重視した弾幕を撃った。それは間違いない。まあそれはあくまでも「能力の威力」を調節したという訳である。

闇乗式一護さんとの修行で、能力を自在に操れるようになった今、弾幕に能力を付与することなんておちやのこさいさいなのです。まあ、多分ですけど。

でも今こうやってスキマを消せましたし、実験は成功ですね。

……ただ、当たってもそんなに威力は無いようで、紫さんはピンピンしている。

「やられたわね……。まさかここまで能力を扱えるようになっていたなんて……。けれど勝てるわ。二人も足を引っ張ってくれる姉がいるのだしね!」

「……今、なんて言いました？」

「お荷物が二人もいると、言ったのよ。それがどうかした？」

「……っささい。許さない! レミリアお姉様とフランお姉様を侮辱するヤツは、絶対

に許さない!!」

「でも事実でしょ？ 足を引つ張りかねないことは」

「黙れ！ ここで再起不能になってもらう！」

「出来るかしらねえ？」

紫がそう煽つた瞬間に、私は能力を少しだけ使った。紫の能力だけを殺したのだ。そうすれば枷がなくなり、お姉様達が能力を使えるようになると思ったからだ。

「なっ!?! 能力が使えなくなつた!?!」

実際、その読みはあつていたように紫は能力が使えなくなつていた。

「運命が見える見える。八雲紫、貴女が負ける運命がね！」

「アハハ！ これでおしまいよ！」「キュツとしてドカン！」「」

そうして紫は私達、紅魔の姉妹に敗北したのだった。八雲紫は所詮、先の時代の敗北者じゃけえ！

「すいませんでしたあ!!」

「いい、いいのよいいのよ、気にしなくても。元はと言えば、煽ったのは私なんだし……」  
「それでも!」

今、私は紫さんに対し、地面にめり込むほどに頭を下げた土下座をしている。

確かに紫さんも煽ってきたけれど、だいたい初めに煽り出したのは私だ。さらにお姉様たちを貶されたとは言え、私は激情に身を任せて紫さんの煽りに乗っかってしまった。

お姉様達も危険に晒すし、どの道いけないことをしたのは私なのだ。

「お姉様達も! 本当にごめんなさい!!」

「いいの、アツサ。あのとき八雲紫に煽られた時、本気で怒ってくれたこと。とても嬉しかったわ」

「私も! 嬉しかったよ! ……だけど、あんまり怒ったアツサは見たくないかな。ちよつと心が泣いていたような気がするの」

「うう……照れますね。でも私は泣いてないですよ多分」

「多分じゃん!?!」

実際のところは分からない。それこそ、あの悟妖怪である、さとりに聞いてみないことには。

けれど、私は顔に文字が書いてあるんじゃないかってくらい、心を表面に出している（お姉様達のみ）らしい。そう考えると、フランお姉様の言葉は的を射ているのかもしれない。

「うう……悩みどころです」

「まあまあ、取り敢えず頭を上げてもらって……」

「それは出来ないです！」

「……あのお、みんな西行妖が咲いていることを忘れてないかしら〜？」

「『『『『『あつ』』』』』」

幽々子さんの言葉で思い出した全員であった。

ちなみに、少し前に来ていた妖夢さんが土下座を見て、思いつき顔を引き攣らせていた。悲しいなあ……。

## やってあげましょう

あまりにも紫さんとの弾幕勝負（強引）で、忘れ去られていた西行妖。その姿は少々寂しそうに見える……はずもなく、むしろ禍々しい雰囲気醸し出している。

その場にいた幽々子さんを除く誰しもが、あれはマズいと本能で感じた。

……あれ？ さつきまで近くに幽々子さんがいたはずなのに、何故か居ないような？  
「末っ子ちゃん、幽々子がどこに行ったのか不思議に思っているのでしょうか？」

「え？ は、はい」

「簡単に言うとな、かつて幽々子は自分の屍体を重石にして、西行妖を封じようとしたの。その封印が、解けたのよ」

「えつと……つまり、犠牲になったのだ……？」

「まあ、そんなところね。そして今……待って末っ子ちゃん、この状況でふざけた？」  
「そのようなことがあるうはずがございません！」

「……まあいいわ、とりあえず……死の桜は今、咲いたのよ」

死の桜は咲いた。その言葉からなんとなく、幽々子さんはあの西行妖に取り込まれたということを理解した。

問題はどうかやって、幽々子さんだけを切り除くのかということだ。

「……殺せはします。一応、ですがそれだと幽々子さん諸共……ですな」

「そう、救えない可能性の方が高いのね……」

「まずは、あの弾幕を捌いていきましようか」

「そうね。アレは食らったら恐らく、死ぬわよ」

西行妖の方を見ると、花卉は黒く色づき、この世のものとは思えないほどの禍々しい桜になっていた。その桜から美しい花びらが舞い、禍々しくも美しい蝶弾が飛び交っている。

どの弾も当たったら即死亡。死亡RTA走者は喜んであの中に入っていくのだろうが、私は生憎そうではない。

故に、どうやって躲していくかを考える。

「お姉様達は、多分大丈夫。だけど……」

「おいおいアツサ。私はお前の姉貴分だぜ？ その私が早々に殺られる訳ないんだぜ

！」

「魔理沙……」

「大丈夫です、アツサさん。私は幽々子様警護役であり、剣の指南役でもあるんです。だから……私は平気です！」

「妖夢さん……そんな泣きそうな顔しながら言われても、説得力が」

「ウグツ、い、いいじゃないですか！ まだ泣いてないんですからあ！」

「そこ、問題じゃないと思うんですけどね……」

魔理沙との会話で勇気を、妖夢さんとの会話で安心感（何処からでしょうかね……）を貰った。

霊夢は……なんか恥ずかしそうな顔をしている。え？　なんで？　そんな恥ずかしい会話してたの私達。

そう思っていると、霊夢は私のスカートの部分を指さしてこう言った。

「ドロワが見えてるわよw」

と……



「殺す、霊夢殺す！」

「そ、そんなに怒らなくていいじゃない。愛杉」

霊夢が顔を赤くしていたのは笑っていたから。というか、スカートが捲れてるのに普通に話していた私って一体……。

「末っ子ちゃん？ また、西行妖のこと忘れてないわよね？」

「あ、それは覚えてますよ。それになんとなくですが殺し方、分かりましたから」

「え？ それってどういう……」

「とりあえず、行きますよー」

私が先頭をきつていく。無論、花びらにも蝶弾にも当たらないように避けながら。

殺し方というのはつまり、幽々子さんと西行妖を切り離す方法だ。簡単に言えば、西行妖の妖怪の部分の殺して、桜だけを残す。

だけど、この方法には問題がある。ズバリ成功率だ。正直、この作戦の成功率は冗談抜きで低い。作戦とも言えないほどだ。

しかし、だからこそやるのだ。それしか方法がないならやるしかない。

少しでも確率を上げるために、私が西行妖に触れて能力を使おうかとも考えたが、流石に霊夢達に止められた。

仕方なく、西行妖にギリギリまで近付いて能力を使うことにした。

これも反対されたが、成功率をあげるためと何回も言っていたら呆れられた。

「本当、愛杉はワガママというか……」

「まあ、まだ幼いからな！ 主に容姿が」

「それは私も同意ね」

「アツサは可愛いもんね〜！」

「確かに、アツサさんは少々幼いと言うか……」

「末っ子ちゃんは可愛らしいわねえ」

「みんないきなりどうしたんだ!？」

いきなり、みんなが幼いだの可愛いだの言い始めた時はよく分からない感情になった。

幼いに関しては怒りを、可愛いに関しては嬉しさが。怒りと嬉しさを同時に味わうとこうなるのか……と謎の感慨がある。

「どうかそれは置いといて……サクツとやっちゃいましょう」

「「「「それをアツサ（末っ子ちゃん）（愛杉）が言うのか……」」」」」

「みんな後でもう一度殺して差し上げましよう」

「「「「ごめんなさい」」」」」

みんなして酷いものである。なんでこうも私は……まあいいや。後で殺人的なイタ

ズラをする程度で許そう。

みんな各々が様々な避け方をしている。紫さんはスキマを活用しながらも普通に避けている。霊夢は相も変わらず涼しい顔して避けている。

魔理沙も相変わらず危なっかしいけど、前よりは遥かに避け方がマシになっている……でも、スピードに任せた避け方はあんまり良くない気がするな。

妖夢さんは意外にも危なげなく避けてれている。けど、どれも紙一重ほどのストレスで躲すから、見ている私は正直冷や汗が……。

レミリアお姉様とフランお姉様はいつも通り危なげなく避けており、見ていて安心する。

「よし、近づけました。じゃあ、お願いしますね！」

「よし、やってやるぜ！」

予定通り、魔理沙達には西行妖の注意を引き付けてもらう。

そして……私は能力を使った。

## 酒呑み達のサイネリア

## 夢も宴会も儂いもの

久方ぶりに夢を見た。昔、私が日本という場所に流された時の遠い遠い昔のことを。捨てられた私を救ってくれた人は少し闇乗弍一護さんに似ていた。……少しSつけがあるところが。それ以外は全く似てなかったなあ。

あんなに絶大な力を持っていなかったし、それにあの人はただの人間だったし。だけど、二人とも私を救ってくれた。私の口が悪くなったりするのが追加されてるけど……それでもまだいい方だろう。

大変だったのはそれからだ。なんとか無事に元のお姉様達のいる家まで着いたはいものの、言葉が通じなかった。その事がショックだった私は言葉を勉強してその後……あれ、どうなったんだっけ……？

「……ツサ、アツサ」

……??誰かが私のことを呼んでいるような……でも、まだ寝ていたい。この夢を見ていたい。

この声を聞かないふりして……。

「…アツ……、アツサ」

これは、お姉様達の声?!それにこの声は……魔理沙?

「アツサ、アツサ!」

起きなきや……。よく分からないけど、今にも泣きそうな声で私を呼んでいるのだから。

「愛杉?!早く起きなさいよ!」

「ふああ……おはよう。霊夢、魔理沙、フランお姉様、レミリアお姉様、紫さん、妖夢さん、幽々子さん」

「うわあ?!いきなり起きるな!」

「じゃあ寝ます。おやす……」

「」「」「寝るな!」

「じゃあ私もおやすみなさ〜い」

「「「「あんた（幽々子（幽々子様））も寝るな!」」」」」

開幕早々から騒がしい霊夢達。 ……まじでもう一回殺しましょうか?とか思いつつ、それがいつもの事でとても楽しいことなのは事実だから特に言葉にせずに、私なりの笑顔を浮かべた。

だけどその瞬間に、お姉様達は恐怖に怯えたような様子になった。 え??私の笑顔って怖かった……?」

そう思っていました。が後に聞いたところ、殺してやろうかと言わんがばかりの殺気が笑顔からビシバシと伝わってきたとの事。 ……私って二個目の能力扱えてない?

「まあとりあえず、愛杉が今回の異変解決の主役になった訳だし……今回こそ、宴会に出てもらおうわよ?」

「い、いや。私はお酒飲めないの……」

「飲めなくてもいいじゃない。私達が飲ませるもの」

「酷い言葉だ!」

そんなこんなで私は、強制参加みたいな形で宴会に出なくてはならなくなりました。とほほ……。

さてなんで今まで私は宴会を嫌がっていたのか。簡単です、私はお酒にすぐ弱いんです。レミリアお姉様がたまにワインを飲んでいる時があるのですが、その飲んでいるワインの匂いを嗅いだけで酔ったこともあるくらいです。

飲める時は飲めますよ??ただ一口、たった口にしただけで記憶を失うほどに酔いますけど。

そんな訳で今の私は宴会までに匂いだけで酔わないようにしています。はい、私の周囲にはワインばかり。見渡す限りワイン。

「ね、ねえアツサ。あなたいくらなんでもやりすぎじゃないかしら?」

「そんなことないよレミリアお姉様。今に酔わなく……」

バタン!

「……言わんこつちやないわね。咲夜」

「なんでしようか、お嬢様……。ああ、アツサ様のことですね？」

「ええ。お願い出来るかしら？」

「承知致しました。お部屋まで運びますね」

「よろしくね」

「全く、目を離すとすぐに変なことをやらかすのだから……。まあそこも可愛いけど」

「それにしてもお姉様。アツサは宴会の時大丈夫かな?? 霊夢とか魔理沙とか、絶対に酒を無理矢理にでも飲ませようと思うんだけど……」

「大丈夫。策は……。無いけど、なんとかしてみせるわ」

「……不安だなあ」



私は気が付いたら部屋にいた。凡そ、あのワインだらけの部屋で酔って眠ってしまったのだろう。……うう情けないなあ、流石にお酒ぐらいはなんとか飲めるようにしたいんだけどなあ……。

「アッサ、入るわよ」

お酒のことで悩んでいると、レミリアお姉様が部屋に入ってきた。

ちなみにだが、私の部屋は相変わらず地下にある。それでも今までよりもだいぶ片付いて、本の数は二桁台しかない。それでもかなり多い方だが、前よりは片付いたのだ。

「レミリアお姉様。どうしたんですか？」

「今日、もう宴会だけ……」

「え、そんなに寝てたんですか私……」

「そこまでは寝てないわよ。それで提案なんだけど……私の血を飲まないかしら？」

「??え??ええ??えええ!!」

「簡単よ。確かお酒って、肝臓とかがどうのこうのなんですよ?」

「レミリアお姉様。そこはしっかりしましょうよ……」

「まあ、ともかく……。私の血を飲むの??飲まないの?」

確かにレミリアお姉様の血を飲めば今までより、お酒が一時的かもしれないけど強くなれるかもしれない。

けど、私はあまり血を飲むのは得意ではない。それでレミリアお姉様の血が足りなくなったら……。

「アツサー!」

「は、はい!」

?レミリアお姉様が声を張る。も、もしかしてまた顔に出た……? (忘れがち)

「大丈夫。私は多少血が足りなくなつた程度で死にはしないわ。それに、妹から血を吸われたつてご褒……ゴホン! 苦にはならないわよ」

気のせいなら今レミリアお姉様の口からご褒美つて言葉が聞こえたような……。

「気のせいよ!」

「アツハイ」

そんなこんなで私は初めての宴会を迎えたのだつた。

# お酒呑みたい

ちなみにレミリアお姉様の血の味はとても甘かったです。……まあ、確かに毎日プリンとか食べてればねえといった感じですが…なんか別の要因で甘く感じたような気もしなくはないです。

うーん……よく分かりませんね(すつとぼけ) とりあえず、近くで嗅いだレミリアお姉様の匂いも甘く感じたときだけ伝えときます、誰に伝わってるのか知りませんが。多分闇乗式一護さんにでも伝わってるんでしょう。

「アツサ? 何してるの? 早く行くわよ」

「わ、分かりました。レミリアお姉様」

「アツサ、無理してお酒飲まなくていいからね?」

「ふ、フランお姉様……。そんなに近くで言わなくてもいいじゃないですか。ちよつとビックリしましたよ」

「えっ あ、あああ ご、ごめんね! なんかアツサの口からお姉様の香りがしたからつい……」

え?もしかして、レミリアお姉様の血を飲んだこと……バレてたり?

それって結構まずくないですか？ 私はそうは思いませんけど（確か……エビオ？って人の構文）

バレてもいいんですけど、なんか気の所為ならフランお姉様の目からハイライトが消えてる気もしなくはないですね……。もしかして、ヤンデレへの第一歩？ ヤンデレは面倒くさいって助けてくれた人が言っていましたね。（それと男が好き要素の一つとも言っていましたね）

と、兎に角なんとかしなきゃですね。ええつと……

そう考え始めた時には、フランお姉様の鋭くどがった八重歯が私の細い首に噛み付いていました。噛まれた部分を見たら、フランお姉様が私の首から出てきている少量の血をコクコクと喉を鳴らしながら、とても美味しそうな表情で飲んでいるところでした。……ついその様子を見入ってしまったのは内緒です。

「ぶはあ、美味しかった！ ありがとうアツサ」

「へ？ 私なにかしましたっけ？」（すつとぼけ）

「血を飲ませてくれたじゃない。何言ってるの〜？」

「そ、そうでしたね！ キモチヨクナツタウエニミイッタナンテイエナイ（小声）」

「ん？ なんか言ったかな？」

「い、いえ何も！」

フランお姉様の横を通り過ぎる時、すつごく悪魔っぽい顔をしていたのはわざとやったっていう証拠でいいんでしょうかね？

ちなみに気持ちよかつたのは本当ですよ？　なんとというか血を抜かれていって、それによつて脳が麻痺するような感覚でしたね。吸われる人間側の気持ちになれたつて感じでしょうかね？

「酒を呑む時間だあ！　野郎ども！　酒をのめえ！」

「「「「「イェーイ!!!」」」」」

そんな、よく分からない掛け声の元、始まった宴会。場所は冥界の白玉楼にてやつております。……というか、今の声誰の声なんですかね？　私は聞いたことがないんです

が……まあいいでしょう。私もお酒を飲んで気持ちよさをゲットだけ!

「などと供述しており……」

「また心の声を読んでもらう!」

その時の私は思いつきり涙を流しながら叫んでいたそうです。……またさとりさんには思いつきり引かれたそうです、ちくせう。

「とりあえず、私はお酒を飲みたいんですよ! 早く飲ませてくださいよ!」

「ダメだつて……何回も言ってるよ、アツサ? もーお姉様! お姉様からも何か言っちゃおうだい!」

「そうね……いくら私の血を少し飲んだからつてすぐにお酒が飲める訳じゃないわ。だからもう少し我慢してちょうだい!」

「ぶー! フランお姉様もレミリアお姉様も意地悪するう! 霊夢! 魔理沙! なんか

言つてよ！」

「そうやってわたしは霊夢と魔理沙に意見を求めるも、霊夢も魔理沙も少し困惑した様子でこう言った。

「私達には何も出来ないわよ（のぜ）」

「いいよねーフランお姉様とレミリアお姉様はワインが吞めて！ 私は匂いで酔っちゃうお酒弱い系吸血鬼だからねー！」

「な、なあフラン」

「ん？ なあに？」

「アツサつて酔つ払うとああなるのか？」

「あーうん。ちよつと面倒というか、なんていうか……まあそこも可愛いでしょ？」

「うーむ……ちよつと無理やりな気がするがまあいいだろう」

なんか、魔理沙とフランお姉様が話してるけど聞こえないく!!!

なんか霊夢とレミリアお姉様も話してるけど聞こえないく!!!

うう!!! ずるいずるい! なんてみんな私に話しかけてくれないし、お酒を飲ませてくれないの!!!

「それは貴女の心の中が荒れてるからじゃないですかね。折角ですし、お話でも思ってたのですが……やめておきましょうかね?」

「やめてください。本当に話し相手がいなくなつてしまいます」

「わ、分かりましたよ! なりますよ! なりますから! 土下座までしなくていいですからあ!」

何故か分からないが話し相手が出来た私でした。

さとりさんまじ優しい天使かな?

「殴りますよ? というかやっぱりお話するのやめましょうか?」

「やめてください。本当の本当に話し相手がいなくなるのでやめてください」

「ちよつ……心の中でも外でも泣くのは反則ですよ! その、可愛く思えちゃうじゃないですか……// //」

あつちよつと! ニヤけるのやめてください!」



本当に天使でした、対戦ありがとうございました。

## 意識外からこんにちは

なんとかさとりさんと二人つきりで話せる雰囲気にはなったけど……何話せばいいんだろうか!? 冷静になってくると急にさつきまでの行動がとんでもなく恥ずかしくなってくる。当たり前っちゃ当たり前だけでも……。

さて、何から話そう? 確かあの人が、天気デツキは使っちゃいけないらしいけど……。

「あの、月が綺麗ですね……?」

「女が女を口説くのはどうかと思うんですけど……後さつきまでのことから考えて、明らかにそれ。天気デツキってやつですかね?」

「読まれてる……。流石はさとり妖怪ですね。じゃあ今何考えてるでしょう!」

「レミリアお姉様みたいに優しそうとか思ってますね? 確かに、こいしからはたまに

『お姉ちゃんは中途半端に優しいよね』とか言われますけど……。」

「アツツスーそうなんですね。さとりさん、妹さんがいらっしやるんですね!」

「そうだよ?」

「ファツツ!? 意識外からこんにちはしてきた!」

突然現れた意識外から失礼するゾ、くしてきた人は薄く緑がかつた癖のある灰色のセミロングに緑の瞳。鴉羽色の帽子に、薄い黄色のリボンをつけていて、どこかさとりさんを想起させるような容姿をしていた。

もしかして、この人がこいしさん？

「当たり前よ、アツサさん。この子がこいし。」

「こいし、ちゃんとご挨拶しなさい？」

「は、はい、お姉ちゃん！ 私が古明地こいし！ 気軽にこいしちゃんって呼んでね、アツサちゃん！」

「分かりました、こいしちゃん。そういえばさとりさん、こいしちゃん的能力ってもしかして……」

「心は読まないわよ、瞳を閉じているから。その代わりに、無意識を操るの」

「あーやつぱり……じゃあやることは一つ！ こいしちゃん！ いや、こいしさん！ お姉様を下さい！」

「ん？ いいよ、お姉ちゃん殆ど人と話さないから……夜のお相手とかもないんだよね」

「ちよつ、ちよつとこいし!? そこまで詳しい事情は話さなくていいから?!」

何がやること一つなんでしょうか？ やることにもなってしまったじゃないか（歎

喜)

「というかこれ大丈夫？ 放送出来る？ 主にさとりさんの心の中の的に。」

「大丈夫なわけないじゃない!!」

「ですよー知ってましたようん。」

「そういえばさとりさんってこいしちゃんの心の声は聞こえ……」

「ないです」

「ですよー無意識ですし当たり前つちや当たり前ですよね」

「私、心の中読めないから話に置いてけぼりなんだけど?」

「ごめんなさいこいしさん。代わりに私のフランお姉様とイチヤイチヤしてきていいで

すよ?」

「本当!? フランちゃんは気になってたんだよね」

「多分、フランお姉様とは仲良く出来ると思いますよ! 性格似てますし」

「だといいんだけどね、まあなんとか落としてみせるよ!」

「そういうつもりで言った訳では無いのだが (困惑)」

「アツサさん? 心の声漏れてますよ?」

「あつ (察し)」

「何故かさつきからネタに走ってしてしまうのは仕方ないことなのだ! 多分、きつと、m

フ  
ラ  
ン  
s  
i  
d  
e

「……？ あれ？ 誰かいる？」

「いるよ〜？」

「あ、こいしちゃんだ〜！ お久しぶり〜」

「久しぶり〜。あ、そうだアツサちゃんと話したよ〜」

「あー…迷惑かけてない？　今、酔ってるからかなり面倒臭い子になってると思うけど……」

「ん、大丈夫だようちよつと変な子だなんて思ったくらいだから」

変な子……全く、アツサったら何をしでかしたのかな？

本当に変なことばっかりしてそうで怖いなあ。

「お姉ちゃんにプロポーズしてただけだから」

「十分に变なことしてたよあの子!」

「酔った勢いで結婚しました。とかにならないといいね」

「そういう問題じゃないんだけどなあ?」

変なこととは聞いたけどまさか求婚していたとは……うう、頭が痛い。しかもさとりさんにかあ……なんというか女癖が悪いというか、女を選ぶセンスがないと言うか……。

と、とにかく。式をあげるならゼクシイ?　つてやつを買ってあげないと……。

「フランさん。それは多分幻想郷に無いですよ。とかかなんですかゼクシイつて。それ以前に私はアツサさんと結婚する気は無いですよ」

「あーアツサちゃん、振ったー!」

「かなりの優良物件だと思ってたのに……」

「より、スカーレット家といい関係を結べると思ってたのに……」

「なんで私はこんなに責められてるんですか!?　というか私はアツサさんがこいしが消えた後に、少しだけ日本酒を口にしただけでバタンキューしたので、フランさんたちに任せようかと引きずって来たんですよ!?!」

「引きずって来たって……」

「それは無いわ〜お姉ちゃん……」

いくら、さとりさんとはいえアツサを引きずって来たのは流石にちよつと許せないかなあ……。

というか、なんでそんなにぐつつりと寝れるかなあ引きずられてるのに。痛いと思うんだけどなあ……。

「それで……アツサちゃん、砂まみれだけど本当に大丈夫なの?」

「え!?　あつ……ご、ごめんさい!　本当はあまり力が入らなくて、引きずるしかない状態だっただなんて言えなくて……」

「さとりさんのそういうところは可愛いんですけどねえ……」

「可愛くないです……!」

結局この後もアツサが起きることは無かった。

……問題はもう何個かあるんだよね。これ、多分また異変だったこと、それに……。

「恐らく、あの人が原因ですよ。流石ですなフランさん」

「あ、やっぱりあの人なんだ……でもなんか今回は私達は一切介入出来ない気がするんだよね」

「そうですね、強くなった……という訳では無いはずですけど」

「でも、【伊吹萃香】さんだつて鬼なんだからもしかしたら強くなってるかもよ？」

「尚のことありえない……はずですよ」

「まあ、アツサなら自由に動けるっぽいからアツサに任せるしかないかな……」

「そんな訳で、お酒に弱すぎる救世主に任せるしかなかった私達であつた。ちゃんちゃん。」



ついつい……

さて、私は今博麗神社にいます。

はい、そうです。また宴会です。

またお酒を飲まされそうになってます。

誰か助けてください。

「アツサさん。呑まなきや損なんですから呑みましようよ?」

「さとりさん先週はお酒勧めませんでしたよね!」

「今週は違うんですよ。酔った姿を見せなさい! (迫真)」

「急に声が迫真になった!?! これには淫夢厨って人達も大喜びってやめてください!

お酒をましてや日本酒を目の前に出さないでください! 酔ってしまいます! やめ

て、やめてえ!!!」

はてさて、何が問題なのか……さっぱり分からない。何がさとりさんを動かしている  
というのだ?!

「好奇心から来てるんですよ。多分、きつと」

「なんで好奇心が生まれて……ああ! さとりさんさではお酒呑みすぎましたね!」

「そんなことないですよ！ 私は酔ってなどいません！」

「などと供述してますが、どう思われますかこいしさん？」

「あれ？ バレたの？ まあいつか。これは明らかによつていますね、先週は少々嫌々

関わっている様子でしたが今はアツサちゃんにベツタリですからねえ」

酔って私にメロメロってことですかね？ ならこれは堕ちたな（確信）

というか、なんで私にメロメロ？ まさか、私気付かないうちにチャームでも使いましたかね？

「それは無いですよ。私自身があなたの事を好きになっただけです、友人として」

「おっと！ これは照れ隠しかあ！ 照れ隠しなのかあ！」

「これは照れ隠しに決まっていますね、当たり前ですよ」

「照れ隠しじゃないですからね！」

「おおっとここでお決まりのセリフだア〜!! これは完全に照れ隠しだア〜！」

「ここでこのセリフを言うあたり、確信犯とみてもいいですね〜」

そろそろ何故ここまでこいしさんとさとりさんと打ち解けているか、説明した方がいいかもしれませんね。特にフランお姉様。

今日の宴会が終わったら説明しなきゃ……。なんか思ってた以上に笑顔だ。笑顔は危険だ、ヤンデレの話は基本笑顔から始まるから。って色んな人が言っていました、多分。

「アツサさん？ 別にフランさんはヤンデレ？では無いですよ多分」

「さつきから、さとりさん多分って言い過ぎじゃないですか？」

「そんなことないですよ、多分」

「もうこれ多分って言いたいだけでしょ……」

そんなこんなで宴会は終わり……私はフランお姉様とレミアお姉様、そしていつの間にかいた咲夜さんにさとりさんとこいしさんと何があつたのか話した。

今回はその内容が本番ですよ。多分（○）

その日は確か、前の宴会の翌日……いや、君達にとつては明日の出来事……つてごめん  
なさいふざけたのは謝るから殴らないでください。弾幕を張ろうとしないで（懇願）

コホン！ とにかく、私は前の宴会の翌日に私は地霊殿つてとこに行きました！

……え？ 今後行かないこと？ なんで!? え？ 不干渉!? そんなこと聞いてないですし、さとりさん達も何も言いませんでしたよ?! ……私が言う事聞かなそうっていくら私でもちゃんとそういうところは言うこと聞きますよ!?

……まあいいです。とりあえず、地霊殿に行きました。この話はその時の話です。

「ふう、やっぱりいつでもお外に出れるっていうのは気分がいいですね!」

「確かに、いつでもお外に出れるのは楽しいよね」

「そうですよね〜ってこいしさん!」

「お、いい反応だね〜まあとりあえず……私たちの所においでよ! きつともつと今日のお出かけが楽しくなるよ!」

「わ、分かりました!」

そして私はこいしさんと一緒に旧地獄つてところに行くことになった。

「アツサちゃん。旧地獄の行き方、知ってる?」

「いえ、知らないです」

「そっか、じゃあ私についてきて〜っていかももう着いてるけど」

「着いてるって、目の前に大きな穴があるだけですけど……まさかこの下が旧地獄って言いませんよね?」

「いや? この下が旧地獄だよ?」

「……ワーオ、マジですか。そりや今世紀最大の驚きだ」

「ちなみに前世紀最大の驚きは？」

「あまりにも膨大な本がほぼ私のものになったこと」

「なんかお姉ちゃんがそれを聞いたらちよつと悔しがりそうだね」

そんな会話をしながら旧地獄の入り口にずっと立っていたら……

「おーい、いい加減に降りてくるか降りてこないか決めてくれないかい？」

「あ、あなたは？」

いきなり、金髪のポニーテールで茶色のリボンをしている……蜘蛛？　みたいな人にかつた。

「黒谷ヤマメ。まあヤマメと呼んでくれよ。んで、何してるの、こいしちゃんと……」

「あ、アツサつていいいます」

「おーけー、アツサちゃんね。んでなにしてるの？」

「これから旧地獄に行こうって話をして……」

「ああなるほど。とりあえず降りる時は私の巣に気をつけてってことと……」

「ことと？」

「キスメに気をつけてってところかな。多分ビビって出てこないかもしれないけど」

キスメって聞いた瞬間、ついキス魔みたいなものかと思ってしまう。いや、結

局キスメさんに会ってないですけど、このことについては本当に謝らなきゃなってると思いますはい。

「りよ、了解しました。じゃあいつてきますね」

「いつてきまーす！」

「うん。行つてらっしゃい」

そういつてヤマメさんは大きな穴を下りていく私とこいしさんを見送ってくれました。

## 旧地獄内部

さあ、ついにやってきた地下。すなわち旧地獄!話し方が変わってるのはお気になさらず!

ここで登場するのは橋姫と呼ばれている……えつと…パルスイさんでしたっけ?? そうそう水橋パルスイさん。

彼女はなんというか……とにかく嫉妬狂い??というかなんというか……。

「あら、貴女……ここでは見かけない顔ね。どちら様?」

「私、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットっていいいます」

「あら、じゃあ貴女がああの有名なスカーレット三姉妹の末っ子??妬ましいわね」

正直、初手から何を妬ましがっているのか分からなかつたです。後でさとりさんから聞いた話によると、嫉妬心を操るとかなんとか。恐ろしい能力ですけど、本人がそれを使つてなにかしようつて気になつてないだけ、良い方なんでしょうね多分。

「妬ましいって、いきなりそんなこと言われても少し困るというか……」

「あら、この程度で困惑するの??妬ましいわね」

「そこも妬ましいんですか (困惑)」

「ええ、私にとつては全てが妬ましいわ。自由に外を出歩ける貴女が妬ましいし、貴女のことだけじゃなく世界全てが妬ましいのよ」

「は、はあ……」

「また困惑したわね??妬ましいわ」

こんな調子で数十分くらい話しているとパルスィさんの後ろからとても大きな人……つていうか大きな角の生えた、大きな鬼さんが現れました。

「相変わらずだね、パルスィ。コイツちよつと困ってるじゃないか、流石に離してやりなよ」

「いいところに邪魔とはね…妬ましい……」

「やれやれ、それでコミュニケーションを取ってるつもりなのかねえ……」

おつと、すまないね自己紹介が遅れた。私は星熊勇儀つてんだ。アンタは?」

「あ、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットつて言います」

「あのスカーレット三姉妹の末っ子の名前か。こりやとんだ大物が旧地獄に来たもんだ。それで……どうだい??助けた借りを返すと思つて、ここで一勝負やるつてのは」

「い、いきなりですか?」

「まあ、アンタは酒弱いつて聞いたから酒は無しにしてやるよ。その代わり……」

「ストップです」



その大きな鬼さん……星熊勇儀さんに勝負を仕掛けられた時。さとりさんが星熊勇儀さんの後ろからゼーゼーと肩で息をして走ってきました。

「勇儀さん。ゼーゼー流石に、私の友人に手を出すのはやめてください。ゼーゼーというか、暴れないで下さい。後処理が面倒なんですよゼーゼー」

「げっ、さとりか。アンタに友人が出来るとはねえ……まあそこには口出ししないよ。

それにしても、怨霊が恐れる少女に友人とはね。大切にしなよ」

「ゼーゼー貴女、口出ししないって言ったばかりじゃないですかゼーゼー」

「おっとこれは失礼……。まあとりあえず、その体力のなさ、いい加減に直したらいいかもね。それじゃ」

星熊勇儀さんはそういつてその場を去りました。……優しそうなイメージが湧いてきたのは変なことではないといいんですけど。

少しして、さとりさんの息が整ってきた時、さとりさんが話してきました。

「……やれやれ、相変わらず勇儀さんは世話焼きというか……」

「なんか、優しそうな人でしたね」

「……優しいというよりは自分より強い人と戦いたいとかそんな感じのものですよアレは」

「……え??さとりさん、強いんですか?」

「まあ、それなりには。というかどうやってここまで……?」

「私が案内したんだよ!」

「こいし……また一人で勝手に出歩いてたんですか? 心配になるのでなるべくやめてって、この前お願いしたばかりじゃないですか」

「ウツ! つ、つい……ね??無意識だからねしようがない!」

「こいしさんが胸を張りながら胸を張れることを言えてないのを心の中で笑っていたら、さとりさんにちよつと睨まれました。

「あまり、調子に乗らないようにしてくださいね。はあ、とりあえず、地霊殿に案内しますので着いてきてください」

「わ、分かりました!」

「なんか、婚約相手の親に挨拶しに行くみたいに関張してるね、アツサちゃん!」

「なんでそんな的確に分かりにくい例え使ってくるんです?」

「えー??無意識だからしょうがない!」

「だんだん、こいしさんの十八番になりつつある無意識だからしょうがないに思考を乗っ取られつつ、さとりさんに地霊殿まで案内してもらいました。無意識ならしょうがないね!」

地霊殿に着くと、中を案内された。内装は黒に赤や紫色の市松模様彩られた床や、鶏の模様が象られたステンドグラスの天窓が特徴的でした。

「……」が地霊殿です。まあ広いので中の方も案内します。ですがまずは……」

まずは……アルコール消毒かな?!しかし違ったようで、いつの間にやらさとりさんの後ろに猫耳の少女と、一対の大きな黒い羽を背に生やし、腕になにやらすごく……大きい太い棒を嵌めた少女が佇んでいた

「猫耳の方が火焰猫燐、黒いのが霊鳥路空です。二人とも挨拶を」

「はい、さとり様!私に火焰猫燐。気軽に燐燐って呼んでね!」

「私は霊鳥路空。お空って呼んでくれると嬉しい」

「分かったよ。お燐、お空。私は愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット。アツサツって呼んで」

その二人の少女との自己紹介が終わると、さとりさんがコホンと咳払いをして「それじゃあお空、お燐。戻っていいわよ」

そういうと、お燐は猫の姿に、お空は鳥……それも八咫鳥??の姿になってどこかへ去っていった。

「さて、ここは動物が多いので気をつけてくださいね、アツサさん」

「動物好きなので大丈夫ですよ？」

「虫は嫌いそうだけどね〜アツサちゃん」

「確かに虫はちよつと……」

「なら、嫁入りは大変そうですね」

「ええ〜……」

## 動き

「虫、思ってたよりも少なかったですね」

「元氣そうな声の割に、虫が飛び出してきたとき地霊殿全体に響くほどの絶叫を上げてましたけどね……」

「まあ、それほど元氣つてことでいいんじゃないかな？」

「こいしさんが癒しだ……ありがたやあ……」

「でもうるさかったのは確かにだね！」

「ゲフウ!!」

そんなよく分からない会話をしていると、私のお腹から爆弾がつっ！ じゃなくて、呻き声のような音が鳴り響きました。

はい、そうですねお腹がすいたんですね。この時の顔ですが、言わずもがな顔を鮮やかな紅葉色に染めた上に、彼岸花も心做しかいつもよりも紅く色づいていたそうです。

……実は私と彼岸花って繋がってる？

「……食事にしましようか。——お憐」

「はいはい、お食事ですね〜分かりました！」

またまた、お隣さんがどこからか現れて食事を用意している。

え、お隣さんガチでいつから居たんですか？ アレですか？ 家政婦さんでどこから何かを見たんですか？ なーんて疑っているときとりさんが、

「先程からお隣が猫化しながらついてきてくれてたんですよ。だから私達の声は丸聞こえでしたよ？」

「流石に虫が出てきた時に大声を出した瞬間は、猫化をやめたくなっただけだね……」

「この度は本当に申し訳ございませんでした」

即刻、お隣さんに向けてジャパニーズDOGGEZAをかますと、笑いながらお隣さんは許してくれました。

お隣さん優しい？ 地霊殿のみんな優しい？ 優しい世界？ 野菜生活？ やめようこの話題。みんなに通じませんしお寿司。

「出来ましたよ」

「おお！ シンプルイズザベストな和食！」

「単純すぎて言葉に出来ない、なんて思っていないですか？」

「いや、さとりさん。流石に思ってますんって」

「お姉ちゃん流石に疑うのは可哀想だよ。アツサちゃんの口から滝のように出ているヨダレに失礼だよ？」

「おっと、そうでしたね。お隣もそんなにしよげなくても大丈夫ですよ」

多分その時、私ヨダレ垂らしてないと思うんですよ。オオン。きつとこいしさんの見間違いだと思っんですよ。オオン！ ちよつフランお姉様、くすぐらないで！ わ、分りましたよ！ 確かにヨダレは垂らしました！ 汚いのは分かってますけど美味しそうだつたものですからつい！

「……アツサさん、そろそろヨダレは垂らさなくても大丈夫ですよ？」

「え？ あつごめんなさい。ついつい……テヘツ」

「……百点！」

「星も出てましたし、これはいいテヘツですなえ」

「さあ、さとり選手！ ここはどう出るか？」

「……反則ですよそれは（ボソツ）」

「これはテレだア！ ついにさとり選手からテレを勝ち取りました、アツサ選手！ 今の気持ちはいかがですか？」

「もうこれは結婚していい流れなんじゃないかなと思いました」

「おおっと！ アツサ選手から結婚申し込みがありました。これをどう返すのかあ？」

「いやあの時ドキドキでしたね。……え？ 今のところで切るなって？ いや、流石にちよつと話し過ぎたかなって。」

待って、レミリアお姉様!? お酒はダメです! 私酔っちゃいますから! わ、分かりました! 先を話しますから!

「……ええ、いいですよ」

「赤面しながら、言ったあ! これにはアツサ選手も?」

「ゴハア!」

「たまらずノックダウン! 勝者はさとり選手だア〜!」

「とりあえず式の準備を……」

「どうして誰もこの流れを止めなかったのか? 簡単です。誰も止める人がいなかった!」

「お隣? 誰に話してるんです?」

「お空にですよ。ほら、そこに困惑した様子でいるじゃないですか」

「本当ですね、お空いらつしやい。ちゃんと説明しますから」

とまあ、そんなこんなで仲良くなった訳です。結構あっさりしてたでしょう?

え? 最後が濃すぎるって? いいんですよそんなこと。



## フラン side

「さて、こんなもんで私の話は終わりです！　じゃあ解散！」

そんな、アツサの一声でみんなあっさり解散していく。

さつきまで誰も動けていないことに気付かないあたり、やっぱり私の妹は抜けてるんだなと感じるが、そこも可愛いので許せる私がいる。

「ところで、さつきからそこにいる鬼さんはどちら様かしら？」

「ありやバレちやつたかい？　さつきの末っ子の話。とても愉快なものだったね？　私の能力が効かないことを除けば」

やつぱり、この鬼が今回の問題児なようで……さて、私がここから大逆転勝利、なんでものは夢のまた夢のようで、一切動けない。

「やつぱりあの末っ子には効かないんだねえ。全く、他の奴らはこんなにも効くつてのに……全くその事に気が付かないなんて、お前の妹はちよつと頭が弱いんじゃないか？」

「ブランドール・スカーレット」

「それは無いわよ、伊吹萃香。むしろ、あの子が……アツサが一番切れ者よ。私達三姉妹の中では」

「ほう？ まあ、そんな切れ者がこんな簡単なことにも気付けないとは……吸血鬼つてのはバカの集まりなのかい？」

さつきから聞いていければ、アツサの悪口だったり、お姉様や私の事まで馬鹿にするような内容ばかり話す。

なにか言い返したいところだが、中々な正論ばかり言われているものだから言い返せない。

「……まあいいや。私はただ、あの末っ子と戦いたいだけだからね。私の能力が効かないアツサとやらと」

「フツ、そんなこと言っているとアツサにあっさり殺られるわよ？」

「そんなことないさ、私だって鬼の端くれ。それに加えて私は鬼の四天王の一人とまで言われてるからね。勝っちゃうかもよ？」

「そう言つてられるのも今のうちなんだからね！」

なんて、アツサが聞いていたら何その捨て台詞。なあんて言われそうなことを言っちゃったけど、そのあと解放されたからいいか。

……気が付いてなかったわね、あの鬼。私が少しずつ動いていたことに。

## 犯人

アツサ side

さて、また今週も宴会があるという……。なんか宴会多くないですかね？

ま、まあとりあえずまた行くとして……。そういえば私、自分のことばかりで周りを見てなかったですね。少し反省……。

よく考えてみたら最近、レミリアお姉様やフランお姉様とかの妖力が探知しにくいよ  
うな……。気の所為であって欲しいですけど、まさかまた異変とかでは無いですよ  
……。まあ異変だったら霊夢と魔理沙に任せようかな？ あ、でも人任せは良くない  
よね。私も参加させてもらおうかな。

「……アツサ？」

「ん？ レミリアお姉様とフランお姉様。どうしたんですか2人揃って」

「いやあ、一応忠告でもしようかと……。ね？ お姉様」

「そうね。もしかするとの話だけどアツサが答えに辿り着いたのかもしれない……つて思ってるね」

「答え？」

「答え……もしかしてお姉様達の妖力が探知しにくい原因とか？」

「半分正解、けどまだ答えには辿り着いてないみたいね」

「そんなアツサにヒント！ 周り、見てなかったでしょ？ おかしなところがあるからそれを感じとれたらわかるよ！」

「まあ確かに、私は周りをよく見てなかったですけど……そんなあからさまにおかしなところが？」

「詳しくは教えられないけど……まあ、あからさまだね」

「そんなフランお姉様からのヒント？ でも詳しくはウエブで！ みたいなノリで言われちゃったら全く分かりませんって……とりあえず、今週の宴会を待ちましようかね。」

## 宴会の日

さて、待ちに待っていないような気がする宴会の日ですよーって言っても、お姉様達のヒンツツ！ の確認みたいなものですねはい。ちなみにヒンツツ！ って心の中で考えた瞬間、お姉様達に冷たい目で見られたのは気のせいです。誰がなんと言おうと気のせいですからあ！

「アツサ……分かってるよね？」

フランお姉様が真剣な目で見てくる。こういう時はおふざけ無しの本気の時だ。

もしかすると、吸血鬼としてのプライドというものを汚されたのかもしれない。フランお姉様もレミリアお姉様と一緒に、吸血鬼というブランドにこだわりを持っているから。

ならば答えるしかないだろう。姉が馬鹿にされた可能性すら出てきたのだ。必ず答えを見つけてやるという一心でこう答えた。

「分かってますよ、変なおじさんを所望ですね？」

フルボッコにされた。

さつきまではふざけていたが今は真剣モードだ。少しでも変なところがあつたらすぐに探知できる。

……問題があるとすれば一つは相変わらず妖力探知がしづらいこと。というよりも、誰のかわからない妖力のせいで全く出来ない。妖力で、誰が誰と特定出来ない状態だ。次に、一切の動きがない。妖力が辺りに沢山あること以外は皆お酒を飲んだり、おつまみを食べたりしているだけだ。料理している人も大して変化はない。……本当に何も無いのだろうか？

「おーい、霊夢う！ 酒をもつと寄越すんだぜ！」

「はいはい、分かったわよ。アツサ、頼めるかしら？」

「ん、いいよ」

因みにだが、私は今霊夢と魔理沙のところにいる。下手をすればお酒を飲まされるこ

とになるかもしれないがここにいればある意味、幻想郷で一番安全だ。

そんなことを思いながら周りを見渡していると、ふと気になることが浮かんできたので霊夢に尋ねてみる。

「ねえ、霊夢」

「どうしたの愛杉?」

「普段の宴会ってみんなあちこち行ったりしてる?」

「普段って……これも普段の宴会っちゃ宴会だけど。そうね、確かに言われてみれば皆して酒の席を動かしてないわね。各々で飲んでるヤツらもいるにはいるけど……全員がそうって訳じゃないわね」

「そっか……ありがとう霊夢」

気になることが違和感に変わった。普段よりもみんなが動いてない。

確かに、ちよつとしたことだ。もしかしたらみんな気分じゃないからそうなってるかもしれない。

けど、よくよく周りを見渡してみると、何人かの人が何かを警戒しているように見える。警戒しているけど……そのわりには全く動く気配がない。いや、もしかして動けない?」

そう考えると、周りにある妖力は人を動かさなくするためにあると考えていいかもし



れない。

けど、なんで私は全くその影響を受けてない？ 更にいえば、少しだけだけどフランお姉様も動いている。一体全体、どういうことなのだろうか？

もしかして……。

「あ、やつぱりだ」

「どうしたんだ？ アツサそんな納得のいった顔をして？」

「あ、魔理沙。実はね——」

今、みんなが動けなくなった原因が完全に分かった。そう魔理沙に伝えようとした瞬間に、私は気絶した。

「おやおや？ この程度で気絶とはねえ。やつぱり吸血鬼は大したことないのかな？」  
そんな声が聞こえたような気がした。その声は聞いたことの無い声だった。

## 魔理沙 side

「アツサ!? くっそ、ここまでやることは無いだろ? 萃香!」

私はアツサが気絶した理由の妖怪に掴みかかる。

「まあまあ、魔理沙落ち着きなつて。魔理沙らしいけど、そこまでカツカする性格だっけ?」

「当たり前だろ?! 妹分がやられたんだ、姉貴分として黙つてられないのぜ!」

「魔理沙!」

「霊夢……お前だつて黙つてられないだろ!」

「分かるわよ。ここまでやるつて話じゃないし——」

「ならなんで! お前は萃香の傍にいるんだ?!」

頭に血が上りすぎている。少し落ち着かないとは思っている。しかし、その思いとは反対に、私の心はどんどん熱くなる。

「仕方ないじゃない! 愛杉は今回の異変を自力で解決出来なきや、幽々子たちが認めないつて言つてるのよ!」

「それでも!」

「それでもじやないのよ！ 愛杉の為なのよ！」

「そんなこと言ったって、私は認めないのぜ！」

「……そこまでしたら？」

そんな萃香の冷たい声が余計私の心を熱くして、更に叫ぼうとした時、萃香の分身が、私の口を手で塞ぐ。

「そこまでしたら？ って言ったじゃん。でも確かにここまでやるなんて言わなかった。それは謝るよ。でも、そこまでしないと安心できないんだ」

「ツープハッ！ なんてそんなにもアツサのことが信じられないんだ?! あの子はいい子だ！ 私が保証する！」

「あら、そういうことだったのね」

「!? レミリア！ それにフランも！」

「萃香……だったかしら？」

「ああ、そうだけど？」

その瞬間、霊夢ですら震え始めるほどに圧倒的な威圧感が襲ってくる。私に關してはもはや立っていることすらままならない程のだ。

紅霧異変の時のレミリアですら、ここまでの威圧感を出してこなかった。

「なら、いいわ」

「何をする気？ 暴力は反対だぞ〜？」

「いいえ、違うわ……」

その時、私は目を疑った。何故ならあのプライドの塊のようなレミリアが土下座をしてたからだ。

「本当にごめんなさい。私の監督責任だわ」

「お姉様ツ!? なんで——」

「いいんだよ、レミリア。それに君なら分かってくれる気がしてたからね」

「ちよつと、伊吹萃香?! お姉様になんてことさせてるのよ！ いい加減に——」

「フランツ！」

空気を震えさせる程の声で、レミリアはフランの名を呼んだ。

「貴女もするのよ」

「そんな……なんで！」

「なんでもいいから！」

「いやよ！ 私だって吸血鬼なのよ?!」

「まあまあ落ち着いて——」

「うるさい！」

フランの拳は空を切ったが、言葉通り空気を切ってみせた。しかし、それをあつけら

かんとした様子で萃香は避けた。

「全く、危ないなあ。まあいいや。フラン、君の妹はそれほどのことを……。幻想郷にとつてあまりにも危険なのさ。だからこうなった」

「でも、それは過去の話でー」

「確かにそうだ。だけど、今でも可能性がないとは言いきれない。だから……。仕方ないんだよ。私だつて出来ればこんなことしたくない」

「そんな……。そんな言葉で許されるとも言うの!!」

フランは大地を震わせる程の声でそういった。しかし萃香は、やれやれといった感じでこういった。

「許されるよ。ここは幻想郷だからね」

その言葉に、私もフランもキレた。

# 何故そうなったのか

アツサ side

「んんん……はっ！ ここは誰？ 私はどこ？」

「思いつきり逆じゃないか？ 普通はここはどこ？ 私は誰？ だろ？」

「冷静なツツコミ、アンタただ者じゃないね！ でどなたですか？」

「土方の……」

「おっと、それ以上はNGだ。ただでさえ私がおかしいのに、貴女までそんな変なことを口走つたら大変なことになる」

「アツハツハツ！ 面白いね。流石は吸血鬼三姉妹の末っ子といったところかな？」

い、今起こったことをありのまま話すぜ。気絶して起きたらすごく小さな鬼が目の前にいて、私のネタについてきやがる。頭がクレイジーだとか、外の世界に出たことあるとかそんなチャチャなもんじゃあない。もっと恐ろしい、私の心を読まれている感覚に襲われたぜ……。

……でも、さとりさんによく心読まれてるから怖くなくなね？　でも目の前の鬼、サー  
ドアイないZOY☆どーいうことなんだZOY？

「なにか疑問に思っていることがあるみたいだね？　まあいいや。私は伊吹萃香。見て  
の通り鬼さ。昔は鬼の四天王なんて呼ばれてたけど……昔の話だからね。今は関係な  
い」

「で、なんで私は気絶させられたんですか？　それも伊吹萃香さん、貴女に」

「ああ、それはね」

「私が説明するわ」

「おっと、霊夢か。良いよ、代わりに説明してあげてよ」

「なんで霊夢が伊吹萃香さんの近くにいますか？」

もしかして、超ロリにしか興味がないとか!?

「そういうのじゃないわよ?!　とにかく、愛杉。アンタは今、幻想郷の賢者達から疑われ  
ているわ。またあの悲劇を起こすんじゃないかって」

「で、でもそれはこの前のうちで行った集会で」

「そうね、少なくとも幽々子辺りはなんとなくだけ納得がいったみたい。だけど心の奥  
ではみんな疑ってるのよ。それに、大半の者は疑いが晴れぬままなのよ」

「そ、そんな……」

「だから愛杉。宴会が短期間に何度も行われたのよ」

「それって関係ないんじゃない？」

「一応関係あるわ。まあ、とは言っても殆ど同じ異変が起きたことあるから似たようなことをしたってただけだけどね」

「殆ど、関係ないじゃん!？」

まあ、とりあえずこの前の集会であれほど言ったことをまだ疑われているとはなあ……妹困っちゃやう。って話ではなく、結局私は今回何をすればいいのかな？

「そうね、簡単に言えば……私達と勝負しろ」

「ツ!? そんな簡単な話でいいの?」

「この先は私から……愛杉。貴女の言っていることが正しければ、本気の勝負をしながらでも誰も能力で殺すことは無い。そうよね?」

「ま、まあ恐らくは」

「だから、それを試す為に今回私達と戦ってもらうんだよ。勿論、弾幕勝負って形じゃなくて本気の戦闘を行う」

「それじゃあ怪我人が出ませんか?」

「お? やる気はあるんだね。怪我人が出ても、アリスとかが回復魔法をかけるとき。」

「そうそう、一応なんだけどねアンタの姉達と魔理沙は監禁しています」



「……は？」

「いや、だからレミリア・スカーレットとブランドール・スカーレット、それに霧雨魔理沙を監禁しているって言ったんだよ」

「……シテ……ドウシテ？」

「簡単さ。愛杉、君が暴れない為だよ。まあどうやら……」

殺してやろうかな、この女

「裏目に出ちゃった……ぼい？ え、どうしよう霊夢。これ危なくない？」

「……はあ、だから私は反対だって言ったのよ。愛杉は異常なほど姉達を慕ってる。勿論姉貴分である私と魔理沙もね。だからそういった家族同然の人に対して少しでも手を出そうものなら」

「ブチギレて、その人を何がなんでも殺しにかかる」

「そうそう……って愛杉!? なんで暴れてないのよ？ 暴れると思ってたのに」

「いやあ……自分の二つ目の能力のおかげとも言えますねえこれは」

「二つめえ？ それってどういう」

「聞かせてよ。その二つ目の能力。私の能力も教えるからさ」

「なんだか交渉みたいな形になってきましたね。いいのか鬼さん、そんなあつさりと能力を教える……」

「ま、いつか。私の二つ目の能力は殺意を操る程度の能力です」

「殺意？　なんか気が抜けそうな能力だね。まあいい、私の能力は密と疎を操る程度の能力だよ。紫曰く、インチキらしいね」

「ゆ、紫さんがインチキって言うことは相当やばい能力じゃないですかヤダー」

「アンタ、そんなに思ってたないね？　じゃあここにブラックホールってやつを」

「ばつかやろう、そんなことしたらそれはそれで幻想郷が無くなるわい」

なんて恐ろしいんだ、伊吹萃香さんの能力。密と疎ってことはもしかして空气中に紛れることも出来るのかな？

「なんなら意識位なら操ることも出来なくはないかもね」

「やっぱりチートじゃないですかヤダー！」

「アンタの能力も大概だと思っけどね、愛杉」

そんなチートじみた鬼さんにそんなこと言われてもはいそうですねって言えないのが辛いところですよオヨヨ……。

「とにかく、これから私達一人ずつ戦ってもらうからね」

「さて、その順番は……」

「霊夢、幽々子、紫、私の順番だよ！」

「……骨が折れるどころじゃないですかヤダー！　全員アホみたいに強いじゃないです

かヤダー!!」

「え?　じゃあチルノとかにする?」

「え?　変更出来るんですか?」

「出来るけど……どうする?」

「いや、変更無しで……。」

「はい。分かりました!　それじゃあ早速やっていきましよう!」

そうして、始まった本気のバトル。はてさて、この先どうなりますことやら ( )

## 強い ( )

「ちよつ……。霊夢!? た、多少は手加減というものをですな?!」

「手加減なんてものをしなくていいのがこの試合でしょ? なら日頃の紫に対しての鬱憤を……」

「完全に憂さ晴らしに使ってるよ異変を! こんな巫女が異変解決する世界でいいのか?!」

「いいのよ別に、解決すればモーマンタイってやつよ?」

「ダメだこりゃ」

初戦の霊夢ですが……。いやあ強い。やっぱり恐ろしいほど強い。それは勿論本当の戦闘面においてもだ。

因みにですが私は手を抜いています。そりゃ吸血鬼と人間じゃ差がありすぎるからね、しょうがないね。でも霊夢って鬼よりも強いって噂を聞いたなあ……。じゃあ別に手加減する意味ないのでは? なーんて思ってしまうが身体の耐久力を考えると明らかに差がある。やっぱり手を抜くのはいいものですね。

「アツサ、あんた手を抜いてるでしょ?」

「ギクツ！　そそそ、そんな訳……ないよ？　多分、きつと、maybe」

「はあ、これは本気の試合なのよ？　手を抜かないでもらいたいわね」

「分かった」

そう言つて私は完全に全てから浮いていた霊夢に対して、手刀を首に入れた。

それだけで霊夢は一瞬にして意識を失つた。

「あら、一瞬かく。まあ別にいいや。本当に耐久力つてもものがないんだね人間つて」

「そんなものよ！　まあ私は死んでいるから耐久力も何も無いわよ！？」

「早速登場ですか、幽々子さん。……早すぎませんか？」

「いいのいいの。気にしなくてもいいのよ！？」

「いや、気にするとか……つて危なッ!?　勝負宣言されてないのに攻撃しないでください

よー！」

「別にいいじゃない？　それじゃ早速、本気でいかせてもらうわよ！？」

「じゃあ私は多少強気で……」

そんなことは言っているが避けることに関してだけは本気でいく。

そりや当たつた瞬間に即死亡ですからね。まあとりあえずやっていきたいと思いま

す（サボテン風）

「まあとりあえず……私はスペルカードからいこうかしらね！？」

【西行寺無余涅槃】

「え？ なにそれっちはっや!？」

パツと見はかつて西行妖から？ のスペルカードで

【反魂蝶 —— 八分咲 ——】に似ているがその時よりも早いスピードでほぼ同じ弾幕が飛んでくる。

避け方は体が覚えている。後はこの速さになれることだ。

なんだかんだですぐになれてきた。それのお陰で全て避けきることが出来た。

それを見て幽々子さんはすぐさま近接戦闘に私を持ち込んだ。

「おつとつと……か、かなり危ないこととしてきましたね。幽々子さん」

「簡単な話、貴女が私に触れれば一瞬にして死に誘うことが出来るのだけどね」

「それをなんとなく理解してるから私はさつきから避けてるんですよ。それに、空振るのはお辛いでしょう？ 別にすぐにも降参してもいいんですよ？」

「あらくそんな気を使わなくてもいいのよ？」

そんなことを言っではいるが、幽々子さんは息が上がり始めている。ちなみに私は揺れる胸を見れているのでとても目の保養になってます。……心の保養にはならないけどな！ やっぱりさとりさんが一番だぜ！

なんて馬鹿なことを考えていると、先程まですごい速さで揺れていた乳が……ゴホン

！　すごい速さのラッシュが一気にスピードが落ちていく。

じゃあ、これで終わりですかね。

「じゃあ次は私から……」

不殺【オーディオ】

「あら……。これは避けられそうにないわね。辺り一面に弾幕……これは困ったわねえ」

「それではやっていきましよう」

そう言った瞬間に、私は辺り一面にある弾幕を一気に幽々子さんに当てていった。

ちなみにこのスペルカード、周りの殺したくないって気持ちから弾幕を作ってますは

い。

「さりげなく勝てちゃったよ……」

「そうみたいね。じゃあ次は私よ？」

「紫さんか……死ぬて、連続は死ぬて。」

「まあまあ、早くやりましょう？」

「はい……」

そう言った瞬間に目の前にスキマが現れて古くなった電車が現れた。しかし、これは完全に読んでいたのであっさり避けられた。それを読んでか、その避けた先にまた電車が……とほぼ永遠と続くような読み合いが始まった。

たまに、電車よりも速い弾幕がスキマから現れたり、スキマから大量の腕が現れて殴ってきたり、掴んでこようとしてきたが全て避けていく。

「紫さん。さっきの腕……誰のです？」

「え？ 誰のだったかしら？ 確か、腕が伸びたりするような……」

「思いつきりワ〇〇ースの〇フ〇〇じゃねーかよ?!」

つい思いつ切り、つつこんでしまいが隙を作ってしまったようなもの。一瞬にして周囲をスキマで囲まれてしまった。

「さて、積みかしらね？」

「それはどうでしょうか？」

そう言った瞬間に私はニヤリと口角を上げると周囲のスキマを一瞬にして全て殺<sup>壊</sup>した。

紫さんは忘れていたかのように驚き顔を見せるがそのスキマについて私は思いつきり紫さんを地面に叩き付けた。

「さて、これで逆転ですなえ？」

「こんな性格が悪い子だったかしらねえ……」

そんな言葉を交わし、私は紫さんの顔を掴んでいる手から弾幕を出した。



## 強い

「やれやれ、こんなにもあつさりとみんなを倒すなんてねえ……下手すりや私よりも強いんじゃない？」

そんなことを目の前の鬼：伊吹萃香さんはカラカラと笑いながら言う。しかしその目にはそんなことはないという強い目をしている。あの目をしている人は決まって強者だ、それも圧倒的な強者。

ああいう瞳を私は何度も見てきた。それこそ過去の幽々子さん達やレミリアお姉様、それにフランお姉様、ついでに闇乗式一護さんも、みんな強い意志の宿った双眸を持っていた。

前者の人達からはとても長い間お世話になった人や実際に対峙した人もいる。後者は様々な特訓をつけてもらった。

やはり、皆同じ目をしていた。そして眼前の伊吹萃香さんも同じ色を目に宿している。だからこそ、私は油断しない。

それこそ、さつき霊夢に対してしか使っていない、本来の能力を使う気だ。

「……やるんですね？」

「そうじゃなきや私はこんな目をしてない……だろ？」

それもそうかと心の中で同意した瞬間、ふいに僅かな痛みが体を走った。

「ッ!？」

あまりに突然のことで、一瞬にして混乱状態に陥る。一体、今何が起きたのか。これは伊吹萃香さんの能力なのか？

落ち着け……。さつき伊吹萃香さんは自分の能力を言っていたはず。密と疎……まさか

「そうだね、正解かな。私はさつき、私が放った弾を見えないほど薄くしたのさ。よくそこまで混乱しててその答えに辿り着けたね」

「貴女が能力を言わなかったら絶対に分からなかったですよ。知っててもここまで混乱したんですから……ね！」

私はお返しと言わんがばかりに大量の大弾を放ったが全て避けられていく。

たまに避けきれない弾があると、一瞬にして消えて避けていく。

今はこうやって伊吹萃香さんに攻撃させないように牽制しているが、いつ攻撃されてもおかしくない。私は心のどこかでまだ能力を使うのははやいと思っっている節がある。

そもそも、いつ消えながら攻撃してくるかも分からない。でもこうやってうじうじ考えているよりも、体を動かして相手が攻撃してくることを無くさなければ。

「そうやって考えていると——」

その言葉が聞こえた瞬間、私が予想していた最悪の攻撃をされた。

「ほらね？」

「卑怯にも程がありますよその技……。」

「技じゃないさ技術さ」

「似たようなものでしょ……。」

「ともかく、ここからが本番だよ？」

伊吹萃香さんは目をギラギラさせてそういった。まずい、私が完全に不利だ。

「鬼符【ミツシングパワー】」

「ここに来て巨大化……っつてうわああ!!」

巨大化したことにより、私は吹き飛ばされる。あれはあれで厄介だ。

「アダマスの鎌！　せめて一撃でも入れてやる！」

恐らく、巨大化したから遅くなる……なんて考えていたがそれは大きな間違いだったらしい。

「単調な動きだね……蹴っちゃお！」

「なっ……グエー！」

まるで潰されたカエルのような声を出してしまったがそりゃあの巨体でさらに勢い

のついた蹴りですよ？ そんな声出しちゃいますって。

「誰に言い訳してるのか分からないけど、君このままだと……死ぬよ？」

「そんなの……分かってますよ。そろそろ本気でも出そうかなって思ってたんですよ」

「へえ……ってあれ？ 大きさが戻った？」

私はとうとう奥の手を使った。そうだ、私の森羅万象を殺す程度の能力で萃香さんの能力を一時的に殺した、つまり封じたわけです。

「霧にもなれない……ってことは能力が使われたか……まあとはいえ——」

「グハア?!」

「身体能力までは殺してないみたいだね。鬼と近しい力を持つ吸血鬼でも、この程度なのかな？」

「そんな……訳ない……でしょうがアアアアアア!!」

今入る力全てを拳にかけて、ぶん殴る。今まで全く手応えのなかったのが今初めて、手応えを感じた。しかし——

「いてて……中々やるじゃん。そのくらいで来て欲しいね」

萃香さんには殆ど効いていなかった。私の全身全霊をかけた攻撃な筈なのに……なんてことだろうか。これが鬼の四天王の力とでもいうのだろうか？

しかしこんなことでは諦めない。せめて半殺しまでは持つていきたいところだ。

「なら、殺るしかないじゃないですか……。そう思いますよね、伊吹萃香さん？」  
「おっと……。こりやちよつと手強くなつたかな？」

私は殺意を少しだけ解放する。これで少しは力も上昇するだろう……。とはいえ、感情による能力の上昇なんてたかが知れている。しかし、私は吸血鬼だ。人間の感情に任せた攻撃よりはマシになるだろう。

「サアテ、ここからが本番とでも言いましょうか？」

殺意【壊れたカルミ】

「さつきまでとは大違いだなあ本当……。って危なツ!?」

私はスペルカード宣言をすと思いつき萃香さんに向かって突進していく。もちろん周囲に弾幕をばら撒きながら。これはさながら――

「魔理沙の……。なんだっけ？ ブレイジングスターだっけ？それに似てるね」

「まあ、そんな所ですな。本家と違うのは……」

萃香さんの頬を私のアダマスの鎌が掠める。

「鎌を振り回しながら突進していくってところ……。デスね」

「こりや困つたもんだ……。ね！」

私の突進を素手で捕まえる萃香さん。しかし、それをする事によってアダマスの鎌が萃香さんを襲う。

「ぐうう…かなり痛いもんだね…でも負けないからな！」

「サアテ、どうでしょう？」

捕まえているのもつかの間。少し経つとあまりの痛さゆえに離れたらしい。

「結局そんなに耐えられませんでしたネ？」

「それかなり痛くてね…何で作られてるんだか」

私もそんなことは知らない。しかしそんなことはどうでもいい。目の前の萃香さんを半殺しまでにしなくては

「殺意【450年分のランコーレ】」

「あーストップストップ、やめやめ。私の負けでいいよ」

「はい？　なんでです？」

突拍子のない提案に殺意もなくなり、普段の状態に戻る。

「なに、もう君の実力は分かったからね愛杉。君は十分に強い。そして何よりも、能力を自由に操れている」

「それってつまり……」

「ああ、私達は君を歓迎するよ。愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット」

私は真の意味で幻想郷に迎え入れられた。

## その後

私はやっと飲めるようになったお酒をぐいっと飲んでいる。

まあ、お酒が飲めるようになったのはレミリアアお姉様のおかげなのですがね。はい、今回も血を飲ませてもらいました。

ちなみに今宵の宴は本当の宴です。萃香さんが起こした宴じゃないです。

「おーい、愛杉く？ 何想像してるのさ？」

「想像はしてないですよ。それこそ、さとりにさんに聞いてみては？」

「さとりにく？ あんまりいい気はしなないんだけどねえ」

「心を読まれるから嫌だなあ……ですか。貴女は相変わらずなんですネ」

「げげっいつの間に。まあいいんだけどさ」

「愛杉の想像してることを当ててやれ、ですかまあいいですけど……!? アツサさんこの方は……人間ですか？」

「え？ あーそうですね、人間ですよ。私の恩人です」

あの目の腐った……社畜？ ってやつでしたっけ？ そんな感じの人でしたねーあの人は。

それになんか会社が忙しいとか言ってたのに配信ってことをやって、ついには会社をやめて配信オンリーでやってましたね……あの時のあの人は目が輝いてましたね、文字通り。

よく言ってたネタは……

「死んだんじゃないの☆」

「はっ！ さとりさんが近くにいるのを忘れてた！」

「ちよつと酷くないですかね……」

「というかよく真似しましたね、コック○ワサキ」

「なんか急に心の中がそれでいっぱいになったので……」

まあとにかく、可愛い可愛いさとりさんは少し放置して……

「なんで放置するんですか！」

「なんでそんなに涙目なんですか!? 可愛すぎて尊死してしまいますよ!」

「尊死ってなんですか!? え……」

文字通り、さとりさんは顔を真っ赤にして頭からボンツと爆発音が聞こえたような気がした。

それほど、さとりさんは恥ずかしかったのだろう。うむ、いい眺めだ。もつと見てた



そんなことを考えていると、どこからか弾幕が飛んできた……弾幕!! アイエエエ!!  
ダンマク!? ダンマクドウシテ!?

「魔理沙! いい加減に本を返してもらおうよ!」

「うわつとと、盗んでる訳じゃない、死ぬまで借りてるだけなんだぜ? まだ死んでないから返さないぜ!」

「あいつかわらさね……なんか余計にムカついてきたから今日は殺す気でやるわよ」

「ちよつ……ま、待つんだパチユリー。そこまで怒らなくても——」

「問答無用! 火水木金土符【賢者の石】」

「あ、本当に本気で殺しにかかってらあ……」

私は脳天気にもその様子を見ていましたね。ちなみに途中で霊夢が神社が壊れるということで止めに入っついていき、夢想封印をブツパしていました。

うん。霊夢が一番神社を壊しにかかっているね(白目)

さてさて、そんな宴もすぐに終わり……今はさとりさんとこいしさんがうち（紅魔館）に来ています。

なんでかかって？ そりゃ……

「ごめんなさい、レミリアさん。勝手にアツサさんを地霊殿に招待してしまつて……」  
「いいのよ、さとり。アツサも楽しんでいたことはアツサから聞いたわ。だから土下座までしなくともいいんじゃないかしら……」

私が勝手に地霊殿に遊びに行つてしまったことの後始末です。うん、本当は私が謝らなきゃいけないんですけどね、何故かさとりさんに私が謝りますつて言つて、気が付いたらレミリアお姉様の前で土下座してたよね。ほんとうに申し訳ない。

ちなみにその間に、こいしさんとフランお姉様がお友達になつてました。こいしさん……恐ろしい子……。

「そうですね……というかアツサさんが話したということは——」

「結婚の件、聞いたわよ」

「ああ、やはり……本当に大丈夫なんですか？」

「まあ、先を越されたのはなんとも言えないけれど……別に妹の決定に口出しするほど、

「私はやかましくは無いわよ?」

「いえ、そうではなくて……」

「ああ、それなら紫がOKを出てたわ。だから気にしなくていいわよ」

「あ、ならいいです。ちなみに住む場所は……」

「結婚して早々に別居とはいきませんしねえ……私地霊殿に行つてきます」

「いいの? 地霊殿にはアツサが苦手な虫も沢山いるつて聞いたけど……」

「……そこは頑張つて克服したいと思います、はい」

私はなんとも言えない表情でレミリアお姉様の言葉に対してそう返答した。そして  
ら思いっきり笑われました。解せぬ。

ちなみにこんなひと幕があつて今私は地霊殿に住んでいるわけなんです……

「待遇めっちゃ良くない!」

「わっ! ちよつとアツサちゃん。いきなり大声出さないでよ」

「あ、ごめんなさい。待遇が良すぎてつい……」

「まあ確かに、お姉ちゃんがすごい待遇を良くしてるけどさあ……なんか逆に窮屈に  
感じない?」

「それも、はい。そうつすね……」

私は若干苦虫を噛み潰したような顔をしながらそう返答した。

そう。今の私はまるでガラスを扱うかのように優しくされすぎてるのだ。お隣にはお洋服から何からまで用意されたりしてるし、お空にも何かと気を使わせてしまってる。

極めつけにはさとりさんが色んな本を勧めてくれたり、肩たたきをしてくれたりなど……

まあ、お料理は前から咲夜さんが作ってくれたりしてましたが、お掃除は自分でやっていたので……ちよつと慣れなかつたり……。

「腫れ物扱いされてるんじゃないかってたまに思ったりもしますね……」

「うーん。今度お姉ちゃんを叱っておくよ。ちよつと優しくしすぎだつて」

「すいません……」

何かと相談に乗ってくれるこいしさんには感謝しかなかった。

## 相見えるその時まで

どうして

さてさて、私は今日……というかここ毎日、地霊殿にいます。理由は言わずもがな。

最近、なんだか嫌な予感があるのが本音です。なんというか、どす黒い邪悪を感じるというか、吐き気を催す邪悪というか……。どつちにしろ邪悪だなあおい!

とまあそんな冗談は置いておいて。気になったので今日は闇乗式一護さんに来て貰えるかな? どうかな? という感じで、呼ぶことにしました。

「誰に説明してるんです、アツサさん……?」

「あ、そんな汚物を見るような目をしないでください。いくら何でもそれは泣きますよ?」

「え、あ、ごめんなさい……」

「あ、ああそんな落ち込まないでさとりさん。可愛いから襲いたくなる」

「ええ……」

「そんな汚物を r y」

「こんな調子で大丈夫かって? 大丈夫じゃない。大問題だ。」

さて、とりあえずどうやって呼ぶかなんですが……とりあえず名前を呼んでみることに——

「呼んだ？ 呼んだよね？ うん、読んだ呼んだ。絶対呼んだ。お久しぶりだね、アツサ君」

「まだ呼んでないのにでてきた!? この人、さてはNOKの——」

「それ以上はやめようか、僕よりも強い力によってこの世界丸ごと壊される」

なんてことだ、闇乗式一護さんよりも強い力があるなんて……恐るべし、OHK。

とりあえず最近の話をすることに。

「まあ、まさか記憶を残して復活させるとは思いませんでしたよはい……」

「ああ……うん。その件は本当に申し訳ないと思ってる。けど、おかげで自分の強さと

か、再確認出来たでしょ？」

「ま、まあそうですけど……」

なんて返事をしていると、闇乗式一護さんが一瞬いやらしい笑みを浮かべて、

「それに、奥さんも出来たみたいだしね」

なんて言う。うん、当たり前のようにさとりさん顔真つ赤にするよね、その様子を見て私が鼻血出すよね、闇乗式一護さん面白いものを見れたみたいだね、ぶつころ案件ですよ闇乗式一護さん。

「僕を殺せると思う？ 神ですら傷一つ付けられないのよね」

「おおう……すいませんでした」

思いつきり土下座した。いや、だってまだ死にたくないもん。まださとりさんにエツチなこと仕掛けてないもん。

なんて考えてたら、さとりさんからは殴られ、闇乗式一護さんからは撫でられた。あ、殺す気無かったんですねよかった。でも痛いよ、痛いよさとりさん。

パーの方が痛くないはずだからそっちをやってくださいよ。

「じゃあ、今ここで平手打ち。やられてみますか？」

「やめてください、死んでしまいます」

「死なないでしょ、君」

闇乗式一護さん未だに面白いものを見てる時の顔してる、すっごいムカつく……：ていうか今の闇乗式一護さん百合に挟まる男なのでは？

あつふーん（察し） 殺されたなこりゃ

「いや、多分挟まってないでしょ」

「私は挟まってると思うんですけど」

「じゃあ、私はさとりさんの意見に賛成して挟まってるってことで」

「裏切り!? 酷い、アツサさん、僕を見捨てたんですね?!」

「地味に可愛い声出さないでください!」

それ、私が日本にいた時に社畜さんにみせてもらったアニメで一番好きなキャラの声なんですけど。

心の奥底見たなこの人、本当に恐ろしい人だ全く。

「というか、僕を呼んだ理由は？」

「……あッ」

「忘れてましたね……。最近どうやらアツサさんが何かを感じ取っているようで」

「ふむ? 例えばどんな感じだい?」

「どす黒い、吐き気を催すような邪悪を感じます」

「……ふむ? じゃあ、彼女じゃないのか」（ボソツ）



「…？ 彼女？ え、他に誰かいるんです…？？」

どす黒い、吐き気を催す邪悪以外の何かってそれはそれで怖いんですけど。え？  
じゃあ私はまた別の何かを感じ取ってるってことですかね？！

「とりあえず…その邪悪の方は多分、幻想郷にいるよ。多分、きつと、maybe」  
「なんでそんなに微妙なんですか…？？」

「いや、だってこのレベルの邪悪ってなかなかいないんだよ、この幻想郷に……。まあ、二人いるだけだね」

「二人もいるなら、かなり居るじゃないですかヤダー!!」  
最近このネタ使いすぎて、もう擦るところないと思うんですよね。まあ私の鮑は擦らなきや感じないんですがね。

「唐突にドギツイ下ネタはNG」

「私も少し、それはどうかと思いましたがよアツサさん…」

「え？ あ、すいませんでした…」

そういうえばこの二人、心読めるんです。そうでした。コマタナコマタナ。それはそうとその二人とは…？

「聞かない方が身のためだと思うよ…」

「ああ…なんとなく一人は思い出せました。あの妖怪ですか、確かにちよつとどす黒

い何かはありそうですよね」

「私話から置いてかれてるう!」

「とりあえずは置いておこう。最近、タナトスが動き始めたんだ。この幻想郷を潰そうってね」

「……は? それってどういうことですか?!」

「落ち着いて、アツサ君。落ち着かなきゃ話ができない」

「そうは言われても困る。あのタナトスが、また幻想郷を襲おうとしている? 頭がどうにかなりそうだ。まだ、時を止められるって言われた方がマシだ。その方が話的にはちやつちいことだ。」

「どうしよう、またみんなが巻き込まれる……?」

「いや、君はもう完全に自分の能力を掌握しているから……とりあえず、詳しい話はまた明日にしようか。今日はあまり話せない状況だろうから」

「そう言つて闇乗式一護さんはどこかに消えていった。」

「私はその様子を見ていなかった。なにしろ、取り乱していたから。あのタナトスが幻想郷を襲おうとしていると聞いてしまったから。また、私の大切な人達が死んでしまうと思つたから。」

## バカ三人組

「で、どう？ 少しは落ち着いたかな？」

「生憎と私はそんな便利な頭してないです。もし受け止められているなら、昨日の時点であれほど発狂はしてませんかでしたよ？」

「んー……。まあそれもそうか」

「こんにちは、今日も発狂しそうなアツサでございマース！ お魚加えたドラ猫……は追いかけませんけど、闇乗式一護さんのことは追いかけます。」

「いや、ストーリーじゃないですよ、だってお姉様達にタナトスが動いているってことを話すって言ったたら普通追いかけますよね？ え？ 追いかけない？ いやあそんな冗談きついなあ……。」

「アツサ君よ、誰と話してるんだい？ ……ふむふむ、この話を見ている——」

「ストーツプ、ストーツプ！ それ以上はNGですよ！ とにかく、私は絶対お姉様達にはその話を聞かせるつもりは無いんですからね！」

「君も頑固だなあ……。少し話すだけだから、ね？ 少しだから」

「そんな先つちよだけだからいいでしょ？ みたいな言い方しないでくださいよ。それ

絶対最後まで話すつもりですよね?!」

「とうか、君も昨日話最後まで聞かなかったでしょ? 君にもちゃんと話をだね……」  
私は闇乗式一護さんが言い切る前にふて寝した。それと同時に……浮遊感に襲われた。

「どうやら、闇乗式一護さんが力で浮かしてらしい。どうしても私に話を聞いて欲しいようだ。」

「全く動けないんですけど……そこまでして話を聞いて欲しいんですか?」

「うん。そうじゃないと君の誤解も解けそうにないしね」

「むう……分かりました。とうか分かったからこの拘束みたいなのを解いてくれませんか?」

「えー……ま、いいや。……」

よく分からない言葉で闇乗式一護さんが発すると私の体が動くようになり、先程まで感じていた変な浮遊感もなくなった。

「とうか、呪文みたいなのを唱えなくても別に解除出来ましたよね?」

「いやあ……そういうの雰囲気じゃん?」

「いや、やる必要ないならやらなくていいじゃないですか……」

何故そんな子供っぽいことをするのやら……最近ふざける相手いなかったんですか

ね…？

そもそも時間の無駄では…？ まあ本人が楽しんでるならいいんですかね？

とりあえずお姫様抱っこやめてくださいよ闇乗式一護さん。さとりに前やつてさとりさんの恥ずかしがっているのを見て鼻血出てたけど、実際やられると恥ずかしい。

「まあまあ恥ずかしがらないの。僕さつきから後ろからの殺意に耐えてるんだからね？」

「後ろからって——」

ふと、後ろを見てみると殺意が漏れ出ているさとりさんが後ろにいた。嫉妬ですかね？ 嫉妬ですね、可愛い。これはとっても可愛い。けどそれじゃ話が進まないから、殺意はしまつちやおうねく？（某しまつちやうおじさん）

「ふう…：怖かった。君って結構嫉妬しやすいんだね？」

「普通あんなどころ見せつけられたら誰だって嫉妬しますよ!？」

「私はさとりさん一筋だから安心してくださいな」

「本当ですか？ つてうわ、ここまで言わなかったっていいですよ本当に恥ずかしいんですからね／＼／＼」

「ガチ照れk t k r!!!」

「……なんというか、たくましく育ったね。アツサ君」

なんとも言えないって感じの顔しないでくださいよ、絶対あの社畜さんもその顔しますよ？ この光景見たら。

……いや、むしろこれありじゃね？ とか言い出して興奮してそう。エッチなのは嫌いです！

「昨日の心の中の発言……忘れてないよね？」

「はい、すいませんでした。だからまた浮遊させるのはやめてください！ 私のおパンツが！」

「アツサさんはドロワーズでしょ!?!」

「そうですけども?! 何か問題でも?!」

「無いけど、そこを聞く目的でこれやってる訳じゃないからね?」

「デスヨネー!」

……今後、この3人が揃うとバカにしかならないって噂でも立ちそうですね（白目）

そんなてんやわんやがありましたして、なんとか今は紅魔館前です。ちなみに

「私さとり、着いてきてます」

「これ絶対大変なことになるよね？」

「ワタシシラナイナー」

最早白目を剥くしかないこの状況、真面目な話になれるかどうかとも怪しい。

「それにしても、アツサ君はシヨックから立ち直れたみたいだね」

「そうですね、だいぶ心の中も安定してきているみたいですし」

「そう言われれば確かに……」

この二人に心の中の話とか精神の話をされると説得力があまりにも違いすぎる。正直、安心を通り越して恐怖を感じるレベルで。

「恐怖……ってどういうことですかね、アツサさん？」

「そうだね〜ここはじっくり心の中と対話しなきゃいけないかな？」

「そういう所だよ!?! 気付いてないなら阿呆だよ!?!」

「気付いて（るけど）（ますけど）？」

「クツ！ 既に気付かれていたか！ 逃げよう」

「いや待つてくださいいよ、そういう問題じゃないですよ。これから義姉達に会わなきゃいけないんですからね？」

「ハツ!? そういえばそうだった。……気の所為ならちよつと言い方変えてます？」

「貴女とは婚姻関係だと思っていたのですが？」

「いえ、その通りでございます」

「屈服早いなあ……」

闇乗式一護さんに苦笑いをされているがそんなことは問題じゃない。さとりさんがそういうことを言うつてことは、ちよつと危ないんですよ。

「……まあ、今日のところは見逃してあげましょう。もう既に義姉達の家の前ですし」

「よ、よかったあ……」

「さて、話は纏まったみたいだし、入ろうか」

そうやって闇乗式一護さんは門を無視して入ろうとした。待て待て、そこを無視してあげないでください、美鈴さんが可哀想っていうかダメージ入りますからね!! 主に財布的な意味で。



## 恐怖の言葉

「アツサお嬢様あ……無視されましたあ……」

「ええ、分かっていますよ。わかっていますから泣かないでください。最近、魔理沙がよく美鈴さんのこと無視して直接図書館に突っ込んで入ることは知ってはいましたけど……」

「最近構ってくれる人がいないんですよ〜シクシク」

「どうやら最近、美鈴さんのことを構ってあげる人がいないらしい。美鈴さん、子供っというか妖精とかの面倒見がいいから、チルノ……？　さんとかと喋ってればいいんじゃないかなあ……？」

「妖精達じゃダメなんですよ、仕事関係となると妖精達には喋りにくいでしょう？」

「ああ、仕事関係でしたか。それは喋りにくいですね……」

「じゃあ、僕が喋り相手になろうか？」

「あ！　さつき私を無視した人！」

「いや、ごめんって。そんなに根に持たないですよ」

若干、困り顔をしながら美鈴さんの相手をしている闇乗式一護さん。……まあ確かに、闇乗式一護さんなら仕事もしてるし、距離も関係なく相談相手になれるだろう。

「うう……分かりました。相談相手になつてくれるなら根に持たないであげます」  
「うん、ならよかったですよ」

「それにしても貴方が闇乗式一護さんですか……その執事服、アツサお嬢様が言つていた通り、似合つてないですね」

「グハア！ ちよつ、アツサ君?! 似合つてないとか他の人に言つてたの!?!」

「実際、似合つてないですし……」

「ひ、酷い!」

いや、酷いと言われても事実ですし、困りましたね……。

というか、本来の目的をお忘れでは？

「おつとつと、そうだったね。レミリア君とフラン君に会いたいんだけど……いいかな?」

「それ、先に言つてくださいよ……アツサお嬢様の師匠ともなれば会わせないわけにはいきませんしね。いいですよ、まあ機嫌を損なわないようにとだけ……」

「分かつたよ、ありがとうね」

そう言つて闇乗式一護さんが顔をこちらの方に寄せると

「君の師匠つていつ言つたつけ?」

なんて言つてくる。いや、事実師匠でしょ。認めてくださいよ。後そんなこと言われ

ると面倒な事がおきそうだからやめてくださいよ……

「にしても、この中広いねえ……迷わないの？」

「幼い頃はよく迷ってましたけど、最近は割と迷わなくなりましたね」

「たまたま迷うんだ」

「私との婚約の件を伝えに行く道中も、少しだけ迷ったとか言っていましたよね」

「それは言わないで欲しかったなあ?!」

そんな、ちよつとした小話などを挟みながら紅魔館の中を歩いていると、目の前に大きな扉が現れた。

この扉ってレミリアお姉様の部屋の扉……じゃないや。確か……なんだっけ？ そ

うだ屋上に出るための扉だ。

「……迷ったの?」

「いや、そうじゃないですよ」

「ならいいけど」

……というか、フランお姉様の妖力が感じにくいような?

まあ、多分大丈夫でしょ。レミリアお姉様もフランお姉様も一緒の部屋にいるし。多分その部屋は……あ、料理するところですね。

「じゃあ、調理室に行きますかあ」

「そうですね、アツサさんもそこだつて分かったみたいですし」

「二人とも知ってたんです!」

「まあ、当然」

「なんでやねん!」

いや、さとりさんはまだギリギリ分かるかもしれないけど、なんで闇乗式一護さんは分かってるんですか……

そんなこんなで私達はレミリアお姉様とフランお姉様のいる、調理室に着いた。よく考えてみると二人ともあまり料理をするようなタイプじゃないような……？

「あら、アツサとさとり。それに貴方は……」

「あ！ 百合の間に挟まる男!？」

「合つてるとは言わないけど……」

「なんか似たようなもののような？」

「なんで二人して否定しないのかなあ……？ 僕は闇乗式一護アツサ君の——」

「闇乗式一護……？ ああ、アツサがよく話していた人間の。」

「へえ。でも実際に強いのかちよつと分かりずらいわね？ 神力つてやつかしら？」

え、神力つて神しか持てない力の……？ でも人間ですよ、闇乗式一護さんつて。

「まあ、持つてるよ。神は自分に似せて人間を作ったつて言うしね。まあ、僕はお父さんの代からの人間だけだ」

「……まさか、貴方のお父様は神より先に生まれた人間とでも言うんですか？」

「事実だよ。ある理由で死んでしまったけど、その理由は誰も知らない」

「そんなことが……で、なんでここに来たのかしら？」

「ああ、忘れるところだった。まずね、タナトスがこの幻想郷が壊れてないことを知って、また壊しに来ようとしてるってこと」

闇乗式一護さんがその事を話し始めると、レミリアお嬢様とフランお嬢様の血相が変わった。

「それは一体……」

「あれ、紫さん」

「君がこの幻想郷の管理者かい？」

「え、ええそうです。私が管理してますが……」

「じゃあ伝えとくよ、もう一つのこと。神達はこの幻想郷を守る気は無いよ」

今度こそ、この場が一瞬にして恐怖に陥れる分には十分すぎる言葉であった。

## 虚しく響く

「神は……この幻想郷を守る気がないですって?」

「まあ、僕は気まぐれで守る気だけ——」

「別に神の力なんていらないわ、なんとかかなりますからね」

「紫さん?! 何見栄はってるんですか!?!」

「見栄じゃないわよ、本当のことを言ってる迄」

「……ふーん? じゃあ、試してみようか?」

「上等ですわ。貴方程度の間人、赤子の手ををひねるがごとくよ」

そう言つて紫さんはスキマに隠れて闇乗式一護さんの後ろに現れて、弾幕で攻撃しようとした。

「……バレバレなんだよね」

「なっ!?!」

まるで元々後ろから攻撃されるのを分かっていたかのように、紫さんの攻撃を無かったことにした。正直よく分からないが、無かったことにしたという言い方が正しいと思つた。

「何故、今攻撃が出来なかったの？ ま、まあいいわ」

そう言つて、紫さんはスキマの中に隠れた……直後、紫さんが突然、スキマから吹つ飛ばされたかのように出てきた。

「……はあなんかイキつてたから力があるのかと思つたけど、この程度とはね」

「今、私は何をされたの!？」

「分かつたよ。今度は見えるようにやつてあげるからもう一度来てみなよ?」

「くつ、舐めた真似を!」

そう言つて、紫さんが私達も巻き込んでスキマに隠れたが、その先には闇乗式一護さんがいた。

「やあ、この空間、気味悪いね。だから吹つ飛びな」

今まで闇乗式一護さんと関わつてきた中でも一番声が低かつた。どうやらそれほど闇乗式一護さんは怒っているようだ。

そして私達は、闇乗式一護さん曰くゆっくりと殴つて、スキマから強制的に弾き出した……らしい。

「はあはあ、なんて力なの……?」

「言つておくけど、僕は人間だけ……神より先に生まれた人間の子供だからね。ある程度強くなきゃダメなんだよね」



「闇乗式一護さん……?」

「アツサ君達は大丈夫かい? 紫って妖怪に巻き込まれたみたいだけど」

「巻き込まれましたけど、殴りましたよね?」

「ゑ!? 殴ってないよ?! トンって押したただけだからね!」

「……その言葉、信じますよ?」

「貴方、凄いのね! 流石はアツサの師匠つてところかしら! ねえねえ、もつと強いところを見せてよ!」

「フラン、あんまりはしゃがないの。」

「それに妖怪の賢者、滑稽だったわよ」

レミリアお姉様が紫さんを嘲笑っていると、闇乗式一護さんが、まあまあといった感じ

で間に割って入ってきた。

流石に、紫さんも力の差が分からされたからなのか、すぐにレミリアお姉様に迫るの

をやめた。

「……で、なんで私達にそんなことを伝えに来たのかしら?」

「いやあ……何も知らないで滅ぼされるって嫌じゃん? だから伝えに来たってのど—

—」

「私達に力を上げてもらって自分達でタナトスからの脅威を防いでもらおうってことで

すかね?」

「そうそう、流石はアツサ君。僕の思考をある程度分かっているみたいだね」

「そ、それほどでも」

そんな訳で、特訓になる……と思っていたのだが闇乗式一護さんから衝撃のことを言われる。

「え？ まだ無理だよ？ だって、君達まだまだ体が耐えられるほど強くないよ」

とのことだった。どうやら基礎的な身体づくりが出来てない……らしい。あれ、でも私は結構訓練受けましたよね？ なら、身体出来上がってるんじゃないですか？ 仕上がってるよ！ 仕上がってるよ！

「でもまだ貴女は引き締められるよ」

「つまりダメってことですか……」

「そうだね。まあ今後は異変は起きないかもしれないけど、身体を動かそうなことがあればそのタイミングで動かすといいよ」

「身体を動かす（意味深）」

「やったねたえちゃん子どもが増えるよ！」

「おいバカやめろ」

なんて、小話を挟みながら、そもそもこの後異変なんて起きるのだろうかなどと考えていた。

前の時に起きたのは永夜異変だった。あの時はなかなか大変だった……永琳さんが強すぎて皆で束になっても勝てないんじゃないかってほどだったなあ。

……え、まさか永夜異変またやるって訳じゃないよね？　だって今回皆の記憶引き継いでるから、月から誰も来ないって分かっているのでは？

そういえば暴走しかけてる危ない人達がいるって言ってたなあ。……まさか永琳さんが危ない人って訳じゃないよね？

「あれ？　言ってたなかったっけ？」

「ごめん待ってそのセリフで大体わかっ——」

「君の言う永琳さん……つまり、八意永琳がその危ない人の内の一人だよ」

「……聞きたくなかったなあ」

正直この時点で頭を抱えなくなるほど私は困っていたのに、闇乗式一護さんはもつと困ることを言ってきた。

「ちなみに、八意永琳はアツサ君、君のことが気になっているらしいよ？」

「ア、ア、ア、ア、ア、ア」

そんなこと言われるってことはこれ絶対次の異変、私と永琳さんの間で起こるようなものじゃないですかヤダー!!!

「まあ、多分暫くは大丈夫だと思うよ？　うん。多分、きつと、maybe」

「とりあえず、もしそんなことになったら私もアツサさんの手伝いをするので……安心してくださいね?」

「闇乗式一護さんは全くもって安心出来ないし、さとりさんはさとりさんで、安心出来ない笑顔浮かべないでくださいよヤダー!!!」

私の大きな声が紅魔館内に虚しく響いた。

## 妻バカ

どうも、アツサです。今私は頭を抱えています。はい、そうですね。永琳さんに狙われていたという点でモーレッツに頭を抱えています。なんならポーディング変わってませんよ？ 本当に、いや、マジで。本気。本気と書いてマジと読む。結局マジやんけ！

「アツサさん、現実逃避したい気持ちはよく分かりますけど、そんな場合では無いのでは？」

「ハッ！ そうだった。でもどうすれば？」

「まず頭に引つ付いたかのように置いている手をどければいいんじゃないかな？」

おい、闇乗式一護さん。笑いながら言うのやめて貰えます？ ガチでむかつきます。いやほんと、ガチで。本気。本気と書いてガチと読む。

「その流れさつきもやったじゃん。何？ ハマったの？」

「ハマってないですよ！ ハマっ子じゃないですし」

「……？」

「いや、無駄に可愛く首傾げないでくださいよ……」

「あの、アツサさん。すいません、ハマっ子とは……？」

「知らなくていいことです。さとりさん」

「なんとというか……変わったのねアツサは」

「うん、お姉様の言う通りだね。紅魔館にいた頃よりも活発になったていうか……」

「しみじみした空気感出さないでよお姉様達!」

人が……ってというか吸血鬼が自分のことで頭悩ませてる時に何勝手に色んなことしてるんですか。脳内バグりますよ?

「というか勝手にバグってるだけだと思っただけですよ私」

「今気が付いたんですか?」

「とつくに気付いてるものだとばかり……」

「あなた達二人といるからバグってるのか、元からバグってるのか分からないじゃないですか!」

「ひっ酷い!」

「あ、ごめんなさいさとりさん。お願いだから泣かないでくださいよお!」

「こうやって、犯罪は起きていくんだね」

「幻想郷にもDV被害が出るとは驚きね……」

「アツサつたら妻なのに妻を泣かせたらダメじゃないの!」

「妻なのに妻を泣かせるとかいうパワーワード。嫌いじゃないし好きだよ」

「うん。こりや元からバグってるね」

それこそ酷いってものなんですがああ。勝手に私がバグってるだけ判定しないでもろて。なんでこんなことになってるんですかね……まあ楽しいからいいけど。

「でもそんなこと思っても君への興味が無くなるわけじゃないと思うんだよね」

「そうですね！」（血涙）

なんとも言えない、こう……なんて言うか悲しい気持ちになりましたまる

「とりあえず、まとめようか。」

一、八意永琳がアツサ君のことを狙っている

二、ひまわり畑の住人が凶暴化してる

三、この前暴れた伊吹萃香はタナトスに能力を強制的に強くされられた

四、タナトスが幻想郷を狙っている理由は七つの幻想郷を壊すとんでも願いが叶うから

五、神達は幻想郷を守る気がない」

「うん。何からつつこんだらいいか分からないけど幻想郷が七個あって、しかも壊されると願いが叶うとか意味わからない。何？ ドラ○ンボー○にでも汚染された？ 馬鹿なんですか？」

「冗談だよ。ちよつとした神を超えた人間ジョークだよ」

「冗談だとしても、かなりキツイわよ?」

「あ、ごめんね? ていうか三番目忘れてない?」

「忘れてないですよ。それ以上に四番目のジョークがキツイだけであって……つて、ええええええええええええ!!! もう? 既に? タナトスが? 幻想郷を攻撃し始めてるうううううう!!!」

「感情バグつたのがな?」

「いや! バグりますよ! 誰だってバグりますよそんなこと言われたら!」

「それもそつか。とうるか攻撃つて程でもないよ。ただ遊ぼうとしたらしいよ?」  
「神つてなんて適当なヤツらなのかしら?!」

「それは同意するわ。でも遊びであの伊吹萃香の能力を暴走させるなんて……」

「いや、暴走してないよ」

「……ん? あ、言われてみれば確かに完全に使いこなしてましたねあの鬼さん。え、てことは萃香さんつて能力を完全に使いこなせてるつてこと? やったね、戦力増えたよ!」

「そうそう、元から自分の能力を完全に扱いきれていたみたいだしね。だからあの異変は意図的に行われたのさ。……まあでも、試しているのは嘘らしいけどね」

「……萃香さんつて戦い好きなんだ」



「……んーそうみたいだね」

戦いたいがためにあそこまで私に嘘を言っていたのか……（呆れ）

困った人もいたものですね。私は違いますけどね！

「君は別の意味で困った存在だけだね」

「酷い?!」

「実際そうだから何も言えないわ、アツサさん」

「さとりさんが否定しない……だと?」

そこは否定して欲しかったです、さとりさん。私とっても悲しいネ！

「なに似非ちゆうごくじん? みたいになつてるんですか」

「中国人ひらがなみたいない方で可愛いよさとりさん!」

「んー……これは明らかに妻バカ」

「そうとしか言えないのが辛いところね」

「妻バカも程々にして欲しいけどね? アツサくたまには私にも構つてよ!」

「はいはい、フランネエサマカワイイー」

「棒読みだ!」

いや、フランお姉様も可愛いんだけどね? それ以上にさとりさんが可愛いんですよ

! 可愛すぎるんですよさとりさんは!

「んー……これ以上妻バカっぷりを見せられたら困る。帰るよ僕」  
「はーい」

そんな訳であっさりと帰っていった闇乗式一護さんでした。……なんかあの人が来たの重要そうな気がしますようん。

## スノードロップを贈る者 動き出す

「貴方が欲しい！ で、合ってるのかしらね？」

「なぜ疑問形なんですか……永琳さん」

今目の前にいるのは永琳さんであった。見事に死亡フラグですありがとうございますしました。短い妖生でしたが楽しかったです、ありがとうございました。

「なに考えてるの？」

「あ、いえ別に……特になんにも考えてないですよ？」

「本当かしらね？ まあいいわ。今夜、貴女の実力つてもものを知りたいから、永遠亭まで来てちょうだい。勿論、道中も実力を図るわよ」

なんでなんで図られなければいけないんですか。訳が分からないんですがあのあの。と言うよりも、この状態。さては人の話を聞いてないな？ なんてこつたい私完全な

詰みじゃないですかヤダー！

せめてア○パ○マ○のあの一人ぼっちさを紛らわせてあげたい妖生でした（白目）

「で、なんで実力を図るんですか……？」

「それは勿論……」

「勿論……？（ゴクリ）」

「実験の為よ」

「デスヨネー……ってなんの実験です？」

「それは秘密よ？」

なんで秘密なんですかね本当……せめて伝えてくださいよ、そして協力なんていくらでもしますよ。貴女が今危ないんですから。恐ろしすぎますよ、何が起こるか分からないんですから……下手をすればタナトスが裏を引いてる可能性も……？

「とりあえず、夜になったら来てちょうだいね」

「は、はい！」

とりあえず、今は考えたくないから後で考えましようかね。

なーんて思っで、少し寝たらもう夕方だよちきしょー!!?? どうするんだよこの状況!?

「何焦ってるの、アツサ…まだ私は眠いのにな……（ムニヤムニヤ）」

「いやいや、そんなこと言っでられないんですよレミリアお姉様!」

「……そういえば今日アツサのところに永琳が来たんだっけ忘れてたわ」

さとりさん情報早!! さすが私が惚れた嫁ですこと。まあ、多分大丈夫。多分、きつと、maybe……

「命令には従った方がよさげね……あまり刺激したくないし」

「そうですね、レミリアお姉様とかがついてくる訳には……」

「いけない、わね。どうしたものかしら……」

……気の所為なら、レミリアお姉様から永遠亭を破壊するとかなんとか聞こえた気がしますねはい。姉妹ながらちよつと怖いよレミリアお姉様。というか永遠亭を破壊したら薬屋みたいなのが無くなりますよ。それは世間が許してくれあせんよお。

「とりあえず……アツサ、貴女の出来ることを出来るだけやりなさい」

「レミリアお姉様……」

「きつと、それが正しい道になるわ。運命もしつかりと見えるもの」

「レミリアお姉様……!」

レミリアお姉様が言うなら確実だ。運命が見える能力は流石としか言いようがない。

だけど……何かある、そう私の頭は告げている。こういう時の私の警鐘は大抵当たる。

不安に駆られる……でもそのタイミングでレミアアお姉様に抱きしめられる。

「大丈夫、大丈夫よアツサ。私達は貴女が暴走した時よりも強くなってるわ、だから……大丈夫よ」

「うん……分かった。安心して行ってこられるよ」

「ええ、行つてらっしゃい（ニコッ）」

レミアアお姉様の笑顔に見送られながら私は紅魔館を出た。そのことが、最悪の選択だとも分からずに。

「いやあ……これマズイですね☆」

さつきから、妖精達の殺意高すぎませんか?! 攻撃がいやらしくてたまらないんですが!?

「……こんな夜に何しているんだ愛杉」

「え、あつ慧音さん!? そちらこそなにしているんですか?」

「なにをしているも何も……あの人間の世話を見ていたところだ」

あの人間……? 慧音さんは確かに人間と仲がいいし、実際人間の里に住んでいる。  
(いいなあ私も住みたい)

でも、特に誰かに肩入れするようなタイプではないと思っていましたけど……人間の里でもみんなを等しく愛するみたいなことを言われているらしいし。

そんな慧音さんが肩入れするほどの人……ちよつと気になる。

「あの人間……とは?」

「あまり言いたくないのだがね……まあ君はあの時居なかつたし、ちようどいいか。

とりあえず……私と一戦交えてもらおうか!

旧史【旧秘境史 — オールドヒストリー—】

「ちよつ、いきなりなんですか!」

普通に話を聞こうとしたが抵抗されては仕方がない。こちらも仕掛けなければ無作法というもの……

というかこんなスペルカード持ってたんですね……最初っからこのくらいのことをやればよかつたのに

「まあ仕掛けられたら、仕掛け返しますよね？」

不正服【アダマスの鎌】

「なっ……私の弾幕を全て消しただと？ フツ、やるようだな。ならこれならどうだ?!

転世【一条戻り橋】

後ろから米粒状の弾幕が大量にやってきたと思っただら慧音さんの所まで行ったら消えていく。

どうやら、多少厄介なスペルカードのようだ。ただ、今の私には避けきれないものは無い……が、ここはあえてアダマスの鎌で全て消し去る。

すると慧音さんは少し驚いたようだが、すぐに苦笑した表情になる。

「君は弾幕ごっこのルールってものを忘れてしまったのかね？」

「忘れた訳じゃないですよ？ わざとです。わざと」

「となると……結構君は嫌な性格になったようだな」

「あら、それは言われなくなかったことですね」



そんな小言を挟みながら、慧音さんは冷や汗をかいている。

「どうやらこれからはあまり手が無いようだ。まだ詰みと言うほど、詰んでもないようだが。」

「じゃあ私から攻めようかな？」

そうやって私はスペルカード宣言をするのだった。

## 歴史

「最つ高の最低を差し上げましょうか？

殺意【450年分のランコーレ】」

「……随分と嫌な弾幕だな。殺意をビンビン感じるよ」

「そういう弾幕ですからね、これ」

私の周囲にはレーザー弾幕、その外には圧倒的な量の大弾、大弾は私に向かって来る。しかし、レーザー弾幕でそれらをかき消すかのように見せている。

これは私が今まで募らせてきた、殺意の象徴のような弾幕だ。大弾が殺意、レーザー弾幕は私の心。

はつきりいつて、近付けば近付くほど危ない弾幕だが、弱点がある。それは発動した瞬間に私のすぐ側まで来られることだ。こうなってしまうえばこのスペルカードは攻撃方法がない。

「やれやれ、君には大層驚かさされるよ。ここまでの殺意があつたとは……やはりあの時、人里に近付けなくて良かった」

「かなり冷や汗かいてますね、余程近付けたくなかつたんですね。ちなみに、なぜ今向

かっている方に向かわせてくれないんです?」

「あの人間は死なない。だからこそ君との相性は最悪だと思つてね」

「あら、慧音さん。それは違うんじゃないですか? 私との相性は最高ですよ。殺せないならいくら殺しても大丈夫ということなんですから」

とはいえ、今は一切誰かを殺したいとかそういう欲求はない。能力を完全に操れているからだ。別にたまには誰かを殺したいとかそういう欲求は断じてない……多分。

まあ、殺意は完璧に操れているのでその辺りは問題は無いみたいだ。あのスペルカードはかなりの殺意を感じさせるもの。それをあの程度の冷や汗で済ませられたので良かったと言うべきだろう。……とはいえ、慧音さんは殺意とは別のことで冷や汗をかいているらしいが。

死なないってことはどういうことなんだ? 過去にレミアお姉様が死なない人間と戦ってきたなんてことを言っていたと思うがそれは本当のことだったのだろうか?

……やはり、只者では無いのは確かだ。レミアお姉様の攻撃で死なない人間はそう居ない。そう考えると……いや、そもそもその人間はただの人間なのだろうか?

「君、どうやら相当考えているようだね」

「やはりバレますよね。教えてくださいよ、その死なない人間のことを」

「ならばこのスペルカードを避けきいたらな!」

新史「新幻想史 ―ネクストヒストリー―」

周りに大量の魔法陣のようなものをばらまかれたと思っただらそこら大量の弾幕が十字に放たれたかと思っただら回り始める。

その後、慧音さんから私を狙って弾幕を放ってくる。んー、逃げ道は……あるにはあるね。大丈夫、この位なら避けれる。

「これが慧音さんの本気なんですか？」

「やはりあつさりと避けるか……ならばこれで終わりだ！」

【無何有浄化】

そうスペルカード……いや、last wordを発動すると、慧音さんの周りに円の一部が途切れている弾幕が展開される、と思っただら後ろから弾幕が襲う。それらは慧音さんの周りで消えていくが少しの間残っているので近付くのは明らかに危険だ。

「私の苦手とする弾幕ですなぁ……どつかで聞いたんですか？」

「いや、たまたま君の苦手とする弾幕になってるだけさ。ほら、まだいくぞ！」

そういうと、慧音さんは私を狙って時々大弾を放ってくるようになった。

より避けにくくなった……とはいえ正直まだ避けれる。

「……終わりですか？」

「そうだな。やれやれ、これで君に話さなくてはいけなくなっちゃったな」

「そう言いながらにこやかな表情浮かべてますけど……」

「なあと、愛杉。君がいい方向に変わったのが嬉しくてね」

「本当に慧音さんは先生なんですな」

少しだけ気が楽になる。昔は二個目の能力のせいでよく暴れていた私ではあるが、こうして慧音さんに認めてもらえるほどになったのは単純に嬉しい。

「さて、死なない人間の話だったな」

「ああ、そうでしたね。先程言っていたあの人間と同一人物なんですか？」

「そうだ。彼女は……被害者かもしれないな」

「被害者？ それはどういう……」

「まあ結論を急ぐな。少し話させてくれたまえ」

慧音さんからの簡単にまとめると、その人は藤原妹紅というらしい。父親はかぐや姫……つまり蓬萊山輝夜さんにゾクコンだったらしい。

それで何かを要求されたらしく、まあ難題を押し付けられ、そしてクリア出来なかつたらしい。

そして、輝夜さんが居なくなつた後死んでしまつたとかなんとか、それで妹紅さんは輝夜さんに恨みを持ち、富士山で処分する予定だつた蓬萊の薬というものを盗んだ上、飲んでしまつたらしい。

そうして、妹紅さんは所謂不老不死になつてしまつたらしい。

今は、輝夜さんが近くにいるからちよくちよく殺し合いをしているらしいが、昔は本当に生きる活力というのを見失つていたらしい。

「本当に大変な人生……。」

「そうだな、本当に私もそう思うよ」

「で、私はこれからそんな人に出会ふんですか？」

「まあそうなるな、この先に進むなら」

んー、てことは戦うことになるのかなあ……流石に負ける気がするけど。

「まあ、多分話せば聞いてくれるさ。今宵はあの夜じゃないからね」

「やはり何かあつたんですね？」

「それを話すとより長くなるがいいか？」

「イエ、ヤメテクダサイ」

「ハツハツハツ!! まあいいだろう。行つてきなさい」

そう言われて、私は妹紅さんがいるであろう迷いの竹林を突き進むのだった。

## 永遠を生きる者

「この辺にいる……筈なんですけどね〜」

私は言われた通りに進んでいった……はずなのだが

「これは迷いましたねえ間違いない（確信）」

物の見事に迷いました。竹に傷でもつけなきゃだつたなあ……困つた困つた。

でも同じところをグルグルしてる感じはしないんですがねえ……というか飛べばいい話なんですけどね初見さん

「飛ぶとんだか負けた気がするんですよねえ……困つた困つた」

「何を迷つてるのか分からないけど多分道に迷つてるんだよね君」

「え？ まあそうですけど……貴女は？」

「ああ、ごめんごめん。私は藤原妹紅、ただの——」

「貴女が妹紅さん!? 探してたんですよ!」

よかつたよかつた、やつと見つかつた。これでやつとこの竹林を抜けられる!

「で……人の自己紹介を遮つてまで言ったことが探してたとは。なに、またあの輝夜の差し金? 羽根があのレミリアってやつと似てるし」



「あ、レミリアお姉様は私の姉です。……もしかして貴女が死なない人間ですか？」

「お、死なないってこと知ってるんだ。もしかして輝夜に聞いたのか？」

「い、いや慧音さんから——」

「よし、決めた。アンタも恐怖に陥れてやるよ」

「いや、あの話をですわね」

「問答無用！」

そう言つてからいきなり弾幕を張り出した妹紅さん。

いや、よりによつて御札なんですけど?! ちよちよちよ、待つて! 困る! 当たつ

たら痛いじゃん! ……弾幕は大抵痛いけども。

「すぐに対応するとはねえ……」

「結構ギリギリなんですから……ねッ!」

そう言つて私は妹紅さんに牽制のための弾幕を放つ。それにより御札がはらりはらりと落ちていく。

ふむ、そこまでの霊力は込められてないみたいですね。

「で、貴女は今までなにをしてきたんですか？」

「話す必要は無い!」

時効【月のいはかさの呪い】

スperlカード宣言を妹紅さんがすると米粒に見える弾幕を八方向に出しながら回転させていく。

その上、青いナイフも飛んでくる。しかもそれは私の後ろの方に飛んでいくと赤いナイフに変わって私の方を狙ってくる。

「面倒な……もう早く止めてくださいよ！」

「だーかーらー！ 輝夜の差し金なんですよ？ これくらいは耐えられるでしょ?!」

「だから違うってばあ……」

何とか耐え凌ぐとまた懲りずに御札を展開してくる。しかもなんだか先程よりもパターンが違う。またちよつとめんどくさいなあ……というか避けにくすぎイ！

「これも対応されるのか……流石というか。まあ、これくらいは対応出来なきや輝夜が選ばないか」

「だあかあらあ!!!」

「分かった分かった、さっさと本気出させて？ まだ小手調べさせてもらおうよ！

不死【火の鳥？ 鳳翼天翔?】

「違うんだよなあ……」

そんなことを呟きながらも私は妹紅さんの弾幕を避けていく。

どうやら今回のスperlカードは火の鳥の名のごとく、赤い鳥の形をした弾幕を放って

きて、その弾幕が通った後にも弾幕が残っている。何回か放ってきた後、米粒みたいな弾幕を放ってきて、残っていた弾幕も動き始める。

「なんかしつこいといつかなんといつか……」

「しつこいのはアンタの雇い主じゃなくて？ もっといくよ！」

「もー！ 疲れてきた！ 流石に使うよ！」

不征服「アダマスの鎌」

今回は、私の周りに鎌状の弾幕を展開して、相手の弾幕を防ぐ形をとる。どうやらその作戦は成功したようで殆どの弾幕がこっちに来ない。

「キイー！ 防ぐのは卑怯じゃないかなあ?！」

「そんなことはないですよ！ そっちが悪いんですよ！ 行け、アダマスの鎌！」

そう言いながら私は鎌状の弾幕を妹紅さんに飛ばしていく。すると思っていたよりもあっさりと体が真つ二つに……ん？

「真つ二つ!? え、ちよつ……ええ?! ちよつ、どうしよう!? これどうやって助ければ  
——」

「うるさいなあ……そんな騒がなくても私は死んでないよ」

「真つ二つになりながら喋るカオス!?!」

ゾンビもびびっくりな状況、人が真つ二つになりながら喋るとかいふB級ホラー映画も

ビックリな状況になっている。いや、A級ホラー映画もビックリか。

「【リザレクシオン】」

ふむ、その様子だと……そこまで私のことを聞かされてないのか？ まあその方がいいか、だとして名前教えるかなあ……」

そのもはやA級ホラー映画もビックリな状態から一瞬で治るってどういうことなんですかね（恐怖）

でも今なら話聞いて貰えそうだし……話しかけますか

「え?! あ、あのくすいません。そろそろ話聞いて貰えますか?」

「ん? まあいいよ。そろそろ君に一切の殺気とかが無いのが分かったし」

殺気消しという良かったあ……これ消してなかったら大変なことになってたな、さては。

さてさて、この人からどんな情報が貰えるか、チェックしなければいけませんねえ。

……決してエッチなことか考えてないですからね! 本当にですよ! ……誰に対して言い訳してるんだ私。あの人にかな? てかこの会話頭の中で前もしたな。

「えつと……まずは慧音さんから話を聞いたのは分かって貰えますか?」

「ああ、さつきも言ってたしね。というかその時点で信用してればよかったね」

「まあそれはいいとして……永遠亭ってどうやって行けばいいんですか?」

「別に教えてもいいけど……どうして永遠亭なんかに？ アンタは見たところ怪我とかしてなさそうだけど」

「あ、実験に使われるらしいです」

「……実験？ そりやまたなんとも。」

ええ、本当になんともですよ。ごめんなさいこう言うしかないんです信じてくださいマジで。

「まあ、分かったよ。こっちだ着いて来な」

「はっはい！」

そうしてなんとか永遠亭に着きましたとき。

ちゃんとお礼に、お金は払いましたよ!? まあ拒否されかけましたけど……

## 聞きたくなかった

「ええ……貴女、また来たの？」

「はい。……もしかして今なんかやばいんですか？」

「ヤバいどころじゃないわよ、逃げるなら今のうちよ」

入って早々に、鈴仙・優曇華院・イナバさんにとんでもない忠告を受けました。え、何逃げるなら今のうちって。

怖すぎて小悪魔さんになったわね。まあ冗談ですけど。

「ちっ、ちなみにですがどんな感じでやばいんです？」

「えつとね、師匠が釜で何かを茹でてたわよ」

「魔女かよ?! 古風すぎてビックリだわ?!」

「いや、流石に冗談よ。アツサ、貴女いつからそんな感じのキャラになったのよ……前会った時はもつとお淑やかというか、殆ど喋らなかつたっていうか……」

「最初に褒めて後で落とすのやめて?!」

鈴仙さんも随分と酷いこと言いますね。貴女もそんなキャラじゃ無かつた……いや、最初っからあのお師匠さんに振り回されてるから合ってるか。

それにしても本当になんで私なんかを呼んだんだらうか……

「とりあえず、帰る？」

「帰りませんよ。その、永琳さんに呼ばれたんですし……」

「ああ……ご愁傷さま」

「ありがとうございます……？」

なんて小言を挟んで私は廊下を歩いていると、不意に腕が伸びてきて、引つ張られた。「わつととッ！　なにするん……で……すか？」

「あら、ゴメンなさいね。永琳のところに行く前に忠告をと思つてね」

その引つ張られた先には黒く、とても長い髪で顔がとてもよく整っている人がいた。声もとても愛らしく、聞いてて心地の良いものだ。

「あ、あの……忠告つて？」

「あら、ごめんなさい。貴女、少し私に見惚れていたから時間をあげようかなつて」

「み、見惚れてなんて……」

「いた。でしよう？」

少し意地の悪い顔をするがその顔さえ美しい、愛らしい。まるで、昔の物語のかぐや姫のよう……ん？

「違和感が付いたかしら？　そう、私こそかぐや姫こと、蓬莱山輝夜よ！」

「あ、ああ、貴女が……」

「なになに、なにか噂されてるの？ 私？」

「ええ、聞きましたよ。とんだニート姫がいると」

「グボア!？」

「まさかそんな訳ないとは思っていましたが本当にニート部屋とかしてるとは……」

そう、この人のお部屋……本当のニートの部屋のようになっており、ゲームがそこらかしこにあるわ、なんかゴミが散らかっているわでとんでもない。

こんな人から忠告を受けるだなんて、それこそウケるわね。

「まあ、いいわ。とりあえず忠告よ」(グスン)

「は、はあ……」

「その壺！ 絶対に今の永琳から機嫌を損なわないこと！

その式！ 危ないと感じたらすぐ逃げること！

その参！ は無いわ！

「適当だこの姫!？」

思っていた以上に適当な忠告に普通になり始めた私。え、大丈夫？ 機嫌を損なう行為として、逃げるって入ると思うんだけど……？

「まあ大丈夫よ」



「え?」

「凄い。この姫、普通にハグしてきた。ちよつ、この姫ニートなはずなのにめっちゃいい匂いする! ちよつ、ドキドキするからやめて?!

「いざとなつたら、私にイナバ達、それに鈴仙もいるから」

「わ、分かりました」

「あ、今いい匂いとか思ってたでしょ?」

「チツ、だからニート姫言われるんだよ」

「お口が悪い?」

そんなこんなで部屋を出て、また長い廊下を歩いていると、なんともいえない葉の匂いがしてきた。恐らく、そこに永琳さんがいる。

「……とても恐ろしいですが、行くしかないですね」

「誰が恐ろしいですって?」

「ピギヤアアア!!! お化け! 妖怪! お年の召したお姉様!」

「それどういふことよ……。途中まで分かるけどなんで最後がお年の召したお姉様なのよ」

後ろから永琳さんに話しかけられた私はついついビククリしてしまい、よく分からないうことを口走ったようだ。

……確かになんだお年の召したお姉様って？ レミリアお姉様かフランお姉様が怒りそうなワードだなあ……

「と、来たわね。愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット」

「ええ、来ましたよ。八意永琳さん」

「用事は二つ。まず一つ目からね」

まさに緊張の瞬間。何を聞かれるのか、何をされるのか全くもってわからない状況。

まして、先程鈴仙さんには帰った方がいいと言われ、ニート姫には忠告という名のただの注意事項を言われ……うん、とりあえず怖いって話にしておこう。

とりあえず、この間、闇乗式一護さんに危険と言わしめたほどの危険人物となった永琳さん。……機嫌取りに行った方がいいかなこれ。

「一つ目は……貴女、闇乗式一護という人間に会いましたね？」

「は、はい」

「どうだったかしら、あの完全な人間の有り様は」

あ、有り様？ そんなこと聞かれたってあの人掴めないっていうかおバカな師匠って感じだったんですか?! どう説明しろと？ 困るんですよそういうの！

「まあ、まさに闇乗式の名に恥じない、完全な人間かと」

「そう……。じゃあ次で最後ね。貴女……」

その後には発せられた言葉には驚きしかなかった。何故ならそれは……

「貴女、あの完全な人間と同じ立場になりたいかしら？」

殆ど、神になりたいかと問われたも同然だったのだから。

## 災害をもたらす薬

「そ、それってどういう……」

「そのままの意味よ、貴女を妖怪でも神でも人でもなくす。完全に洗礼された《人》にするの」

あまりにもバカげたことを言う永琳さん。正直、何を言ってるかも分からない……がこれは逃げた方がいいに決まってる。でも、身体は決して動かなかった。強くなりたいたいと切実に思っていた私にとって、その話が本当なら。すなわちそれは美味しい話だ。

逃げなければならぬ、けど強くもなりたいた。まるで自分が二人いるかのごとく、頭の中ではそのハッキリとしたふたつの意思がぶつかり合っている。

「身体が震えているけど、そんなに嬉しいことなの？」

「ち、ちが……そうじゃないんです。怖いんですよ、こんないきなり——」

「まあそうよね……」

「じゃあこの薬を作れた経緯でも話そうかしら」

聞かされた話はとても信じ難いことであつた。

私の話から神をも超えた人の存在を知り、自分がならなくてもいいからとりあえずな

れる薬を作ろうと思っただけ。これだけでも十分にイカれているというか、なんとも言えない気持ちになるが、それだけではない。

タナトスが永琳さんに力を貸したらしい。最早、タナトスがしたいことが全くもって理解し難いものになるが、協力したらしい。

それにより、永琳さんの能力である、ありとあらゆる薬を作る程度の能力が更に強くなり、素材が無くとも自分の考えた薬が作れるようになったらしい。

そうして、作るにも材料がなかった《人》になる為の薬が出来たというわけらしい。こんな馬鹿げてるよ（某馬鹿げてるよおじさん）。え、何？ 強くなりたから作るとかならギリギリ分かりますけど、とりあえず作りたくなつたから作ってみたとか意味分かんないんですけど。

アレですか？ 神から神よりも上の存在を作ってみた！（某サボテン）的なアレですか？ 訳が分からないよ（某魔法少女）

「なにか悩んでいるように見えるけど、そんなに《人》になりたくないの？」  
「それも違うんですよ。ただ……」

「ただ？ 何？」

「はつきり言いますよ？」

「ええ、構わないわ」

「そんなの馬鹿げてるよ」

「……はっ」

それ以降、私の心の中の思いを思いつきりぶつけた。これで何とか馬鹿げてることを以降しなくなるのなら安いものだし、とりあえず話さなきや正直爆発でもしそうだったからそういう意味でもお釣りが来る。

「そう……そうね。これはいくらなんでも馬鹿げてたわね」

「ですよね？　そうですね?!　やっと分かってくれましたか……」

その後、約二十時間の口論の末、なんとか理解を得られた。

「まあでも作っちゃったものは作っちゃったんですもの……折角だから、飲んでちよう  
だい」

「いや、ですから……」

「大丈夫よ。自分の好きなタイミングでなれるだけだから」

「な、なら……」（即落ちニコマ）

正直、結構苦かった。でも特にこれといって力が溢れてくるとかそういうのを感じない。

こういうのって通常状態でも力を感じるのでは？　と思っただが、某七つの星球の物語の中のアルティメット化を思い出す。

そういえばアレって潜在能力以上を出せるんでしたね。なーんて軽く考えていた。

「じゃあとりあえず、一回なってみない？」

「そうですね。じゃあ失礼して……」

そう、それこそが二つ目の間違い。

「な……?!　力が溢れてくるどころじゃない?!　は、早く止めないと!」

「あら、でもそれじゃ効力が分からないわ。ほら、もっと集中して?」

ああ、そう耳元で囁かれるとおく。じゃない!　本当に早く止めないと!　でもなんだが意識が少しずつ無くなってきてるようない?

「《人》になろうよ」

な、なんだ今の声?!　誰だ!　誰だ!　誰だあゝ!?　（某アニメ）

「そんなことはいいいからさ、《人》になろうよ」

そ、そんな訳にはいかないんですよ！　今は《人》になる気は……

「でも、力が欲しいんですけどしょ？」

そ、それはそうですね。ですがこんな方法じゃ……インチキですよ！　ズルいにも程があります！

「でも、相手もインチキ以上よ？　ならばインチキに縋るしかないんじゃないの？」

相手がインチキ以上？　あなた一体誰を敵と見て――

「まだ分からない？　私をある程度知ってるものかと思っただけ……どうやら私の見た目とかは知らなかったのね」

まだ分からない……？　まさか、あなたは！

「あら、ようやく分かったのかしら？　でももう遅いわよ。貴女の身体は乗っ取ったも同然。無理やり身体を《人》にしてやるわ。あの憎き闇乗式一護と同じ《人》にね！」

やはり……：タナトス！　ここで殺して……

「無駄よ？　あくまでも貴女の心の中にいるだけ。本体がないなら出来ないわ。残念だったわね？」

クソツ!!　こうしてる間にもドンドンと意識が……

「じゃあね〜征服された、征服されない吸血鬼さん？」

そのタナトスの言葉を最後に、私の意識は完全に無くなってしまった。



## 永琳 side

「ふう、これでいいの？」

「ええ、良いわよオ？　これであの吸血鬼ちゃんもおしまいね」

まるで子供がイタズラに成功したかのような笑みを浮かべるタナトス様。これで私の能力を完全に引き出ししてくれるのなら別になんてことは無い。

「で、約束の件ですが……」

「もうとつくにやってるわ。それじゃあねえ」

「ちよつ……はあ。本当に子供みたいね」

そうやって私がぼやくと、またどこからが現れて「何か言った？」と聞いてくる。「いえ、なんでも」と言うと、「そう」と言つてまた消えていった。

「これから、幻想郷はどうなってしまうことやら……やれやれ、大変ね」

どこか、他人事のようにそんな言葉がスラスラと出てくる。とりあえず、あの完全な人間はしばらくは来ないはずだ。もう、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットを止め

られるものはない。

「まあ、スカーレットの名も使われなくなるのかしらね？」  
なんて言いながら、私はその場を後にした。

## 来てしまった最強

フランク side

「……ねえ、お姉様」

「分かってるわ。明らかにアツサの様子がおかしい気がするわ」

ちよつと前からなんとなく感じられていたアツサの様子がおかしいことに気が付いた私とお姉様。ちなみになんでアツサの様子が分かるのかは、姉妹の絆つてことにしてね。

「やはり、行った方が……」

「いや、でも何かおかしいわ。何かアツサの師匠に似た感じがするわ」

似た感じがする……？　もしかしてあの闇乗式とかいうやつと同じ、神を超えた人間になったというの？

「分からないわ、でも私も行った方がいいかもしれない……けど、覚悟しなさい。最悪――

――

「アツサを殺すレベルまで考えた方がいい……ってことね？」

「そういうことよ。わかってるならいいわ――」

なかなか上から目線ね……相変わらずって感じかしらね。まあいいわ、アッサを助けるためなら命にかけてもって感じね。

ちよつと語彙力がないのはアッサと違って本をあまり読んでないからって言うっておくわ。

まあなんでこんな感じで頭の中でも話してる風かと言ったら……

「どうせいるものね、闇乗式一護」

「そんなに憎そうに名前を呼ばないでよ」

「そのいつも浮ついた顔の上に、アッサの師匠とまで来たわ。イラつくのも当然よ」

正直、闇乗式一護はムカつくやつだとしか思っていない。けれど……今だけは、信用することにする。悔しいけれど、アッサのことを知る頼りはコイツしかない。

「ごめんなさいね、うちの妹が」

「いいや、慣れてるからね。君も、あのフランドールのように、憎く思ってるんだろ？」  
ハッキリ言えば、闇乗弑一護という人物は信用できないと思っていた。しかし、いざという時は頼りになる。今はそう思っている。

更に言うなら、私は闇乗弑一護のことを憎くは思っていない。正直に言うならありがたいくらいだ。師匠になってくれて、それにアツサを強くしてくれた。感謝しかない……が、信用は普段してない。

「ふむふむ、憎くは思っていないのか。まあいつか取り敢えず行こうか、アツサくんの所へ」

そういつて、私達はアツサがいるであろう永遠亭に行くのであった。

「さてさてサーティワン」

「なによそれ意味分かんないんだけど？」

「ごめんごめん僕もまさかこんな言葉を発するとは思ってなかった」

「それはそれで困るわよ……」

今は迷いの竹林というところの前にいる。というのも、レミリア君とフラン君がいうにはこの中に永遠亭があるらしい。これ迷いの竹林焼き払えば良くない？

「貴方、今明らかに焼き払おうとしてないかしら？」

「そんな震えた声出さないでもいいじゃん？」

「そりゃ出すわよ?! 焼き払おうとか考えたことないし、誰もやらないし!」

あ、やらないんだ。力試しにやるとか有り得そうなものだけ……? まあいいか、やらないなら今僕がやっちゃってもいいよね〜?

「危ない考えはよした方がいいですよ、闇乗式さん」

「その声は……さとり君だね？」

「当たり前です、というか焼き払おうなどと考えるとは……やはり物騒ですね貴方は」

物騒とは失礼な……とは思ったが、言葉にするとなんとも言えないというか、気まずくなりそうというか。

なんでみんな空気なんてものを……クツ、訳が分からなすぎて右手が疼くツ！ 今す

ぐ竹林を焼き払いたい！ この右手に宿りし暗黒の炎が、竹林を焼き払いたいと思つて  
いる！

「とりあえず、ブツソウトハシツレイナ」

「なんで棒読みなんですか……全く、貴方も貴方でほっとけない人ですね。まあ、アツサ  
さんには敵いませんが」

「なんだかんだ、君はアツサ君が大好きなんだねえ……」

「ま、まあそうですね、好きですよ／＼」

あーらあらあら、顔を真っ赤にしちやつて。これみたらアツサ君、一発で治るじやな  
いかな？ まあ、問題が見ても響くかって話だね。困つたもんだ、僕も召喚した代償は  
高くつくよ？

「本当は付かないんですよね？」

「あ、バレた？」

とりあえず我々はアツサ君の様子を確認すべく、アマゾンの、いや、迷いの竹林の奥  
地へと向かつた……

「いやあ……まさか、奥地に行かなくとも、着くとはね！」

「奥地って、ただだけ深く行こうとしてるんですか?!」

「そんだけ」

「ただだけえ〜!!」

「いやあ……さとり君もアツサ君に訓練されてるなあ……この調子なら芸人になれるかもしれない。」

まあ、今のネタはとあるおかまな芸人のネタなんだけどね〜。

「それにしても困ったものだね……まさか、アツサ君本人が出迎えてくれるなんてね」

「フヨウナモノハ……スベテ……ケス！」

「普段以上に殺意マシマシだけど……なんでそこまで棒読みなんだろう？」

「多分……純化してるのかもしれないね」

これで完全に《人》になっていたら困りものだったけど、どうやらそこまでは神の地位を使つても無理だったみたいだね、タナトス。

まあでもここまで妖怪を消さずに限りなく《人》に近付けさせられるとは、あつぱれ



としか言いようがないというか。

でも、この感じ……危ないね。

「純化ってなによ?」

「純化……んー簡単に言えば、単純な力が強くなるというか、なんというか?」

「よく分かってないの?!」

「いや、分かっているんだけどね……簡単に説明するのが難しいというか」

純化ってなんでここまで言葉にしづらんだろうなあ……困ったなあ。全く、あの娘にも困りものだねえ。

とりあえず、この状況をどうすればいいのかだよね。

「で、治す方法はあるのかしら?」

「あるにはある、けど絶対戦っちゃいけないよ。多分……ね?」

## 壊れた後

多分って言ったのはちよつと誤解を生みそうだなあとか思ってたけどさあ……。

「オ、オネエサマたち……テキジヤナイノニナンデ？」

「だって、スカーレット家にはこんな家訓があつてね……それは敵かどうか怪しいヤツは、一発」

「ぶん殴る！」

いくらなんでも妹をぶん殴るとか色々しようとしてるのは見逃せるわけがないと。私はそう言いたい。けど皆さん、無理なものは無理という言葉をご存知でしょうか？

流石に姉妹喧嘩にあーだこーだ言う気はしないねうん。じゃあ放っておこうじゃないか。

「チョツ、ホントウニオネエサマたちヤメテ。グエ……」

「あーもー、アツサ吐くなんてどんなことされたの？ 腹パンされた？ それとも吐くほど嫌なことがあつた？」

「ほら言いなさい！ それとも私達に隠すつもりなの!？」

思いつきりポコオ！ とか、グチャア！ とか鳴ってそんな勢いのグーパンを腹に叩



どこことなくレミリア君の顔に影が見えたような気がした。しかし、すぐに頭を振って顔をパンパンと二回叩いた。

「そう信じたいたい……ではなく信じてあげなきやね。私は長女ですもの」

「お姉様がそう言うなら私もしつかりしないとね！　なんせ、アツサのお姉ちゃんなんだしー！」

「私も、妻としてアツサさんを支えてるんです。私もしつかり気を持たなければ……」

……なんかいい話風になってるのん。え、アツサ君どんだけ影響与えられるの？　おじさんビックリ。まあおじさんって言われる年齢超えてるけども。

とりあえず、そんなことよりもこの永遠亭の中にアツサ君を探しに行かないとね。

そう思つてはて何時間が経つたのか、分からずじまいだけど、そんなに時間は経つて

ない……気がする。

気がするだけ、あんまり意味は無い。けど、まあなんとかなる……気がする。うん、まあいいでしょ。

「割とあつさり見つけられたのよ？ アッサだけに」

「流石に寒いよ、レミリア君」

「妹をネタにするとかサイテー」

「さつき、家訓がどうのこうの言ってたのはどこの誰かしら？」

「ウグツ！」

なんて話をさつきからずつとしている。ちなみに、本物のアツサ君は優しい笑顔をずつとうかべたままだ。正直気味が悪い、が今のうちに戻せる方法が試せると考えると楽で助かる……と言ったところだ。

「まさか、姉妹の会話で治らないとはね。さとり君の笑顔はどうだろうか？」

「え、えつと……？」

「ほらニコツてするんだよ！ あのアツサ君と同じようによオ！」

「ヒツ……や、やめてください……」

ニコツてさせるつもりが何故か泣いてしまった。うん、めつちやアツサ君怒ってるよね。こつちに攻撃来たよね、まあ避けたけど。一撃でその辺の上位の妖怪を殺せるレベ

ルの攻撃だから恐ろし言ったらありやしない。

「とりあえず、笑ってみてよ。多分それで何とかなるから」

「多分じゃ笑えませんよ?! ……ま、まあアツサさんが元に戻るなら」

そう言つてアツサ君に対してぎこちなく笑顔を向けるとアツサ君はいつものように鼻血を出しながら倒れた。仰げば尊死とはこのことか。

「……あつさりと逝つたわね」

「死んでないからね私! ハッ!? ちゃんと喋れた!? やつたぜ——」

「それ以上はいけない」(戒め)

女の子がそんな事言つちやダメだぞお(はーと)

「今めちやくちや寒気が……」

「気のせい気のせい。それじゃあアツサ君を戻す——」

「それが……自分じゃ戻れないんです」

まあそんな気はしていた(白目) なんにせよ、戻れないなら無理矢理戻すのが基本基本!  
本! きほおんきほん(某超次元サッカーアニメ)

「めつちや痛いからねゝ気を付けてくださいねゝ」

「そんな、痛いですからからねゝみたいな注射する前のノリみたいなのをやめてくださいよ?!」

ピンピンピンピン……チクツ(大嘘) まあ流石に冗談だけどき。ああゝ逝くッ

チーン　って流れじゃないから安心してね？　まあ死にかけてたんだらうけどね。

「生きててよかったー!!」

「死にかけてたどころじゃないと思うけどね」

「すっごいイヤミな顔してますね。殴ってもいいですか？」

うん、いつも通りのアツサ君だね。……多分（遠い目）

「あれ？　お姉様達、どうしたんです？」

「アツサ……貴女、翼とか諸々無くなってるわよ」

「~~ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ~~!!!」

とんでもない声を出しながら気絶していったアツサ君。どうやらこれは長い話になりそうだね……。

## 夾竹桃な代償

あのですね……

アツサ side

気が付いたら、紅魔館にいた。一体今まで何が……なんて言うのは冗談で。

まさか人間になったとは思えないけど、よく分からないことになるとはビックリ。あ、まさか彼岸花さんは……生きてた。よかったよかった……。

彼岸花さんが生きてるってことは今はまだ妖力があるってことかな？ となると容姿が変わって、力は変わってないのかな？ ……んーよく分からないなあ。

「やあやあ、生きていたんだね」

「死んだと思っただけですか」

「別に？ 君なら死なないと確信していたからね。だからそんな睨まないでくれよ」  
「そつちこそ、笑いながら言うことじゃないと思いますよ……闇乗式一護さん」

なんだかんだでこの人と話してるのは楽だ。案外ネタが通じることが多くて楽しいっていうのもあるのかなあ……。



とりあえず、確かめたいことがあるから動きたいんだけどなあ……なんでお姉様達が邪魔するのかなあ？

「あの……レミリアお姉様、フランお姉様。私、体を動かしたいのですが——」  
「ダメよ。まだその症状がどこから来ているか分からないのに安易に体を動かさせるわけにはいかないわ」

「そ、それに！ あれだけの力を一時的とはいえ出したんだから休まなきゃダメだよ！」  
「力……？ そういえば私はなんの力を出していたんです？」

「確かあの時感じたのは……」

「妖力と霊力、それに感じずらかったから恐らく神力も出てたと思うわ」

え？ 神力？ 出せてたんです？ え？ そこまで私力を秘めてたんですかね？

え？ すっごい怖いですけど?! やめてくださいよ、今更神になれましたとか、ちよつと本当に何言ってるか分からない。状態になる。

それに霊力かあ……純化していったって聞いたけど、それってつまり、純粋な私の力って人と神と妖怪のミックスってことですかね？

うーん、もしくは昔までは妖力しか使えなかったのが、あの人と関わって霊力を持つようになるって、そして闇乗式一護さんと関わったから神力が持つようになった……とか？ もしそうだとしたら、力の本質は繋がってことなんですかね？

「おおよそ当たりだよ。繋がりには必要。その上で深い関係にあることが重要なんだよね」

「要するに、繋がりじゃないですか?!」

「そうそう。まあ要するに……博麗霊夢は霊力が使えるかな。元々の種族の話もあるけどね」

「となると……闇乗式さん無敵?」

「あれ? 結構今更な話をするね。まあいいや、取り敢えずスカーレット姉妹」

「なに? 闇乗式一護」

「まずは体を動かさせてあげてよ。なにかないようにはするからさ」

闇乗式さんがレミリアお姉様と話している。どうやら交渉してくれているみたいで……うん。嬉しいけど、なんかやらせようとしてることがおかしいよね? なに、空中キリモミ回転三千回って……

やるべきは力の解放……あるいは力を使いこなす為の練習では……?

「まあそうなんだけどさ。またあの空間作るの面倒くさくて」(ボソツ)

「ボソツと言うことがそれですか……やれやれ」(ボソツ)

「そこ! 何ボソボソ喋ってるの!」

「アレ、霊夢。いつの間」

「なんか愛杉が暴走したって聞いたから聞いてもたつてもいられなくてね」

「そっか、ありがと——「それに!」?」

「不安……いや、異変を起こされたら困るからよ」

「相つ変わらず、嘘が下手だなあ霊夢は」

「魔理沙!!」

「よお、アツサ。私も暴走したこと聞いて、不安で仕方なくてな。それに、なんか嫌な予感もしてたから……な」

「嫌な予感?」

魔理沙が嫌な予感なんて、本人には悪いけど普段特に何も感じず生きていそうだから意外だなあつて。

「というか、嫌な予感ってなんぞ? 我そんななんか悪いことした? いや、したはしたけどさ、魔理沙が嫌な予感を感じるほどの嫌な予感って?」

「ああ、まあなんからしくないのは分かっているんだが……アツサが妖怪の範囲を超えるような何かになってまた幻想郷を壊すんじゃないかって思ったんだ」

「幻想郷壊す以外、殆ど当たっているのでは……?」

「え?! 師匠よりも基本スペック高いのにもっと高くなるのかよ?!」

あ、ああ。なんとというか……魔理沙らしいなあ。やっぱ、魔理沙らしいのはいい

ことだね（白目）

その人らしさがあるってのは良いことだと思う。と思うけど、霊夢はらしくあると、下手すれば退治されそうだから怖い……。

「ん？ 愛杉。何私見てブルブル震えてるのよ？ 退治したくなるじゃない」

「理由が酷い?! なんでそういった理由で退治したくなるんです?!」

「えー、何となくかしら?」

なんとなくて仲のいい妖怪を退治しようとする悪魔、博麗霊夢様。今日も幻想郷最強の巫女としてちゃんと生きていらっしやるんですね。（白目）

「とりあえずさ。アツサ君を精神と時の部屋のサムシング部屋に連れていきたいんだけどいいかな?」

「もはや隠す気ないですね?!」

「まあいいんじゃないですかね?」

さとりさんの許可も降りたし、別にいつか。

そんなことを思いながら一緒に闇乗式さんと精神と時の部屋のサムシング部屋に入ろうとした時、闇乗式さんの顔が曇っていたことを私は見逃さなかった。

## 一方的

「お前を殺す」

「ブデン！」

なんて茶番みたいな状態から入りましたが……この部屋に入って一言目がそれって物騒では？

「致し方なし、ていうか僕が間違ってたらしくてね」

「間違っていた？ 珍しいこともあるんですね」

何かと何かが似ていたとか？ それなら何となく分かるんですが……

「そうだね、似ている。というよりも似ていた……かな？」

「似ていた？ ていうか何と何が似ていたんですか？」

「サクツと言っちゃうと、君の【人】化と純化」

「……は？ 【人】と化してたんですか!？」

「まあ、そうだね。なんでかな？」

「こつちが聞きたいですよ?! え、なんで似ていたんですか？」

「えつとねくアハハく分かんないやく」

「首取りますよ?」

「笑顔で言われると怖いなあ」

曰く、この部屋に入った瞬間に「人」になつたらしく……え? ちよつと本気で何言つてるか分からない状態なんですけど。もしかしてアレですか? さつき人と関わつていたりしていたから云々の話で闇乗式さん「人」だからそれで私も「人」になつたつてことなんですかね?

……となると、強くなるのは楽になれるような? もしかして、あつさり最強になれるんですか! なるう系ですか! やったぜ!

「そういうことじゃないよ? また暴走して周り巻き込んで死ぬよ君」

「え? マジですか? またよく分からない滝行するんですか?」

「よく分からないかどうかは別としてさ。似たことはするよ、「人」としてやるべき事はやるからさ。任せてよ」

そんな訳で私の修行みたいなのが始まる……と思つていたら、目の前で思いつきり戦闘態勢に入っている闇乗式さんが。

……え? 戦うんですか? 私聞いてませんよ?

「取り敢えず、手合わせ願おうかアツサ君」

「マジでやるんですか? 話にならないと思うんですけど……」

「大丈夫大丈夫。話にはなるから、笑い話程度には。」  
「そういうことじゃねえよ?!」

そんなことを言っているうちに、闇乗式さんがすごい速さで私の目の前に立つと、いきなりエルボーをしかけてきた。

ギリギリでよけると、エルボーをしかけてこなかった方の腕を私のお腹にめり込ませていた。体からミシミシと良くない音が聞こえてきた。

「グエ……ゲホツゲホツ!」

「その具合なら僕がある程度本気を出しても死なないかな?　じゃあ行くよ?」

そう言つて闇乗式さんが取つた戦闘態勢はボクシングのデトロイトスタイルだ。簡単に言うとはじめ〇一〇で〇柴さんが使つていたと言えば大体分かるでしょうかね?

闇乗式さんの場合はどうやらオーソドックスらしく、左腕をだらんと下げて、右拳を顎の前まで持つてきています。

「いやあ、説明ご苦労さま。どうやら君は無形の位なんだね」

「楽なので、それに強者は常に余裕を持ちさないとレミリアお姉様から言われてましてね」

「どうやら、どちらが強者か分かつてないようだね」

闇乗式さんは左腕を振り子のように左右に動かしている。あれはタイミングを凶つ

ているのもあるが基本あんな風の間〇さんは動かしていた。

流石、別名死神の鎌。動いているのがみていて怖い。

刹那、闇乗式さんの左腕がそんな方向に動くのかといったレベルの動きをしながら迫ってくる。それを私は避けに避けまくる。かなりギリギリの交戦だけどこれは近付けばいける……ッ！

「甘いよ」

「え？ グハアッ！」

何が起こったか分からなかったが少しだけ時間が過ぎて分かった。

ほぼ無茶な事だが、フリッカーに飛燕を混ぜたらしい。フリッカーばかりに気を取られていたから、飛燕が混じっていることに気付かず、モロに右頬に食らってしまった。

けど、いくらなんでもパンチが重すぎでは？ まさかこれ、は〇めの〇歩のキヤラの強さ全部混ぜ混ぜしてるやーっ？

「当たりく。じゃあ次はなんの攻撃が当ててみてよ」

「いや、そういうゲームでは無いですよね？」

「あ、そうだった。じゃあ、えい☆」

「グエ……オロロロロ」

「普通に吐いたね。まあ、あの力で殴られたらねえ……」



「ゲホッ、いくらなんでもあの人達は人間ですし私には効かないのでは？」  
「そう？　じゃあこれをくらつても効かないって言える？」

闇乗式さんは腕を鞭のようにしならせる。それで叩かれた瞬間、あまりの痛さで泣きそうになった。

どうやらただ腕をしならせてるだけじゃないようです。恐らくは身体全体をしならせて、攻撃の瞬間だけ全身に力を込めているようなそんな感じ。

んーよく分からない。ていうかこの攻撃、誰かがやってましたね。鞭打ちみたいな感じでのなこと言ってたような気がする。

「そうだね、彼が一番気に入っているSSってやつオリジナルキャラクターの攻撃だね。そしてやつぱり効くじゃないかくそれで強くなったつもりかな？」

「む、それはなにかムカつきますね……。彼って誰なのかは後で聞くとして、すぐに攻撃しますよコノヤロー！」

私はそう言うのと、今のところ一番の攻撃力を持つスペルカードを宣言した。したはずだった。

「奇跡【？今までの全て？】」

そのスペルカードはありえないことばかりだった。魔理沙のマスタースパークが出てきたり、霊夢の無想転生が出てきたり、レミリアお姉様のスピア・ザ・グングニルや

フランお姉様のレーヴァテイン等、今まで出会ってきた全ての人のスペルカードが詰まっていた。

なぜ最初に奇跡がつくのだろうかとばかり思っていたが、それどころではない。闇乗式さんが全て食らっていたのだ。

「闇乗式さん!!!」

「痛た……流石、アツサ君と言ったところかな」

「闇乗式さん……良かったあ」

「おいおい、仮にも君が放ったんだろう？ なら倒せたことを喜ぶべきじゃない？」

「そ、それもそうですね……？ え、倒せてなくないですか？」

「いや？ 僕はそもそもちよつとでもダメージが僕に入ったら倒せた判定にしてるか  
ら」

「ちよつと何言ってるか分からない」

「あはは、それでいいんだよ。どうやらまだ完璧ではないんだね（ボソツ）」

「何か言いました？」

「いや？ なんでもないよ。ほら、後は羽根とか戻してあげないと」

そう言われてみれば羽根とか戻すのがそもそもの目的だったのを思い出す。

羽根がないと私じゃないみたいですし早く戻し方を教えてもらわないと。

「そうだった！ ど、どうやって戻せるんですかね？」

「君レベルになると簡単さ。自分の姿を想像すればいいよ」

「想像……分かりました。えーと、こう！」

いつも通りの姿になったと闇乗式さんに言われたので鏡を見せて欲しいと言ったらダメと言われた。何故だ、何故なんだ……別にいいじゃん普通の姿なんだから。

そういじけていたら、どうやら変なところがあると言われて、動かないでと言われたので動かないでいたら治ったと言われた。

治してくれたっぼかったのでありますがとうございませう言ったら笑顔を返された。そうして、またこの精神と時の部屋のサムシング部屋から出たのだった。

ええ……

「アツサ……それどういう冗談よ？」

「さ、流石に嘘だよね？」「人」になつたつて……嘘だよね？」

「あのですね、さつきから言つてますがお姉様方、本当なんです」

「さつきから私が「人」になつてしまったことをお姉様達に説明しているのだが、全くもつて聞いてもらえない。でも、それもそうか。フランお姉様に限つて言えば、嫌な奴と好きな奴が付き合つてました的な感覚ですよね。」

「いや、取り敢えずレミリアお姉様は納得しましょうよ……？ あ、よく見たら納得してる顔になつてる。レミリアお姉様もなんだかんだでわかり易いですよね。私は人のこと言えないみたいですけど……ま、まあ今後顔に出ないように練習すればなんとかなるはず！」

「アツサ、なんとかならないわよ。それすら思いつき顔に出てるわ」

「なんで私はこんなにも顔に出るんだ?!」

「正直、最近サードアイを使わずとも、アツサさんの心が読めるようになってきたのは嬉しいですけどね」

「照れながら可愛いこと言ってるさとりさん可愛いヤッター!!」

「か、可愛い……／＼」

「流石に可愛いわね。アツサに同意よ」

「フランお姉様すら落とした……?! さとりさん最強説あるなこれ。勝ったな、風呂入ってくる（フラグ）。

「ちよつとアツサ君。サラツとフラグ立てるのはどうかと思うよ?」

「何言ってるんですか?! さとりさんの可愛さですよ??? 勝てる奴いないでしょ!!」

「私を忘れてはいないかい?」

「あ、忘れてましたア……あ!? 忘れてた?! 勝てる人がいる。いや、妖怪がいる! こいしさんじゃん!」

「いえーい、ピースピース!」

「そういえばいたなあ?! 最近出てこないからびっくりしたア……あれ? 本当に最近居なかったのかな? だつてこいしさんつて」

「うん。ずっと一緒にいたよ? 無意識の中に潜んで……ね?」

「うん、ヤンデレかな?」

「違うよ? あ、そうそう。アツサちゃんが「人」? つてやつになったのも私のせいだよ。私が無意識に封じてる力を無理矢理出させたからね」

「……はあ？」

「ま、まさかこんな娘がまだ幻想郷にいるとはね……」

「闇乗式さんも驚いてる場合じゃないですよ?! これこいしさんをなんとかしてやめさせるようにしないと?!」

「こんなの誰でも使いたくなってしまふ。いや、割と幻想郷にいる人たちってそんなに強さに固執してないような？ あーでも、魔理沙は少し固執してるところあるからやめて欲しいなあ……」

「というかいつの間にかそんな力を……？」

「えつとね〜いつだったかな〜？ 忘れちゃったあ〜あはは!!」

「忘れちゃいけないところ忘れちゃってるよこの人……」

「さて、タナトスのせいなのは凡そ察せたからいいとして」

「なんで察せるのかな〜この【人】は……」

「相変わらず察しの能力が人を超えていますね。まあそりゃ【人】だからね、しようがないね。」

「まあともかく、タナトスのせいだとしていつの間にかやったんだそんなこと……無意識を司るとかになるのかな？ だってやってること、ドラ○○ボール○の老○○神と同じだよ？ 潜在能力以上を引き出してるとよ？ おかしいよこの姉妹（誰が言ってるんだ）」

「まあ、どうすればいいっていうのは簡単でしょ?」

「私が危ない人を無意識に感じられれば問題はなし!」

「それもそうですけど……やっぱり不安ですよ。知らない男の人に近寄ってちよつとい事してあげるって言って潜在能力以上を引き出しそうで怖いですよ」

「すつごい早口で言っただけでもしかして別の想像しちゃってたり?」

「それは無いので安心してください、こいしさん」

いや、疑いの目で言われても本当に何も無いから。いや、本当は寺子屋の男の子を一人ずつ誘い出して、一人一人襲ってそうとか考えてないですし。どちらかといえば女の子誘ってそうとか考えてないですし。

「思いつきりエッチなこと考えてるじゃくん! もうエッチ」

「なんか、こいしさんにエッチって言われてもあんまりムラムラしないなあ?」

「ええく? なんかもそれ酷くなくい?」

「……エッチ／＼」

「ブフォアアア!!!」

「アツサ君が死んだ!」

「この人でなし!」

私がさとりさんのエッチに殺られてから数時間後はたった後、さとりさんから天誅を

食らいました。はい、めっちゃ痛かったです。

それと、どうやらいい加減戻らないと秘書が怒る可能性が高いとのことなので、闇乗式さんは帰ってしまいました。なんかちよつと残念というか、寂しいというか。

まだ私と闇乗式さんとさとりさんの三人で馬鹿やってたかったけど、そういう訳にもいかないとこのわけです。まあ、高々その辺の「一人」の言うことにや聞く訳にはいかないとこのことで……。というよりも、そもそも闇乗式さん達の血筋以外で「一人」が出来てしまったことについて話し合わなければならぬらしく……

まあ当然のごとく、私が呼び出される訳ではいい。ちなみにこいしさんですけど。何聞かれるんですかねえ……。やつぱりなつた経緯ですよね普通に考えて。後はなつてしまつてどう感じたかとか諸々聞かれるんだらうなあ……。ああ、胃痛が痛い。

まあでも、それも数日してからとの事なので……。なんとかなるっしょ！（盛大なフラグ）

ちなみにこの頭の中の会話というか独り言をさとりさんに聞かれてしまったのでオワタ方式でしたけどね初見さんも初見さん以外も！



## 変態共め

さてやってまいりました！ はい、そうです神達がいる世界にです。

闇乗式さんの案内であちこち回りましたがすごい神秘的……かと思いきや、案外人間の町と変わらないところが多かったですね。繁華街とかも結構どこかで見たことあるような、無いような感じでしたね。

闇乗式さん曰く、「人」が先に出来たんだから、神が人間に似るのは当然だと思う。だ  
そう。な。ん……よく分からない。

まあとりあえず……

「さて、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレット。なにゆえ「人」になったか、詳しく教えてもらおうではないか」

「おっと、あんまり威圧感を出してもらっては困るなあ。その辺によくいる神如きが、「人」に逆らえるとも？」

「相変わらず、その高飛車な態度。何とかならんのかね？ 闇乗式一護様？」

「そんなこと言われてもねえ？ 僕だって、好きでやってる訳じゃないんだからさ」

この重い空気を何とかしてください。いや、本当、心臓に悪い。偉い感じの神様と、闇

乗式さんがずっとあんな感じのやり取りをしているから胃痛ガガガ……

それに話そうにも、闇乗式さんが割って入ってくるから話せない。

無理に下手に出るな……ことなんだろうけど……私自身今まで沢山のひとかに下手に出てたから、つい癖で下手に出てしまうんじゃないか？

というか闇乗式さん。普通下手に出るのでは？ あ、「人」だからダメと……そういう部分で舐められたらいけない。なるほどとはなりますけど、私つてこの神様達の所にいるわけじゃないんですから大丈夫では？

「君はわかっただけじゃないね!? 舐められたらおしまいなの人付き合いってもんは!」

「この場合、神付き合いでは?」

「細かいことはいいの!」

「どうやら愉快な「人」のようだ。皆、歓迎してやりなさい。とことんな」

一神がそう言ってニヤリと笑うと、その場にいた全ての神が、一斉に私に襲いかかってきた。やだ、この神達ロリコン?! などと言っている暇などなく……

「よいしょつと……危ないところだったねアツサ君」

闇乗式さんに助けられていた。なんだその周囲に展開されているバリアー?! 私にもできるかな?

「出来ると思うけど……今すぐには無理だと思おうよ?」

「とりあえず今は逃げるが吉ってやつだね！」

「今はじめて喋りましたね、こいしさん」

「いやあ、喋る暇なかったからね！」

とりあえず、こいしさんが元気そうではよかった。じゃあ早速……どこに逃げればいいんだ私達？

「とりあえず、『人』に認められた者しか入れないところに行こうか」

「それ、私はともかく。こいしさんは……」

「無論入れるよ。というか、君達古明地姉妹とスカーレット姉妹は入れるようにしてるからね」

「随分と信用されてるな私達〜！」

「まあ、アツサ君の姉妹とアツサ君の嫁とその姑みたいな人達だからね」

「気のせいなら、姑の意味が……」

「そういうの後でいいから」

真顔で言われても困るだけなんですけど闇乗式さんエ……まあ、とりあえずは助かったってことかな（ふんぞり返り）

「多分、また神達が君を狙って追ってくるかもね」

「もうあの変態地獄には行きたくないです」

「うわ、泣いてる。そこまでだったか……」

「えつと……アツサちゃん、大丈夫だよ！ 私がついてるから！」

「おお、こいしさんが女神だあ……」

ついつい怖くて思いつきり泣きそうになっていたら、こいしさんが女神な発言をしてくれたおかげで、私は若干泣き止んだ。ああ、ここにさとりさんもいればなあ……。

「そんなこともあるかと思つてさとりくんにはここに来てもらつてるよ」

「おお、闇乗弑さんが神様に思える……」

「でもさっきの神がどういう存在か、ちゃんと説明しないといけなくなつたね……」

闇乗弑さんから詳しい話を聞いたが、私にはさっぱりだったので、何となく理解できるところをまとめると、

神は元々「人」によって作られた。だから、神は最も「人」に近く、最も遠い存在である。

神は「人」によって作られ、その後神によって人間が作られたので、人間は神になり得る存在である。

神は「人」に最も遠いので、「人」の何かを摂取することにより、「人」になれる可能性が微レ存。

人間から、神になった場合……つまり、現人神などはより、「人」になりやすい。

ぐらいですかね……？ 正直、分かっているつもりであって、ここも完璧に理解しているかと言ったら、理解出来てない。でも、さとりさんやこいしさんは理解出来ているよ。うで、それはそれで頭を悩ませている。

「えつと……つまり、人から神になった者が〔人〕になりやすいのは、マイナスにマイナスを掛けると、プラスになるようなものってことでいいんですかね、闇乗式さん？」

「まあ、そんなとこだね。いやあなんか難しい話で申し訳ないね……」

「いえいえ、大変興味深い話でした。それにしても、アツサさんが〔人〕になったのって珍しいを超えてるんですね。レアケース中のレアケースってやつですか？」

「そうだね、なんでなれたかも不明……って訳じゃないけどさ。こいしくんの能力が未恐ろしいね」

「えへへ、どんなもんだい！ 私もやる時はやるんですよ！」

こいしさん可愛いヤッター！ っていうかワタシツテヨツポドメズラシインデスネ、さっぱり分からなかった。

てか、レアケース中のレアケースってどのくらいレアなんだろう？ あ、なんかお腹がすいてきた。ってそのレアじゃねえよ!?

「とりあえずは、ほとぼりが冷めるまでここに居なよ。その方が安全だし、君達を鍛えられる」

「え？ 鍛えられるって……？」

「うん！ これから思いつきりやるから、皆で仲良くかかってきてね？」  
「もうイヤー?!」

地獄の特訓が始まったとき。ちゃんちゃん

# クローバーの為 ブラツクコーヒー

あれから何時間も経ったけど一切のダメージも与えられてない。

聞いてみたらタナトス並みの防御力しか出てないとか。え？ めつちや硬いじゃん？ え？ こんなに硬いんですか神って……いや、現人神か確か。

「ここまで硬いとは……神って名ばかりではないんですね」

「まあね。本当なら「人」であるアツサ君には名の通りあっさりと殺してもらわなきゃ困るんだけどねえ……」

「なんでそんなに遠い目してるんですか闇乗式さん。私まだ成りたてですし力の使い方とか全部は教えてもらってないんですよ？」

全く、闇乗式さんは何を言ってるんだか。私何も教わってないのに力を解放出来るわけないでしょう……。

あれ、私って憐れっ子？ いやいや、そんなわけないでしょう。ただ力が解放できないだけで……んー漂う力を欲している子供感。コウレエは憐れですなぁ……？

「そこまで憐れとは思わないけど……まあ、力の解放の仕方を教えるよ。あの時は焦っ

ていたからね」

「焦る……ああ、そういえばいきなりなったんでしたね〔人〕に」

「そうそう、未だにこいし君の影響とは信じられないほどだけだね」

「えへへく私つてもしかしなくても強いのかな？」

「そうだね、とてつもなく強い。神が君の力を利用してしようとすらくらいにはね」

そういうと闇乗式さんは明後日の方角を見始めた。え、なんですか？まさかそこにある変態な神がいるってことですか？

「はい！ そうなんです！ あそこにねくえくとんでもない量の神がいるんです！ 恐らくこの空間を探り当てようとしているみたいですね！」（某ジャパ〇〇〇トたかた社長）  
「闇乗式さんってそんな喋り方するんだね、ちよつとドン引き……」

「え？ あ、今のはアツサ君の脳内の話的にそうした方がいかなって思っただけだよこいし君」

「こいしが引いてるなら私も引きますね、闇乗式さん」

「なんでそんなに姉妹仲がよろしいことまで?！」

「それ自体はいいことじゃないですか」

「そ、それもそうか……トホホ……」

なんか、闇乗式さんが哀れに感じてきた。でもあの社長の喋り方はなあ……なんとも



言えないんだよなあ。しかも声まで似せてきてたし。凄くなんとも言えない……。

ま、まあ私も悪いし……ここは私のせいにしてもらうしか……。

「ま、まあとりあえず私が悪いですしおすし。ここは私のせいってことに出来ないですかね……?」

「出来るけど、闇乗式さんのせいにしたいじゃん?」

「こいしが言うなら私もそれに賛成よ」

「こいしさんもさとりさんも酷い?! っていうかさとりさんはさつきから全く自分の意見を言っていない?!」

「グハア」

気が付いたら闇乗式さんが倒れていた。一体何があったのか分からなかった……。つて訳じゃないですよ流石に。こいしさんとさとりさんがトドメさしたんですよ見事に。あ、でもこれで闇乗式さんにダメージを与えることが出来た。やったね皆、修行が終わるよ!

「おいバカやめろ」

「知ってましたか」

「今のネタってよく分からないんですけど……」

「元ネタはね……ちよいと耳をお借りしたい」

「あ、はい」

そう言つて闇乗式さんはさとりに耳打ちを始めた。あ、あれの元ネタって確かに……

あ、やつぱり。あの人さとりに仕返しするためによりおつたな。さとりさん完全に赤面してらっしやる。

「ああああああああ……／＼／＼」

「なんでさとり君つてこんなにもこういつたネタに弱いんだろうね?」

「今まで地霊殿とか地下の管理の書類をずっと一人で捌いてたから、それで箱入り娘みたいなことになってたみたい。休憩時間とかもやってたの読書だし……」

「捌いていくう!」

しまった、最近(数百年前)に聞いたことのあるネタをついつい言つてしまった。なんなら元ネタ知らないからこまっちゃんぐ! いや、マジで皆何言つてんみたいな感じでごこつち見てきてる。

この場はついに静寂につつまれた……まあ私のせいですけどね?! (やけくそ)「確か、某c o o kしてる人のことらしいよ……?」

「闇乗式さん。それカバーになつてない」

「私はあくまでも普通の少女ですからね、アッサさん!」

「え、あ、そうですね。さとりさんは可愛い可愛い少女ですよ」

そんなことを言った瞬間に、さとりさんは再度赤面した。しかもさつきよりもっと赤く。さとりさん可愛い……さとりん可愛いよ！ もっと赤い可愛いお顔見せて!!

「は、恥ずかしいのでそれ以上はやめてください……／＼／＼」

「は？ 何この可愛さ。愛した」

「愛されましたあ……／＼」

「何この甘い空間、ブラックコーヒー淹れるか。君達も飲むかい、スカーレット姉妹？」

「え、あ、はい。そうですね、頂くわ。アッサとさとりがここまでラブラブだとは思わなかったわ……」

「これじゃあ私の入る隙間ないじゃん……あ、頂きます」

フランお姉様、間に入り込もうとしないで。(必死)

聞いたことないよ百合の間に挟まる女って。それただの百合百合百合じゃん。

レミリアお姉様？ この前言ったような気がするけどそれ忘れてたの？

「百合百合ってよく分からないけど、百合百合百合ってもつとよく分かんないよ？」

「恐らく、女の人が三人いることを指すと思うよ、フラン」

「なるほど！ 流石はお姉様！」

「ふふ、納得してもらったなら良かったわよフラン」

レミリアお姉様もフランお姉様も百合百合しないで……しかも、二人してブラック  
コーヒー飲みながらじゃん。

闇乗式さん、ビツクリ仰天！ って感じで目を今にも飛び出しそうな勢いだよ？

カートウ○○○○トワークもビツクリな程だよ？

「もうヤダ……」

「今回は闇乗式さんが、疲れる番だったか……」

いくらなんでも……

「ホンツと闇乗式さんが咳払いをすると、

「とりあえず、その愛情こそ君達のチカラを開放するために必要なことなんだよ」

「絶対後付けですよね？　なんなら闇乗式さん、愛情持つてなにか育てたりしました？」

「いや？　ないけど」

「ほらあ!!」

「なんでそんなに適当なんですかね……アツサ困っちゃう、こまつちんぐ○○○先生になっちゃう。」

「まーた変なこと考えてるよ、アツサ君は……」

「まあ、アツサが変なこと考えてるのはいつもの事よね!」

「お姉様、いつもの事だとそれはそれで困る」

「確かに、アツサさんが変なことを考えるのは日常茶飯事というか……いつ、普通のことを考えているのかと言うか……」

「さとりさん酷い?!　流石にいつもじゃなくてもそこまで変なこと考えてないですよ?!」

じゃあ今は？ と聞かれると……ま、アレですね。さとりさんのこととか、なんで乗式さんが「人」であってその力を解放出来るか、ですね。

「嘘だね」ですね

「本当は何考えてるの〜？」

「私の鮑のことを考えてました」

「貝合わせしたいとか考えてたね？ どぎつい無しって前も言ったじゃん」

バレテラ（白目） いや、そこまでどぎつくないでしょ?! 普通ですよね!! このくらい……いや、普通じゃない？ あれ、どっちだ？ 私が無駄に本で下の話とか調べすぎましたかねこれ。いやでも、そこまで調べてないしなあ……やること無かったからやることやってただけですしおすし。いや、アウトだわ。私が悪いわ。

「認めたわね」

「認めたね」

「認めましたか……」

「認めちゃったか……」

「認めるのかー」

「皆して酷いな?!」

扱いが酷いのは私慣れないんですよ……シクシク……

「はい、じゃあ力の引き出し方も分かったところで修行再開だよ」  
「うへえ……本当にやるんです？」

「やるって言ったからには……殺る気でいきましよう？ アツサさん」

「それもそうですね、さとりさん。じゃあ本気でいこうかな」（ポキッポキッ）

うわあ、嫌な予感がする。みたいな顔をしている闇乗式さんには悪いけど、その予感。当ててやりますよ。

「とか思ってたのになあ……」

「結局ダメージは与えられずじまいでしたね……」

「いや、君達結構すごいよ。危うく、元の防御力に戻そうと思ったくらいにはマズかった」

「その割にはピンピンしてるよね〜」

「まあ余裕だったし」

「どっちだよ?!」

発言が矛盾だらけになっていく闇乗式さんを見てみると、多分これ本当にマズかったんだなと思わされる。ダメージこそ与えられてないにしても私達は確実に成長している。そう考えると嬉しくなるものがある。

「とはいえ……タナトス並みの防御力と言っても相当あるんですね本当」

「何故か分からないけど、現人神って硬いんだよね。じゃあ今度は攻撃に耐えてみようか?」

「それもあるんかい?！」

その後、私達がサンドバック状態になるの言うまでもなかった。まだいたいけな少女達を痛めつけて楽しいかコノヤロー!!

「え? 一応言うとおもしろい」

「このド変態が!!」

タナトス side



「やれやれ、相変わらず修行修行……飽きないのかしらね？」

私はそう言いつつ、こいしちゃんに取り付けた言わばGPS的なものを通じて、修行ばかりやっている闇乗式共を見ている。

なんでGPSなのに映像が見れるかは教えないでおこうかしら？

「それにしてもこの調子じゃ、私を倒すのも相当時間かかりそうね？」

正直、このままだと退屈で仕方ない。もつと強くなつてもらわねばいじめようがない。まあ、強くなったとしても負ける気は毛頭ないが。

「このままじゃ時間がかかって仕方ないわね……そうだ！ この瞬間に出ていけば……」

楽しいことを想像するのは好きだ。なぜなら……って深い意味は無いわ。

……そう言えばなんですけど、なんでタナトスは力をつけさせた皆さんを放置してるんでしょかね？

なんかその系統で嫌な予感がするような？

「ああ、多分だけど僕達のことを見てるんじゃないかな？」

「見てる？」

「そう、恐らくGPS的なサムシングでね」

「変態じゃないですかヤダー！」

嫌な予感してたとはいえそんな変態な趣味があるとは。恐るべきタナトス、おのれタナトス。私のあんなことしてる時やそんなことしてる時を盗み見てたんですね！

「いや、そうじゃない。違うそうじゃない」

「じゃ、じゃあどういうことなんだよ！」

「恐らくだけど楽しむようにとつてあるんじゃないかな？ 多分……君達が強くなるのを望んでいるようにも思える」

「となると……それを上から叩き潰すのを楽しみにしているってことですか？」

「多分ね……趣味が悪いというか、なんというか」

「どちらにせよ、ならより強くなるしかないですね。それでこそ私の復讐がより強いも

のとなるんですよ！」

「……だといいけどね」

闇乗式さんは少し含みのある言い方をしていたが、その時の私はあまり気にしていなかった。別に今のまま強くなっていけばいずれは倒せると思っていたからだ。

だからこそだ。目の前の真実が信じられなかった。

「やっとなってきたわね、ガールズ。待ちくたびれたわよう？」

闇乗式さんの空間から出てきた時に、目の前にタナトスがいることに。

## 何故？

「貴女が……タナトスツ！」

「あら、貴女がアツサちゃん？ ……ふうん、まあまあね」

「タナトス、それ以上はやめておくんだね。僕がいるんだし」

そう言つて闇乗式さんは威嚇するがタナトスは全く怯む様子がない。私達が強くなったとはいえ、タナトス相手にはまだ届かない。通用しない……いや、うまく連携すればいけるか？

「皆さん、いきましよう……」

「アツサさん?! 本当にやる気ですか？」

「やるしかありませんよ、ここは相手に引いてもらうためにも」

「よし、やるしかないかあ！」

こいしさんやる気でよかつた……。これでこいしさんに反対されてたらちよつと立場無かつたですなはい。

お姉様達は……

「勿論やるわ、妹の言うことにはいつも賛成しているつもりよ」

「でもお姉様私がプリン食べる時はいつも嫌そうな顔するよね。あ、私も賛成だよアツサ」

「ちよつと、それは言わないでよ?!」

うん、大丈夫そうだ。今にも姉妹喧嘩が始まりそうなところを除けばだけど。私を省くとは何事ぞ！ 私も入れたもう！

「アツサは怪我するからダメ！」

「ヒエ……すいませんでした」

「フツ……」

ええい笑うな笑うな！ というかタナトスが離されつばなしじゃんか。まあ別にこの中に入ってこられても困るけど。

「……はあとりあえずお話は終わったのかしらね？ 行くわよ？」

まずはお姉様達の連携攻撃。目にも止まらぬ速さで板挟みにして、パンチをたくさんお見舞いしているが一切効いてる風には見えない。

「ウザつたらしいのよねえ。……ハッ！」

「キヤアア!!」

お姉様達はタナトスが貼ったバリアーに吹き飛ばされる。

その後、さとりさんとこいしさんの姉妹同時光弾も直撃はしたもののダメージは通つ

ていないように見える。

「ん、痒いわね。まだその程度ってなら【人】って大したことないのね？」

「まだです！」

続いて私も攻撃に参加する。勿論、ただ参加するだけではないが。

「鎌……ではなさそうね？ 何かしらソレ」

「薙刀鎌ですよ。知らないんです？ 貴女ほどなら知っているのでは？」

今の私は本気で殺る気だ。故に普段ならただの鎌の状態のこのアダマスの鎌も、変形させている。

ちなみに変形の仕方は仁〇2を参照してください。

今は中段の構え。即ち、刀のような状態になっています。その方がどんな攻撃にも柔軟に対応できますからね。

「ふうん、割と舐められてるのかしらね？ じゃあ行くわよ？」

【破傷風月】

「この位ならなんてことないですよ！ うりやりや！」

刀のような状態でも、回せば破傷風の菌とかなんとか知らないけど返せるはず……多分、きつと、maybe…

まあ、それやるならより畳んだ状態の下段の構えの……アレなんて言えばいいんだ？

ま、まあ刃を畳んで片手で持ちやすくした状態と言えば分かりやすい……？

ま、まあともかく。その状態でうりやりやりやりやつて感じで振り回すと銃弾とか跳ね返せるのでそっちの方が良かったかもしれない（今更）。

「あら、案外こちらに飛んでくるものね。まあいいわ、これはどう返すつもりかしら？」

【スーパーノヴァ】

「なんでそんなに変な技持つてるんですかヤダー!!」

パツと見あれです。某七つの竜の玉集める冒険の白のヤツが打ってくるでつかいやつですありがたいございました。

こんなん打ち返せるわけねえよなあ？ いや、やってやるぜ！ ただし……

「私自身が光線となることだアアア!!!」

「な、なにイイイイ!!」

【超新星爆発!!!】  
ただその場で考えた適当な技

そんな無茶をやつたらボロボロになるのは当たり前……では無いんですよ（某）  
私ならすぐに服を再生出来るんですよ！ これ実はパッチノートには書かれてないんですけど、出来るんですよ（より某）

とはいえ体力を使うんですけどね、初見さん。ヤバい……疲れた

「あら、これでおしまいみたいね」

「そんな訳ハーハー……無いじゃないですかハーハー……」

言葉では見栄を張っているが、身体は正直だった。身体は正直だなあ、グへへ。全くもって動かない。せいぜい動かせて口だけだ。私は口が達者な方な訳では無い。こんなちつぽけな見栄なんてすぐにバレるだろう。

「それじゃあ、これでおしまいね

【The・END】

目の前には膨大な量の神力を感じ取れる大きな大きな弾があった。

ああ、こんなところで死んでしまうのか。そんなことより大抵の強敵、大きな弾を发射するの流行ってるのかなあとか思いながら、この先の運命に身を委ねようとしたその瞬間だった。

「よつと」

「闇乗式さん?! 危な——」

「僕は【人】だよ? この程度、なんてこと……」

そう言うのと、闇乗式さんは片手でその大きすぎる弾を止めたどころか消し去った。

「無いんだよね。本当に」

「相変わらずバカげてる存在ね。じゃあ私は消えるわよ」

「見逃してあげるけど……これが最後だからね? タナトス」



「ふふ、そのうち後悔するわよ？」

「しないさ。だって……この子達が君を倒すからね」

私は目を今すぐ瞑りたい中で、まだ見ていなければと思って闇乗式さんの表情を見ていた。

その表情は……一点の曇りもない晴れやかな笑顔だった。

## 社畜さん

「……やつちやつたなあ」

闇乗式さんはとても惜しげに話を始める。

曰く、最強は最強でなければいけない。だからこそ努力は惜しまなかったと。

曰く、私たちが育てるのもその一環だったそう。そして、それは今のタイミングで遺憾無く発揮されてはいたとの事。

曰く、だから私達が負けてしまつて悔しいのもあるが、自分の力が及ばなかったことがもつと悔しいと。

曰く、最強でない自分は自分ではないと。

私はそんなことは思わなかつたし、負けたのはある程度仕方ない部分があると思つて  
いる。

けれどそれを言つてもなお、認めようとはしなかつた。

「闇乗式さん……言いたい事は分かりますが、それでは——」

「分かつている。でも思うんだ、あの見えない手を使うやつみたいなことを言うけど、怠惰だと。そう思うんだ」

「久々に聞きましたよそれ。でも、最強でしたよ？ さつきだつて私達を助けてくれた時、最強に見えましたし——」

「見えるだけじゃ意味が無いんだよッ!!」

それは、今まで強靱な心を持つていたと思つていたのにその瞬間だけは……ただの外見相応の男子の心に見えた。

まあ見えたとしても何か出来る訳では無いんですけどね、ハイ。でも、最強には違くないのは確かだし……

「そう言つてもらえるだけでも嬉しいかな、うん。じゃあ僕は寝るよ」

「闇乗式さんつて寝るんですね……なんか意外です」

「僕は寝るからね……？ まああの空間にはまだ居てて良いからね。じゃあ——」

「ちよつと！ まだ修練は終わつてないわよ！」

「ええ……君が言うとは思わなかつたよね。フランドール・スカーレット君」

「事実ですもの。それに貴方が言つたのじゃない！ 私達を強くするつて」

まさか闇乗式さんをどこか毛嫌いしていたフランお姉様から修練を求めるとは思つてなかつた。それは闇乗式さんも同じなようで、大層驚いていた顔をしていた。

まあ、フランお姉様つて修練とかやらない感じだから私的な驚きはそこにある……というか、話に乗れるんですねフランお姉様。今まで話を切るのは無意識でやつてるもの

かと思つてましたよ。

「アツサ君がいつも通り、失礼なことを考えてるのはいいとして」

「いいのでしょうか、それを無視して……」

「もう今更だからね。まさかフラン君に喝を入れられるとはね……驚いたものだよ、じゃあ僕もそれに応えてあげなきゃね」

そう言うと言乗式さんは先程のような容姿相応の心の弱さ等見せてないかのように振る舞い始めた。でも決して無理はしていない……と思う。私はそこまで分かつてないけどなんとなく無理はしてないと思う。

なら私ごとやかく言う必要なんてない筈だ。取り敢えず、また私達は面倒な修練をする必要があるのだから。

……私も大概人のこと言えないなあ。修練面倒だなあつて思う派閥だし。まあやる時はやりますけどね?!

「さてと、さっきの目で見えたと思うけど圧倒的に攻撃力、防御力。それに応用力が足りてないのがわかったと思う。だから今後は全てを織り込む形でいこうと思うんだけどいいかな？」

「ですが、全てを織り込むとはどうやって……？」

「簡単だよ。僕が攻撃を今後君達が攻撃している間に仕掛けるから、避けてね☆」

なんとも、無茶なことを言う。闇乗式さんの攻撃は私でも未だに見えないほどの速さだ。

それを避けるだなんて無茶にも程がある。特にお姉様達とさとりさん達姉妹には無茶を通り越していると思う。

「まあ最初は、皆に見えるようにゆっくり攻撃するから安心してね」

「そう言つてマツハで攻撃してくるんですね分かります」

「え？ 本当にして欲しいって？」

「言つてないですごめんなさい」（土下座）

困った時はDO☆GE☆Z☆A☆が一番つてそれ一番言われてるから。それにしてもよくここまで精神が大人びたなあ……いや、普段の行動は全くもって大人びてないけ

ど。

それでも少なくとも私なんかよりは全然大人びてる。まあだからあの人と重ねちゃう時があるんですけどね☆

「そういえば、アツサさんが言っているあの人って誰なんですか？」

「さとりさんには話してませんでしたっけ？ 確かあの人は……ごく普通の社畜さんでした」

「ごく普通の社畜さんって……社畜な時点でごく普通ではないと思うんですけど……」

「まあまあ、ここからですよお話は」

社畜さんは、元々私にはよく分からない企業で働いていた人なんです。

私を拾ったのも、あまりのブラックさで海に飛び込んで死のうとしていたところに私が流れてきて、それで拾ってもらったんです。

社畜さん曰く、なんとなくだったそうです。それから私は幼い頃を社畜さんと一緒に過ごしました。

社畜さんは、私を拾った後A I T U B Eという動画配信サービスで動画配信者になりまして、私の存在を世間そのサービスマス内に広めていって、遂には自分でアバターを作り、そのアバターで配信をするようになりました。

世間ではそれをV t u b e rと言うらしく。まあ、私が幼い頃の話なのであまり覚えてはいないんですが。

とは言えど、私のネタは大抵が社畜さんの受け売りです。むしろあの人がいなければ私は日本語を喋ることが出来なかったでしょう。ちなみに社畜さんはアバターで配信を始めたあたりから会社は辞めました。

もう配信で食べていけるようになったからですね。私もその頃には日本の文化にすっかり染ってまして……お姉様達が私のところに来た時にはもう既に私は腐女子……? つてやつになってましたね多分。

それにお姉様達が話す言葉を理解するのが大変でしたね。なんせ、産まれて三年もしたら海に流されたんですから。

え? 海に流されたら吸血鬼だから死ぬんじゃないかって? そこは流石に配慮したのか木の船で私を流したそうです。

なんだかんだで一番楽しかったのはあの頃かもしれないですね。まあでもさとりさんと過ごすのも楽しいですよ！

「って感じですかね？」

「社畜さんって結構な方だったのね」

「さとりさんが涙している!?!」

思っていたよりもイイハナシダナーしてたんですねこの話……。

まあとにかく、修練しますか……したくないけど。



## 修練好き

「お疲れ様。今日のところはこのあたりでいいと思うよ」

「……お、お疲れ様でした……」

「お疲れ様です……しんどいなあちくしよう」

「途中参加とはいえ……ここまでとんでもないことさせられるとはね」

「出来れば、一生こんなことしたくないぜ……」

「ん？ まだやるけど？」

「……「ええ?!」……」

「今日はやらないって言うてるでしょ。また明日ね」

そう言つて闇乗式さんはどこかへ消えていつてしまった。今回の修練は殺す気で来てるなあ……ちなみに途中から霊夢と魔理沙が呼び出されて強制参加させられていた。

霊夢はなんだかんだついていつていたけど、酷いのは魔理沙だ。もう見てられないくらいポロポロになつてゐる。とはいえある程度は手加減してもらつてゐるようで、こちらは血が出てゐる訳では無い。あくまでポロポロなのは服だけだ。

霊夢は幻想郷の中で最強でなければならぬ。でなければ幻想郷のパワーバランス

が壊れるから。それを考慮して、闇乗式さんが霊夢を呼んだのだろう。魔理沙は……多分そのついでかもしれない。

どんな形であれ、人が増えていくのはありがたいことだ。より、タナトス撃破までグツと近付いたような気がした。

「近付いたきがしても、まだまだ遠いのがタナトスなんだけどなあ……」

「強すぎて困っちゃいますよね」

「まあ、私達が力をつけていけばいはずれ倒せるのは確かだ！」

「とは言えど、いつまで向こうが力をつけなくていいでいてくれるかよねえ……」

「あの調子ですと……まあ相当なことがないと、やらないと思えますよ？」

「だといいんだけどねえ」

「あのお調子者感はどうあがいても拭えないものがありますよね」

魔理沙と霊夢とさとりさんの言う通りだ。言葉の節々にお調子者の感じがするタナトス。よく分からないけどあの調子なら確かにそうそう強くなるうなんて思わないだろう。

それにしても今日は疲れた。寝た方がいいよね……？　って寝る場所なんて見当たらないけど、どこにあるんですかね？

「そういえば闇乗式さんがどっか行っちゃいましたけど……寝る場所ってどこにあるん

ですかね?」

「ああ、それなら先程、闇乗式さんが「みんなの分のベッド用意しておいたからね」って言っていましたよ?」

「さとりさん……そま?」

「マジですよ」

「私お耳おばあちゃんだ……」

「いや、落ち込まなくても大丈夫だと思えますよ?! あの、戦闘中にそのようなことを喋っていたようになってだけなので!」

「さとりさん……」

S M T さとりさんマン天使

もうさとりさん無しだと私はやっていけませんねくオレは。取り敢えず、寝るとしますか。

「それでは皆さん。おやすみなスヤア」

「いや、アツサの奴寝るの早?!」

「愛杉だし仕方ないわよ」

「それもそうですね」

「アツサってここまで寝るの早かったつけ?」

「疲れてるんじゃないかしら? まああれ程体を動かせばね……」

その翌日。私は思いつきり介護される形になつていた。なぜ故?! おい、まだ私は年老いてないぞ! やめろ! やめてくれえええええええ!!

「いや、昨日あれほど動いてたものだからつい……」

「なんとなく……ね」

「ついついやつてしまつてすよね……」

なんでだああああ!! 私は何歳でもないし、まだまだピチピチの480歳やぞ!

……あれ? 480歳? ピチピチじゃない? いや、まだロリだから。自分で言うの

あれだけど、ロリだから。

……ん? もしやロリのせいで介護される形になつてる? それ最早育児では?

ん? 皆さん何に走つてらつしやるの? え、怖い怖い怖い。訳の分からない方向に話が飛んでいくの私一番怖いんですよ。

「だーかーらー! 昨日あれほど動いていたから、今日はまだ疲れが取れてないだろうなくつて思つてみんな色々やつてるんだよ!」

「ああ、そういう事でしたか。……別にそんな疲れてないわい!」

「あ、あれ? そうなの?」

「こいしさん見て可愛いって言えるくらい余裕かませます」

「思つてたよりは大丈夫そうだね!」

こいしさん自分のこと可愛いって思ってたのか……それはそれであざと可愛いのでOKです（鼻血）。

それにしても私今日も同じくらい動く気満々でしたけど……もしかして暫くはこんな毎日が続くのん？

「あ、言い忘れてたけど今日は休みだよ？」

「先に言いましたよ、闇乗式さん?!」

「報告が遅いのは相変わらずなのは困りますね……」

なんだかんだで、闇乗式さんの報告は日々遅い。困ったものではあるけれど、まあ危ない時とかは基本的に遅くないので万事OKですね。

「それにしても……今日休みとは一体何を考えてるんですかね、闇乗式さん？」

「いやあ、今まで修練ばかりやってたからさ。たまにはのんびりしてみるのもアリかなって思いました」

「なるほどなるほど。のんびりですか……」

「そうそうのんびり——」

「我々にそんな暇があると思いで?!」

のんびりしろって言われてのんびり出来るほど今の私達には時間が残っていない。恐らく、闇乗式さんはたまの休日がいい結果を残すと思つての行動。更には休むことで

ある程度私達の疲れをとってもらおうという魂胆なんだろうけど、生憎とそんな暇はない。

「あー……言うと思ったようん。じゃあ今日も今日とて、僕がタナトス並の攻撃力と防御力になるから頑張つてダメージを入れてみてね？」

「やってやらあ!!!」

結局私はなんだかんだで修練が好きなのかもしれない。

## 【人】についての設定

「今回はサクツと私、アツサが知っている【人】のことについて話していきたいと思いま  
す」

「アツサさんが知っていることだけでは足りないと思うので私、古明地さとりからも補  
足としていさせて頂きます」

「それでは、どうぞ！」

そもそもとして「人」というのは主に閻乘式一護含む、閻乘式家代々の神よりも上の存在のことを指す。

しかし、必ずしも閻乘式家の人間だけが、「人」と言われている訳では無い。過去に何例か人間が突然「人」になることがあった。しかし、神達はこれを良しとしなかった。自分達よりも上の存在がポンポンと生まれてしまつては、困る。もつと言うなら、自分たちの立場がないというものもある。

故に、神達は「人」の力を直接取り込むことで、「人」を「人」で無くした。簡単に言えば食べてしまったのだ。神達は「人」を。

無論許されることではない。それにより、神の一部が「人」に成りかけるという事案すら発生した。しかし、どうあがいても神は神にしかなれないのであった。

現人神という人間がいるのは何故だろうか？ 簡単だ、人は……人間は過去、「人」になることさえ出来ていたのだ。神になることなど容易い事だ。とはいえ、それはあくまでも繋がりがあつたからこそ人間は「人」にもなれたし、神にもなれた。

しかし、「人」である閻乘式家はよく人間と絡んだりしていたが、神はそうではなかった。神は人間と絡んだりしなかった。自分よりも弱い生物と関わりを持つとする神はそういかなかった。



繋がりは大抵だ。それも、自分の種族を簡単に変えてしまいうくらいに。それが酷いことを招くとは到底思っていなかった。

話を戻そう。「人」は神よりも強く、どの生物にも負けないほどの力を持つ。しかしそれは、修練をしたらの話である。それほどに、「人」は人間に近いのだ。可笑しいのは闇乗式家初代当主、闇乗式一成が異常すぎる存在だったのだ。

彼は誰からも恐れられた。故に、彼の代は大変だった。とはいえ、彼の息子である闇乗式一護が生まれていることを考えると、なんだかんだ恐れられてはいたものの、必ずしも皆が皆怖がつてばかりでは無いと思われる。ちなみに、闇乗式一成の相手は東風谷早苗というのだから少々驚きである。

話を戻すと、闇乗式一成は自分の強さに危険を感じ、自分以降の「人」を弱くすると

決めた、というかした。

その結果、人間が安易に「人」と関わらなくなっていくた。そもそも、弱くするため繋がりが必要ということも教えていった。

しかし、とある事件が起きた。闇乗式一成の妻である東風谷早苗が息子である、闇乗式一護に産まれた時殺されたのだ。あまりの強さゆえだ。闇乗式一成は思ってもみなかったが、東風谷早苗は予感していた。だからこそ、産んだ……らしい。それは闇乗式一成が東風谷早苗の日記を読んで知ったことらしい。

そして、当の闇乗式一護はあまりよく覚えてないらしい。何しろ、産まれたのは本当に昔のこと。宇宙がビックバンを起こす前の話だ。

昔の宇宙はとても小さかった。しかし、その代わりカオスにまみれていた。だから沢山の可能性があった。

今もそうだが、沢山の世界がある。それは平行世界的な意味ではあるが、昔は平行していなかった。同じ場所が同じところに、重なっていた。重複することも多々ある。

何故こうなっているのか誰にも分からなかった。だが、誰も疑問には思わなかった。せめて言うなら、ビックバン後の大量の平行世界が生まれたことの方が皆疑問に思っていた。

話を戻す。闇乗式一護は明らかに異常ではあった。しかし、闇乗式一成ほどではな

かった。なんだかんだで闇乗式一成よりは弱かった上に全くもって戦闘に向いていなかった。だからこそ、闇乗式一成は修練をさせ始めた。吸収はとも早かった。だから、闇乗式一成はまた「人」に規制をかけた。それは成長速度だ。

だからこそ、愛杉・アツサツスイノ・スカレットはあまり成長が出来ていない。でも、闇乗式一成は誰にもその事を話してはいない……筈だったが、闇乗式一護に聞かれていたようだ。

そうして、「人」になる人間は現れなくなった……筈だった。ここ最近になって、人間が「人」になったり、現人神になったりし始めたという話が上がり始めた。それは、タナトスという新たな現人神の能力のせいであった。

「人」はなんだかんだ、弱いところがある。それは繋がり消失だ。それが無ければ「人」はみな死んでしまう。故に、闇乗式家は繋がりを大切にしていた。しかし、他の

……繋がっているうちに【人】になっていた者たちは死んでしまった。

それにより、人間が【人】と関わる事が無くなってしまった。そうして、【人】はいなくなってしまう……所ではあったが、【人】同士で繋がりがあっていれば生きていける。それに気が付いた闇乗式家はもう人間と関わる事が無くなった。

そして、タナトスが現れた。そのタイミングで闇乗式一成は初代当主を降りた。そして、息子である闇乗式一護が次代当主となった。

タナトスの問題は、闇乗式一成から闇乗式一護への1種の試練であった。当主である為にはどうあるべきかを問うための。

最初こそ、一人でやっていこうとしていたが、時期に一人では抱えきれなくなり、秘書を雇った。

次に、神達に助けを求めた。神達はこれを機に借りを作ってやろうとしていたが、まるで頼りにならなかつた上に、見逃していた。結局人間がどうなろうと、世界がどうなっても、どうでもいいのだ。

ちなみにだが、現人神から【人】になれる可能性は非常に高い。人間が【人】になるよりも余つ程。でも確率は元々あまりにも低いのだ。

人間から現人神。現人神から【人】はある種元に戻ったとも言える。【人】は神を生み出し、神は人間達を作り出した。難しいのはここから、現人神になることで人間はある

意味、マイナスに近い状態になる。もし仮に、「人」と人間をプラスと考えると神はマイナスなのだ。かと言って、現人神が必ずしもマイナスでは無いのだ。

こればかりはわかりやすく言うことはできない。しかし、人間が現人神になるとよ  
り、「人」になりやすくなることは事実だ。

ちなみに妖怪は基本的にマイナスだ。マイナスは人間を取り込んだところで、プラスにはならない。しかし、愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットはどういう訳か「人」になれた。理由は完全には不明。恐らく繋がりのおかげということになっているが、また別の理由があるのかもしれない。

また、古明地こいしが、自分が「人」にしたと証言しているが、詳しいところは不明。

「軽くでしたがこれで終わりです」

「分かりにくいことは作者も分かっています、どうしてもこうなってしまうのです。」

すみません……」

「メタもこの程度にしましょう、アツサさん」

「そうですね、さとりさん」

「では、また次回!!」

ロベリアには注意せよ（コラボ）  
連れてこられたのは……？

私達が修練に励んでいる時。唐突に闇乗式さんが言った。

「忘れてた。風見幽香をなんとかしないとだつた」

（……え？ 今更?!）

「うん、今更。忘れてたんだから仕方ないじゃん？」

「私みたいなこと言わないでくださいよ、闇乗式さん。キャラが被りますマジで」

「マジでつて言つてガチでつて言う感じ？」

「そうそうそんな感じつておい」

私が闇乗式さんに向かって力いっぱいのパンチを仕掛けるが大振りなためあつさりと避けられる。アツサだけに！ ……寒くない？ この部屋。いや、部屋じゃないけどさ。

「でもアツサ君。大分強くなったね、変な邪魔さえ入らなければ大丈夫そうだね」

「その言い方、なにか試す気ですね？」

「そんなことないよ」

「うわ、絶対嘘だ。顔にそう書いてある」

「え?! 本当に!？」

「古事記に書いてあるだけで顔には書いてませんよ」

「そんなわかりにくいネタ誰が分かるんだい……」

闇乗式さんに思いつきり呆れられてしまった。え? ニンジ〇〇レイヤーネタってもう古いんですか?! つてああ、さとりさん達に伝わりませんねはい。闇乗式さんだけにしか伝わらないよこれ。

「まあ、とりあえず。頑張ってくれよ」

「アツハイ」

「私もついて行きます!」

「さとり君が? 珍しいっっちゃ珍しいね」

「なんとなく心配ですから」

「なんとなくなのかさとりさん。でも嬉しい!」

流石さとりさん。いや、さとりん、私嬉しい! やっぱりSMTさとりんマジ天使だわ、流石だわ。

「あの、それめちやくちや恥ずかしいんですけど! /」

「ほぼタメ口さとりん! 可愛いよ! 愛してるよ!」

「もう! / / バカ!!!」



「相変わらず、妻バカだね。まあいいことかな？ さてと、そろそろ幻想郷に送るよ？」  
「そう言われると私はできるだけ顔をキリツとさせて

「はい、準備万端です」

「キリツとした顔で言わないでくださいよ?! わ、私も準備万端ですよ」

「うん、よろしい。じゃあ頑張ってくれたまえよ」

目を閉じ開けると、そこは幻想郷の旧地獄の中心にある地霊殿にいた。

「は、速いですね……ここまでは」

「はっ！ さとり様にアツサちゃん！ 出掛けたと思ったら消えたって話だったからビックリしましたよ」

「あ、お隣さん！ いやあちよつと色々ありまして……また出掛けるんですよ」

「ん、あまり遅くまで出ないでくださいね？ 最近は怪しい女が彷徨いてるって話です」

「怪しい女……？ ふむ、一応注意しておきます。忠告ありがとう、お隣」

「いえいえ、さとり様とアツサちゃんの為ですから！」

怪しい女……女かあ。なんだろう、幻想郷にだいぶ入り浸っているというか……なんというか？

とにかく、多分その怪しい女はタナトスと見て問題は無さそうだ。変なことをしてい

るんだらうけど……まあ今は無視だ無視！ いや、しない方がいいけどまずは幽香さんをなんとかしないとイケない。

正直、強いつて噂の幽香さんにあまり勝てる気がしないけど……まあさとりんもいるし、いけるでしょ（適当）

「ともかく、お燐も気を付けてくださいね？ では、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃいませ」

なんか、お燐さんもタナトスの手の内だったりしそうで怖いけど、まあいいか……？  
ん……お燐さんってなんかおげ○さんみたいな勢いあるからなんか変えたいよね。

「あの、○○○さんって誰なんですか？」

「いや、特に意味は無いですよ。本当です。うん。本当本当」

そこ突つ込まれると思つてなかったからちよつとびっくりしたと言うか。まあ、とりあえず進みましょうよ

「まあそれもそうですね、後出来れば喋ってくださいよ。寂しいです」

「ごめんなさい！」

その場で思いつきり土下座した。いや、思いつきり土下座したってなんだ？

土下座に思いつきりもくそもないだろ多分。そこにあるのは誠意な訳で。だから、思いつきりっておかしい。

……いや、誠意って気持ちの話だから思いつきりって使っていいんじゃないかな？  
んんん??? よく分からない、まあいつか。

この後、めちやくちや——

「何もしてないし、何も起きませんでした!」

「さとりん、そこまで否定しなくていいから?!」

はい、何も起きてないです。めちやくちやの後付くのは探索だったり。

結局私達は色んな人のところに行った。なんだかんだでみんなタナトスの餌食になっ  
っているわけではなかった。

「みんな、タナトスの餌食になってる訳じゃなくて良かったです……」

「まあ、所詮噂は噂ってことですね」

「そうですね」

そうして一安心していた矢先、目の前に現れたのは

「あら、さとりとアツサじゃない」

「うわ、紫さんじゃないですか……」

「うわ、とは何ようわって」

「なんとなくそんな反応が欲しいのかなと」

すると、スキマから出てきた紫さんは人を持って出てきた……人を持つてる?! とうとう人攫いをしたんですか?! ああ、とうとう犯罪に手を染めたんですね紫さん。真相はその大きなたわわのみなんですね。

「ちよつとアツサ。いやらしい目で見るとやめてちようだいな」

「ちよつ、アツサさん?!」

「い、いやあ……つい」

いや、そんないやらしいたわわがあつたら見ちやうじやないですかヤダー! というか問題は紫さんが持っている人間ですよ……

「ああ、これ? まあ危ないけど、味方にすれば強いから。じゃあ頑張つて」

「え? ちよつ、待つ……あーどっか行つちやつたよ」

「とりあえずこの人が起きるまで待ちましょうか」

そんな訳で、起きるまで待つことになった。

## 目覚めたのは

「さつきから一向に目覚める気配がありませんね……」

「紫さんにボコボコにされたとかじゃありませんよ？」

「流石にそんなことしないわよ。それにそんなことしたら向こうの紫に殺されるわよ多分」

向こうの紫。なんて言葉を使っていることを考慮すると、どうやらこちらの世界の紫さんで間違いないようだ。というか本当にあつたんですね平行世界。ちよつと驚きと  
うか……なんというか？

ま、まあなんか紫さんの様子が少しおかしいし、OHANASHI（ ）しますかね

「紫さん？ とりあえず殺し合いしましょうか」

「良いわよ。今なら貴女ごとき、なんてことは無いわよ？」

「ムカつくこと言ってくれるじゃないですか……クロス!!」

殺意「450年分のランコーレ」

「あら、感情に任せた攻撃は当たらなくてよ？」

私の予想が正しければ……

「やっぱり後ろにスキマを出しましたね?」

そう言いながら私は後ろのスキマから止めどなく出てくる自分の弾幕を避ける。しかしこのままではジリ貧だ。避けたその先に別のスキマを出されて、また私の後ろにスキマを出されて弾幕を後ろから喰らわせられる。

だけど私には策がある。恐らくだが、紫さんのスキマには限度というものがあるはずだ。幾らなんでも強くなったからってそこは変わってないはず……多分。

「ひよいひよい、ひよいひよい……そんなに避けてて何かいいことがあるのかしら?」  
「ありますよ? まあ勿論言わな——」

「凡そ、私のスキマのキャパシティの弱点を突いてスキマを使えなくさせようとしてるのかしら?」

「そんな訳——」

「有るわよ? だって貴女嘘をつく時には左上を見るもの」

そんなこと言って私をゆさぶろうとしても無駄ですよ……ん? もしかして私の脳内に直接……?!

「その通り、だから貴女の考えてることを読めるのよ。まあ、少し読みずらいけど」  
「私は完璧に読めますけどね。はあッ!」

そう言うときとりんは紫さんに蹴りを一発入れる。不意を突いた攻撃だったため、流

石の紫さんでもスキマに逃げることは叶わなかったらしい。

「ぐっ……さとりか。でも心が読める程度で私に勝てるっても？」

「そうですね。それだけでは勝てないですね」

そう言うときさとりんは目を閉じる。その瞬間、さとりの周りにスキマが現れる。うわあ……想起つてそこまで出来るんですね。おそろシア、おそろシア。

あの調子なら勝てそうですね、私の力がなくとも。 流石さとりん流石 S S S

「なんで私のスキマを……?!」

「覚えてないんですか？ 私の能力は心を読む程度の能力。まあもつとも、今の能力は程度で済む話では無いですけども」

「ああ、余裕をかましてニコツて笑うさとりんマジ可愛いよ！」

「は、恥ずかしいですよアツサさん／＼」

「隙あり！」

そう言つて紫さんがさとりに飛びかかろうとした時、

「無駄ですよ？」

紫さんの目の前にはさとりんが出したスキマ。それも、私の弾幕が大量に閉じ込められているスキマだ。それをまともに食らった紫さんは一瞬にして地に伏したのだった。

結局私の力少しくらい使つてるだろ、だつて？ そ、ソナナコトナイジャナイデスカ

ヤダー。

「さて、なんであの人を連れてきたか教えてもらおうじゃないですか」

「いやあ、単純に面白そうだなあと」

「……はあ？」

つい変な声が出てしまったがそれも当然だろう。ただの平行世界の住人を面白そうだからといった理由で連れてくるおバカさんがいるだろうか？ まあ居るんですけども、この大きなたわわを持った八雲紫さんって人なんですけど！

……いや、本当にただの平行世界の住人だろうか？ 紫さんが適当に選んだとしても、何かしらの力を持っている可能性は高い。まあとはいえ、妖怪かなにかだろうどうせ。

「んで……味方になると心強いと言ってましたが、本当に強いんですか、この人？」

「強いわよ、大体のことが操れるわ災いとしてね」

「災い……なるほど。凡そ、禍のことを指してるのね。あの妖怪でもそこまで強くなれるなんてね」

「あの……禍ってどんな妖怪なんですか？」

「ああ、そんなこと？ 禍って妖怪は——」

「んんう……」



先程までの戦いが激しいものだったのか、連れてこられた人が目覚めそうになつて  
る。

それを確認した紫さんは「話がややこしくなる」と言つてどこかへ消えてしまった。  
消えた先に関しては大して興味がある訳でもないので無視として。

聞きたいことが山ほどある目覚めそうな人だが、流石に目覚めてすぐに質問攻めは可  
哀想だ。状況を説明してからのの方が良いだろう。

「んあ……ああ？ フランか？ なんだイメチェンしたのか？ ちよつと血塗れみたい  
な感じで心臓に悪いぞ？」

「あ、あの。翼を見て貰えます……？」

「ん？ 翼？」

第一声がこんなものだから私にとつての謎が大量に増えてしまった。

まず、何故フランお姉様を知っているのか。まあ、フランお姉様と私を見間違える人  
はよくいる……：気がするが、大抵の人は翼を見て違いを把握する。

この人はどうやら起きたため、まだ翼をよく見てないようだ。

「ああ、確かにフランのじゃないな。まるでレミリアっぽいものだが……それもイメ  
チェンか？ 羽を引っこ抜くまでするなんて、気合い入つてんな」

「イメチェンじゃないんですよ！ 私は愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットです！」

「なんだその長い名前、厨二病患者か？」

「なにおう！ 私だつてこの名前ちよつと嫌になつてるんですよ！れ！！」

「お、ビックリマークにれを混ぜてくるか。高等技術だな」

「……あれ？ この人以外と話に着いて来れる人？ やば、私の周りあんまり話着いて来れる人いないから嬉しいな……。ちよつとキユンと来ちやいますよ？」

「へえ……意外と真面目なんですね」（ボソツ

「？ さとりん何か言いました？」

「いえ何も」

「そういえばそつちのピンク髪の人の名前を聞いてなかつたな。なんて名前なんだ？」

「古明地さとりと申します。地霊殿の——」

「私の妻です!!」

さとりん、ただでさえ混乱してる可能性が高いのに、もつと情報入れたらアウトだつてばっ!!

「ほう、妻とな。同性婚とはやるな。馴れ初めはどんななんだ？」

「えつと……まあ、色々ありました」

「他人に言えないか。さてはエツチな出逢いだつたんだな、このおませさんめ」

「ツツエ……つて、何この人初対面なのに酷い?! 参っちゃうんですよね！」

「ですよね言いたいだけですよね？」

珍しくさとりんが乗ってきた。まあこの流れは何回もやっていますし、慣れてますよね。というか内輪ネタになるからNGですよさとりん……

「え、あつ……すみません」

「ああ、大丈夫大丈夫。気にしてないから」

「で……ここどこか分かります？」

「サツパリだけど？」

「ですよね」

「まあハツキリ言うとは幻想郷です。貴方の居た幻想郷とは別の」

「俺の居た幻想郷とは別う？ どういうことだつてばよ？」

まあそうなりますよね。さとりさん。ここはゆつくり、丁寧丁寧丁寧にお願いしますよっ。

「簡単に言えば、平行世界つてやつです」

「ああ、なるほどな。で、誰に連れてこられたんだ俺は？」

「覚えてないんですか？ 紫さんが連れてきたんですよ、こつちの世界の」

「ああ……だよな。どの世界でも厄介なのは変わらないな」

「そういうものですからね彼女は……」

そんなことを言っていると突然私の目の前にスキマが開いて紫さんがニョキつと出てきた。

「何か言ってたかしら?」

「イエ、ユカリサンハキレイダナト」

「カタコトね……まあいいわ。それでどうかしら。禍津神碎過、こちらの幻想郷は」

「まっ、イレギュラーって存在が本当にあるとは思わなんだ」

「私の事です?!」

「そりやそうだろ。アツサスイーノ——長いからアツサでいいか? お前、全くもって

力が読めないんだよ」

「う、嬉しいです」

以外と別の世界の人でも分からないものなんですね。だとしたら順調に「人」になれる証拠ですね。

それにしても、紫さんの口からこの人の名前を知るとは思いませんでした……。

……? この人、何故微量の神力を?

「あ、あの」

「ん? どうした、アツサ」

「何故貴方は——」

「そんなに心の中が真面目なんですか？　って聞きたいんですよ、アツサさん」

「え？　いや、違」

「そうですよね？」

「は、はい」

さとりのんが強すぎてつい言い負けてしまった。本当に聞きたいことは、神力を何故持っているのかなのに……

「俺なんか真面目に見えるようなら、医者に診てもらった方がいいぜ？」

「うんうん、この人真面目に見えるな——」

「お腹の中アルマゲドンにしたるか？」

「ピツ?!　すいませんでした……」

思ってたよりも怖いよこの人。いきなりお腹の中アルマゲドンなんて死んじゃうんじゃないの☆(某シエフ)

というかアルマゲドンってあれですよ？　え、どうなるんです？

「と、とりあえず探索しますか」

「そうだな。俺やること分らんし、ついでにこっちの幻想郷のことももつと知りたい

しな。ついて行く」

「じゃあ、一回紅魔館に行きますか」

そうして、私達は紅魔館に行くことになった。

……今、レミリアお姉様やフランお姉様いないけど大丈夫かなあ？ ま、まあパチユ  
リーがいるし、その上咲夜さんもいるから大丈夫だよね。

## 目覚めたのは（禍津神砕過君視点）

「んんう……」

爆発音のようなものが起きかけの頭に響く。ここは何処だろう。俺は何をしていたんだっけ。

確か……そうだ、俺は黒ずくめの男の怪しげな取引現場を目撃して、それに夢中になるあまり背後から近づくもう一人の仲間に気づかなかったんだ。そして意識を刈り取られ、今に至ると。別に体は縮んだりしていなかった。

「んあ……ああ？ フラン、か？」

視界に飛び込んできた情報をそのまま口にしていた。共通語を意味するリングワ・フランカのことではない。

素早く視線を走らせて、状況を把握する。

場所は見覚えのない原っぱ。二人の女の子が興味深そうに此方を見つめている。

（良かった、ちゃんとあるな……）

密かに背中に手を回して、名月——相棒である大太刀があるのを確認する。剣呑な雰囲気ではないが、物騒な戦闘音で俺は目を覚ましたので、万が一に備えてあるに越した

ことはない。

女の子の一人は、先ほど口に出したフラン——フランドール・スカーレットという知り合いの吸血鬼とよく似ていた。でも注視すると、所々に相違があるのが分かる。

服が全体的に紅色のカラーリングで、そこはフランと同じなのだが、何とか暗い紅色なのだ。返り血をたんまりと浴びたのかつて感じ。

もう一人はピンク髪の少女だ。知人の新聞記者が言つてた、ピンクの髪の毛は淫乱なんだつて。あつ、こんなこと言つたら師匠に殺されるわごめんさい。

「なんだイメチェンしたのか？　ちよつと血塗れみたいな感じで心臓に悪いぞ？」  
髪は鈍く輝くブロンズヘア、瞳に宿る光はどこか仄暗い。容姿は確かに似ているが、この少女がフランでないことは明らかだ。

でも親族か何かだろうし、ツツコミから打ち解けることもある。このまま話を続けさせてもらおう。

「あ、あの！　翼を見てもらえます……？」

「ん？　翼？」

少女に言われて視線を落とす。そこには一対の蝙蝠のような羽がピヨコンと生えていた。ちよつと欠けてるのがアップルのロゴっぽくお洒落。

うん、フランの七色の羽とはかけ離れてるね。



「ああ、確かにフランのじゃないな。まるでレミリアっぽいものだが……それもイメチェンか？ 羽を引っこ抜くまでするなんて、気合い入ってるな」

「イメチェンじゃないんですよ！ 私は愛杉・アッサスィーノ・スカーレットです！」

やっとアッサスィーノという少女からツツコミが入った。スカーレット、やっぱりスカーレット家じゃないか。愛杉ってなんですか。

「なんだその長い名前、厨二病患者か？」

「なにおう！ 私だつてこの名前ちよつと嫌になつてるんですよ！れ!!」

「お、ビックリマークにれを混ぜてくるか。高等技術だな」

一瞬誤字報告しようかと迷ったが、噂に聞くれを混ぜる高等技術だと気づく。なかなかやるじゃねえか巫山戯てんのか。

「そういえば、そつちのピンク髪の子の名前を聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

会話に入れずにいたように見えたので、鮮やかな桜色の髪の少女に声をかける。

気だるげな半眼。天真爛漫な隣のアッサスィーノと对象的に、物静かな印象を受ける。ゆつたりとした水色の服装は、パチュリーという知り合いの魔女のそれと似ていた。

しかし、そんなことよりも、一番に目を引いたのはその瞳だ。いや、パツチリしてるとかキラキラしてるとかじゃなくて、第三の目があるんだ。胸元につぶらな瞳がついて

るんだ。

なんだアレ、アクセサリー……ではないよな？

装飾品にしては前衛的過ぎるデザインだし、何より瞳には生気が宿っている。となると、少女の体の一部となるのだろうか。

うん、眼についてイジるのはやめよう。コンプレックスとかあるかもしれないからな。

「……意外と真面目なんですね」

「さとりん？ 何か言いました？」

「いいえ。それより、私は古明地さとりと申します。地霊殿の——」

「私の嫁です!!」

さとりの言葉を遮るようにアツサスイーノが被せた。

嫁、妻、配偶者……。アツサスイーノもさとりも女の子に見えるのだが、何時からか幻想郷は同性婚ができるようになっていたらしい。

さとりも満更でもなさそうだし、真実なのだろう。

「ほう、妻とな。同性婚とはやるな。馴れ初めはどんななんだ？」

「えつと……まあ、色々あります」

惚気けると思って訊いてみたのだが、予想に反してアツサスイーノは俯いてしまっ

た。

悲しみや後悔といった感情が瞳に見え隠れしている。この表情は……ああ、俺と同じだ。きつとこの幼い少女にも、顔に鬨りを落とすような薄暗い過去があるんだ。

少し強引かもしれないが、お茶らけて気持ちを上げてもらいますか。

「他人に言えないか。さてはエツチな出逢いだっただな、このおませさんめ」

「ツツエ……って、何この人初対面なのに酷い?! 参っちゃうんですよね!」

「ですよね言いたいだけですよね?」

うんうん、どうやら調子を取り戻したようだ。

まあ、初対面でこんなこと言う俺の印象は最悪だろうけど、幼女の笑顔には変えられない。別にロリコンではないけど。

「で……ここどこか分かります?」

「サツパリだけど?」

「ですよね」

ですよねって言いたいだけですよね?

それにしても、見覚えのない光景だ。少なくとも慣れ親しんだ妖怪の山やその近くではない。

「まあ端的に言うとは幻想郷です。貴方が居た幻想郷とは別の」

「俺の居た幻想郷とは別う？ どういうことだつてばよう？」

「簡単に言えば、平行世界つてやつです」

「ああ、なるほどな」

衝撃的ではあったが、すんなりと受け入れることができた。

そう、俺の元いた世界に、愛杉・アツサスイーノ・スカーレットという吸血鬼はいなかった。そしてまだ確定はしていないが、俺という妖はこの世界にいないようである。

ん？ つまり、アツサスイーノ⇨平行世界の俺つてことになるのか？

「で、誰に連れてこられたんだ俺は？」

馬鹿な考えに頭を振って、話を進める。まあ大方犯人に目処はついているのだけだ。

「覚えてないんですか？ 紫さんが連れてきたんですよ、こつちの世界の」

「ああ……だよな。どの世界でも厄介なのは変わりないな」

「そういうものですからね彼女は……」

遠い目をしているアツサスイーノを見ると、だいぶ彼女が紫に振り回されてきたことが窺える。こつちの世界の紫は、うちの世界の紫よりもヤンチャかもしれない。

そんなことを話していると、突然目の前の空間が裂けた。ギョロリと覗く無数の眼球。紫がスキマと呼ぶ、いつ見ても悍ましい世界が姿を現す。

「何か言つてたかしら？」

端から聞いていたくせに白々しい。俺は長い息を吐いて肩を竦めた。

「イエ、ユカリサンハキレイダナト」

「随分カタコトね……まあいいわ。それでどうかしら？　禍津神碎過。こちらの幻想郷は」

その質問はちよつと訊くのが早くないか？　こちとらまだ目覚めて数分だぞ。ほとんど二人の女の子と会話しただけだ。

「まっ、イレギュラーって存在が本当にあるとは思わなんだ」

「私の事です?！」

「そりやそうだろ。アツサスイーノ——長いからアツサでいいか？　お前、全くもつて力が読めないんだよ」

「う、嬉しいです」

何故か照れているアツサに苦笑する。果たして嬉しいがるところなのだろうか。  
「こうして見ると、年端のいかない幼女にしか見えないな」

「ひど?！」

レミリアのような高圧的な雰囲気がないから、羽や八重歯に目を瞑れば吸血鬼とすら分らない。良く言えば親しみやすい、悪く言えばカリスマがない。

「あ、あの」

「ん？ どうした、アツサ」

歯切れが悪い。アツサが何か言い淀んでいる。

「何故貴方は——」

「そんなに心の中が真面目なんですか？ って聞きたいんですよ、アツサさん」

「え？ いや、違」

「そうですよね？」

「は、はい」

何やらあつちでやり取りがあつたみたいだが、これは何故真面目なんですか？ って

質問でいいのか。

真面目目……か？ 今までの俺の態度を見てそう言っているのなら、少し頭が心配だ。

永遠亭で診てもらった方がいいのではと思う。

「俺なんか真面目に見えるようなら、医者に診てもらった方がいいぜ？」

「うんうん、この人真面目に見えるな——」

「お腹の中アルマゲドンにしたるか？」

「ピツ?! すいませんでした……」

大袈裟に仰け反るアツサの反応が面白い。絶対に君スカーレット家の末っ子でしょ。

イジリ甲斐がありそうな顔してるよ。

……こんな思考をしているところで、自分は真面目ではないなど省みる。

「と、とりあえず探索しますか？」

恐る恐るといった感じでアツサが提案する。少し怯えさせ過ぎたかもしれん。俺は可能な限り柔らかい表情をしよう努める。

「そうだな。俺やること分らんし、ついでにこっちの幻想郷のことももつと知りたいしな。ついて行く」

「じゃあ、一回紅魔館に行きますか」

そんなこんなで、目的地は紅魔館と相成った。

この世界のレミリアやフランは一体どうなっているのやら。俺が切に願うのは、フランの料理は二度と食べたくないということだ。

## 恐ろしい怪物

「そういえば、こつちのフランって料理するの？」

「……へ？ なんですか藪から棒に」

「いやなに、ちよつとばかし気になって」

「なるほど？ まあ、しないとしますよ？ それにそういうことは未だによく分からないんですよ」

そう、私はよく分かっていない。レミアアお姉様が普段どのような過ごし方か、フランお姉様がどのように遊んでいるのか。ハッキリとは知らない、分かるのは妖力の動きだけだ。なにをしているかなんて分かるわけが無い。

そんなことを考えていると、ふと禍津神砕過さんが頭を撫でてきた。慣れていないのか、壊れ物を扱うように髪にそつと指が触れた。

「なんか……申し訳なかったな。まあ、アレだ。アツサが藪から棒に、なんて難しい言葉を知ってるなんて思わなかったわ。なんか見た目すつげえロリだし」

「あー！ ロリって言った！ この人ロリって言ったー！ さとりんもロリなのに！」

「ちよつ、アツサさん?! 私を巻き込まないでくださいよ?!」



なんか禍津神碎過さんが無理やり和ませようとしてきたから、ちよつとした返しをしてあげた。まあさとりん可愛いから。こういう時にさとりに話を振ると大抵可愛い反応が返ってくるから嬉しくて仕方ない私ですわぞ？

「ははっ、とんでもない玉突き事故起きたな」

「半分以上貴方のせいですけどね？」

「本当ですよ!!!」

「あ、そうだ。古明地のそのよく分からないアクセサリー……？　みたいなのってなんだ？」

あ、そこ触れますか。まあ別に大したことじゃないと思いますけど………なんというか古明地って、さとりんのことを呼ぶ人ってなかなかいない気がする。

「古明地なんて他人行儀に呼ばず、遠慮なくさとりとお呼びください。その方が慣れますし、何せ私には妹がいるので」

「おっと、妹さんがいたのか。そいつは失礼した。んで、その不思議な三つ目のおめめみたいなのはなんぞいな？」

「サードアイって言います。まあこれで人の心を読むんですよ」

「え？　心読むの？　恐怖なんだけど」

「そう言いながら、怖がりもせずむしろ受け入れようとしているのは嬉しいことです」

あら、受け入れようとしてるんだ。凄いなあ……私は慣れちゃったって言うか……ん？ 私も受け入れた一人では？

「あ、アツサさんも受け入れてくれたからこそ、婚約を認めたんですからね！／＼」  
「ほ、本当ですか?! あ、ありがとうございます／＼」

面と向かって言われると恥ずかしいよお／＼

……禍津神砕過さんの方見てみたらこれが通常運転なんだなって言いたそうな顔してらあ……

「若いなあ……」

「そんなこと言つて、禍津神砕過さんは誰が好きなんですか？」

「ウザイ女子の典型かって。ん／＼霊夢……かもな」

霊夢ですか。見る目があると言うべきなのか言うべきじゃないのか……

そもそも向こうの霊夢を知らないからなんにも言えないけどね☆

「そんな話してるところ申し訳ないけど、お邪魔するわよ」

「カツチャマア……」

「ルーミアか……なんか雰囲気違うな前見た時より」

「きつとタナトスのせいですね」

「タナトスう？ 誰だそれ？」

「まあ……イタズラ好きな変な奴とと思ってください」

タナトスの説明していると時間ないですしね……。

てかこの流れは……

「ぶよで勝負だ!」

「なんでですか?!」

「ぶよってなによ、美味しいの?」

ルーミアさん、そこでぶよって美味しいのって言われても答えられないですよ。……

美味しいのかな?

「ともかく、先手必勝!」

不殺【450年の意味】

「俺そこまで弾幕張れないからなあ……」

「意外ですね。結構な力をお持ちなようですからつきり弾幕勝負は得意かと」

ちよつと?! 私が発射勝負してる間にお話してないでくださいよ?! 集中出来ないじゃないですか!!

「ふうう。集中して……ハッ!」

「おつとつと。ただ狙ってるだけじゃ当たらないわよ?」

「そのようですね。というか貴女はどういう能力を持ってるんですか?」

「そうねえ……まあ見せてあげるわ!」

そう言うのとルーミアさんの周りが暗くなっていく。ん? 暗いどころじゃなくないですか?! あれじゃん! 真つ暗闇! 全然周りが見えないよ?!

「これが私の能力! 闇を操る程度の能力。どうかしら? 美しいでしょう?」

「美しいかは別として、なんとなく妖力で居場所は分かるんですよ!」

「フギャン!」

どうやら自分も見えてないらしい……。そりや私の弾にも当たりますわな。

……というか別に強くないってことはタナトスの影響を受けていらっしやらない?!

ちよつと困りましたね……。

「あ、明るくなった」

「急に暗くなるからビックリしたんですが……」

「ルーミアにしては随分と暗くなったからビックリした」(小並感)

ルーミアさんつてそつちの世界でも弱いんですね……。

「あ! ルーミアがやられてる! お前だなやったの!」

「えつと……貴女は?」

「聞いて驚け! 私はチルノ様だぞ! 幻想郷の中でさいきよーなんだぞ!」

「は、はあ……?」

え、チルノさんってこんな感じなんですね。アタマヨワソ。

でも可愛いし、無害ならいいことなんですがねえ……ルーミアさんのこと言ってますし、これは敵ですよ。

「ルーミアを倒したことからお前を挑戦者とみなし、今からお前にしよぶを仕掛けるぞー！」

「お、お手柔らかにお願いしますね……」

「おてやわらかにつてなんだ？ とりあえずしよぶだ！」

「まあ待てチルノ。このアイスでここは手を打たないか？」

「アイス!? いや、いや騙されないぞ！ そう言つて変なもの渡すつもりだろ？」

「いや？」【砲禍】

「うわああああ?!」(ピチューン)

……ええ。明らかなオーバーキルじゃないですか。なんでそこまでするんですか?!

「ああ、あいつ妖精だから復活するんだよ」

「あ、なるほどお。だからオーバーキルする必要があつたんですね」(某RTA走者)

「まあ確かにゾンビ戦法なるものをやらなければならない勝てますね」(フラグ)

「さつきはなんてことしてくれたんだ！」

あ、チルノさんカンカンだ。ええ、折角倒せたのにさとりんのフラグのせいでもたや

り直しか〜……

「じゃあ真面目にやりましょうか」

「そうだそうだ！」

「分かった分かった、二対一な」

「別にいいぞ！ 私はさいきよーだからな！」

そんなこんなで第二라운드의始まりなんですな。

……ただし

「このあたいが本気を出すんだからちゃんとやってよね？」

「……はあ？」

どンドンムキムキの怪物になっていくチルノさん。え、本当にやばいじゃないですか、これもタナトスの影響?! こっわ、何それこっわ。

「アタイがこの姿になるのは初めてじゃないけど……壊れないでね？」

「ピイツ」

チルノさんがとんでもない怪物ガチルノになってしまった。

# 恐ろしき自然の力……？ （禍津神砕過君視点）

小柄だった体は何処へやら。筋肉が歪に隆起し、ガチムチへと変貌してしまったチルノ。こんなん親が見たら泣くやろ……。

「……壊れないでね？」

「ピイツ！」

ガチルノの姿が掻き消えた。

一番距離が近かったのがいけなかったか、まず狙われたのはアツサ。音すら置き去りにして、ガチルノが殴りかかる。

マズい。いろいろ抜けているアツサが、あのゴキブリみたいな瞬発力を持ったパンチを果たして避けられるだろうか。

〃災纏・改〃

グインとパンチの軌道が強引にねじ曲がった。不可思議な挙動、アツサは何事かと目を瞬かせている。

俺は禍——災いを招く妖怪。

この技は災いを自分自身に纏わせ、不幸を手繰り寄せる。要するに攻撃を引きつける

避雷針となる技だ。

少し前までは愛刀の名月の助けを借りなければできなかったが、永夜異変にてコツを掴んだことにより自分だけの力で発動できるようになった。

よって、パンチという名の不幸は俺に向かつてくるわけで。咄嗟に俺は名月を間に挟み込む。

「……っ、重すぎだろッ!」

ギシっ、と体中が軋むのを感じた。

稲妻のような衝撃が腕を突き抜ける。膂力が違い過ぎて踏みとどまることができない。地面を抉りながら後ずさった。

冷や汗が流れる。コイツはさっきまでの能天気なチルノと違ってはいけない。情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ、そして何よりも速さ。どれを取っても段違いだ。

ちと口が悪いが、底抜けに明るかったチルノをこんな怪物に仕立てたタナトスとかいう悪趣味なやつにファッ⑨という言葉を贈りたい。

「禍津神さん! 大丈夫ですか!」

「禍津神って苗字、厨二っぽくてあんまり好きじゃないから下の名前で呼んでくれねーかな!」



返事をしながら、驟雨のように絶え間なく降り出されるラッシュを紙一重で躲している。余所見している暇はあんまりない。

岩の如くゴツイ拳が顔面のすぐ真横を通り過ぎる。ふわりと髪の毛が靡く。ひんやりとした冷気が頬を掠めた。

「……冷えるな」

あの冷気はヤバいな。禍センサーがピンピン立っている。

こっちの世界のチルノがどうかは知らないが、俺の世界のチルノの能力は『冷気を操る程度の能力』。仮に能力が同じだとすれば、少しでも拳を受けようものなら氷づけにされてしまうぞ。

「つたく、筋肉モリモリのマツチヨマンになっても能力は健在とか……つくづく神様ってヤツは優しくないな」

頬を通して伝う冷気に、思わず悪態をついてしまう。できれば決着は早めにつけたいところだ。

「あたいにも、剣があれば……」

「アイシクル・ソード」

「おいおい、氷の剣を造っただど!？」

状況がどんどん悪くなっていく。面倒のやつが面倒なものを持ってしまった。

徒手空拳から長物に持ち替えたガチルノは、正に鬼に金棒。それに対して俺は鞘に入れたまんまの太太刀。いやさっさと抜けよとツッコまれそうだが、俺にはこの訳ありの剣を抜刀できない理由があった。

名月——幾星霜と俺の災いを溜め込んだ相棒は結果として、くそ悍ましい姿となっていた。

あの刀身の色を表すにはなんと言えばいいのか。ただの黒では全然足りない。もつともつと暗く、皮肉なことに先程戦つたルーミアの闇よりもずっと淀んでいる。

そんなエゲつない刀身を晒したら引かれるに決まつてる。アツサもさとりも悪いやつじゃないってことは分かるんだ。でも絶対に引くね。だって本人の俺でさえ趣味が悪いなって思ってるもん。

折角できた異郷の知り合い、失うには惜しい。だからこそ俺は抜刀できない。ガチルノを相手に、こんな縛りプレイをしないとイケないとはな。

「だが形を変えても氷は氷。強度はないようだな!」

氷の剣と切り結んでいると、二三回刃を交えたところでガチルノの剣が砕け散つた。

しかし、意味が無い。武器を破壊したところで、ガチルノはすぐさま新しい剣を造り上げる。

「コレがあたいの、無限の氷製! やっぱり最強はあたいねっ!」

「あ、頭が良い……っ！」

「そしてコレを射撃い！」

掛け声とともに生み出された武器の数々が、矢の如く勢いで打ち出される。剣だけではない。槍や斧、果ては刺さす叉またまで何でもござれだ。

参った。俺は剣技が達者じゃないから、これらの氷細工を弾くことしかできない。達人なら弾き返してガチルノの脳天にぶち当てるくらいはできるのだろうか。

というかなんで触れてもない刀剣が射出されんだよ、おかしいだろ。

弱音はそこまでしておく。

目を凝らす。迫る氷の刃に意識を傾ける。こんな脆いガラス細工に怖気づく必要があるのか？

「アツサたち、口を塞いでおいた方がいい。コイツあ、吸い込むと肺が痛むぜ？」

影のように災いが地面を這う。或いは、蝮の触手のようにガチルノの氷に巻き付く。

〃砲禍・砕き〃

パラインツと硝子が砕けたような音とともに、氷塊が落ちる。氷の塵が辺りに舞った。

「あ、あたいの氷が！」

動揺しているガチルノに肉薄する。心が痛むけれど隙を与えるつもりはない。

ハッ、とガチルノも拳を構えた。

「あたいは接近戦でも、最強ッ!」

「悪いが、一瞬でケリをつけさせてもらおう」

災いをちよつぱり解放する。周囲に、陽の光を呑むほどに淀んだ風が、どこからともなく吹き荒れる。

〃砲禍・連〃

黒い靄だった災いが、次第に形を成していく。次の瞬間には、無数の弧線がガチルノを覆っていた。

「またの名を——初見殺し、だ」

禍とは、災いを招くとされる妖怪。つまりある程度の事象は起こせるわけで、俺は今、災いを幾つもの斬撃に変えた。

剣の嵐が向かってくるなんて、とんでもない災いだよな。

ガチルノは訳が分からないといった様子だがむしゃらに拳を振ったが、抵抗虚しく漆黒の波に呑み込まれてしまった。

「うわあ、エッグい。チルノさん生きていますか?」

「安心してくれ。鞘越しに叩いただけだから死んではない、はず」

地に伏したガチルノに目を向けると、ピクピクと痙攣しているのが確認できる。良

かった、まだ息をしている。

「さつ、気を取り直して紅魔館に向かうとするか」

「そ、そうですね！ 行きましようか！」

そう言うアツサの顔は引き攣っている。

この程度の災いで驚いてたら、名月を鞘から抜いたら卒倒しそうで不安である。まあ、名月を抜刀するようなことはそうそう無いだろうが。

「……何処に、向かうだつて？」

その時であつた。

後ろから近づく不穏な人影、ザツと地面を踏む音が辺りに響いた。

「あたいはまだ、負けてないっ！」

「チルノさん！ 姿が戻つて——！」

ボロボロになつたチルノが、そこに佇んでいた。覚束ない足取りで、意識を保つのに、え苦しいはずなのに、チルノは立ち上がっていた。

一体何がそこまでチルノを突き動かすのか。いや、分かりきつている。

最強への誇り——それだけだ。

「……お前は凄いや、チルノ。その状態で立ち上がるなんて、精神的には俺なんかよりずっと上だ」

「当然。あたいは、最強なんだから！」

えっへんと無い胸を張ってみせるチルノだが、その表情はやはり苦しげ。無理をしていることは一目瞭然だった。

「だけど、あんまり無理するな。お腹の中、アルマゲドンなんだろう？」

「そんなこと……ない！」

どう考えても強がりであった。

俺の災いは確実にチルノの体を蝕んでいて、さつきからギョルルると物々しい音がチルノのお腹から聞こえてくる。間違いなく腹を下しているはずだ。

それでもなお虚勢を張るのは、最強はみつともなくトイレに行かないからか。

「チルノ……。最強でも腹くらい壊すこともある。行ってこいよ、トイレ」

宥めるように、精一杯の優しい声色を作って語りかける。そうだ、トイレに行かない人間なんていない。咲夜さんのような完璧超人であっても、数え切れないほどのトイレを乗り越えてきたはずだ。

「……トイレに行っても、あたいは最強？」

「ああ、間違いない」

力強く肯定する。トイレに行つて揺らぐほどの最強があるものか。もしあつたらゴメン。

「うん、分かったよ。あたい……トイレに行ってくる」

ようやくチルノは決心がついたようだ。目の色が明らかに変わった。今のチルノなら、きつとどんな腹痛だつて乗り越えられる。

「うう……良い話ですねえ……。ねえ、さとりん？」

「ええ……。何なんですか、これ」

## ヒント

なんだかんだであつという間に終わってしまったガチルノ戦。禍津神さん……いや、碎過さんが強いということが十分にわかつたつて言うのと、とてもいいドラマを見れたことにとても感激しております、アツサです。

「アツサさん、その……」

さとりんが言葉を濁しながらも何かを言おうとしている。なになに、私も感動しました!! アツサさんもそうですよね?! ってえ?! 仲間だね! さとりん!

「いや、全くもって感動ポイントが分からなかったのですが……」  
「ズッテーン!!」

ついつい効果音自分で言っちゃったよ恥ずかぴ。

いや、そこじゃない。なんでこの感動的な物語が分からないんですか?! お腹がアルマゲドンして、そこでトイレを勧める。そして最強の名を傷つけることなく、トイレに行くチルノさん。名シーンばっかじゃないですかあ!?

「頭が痛くなってきました……」

「どうしたんだ、さとり。なんか頭抱えてるけど」



「あ、ちょうどいい所に！」

「どうしたアツサ。そんなハイテンション気味になって」

「先程は感動のシーンをありがとうございました！」

「??？」

それからというもの、私は碎過さんに感動したシーンの一つ一つをどこがどう感動したかなどを丁寧に説明した。途中でだんだんと顔をひきつらせていたのは何故か分からないが……まあ感動が伝わっていればいいんですよ！

「さとり」

「なんでしようか？」

「俺も頭痛くなってきた」

なんで二人して頭抱えてるんですかあ!!!

「アツサさまあ!! なんで今まで居なかったんですかあ!! めっちゃやくちや大変だった

んですからねえ!!」

「恐らくですが魔理沙の事ですかね?」

「そうなんですよ! 魔理沙さん酷いんですよ?! 毎回私を通り越して図書館に直行していくわ、闇乗式さんは大して相談に乗ってくれないですし e t c.」

「あはは、大変でしたね……」

なんてことも道中にあつたなあと思ひながら飛んでいる私、アツサ。現在、美鈴さんにめちやくちや愚痴られています。

「と、とりあえず。この方、禍津神碎過さん。簡単に言うと……平行世界の幻想郷の住民です」

「あ、これは失礼しました。私、紅美鈴と申します」

「ご丁寧にも……もう名前知ってるけど(ボソツ)」

「ちよつと、碎過さん……」(ボソツ)

まさかの碎過さんは美鈴さんのことを既に知っていたのだ。まあ確かに、私のことをフランお姉様と見間違つたあたり、私達姉妹とその仲間たち(○)は知っているか、と納得がいった。

「あ、そうだ! アツサ様、レミリアお嬢様とフランお嬢様がおかえりになられていますよ!」

「え？ レミリアお姉様とフランお姉様が？」

「はい！ なにやら込み入った様子だったのであまり詳しい事情は分からなかったですが……お客様と共にお嬢様方の所にお連れしましょうか？」

「そうですね、お願いします」

美鈴さんの様子を見る限り、この先も愚痴られるんだろうなあと思いつつも、心配だったので詳しい案内をお願いしてしまつた。

「ふふ、流石はアツサさんですね」

なんてニツコリ顔でさとりにいわれたらきゅんんと来ちゃいますね。

「美鈴、私がアツサ様達をお連れするわ。貴女は引き続き門番をしないささい」

「さ、咲夜さん?! うう、分かりました……」

「ちよつと咲夜さん、美鈴さんは——」

「仕事に私情を持ち込まないの。後で話は沢山聞かすわ。それまで我慢してちょうだい」  
「さ、咲夜さん……!」

なんだかんだで仲良いですよねこの二人。幸せに結婚して……どうぞ（勧め）

「さて、アツサ様のことです。近状が気になるかと思うのでお話しながら……ね？」

「はい!」

「まるでお姉さんだな……」

「そんなものですよ」

そんなこんなで私達は咲夜さんと話しながら紅魔館内を歩き始めた。

地霊殿でお隣さんから聞いた通り、怪しい女の人が見れたらしい。お隣さんから聞くよりわかり易く、聞いてて心地が良いと思えるなあとか思いながらもしれつと重要なことを言っていた。

曰く、私の親しくない人（私のことを敵視している人）を中心として、能力を強くすると言っている。また、実際にそれで強くなった人ばかりらしい。

「……明らかにタナトスが干渉してきてますね」

「そのタナトスってのは相変わらず悪趣味なことしてるんだな」

「恐らくですが、チルノさんの件は素の能力かと……」

素の能力であそこまでいけるんですか……とんでもないですね、妖精って……

「一回、パチュリー様にも会いましょうか。お先に失礼しますね」

「あ、ちよつ……行っちゃったよ」

「案内するんじゃないかったのか？」

「まあ、いいんじゃないですかね？」

そうして私達は、図書館に向かうことになった。

「で、アツサやさとり、それに……禍津神碎過つてのが来たのね。あまり煩くしないでね？」

「なんで俺だけフルネーム……」

「分かりました。この本は読んでもよろしいですか？」

「良いわよ。貴女は本を大事にしていそうだし」

「私も読書を嗜む身なので……」

「ならこの本がオススメよ——」

「初めて見ますねそれ。どういう——」

「どうやら本好き同士で話を通じ合うらしい。色んなことを話している。あれ？ それって私には読ませてくれなかった魔導書では？ ちよつ、私にも見せて……見せて!!」

（大声）

「「煩いですー!」 わよー!」

「なんで二人してつつこむですか……」

「ま、まあ落ち着けてアツサ」

碎過さんが慰めてくれる。お兄ちゃんを持つとこんな感じになるんですかね……。

まあ、それはどうでもいいとして……

「いつの間にか腕を上げましたね、パチュリー」

「あら、わかるのね。まあレミイの妹だし、それくらいは当然って感じね」

「信用してるんですね」

「まあ師匠してるからね魔法の」

「師匠ってほどのことはしてないわよ。ただ、下手つびな魔法を見て、それじゃスカレット家の名が汚れると思ったから最低限を教えたまでよ」

「理由、酷?!」

酷いつて言ったって本当に私の魔法ってどうしようもないんですね……いやマジで。

「とりあえず、確認したいことは出来たのでお姉様達のところに行きましようか」

「そうですね」

さとりんが渋るかと思っていましたが意外とすんなり答えましたね。

「お久しぶりってほどお久しぶりじゃないけどお久しぶりですお姉様達！」

「久しぶりだね、アツサ！」

「久しぶり、アツサ。その後ろの男の人は……？」

「禍津神碎過だ。碎過って呼んでくれ」

「碎過ね。分かったわ」

最初の挨拶は上々ですかね……？ とりあえずフランお姉様はその獣のような目はやめていただきたいです。狙ってるんですか？

「それで……なんで紅魔館にいるんですか？」

「簡単に言えば、またヒントを与えに来た……かしら？」

「ヒント？ また異変が起きてるんですか?！」

「まあそんなところね。とりあえず、死神に会うといい。だそうよ」

死神……？ 私自身が死神みたいなどころありますけど、本当に死神がいたんですね。なら地獄もあるってことですか。……地獄に行けばいいのかな？

「その様子だと分かったようね。行きなさい、運命は貴女と共にあるわ」

「はい、レミリアお姉様！」

「大丈夫！ 殺されるなんてことは無い……と思うわ！ アッサなんだし！」

「はい！ フランお姉様！」

そんな訳で、死神を探しに本当の地獄を探しに行くことになった。



## 無縁塚に行こう（無理矢理）【禍津神砕過君視点】

ホッと安心したような、それでいて肩を透かされたかのような複雑な心模様。この世界の紅美鈴と話をした俺はそんな心境だった。

真面目で、好感が持てるさっぱりとした口調。スリットの間からすらりと伸びる美脚。

ちよつと頭が足りなそうなところまで、うちの世界の美鈴と大差ない。

「あの、今失礼なこと考えませんでした？」

「め、めめめ滅相もない！」

「その反応は無理がありますよ」

意外に勘は鋭いらしい。いきなり胸の内を言い当てられ、キョドリながら俺は返事をしてしまった。

それから、アツサと美鈴があれやこれやと話を進めていく。どうやらスカーレット姉妹のところまで案内することに落ち着いたらしいのだが、それは突如現れたメイドによつて止められた。

十六夜咲夜。何でもないような平面で唐突に乱入してきた彼女もまた、平行世界での

知り合いだった。

とかくして、美鈴は門番を続行。案内役は咲夜さんにバトンタッチされて、我々はパチュリーの生存を確かめるべくアマゾンの奥地へと向かった……。

「こつちの咲夜さんと向こうの咲夜さんはちよつぱり違うな」

「そうですか？」

道中、そんな話の接ぎ穂を投げかける。

「ああ、なんというか……俺の知ってる咲夜さんはもうちよつとポンコツだった。だって、フランと仲良くなりたいてって言って俺を頼ってきたんだぜ？」

「そんなことが。それで、私は妹様と仲を深められたのですか？」

「結果として、仲良くはなったかな。俺はプリンを食べただけなんだけど」

「ふふっ、おかしい」

笑顔の花開く。

やはり笑い方まで大人っぽい。仕草は凛々しく、澄まし顔がよく似合うリコリス・ラジアータ咲夜さん。だがしかし、根の部分は俺の知っている咲夜さんと似ているような気もする。

それからパチュリーについてもご多分に漏れず、あまり変わった様子はなかった。強いて挙げるなら、持病の喘息がうちのパチュリーよりも辛そうだったことだろうか。

ケホケホと咳をするのも苦しげに見えた。災いを吸うという厄病神の真似事をしてみたが、少しでもマシになったら幸いである。

そして——ここまで来たら、元の世界もこの世界もあまり人格に相違はないのかな、なんて思いつけていた頃。

一番変わり様が酷かったのは、まさかのフランだった。その有様は最早、変わり果てていたと言つてもいい。

「えつと……俺の顔に何かついてるか？」

物言わずにじーつと此方を睨めつけるフランに、堪らず問いかける。

まるで獲物を狙う猛禽類の瞳。燃ゆるような深紅の双眸が、一向に俺から離れようとしない。

試しにちよいと横に動いてみると、やはり視線も一緒に平行移動。うん、完全にロツクオンされてますね。

「ねえ、サイカ。平行世界の私とはどんな関係だったの？」

いきなり名前呼びですか。距離感バグってないですか。それと質問を質問で返すなアツ！

「えーつと、関係……か。改めて考えると、なんだろうな？ 地下に閉じこもってたフランを引きずり出したのが出逢いなんだが、友人つてのも違う気がする」

顎に手を当て思案する。

不思議だ。他のみんな——例えば、魔理沙ちゃんや咲夜さんには友人という言葉がピタリと当てはまるのに、フランだけには違和感を覚える。

知らず知らずに妹のように扱っていたのか、或いは単純に幼女と友人つてところ引つかかっているだけなのか。

「……やつぱり。サイカは白馬の王子様なんだわ」

「いや、白馬は違うだろ。どっちかというと魔性の黒鹿毛だよ」

口が勝手にツツコンでしまったが、違う違うそうじゃない。白馬のつてとこじゃなくて、王子様の方が謎なんですよフランソワさん。

「だってそうでしょう？ サイカは薄暗い部屋で独りぼっちだった私を、さながら御伽噺の王子様みたいに颯爽と助けに来てくれたのだもの！」

「隣の世界のフランを、だけどな？」

爛々と目を輝かせて語るフランは、実際にその景色を見てきたかのようだ。飴細工に似た七色の羽もパタパタと可愛らしく弾んでいる。

「たとえ別の世界でも、私は私。今こうして巡り逢えたのはきつと運命のお導きだわ！」

「いやあ、そうなんですか？ レミリアさん」

「ええ、運命の赤い糸がそれはもうグルグル巻きよ。雁字搦めよ」

「わーお」

心が読めない俺には、それがレミリア・ジョークであるかどうか分からない。でも、フランの目の色が変わったということは確かだ。

おかしいな。俺の知っているフランは無垢で天真爛漫——それでいて、内向的な一面も持ち合わせている最高にキュートな少女なはずなのに。

「これはもうお付き合いを前提に結婚するしかないわね、サイカ！」  
「ええつとー……」

助けを求めるようにアツサの方を見る。すつごくニコニコしていた。今世紀最大の笑顔だよ、こんちくししよう。

縋るようにさとりを見る。ふるふると無慈悲に首を振られた。私にはどうにも出来ません、と表情が語っている。

「すまん、俺には意中の相手が既にいるんだ」

「へえー……。それって、人間？」

「へっ？ ああ、そうだけど」

誰も彼もが頼りにならない。こうなつたらと素直にお断りすると、フランの顔から笑顔が消えた。眼は光を失い、心做しか声のオクターブが下がったように感じる。

「それなら大丈夫よ。人間の寿命は短いんだから、五十年、百年だって私は待ち続ける」

お・も・い、重い。

幼少期に注がれた愛が少ないと、愛に飢えやすいつて何処かで聞いた。へいへーい、レミリアちゃん。ちよつと愛情が足りないんじゃないかい？

まあ、その理論が正しいとすると、親の顔すら知らない俺はスーパー愛に飢えていることになるのだが。

「ふふふ、砕過・スカーレットね」

「ダサいし、なんで俺が婿入りしてんだよ！ 禍津神・フランドールだろつてどつちにしろ絶望的にダサいし、言わせんな馬鹿野郎！」

「ごめんね、アツサ。実は愛杉つて名前おかしいなつて思つてただけど、私も同じような苗字になるね」

「唐突に心無い言葉が私を襲つた！」

もう何がなんだか分からない。この場が混沌としている。レミリアは弟ができるのね、うふふじゃないんだよ。

この一連の流れはタチの悪い冗談なのだろうか。頭を抱えたくなつてくる。

「……本気、みたいですよ？」

「ざとりが言うたとマジで冗談に聞こえない」

辛うじて吐き出された言葉は力無い。弱々しく息をついた。

「よし！ 無縁塚に行こう！」

「わー、現実逃避だ！」

うるせえ、行こうッ！

俺の知り合いの死神——勿論、平行世界での知り合いという意味だが、あの人なら、無縁塚の近辺で今日もサボっていることだろう。

## 閻魔

「……ところで無縁塚ってどこなんですか？」

「え？　そこからのん？」

普通に砕過さんにツツこまれてしまった。いや、だって私今までは外でたことないんですよ!!　知らないのも仕方ないじゃないですか!!

でも、なんだか名前からして墓地っぽい名前ではありますよね……もしかして怖いところ？　ホラースポットのなサムシング？　こっわ、なんでそんなところ知ってるんですか砕過さん……

「あ、そういえばアツサさんって今まで約450年間程、外に出てないでしたっけ」

「え、何？　フランと同じなの？」

「フランお姉様とは別です。というか、この世界のフランお姉様は監禁……？　的なことはされてないです」

すると嘘だろって感じの顔を浮かべる、それとほぼ同時に納得したような顔をしている砕過さん。

うーん、なんかいつの間にか砕過さんのこと知ってたフランお姉様は一体なんだった



んだらうか……？　というか何故あそこまで興奮してたんだフランお姉様……

「フランさんは相手がいないから興奮してたとか……？」

「どうなんだかなあ。でも確かに男が少ないのはわかる」

「確かに！　男の人って外の世界と比べると少ないですよ。何故なんでしょう？」

「そんなこと気にしていると死神が来るさね」

「そんな訳……」

そう言つて声のした方を振り返ると、いかにも私が死神ですと言わんがばかりの鎌  
そしてなんとも大きいたわわ。更には身長が大きい。そして何よりも……ツインテ  
ル風の赤髪！　……いや、ツインテールってあんまり好きじゃないんですがね？　赤  
髪つてところがいいですよ。目も赤だし！　統一感があつて私は好きです（告白）

「それにしても、おっぱげだ……」

「なんだい、そのおっぱげつて。アホみたいな言葉だねえ」

「アホつてなんですか！　アホつて！　……まあ確かになんとも言い難い言葉ですが」

「なんでそこで自信をなくすんだい。そんなんでスカーレット家の末っ子がつとまるの  
かい？」

「つ、つとまりますよ！　ええい、こうなつたら弾幕勝負だ！」

「こつちとしてもそれが好都合だからいいけど……随分とまあ強引なこつて」

「別にいいじゃないですかあ!!」

強引なのはさとりにだけにですからね！ たとえ相手がたわわだとしても手を抜くつもりは毛頭ないですからねこんちくしょー！

「まずは鎌の耐久勝負といきましようか？」

不征服【アダマスの鎌】

「私の鎌も負けてないよ？」

死符【死者選別の鎌】

私の鎌状の弾幕が彼女の鎌を振り下ろす動作で掻き消されてしまった。それどころか私の真上に光の矢が降ってくる。

それを私はバックステップすることにより、避ける。

「よっと。危ないですね、じゃあ今度は力比べといきましよう……かッー！」

「受けて立つよッー！」

私のアダマスの鎌と彼女の鎌がぶつかり合う。辺りに金属音が鳴り響く。

しかし、鎌の形状上金属部位が当たるとツルツと滑ってしまふ。それで互いに力が流れていつてしまい、お互いの鎌が地面に刺さる。

「あー！」

「……なんですかこの馬鹿な戦いは」

「さよりの右ストレートだ」

そんなこと言われたって、鎌の形状上仕方ないんですもん！　なんて思っていたら相手は既に鎌を持っていった。

「ちよつと能力使ったけどいいわね？」

魂符【生魂流離の鎌】

「ちよつ……ッ！」

ギリギリで避けましたけどあれ結構危ない技ですね。

鎌をクルクルと回し始めたかと思ったらこちらに衝撃波が飛んできて、その後魂みいたいな弾幕が残っていましたね。

と、とりあえず私の鎌を……抜けた！

「これで平等ですね。平等院鳳凰堂ですね！」

「んー微妙、三点」

「何点中ですか？」

「百点満点中」

「低くないですか?!　ていうか貴女の名前は？」

「ああ、小野塚小町って言うよ。貴女は確か——」

「愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットと申します。どうかアツサとお呼びください」

「いや、私はアンタの名前知ってるんだけどね」

「……もしかして地獄行きのリストに乗ってるのか?」

え、まあ確かに今まで本ばかり読んで、神に祈るとかあんまりやってこなかったですけど……って言うか吸血鬼が神に祈ってどうするんですかねえ?

「まあ、確かに貴女は地獄行きのリストに乗ってるよ?」

「あー!! やつぱりい……」

「まあまあ、落ち着きなつて。今からでも挽回はできるからさ」

「それは良かったです……」

「なんでこの人達は地獄行きかどうかの話してるんですか? 数千年以上後の話ですよ

?」

「さとのワン・ツーが入りました!」

碎過さんさつきからそれしか言っていないじゃないですか!

ちよつとはこつちの心配というものをですね……

「おっと、よそ見は厳禁だよ?」

死神【ヒガンルトウール】

スペルカードが宣言された瞬間、目の前に小野塚さんが現れたと思つたら、勾玉のよ  
うな弾幕が張られ、すぐに避けるがすぐ次がやってくる。そしてその次はまるでハッ○

○ターンの様な弾幕とともに勾玉のような弾幕が張られる。それも避けると、円状に弾幕が張られた後、私を狙った三方向の弾幕が張られる。

ギリギリで避けていくが掠ったりもした。おかげで少しだけ血が出ている。

「ふう、危なかった……これは私の——」

「あたいの負けでいいよ」

「え？」

「第一、勝負するのはある意味通過儀礼みたいなものだよ。着いてきな、映姫様に会わせてあげるよ」

「は、はあ？」

なんで勝負が通過儀礼なんですかね……ていうか映姫様って誰？　もしかしなくて

もあの世関係の人？

「そうですね、映姫様……となるとあの世の、それも閻魔大王みたいなものですよ、アツサさん」

「え、閻魔って……本当に居たんですね。てつきり外の世界の日本でしか言い伝えられてないかと思ってました」

「まあ、旧地獄がある以上。今動いている地獄があるってことだね。そう考えれば、アツサは飲み込めるんじゃないかい？」

そう言われてみれば確かにそうだなと思える。旧地獄があるということは今の地獄がある。となれば自然と地獄と天国があるのは明白。そして、それらを管理する閻魔大王がいて当然だと思える。

ふと周りを見てみると、墓地……と言うよりも、足元に大量の石があつた。んー……石となるとあまりいい待遇を受けなかつた人とかが埋葬されてるんですかね？

「ん？ 周りの石が気になるのかい？ それはね、外から来た人間の墓だよ」

「外から来た人間……もしかしてこの辺り、結界が綻びてるとか？」

「そうだね、あるよ。それで外のものとかがどこからともなく流れてくるんだよ」

まさか本当に綻びがあるとは……なんとなく言ってみたんですけどね。

んで……何故か彼岸花さんが震えてるんですけど何故なんですかね？ というか、生きてたんですね彼岸花さん、てつきり死んだものかと……ってこれは彼岸花さんに失礼ですね。

「ん？ アツサが髪に挿してる彼岸花、妖怪なのか」

「そうですよ。私が枯れそうになっていたところに妖力を注いだら妖怪になりました」「んーとなると……その花も、怒られるかもね？ 名前は知らないけどさ」

怒られるって……もしかして罪を咎められるのかなんですかね？

「その通りです。愛杉・アツサツスイーノ・スカーレットさん」

「あ、映姫様！」

この人が閻魔大王かと思いつながら見てました。威厳のある人らしく、身長が高いです。うーん、身長高い人多い……多くない？ もうこれ頭にきますよ?! (憤慨) 身長分けろよ!

## なんでもお見通し（禍津神碎過君視点）

閻魔様という言葉のイメージは、髭を生やした大柄な男といった感じだった。それはもういかにも厳つい顔をしていて、傲慢な態度で死者を裁くのだ。

俺の世界の小町さんの口癖が『映姫様に叱られる』だったのも、そのイメージを加速させた。

「アンタが映姫様……」

「いかにも、私が四季映姫・ヤマザナドゥです。異郷のお人」

あまりのイメージとの相違に、ポカンと口を開けてしまう。

なんと、閻魔様は中学生のような出で立ちをしていたのだ。背丈は割りかし高めだが、顔立ちにはどこことなく幼さが残っている。右側だけ少し長めの翠緑の髪と、紅白のリボン。左右非対称のはずなのに、きっちりとした印象を受けるのは何故だろう。

「ははあ、いつもお世話になっております」

「相手を敬うのは良きことですが、そんなに畏まらなくても構いませんよ」

「そう？　んじゃ、遠慮なく……」

閻魔様のイメージとは遠く離れていたわけだけど、オーラというか何というか。映姫



と名乗る少女には思わずかしず傅つかきたくなくなる威かしず厳げんがあつた。

流石は死者の魂を裁く存在。前に立つだけで、不思議な緊張感がある。

「そんなことよりも、です。私はその吸血鬼——愛杉・アッサスイーノ・スカーレットに話があるのです」

「えっ、私!？」

「アッサさん、何やらかしたんですか？」

「ま、マズい。心当たりがあり過ぎる……!」

突然名指しで呼ばれ、困惑気味のアッサ。

そりゃあ、死後自らを裁くだらう閻魔様に呼ばれば誰だつて驚く。心当たりがあり過ぎるつてのは問題だけど。

「そう、貴方は少し周りに無関心すぎる」

「む、無関心、ですか……?」

「また映姫様の説教が始まったよ。こりゃあ、長くなるよ?」

やれやれと小町さんがため息をつく。

どうやら映姫様がこうして説教を垂れるのは恒例行事らしい。説教好きというところは、うちの頭ピンク色師匠と通ずるものがある。アッサはその犠牲となつたのだ……。

「貴方は幽閉されている頃、本の方に興味を示していましたね」

「そ、それは、本しか手元になかったからで……」

「それこそ言語道断です。周りに関心があれば、自分から外の世界に働きかけるものから」

「手厳しいねえ」

辛口評価の映姫様。そんな些細なことまで咎められてしまつては、俺なんて心当たりが十や二十はある。叱られるのがアツサで良かった。

「それからそう、貴方は少し甘すぎる」

「今度は甘い、ですか？」

ピンと来ていないようで、アツサはきよとんと首を傾げる。

「まあ、甘いですよね」

「そもそも甘過ぎの大あまちゃんよ」

「じえじえじえ！」

「うわっ、急にどうしたさとり？」

甘い——言い換えれば、心優しいということであるが、本人は自覚していないようだった。優しいのは美德に思えるが、その矢印が誰にでも向いてしまうのは少し問題だ。

例えば、タナトスとかいう奴にだって、アツサは氣遣つて全力を出せないやもしれない。

「勿論、それはとても尊いものです。ですが、時には心を鬼にすることも必要……心に留めておきなさい」

「はい、分かりました?」

ホントに分かつてるのだろうか? 語尾が上がったところが少し気になる。映姫様も同じなようで、目を細くしてアツサを怪しんでいる。

「まあ、いいでしょう。次です。そう、貴方のその髪に挿している彼岸花のことです」  
「あつ、これですか?」

アツサが髪飾りのようにしていた彼岸花を取る。オシャレな簪かと思つてただけど、それモノホンの彼岸花なんすね。

ん? 妖力……?」

「この彼岸花は枯れそうだったところを、妖力を注いで元氣にしてあげたんです」  
「それがいけないのですよ」

「えっ!?!」

思わず彼岸花を取りこぼしてしまふアツサ。

おおつ、何すんだつて感じて彼岸花がウネウネ蠢いている。コイツ妖怪やんけ!

ずっとアツサの髪の毛に隠れてたなんて不届き者め。

「幻想郷では、新たに妖怪を生み出すことは御法度とされています。矮小な植物だからまだしも、人間なんて妖怪にしたら則ち地獄行きですからね？」

「さ、流石にそんなことしませんよお」

やだなあ、とアツサは頭を掻く。映姫様は眉間にシワを寄せて怪訝そうな顔をする。

「……では、道端で人が倒れていたとしましょう。その人は死にかけて、永遠亭に運び込む時間もありません。さて、貴方はどうしますか？」

「そりゃ血を分け与えて……あつ」

アツサは今更口を押さえるが、時すでにお寿司。さとりは呆れた顔をして、小町さんは頭を抱える。俺は堪え切れず嘔き出した。

「そう、貴方はそこで見捨てるという選択が取れないから、危険な甘さなのです。努々ゆめゆめ忘れぬように」

「ぜ、善処しますう……」

アツサはすっかりしよぼくれて項垂れる。

でも……目の前に閻魔様がいるというのに、迷わず人間を助けると答えたアツサを素直に尊敬する。究極の天然と言い換えることもできるが、アツサはきつと本当に人間のことが好きなのだろう。

そんなアツサが、ちよつとだけ眩しく感じた。

「さて、次は貴方です。禍津神碎過」

「へ？」

間抜けな声が零れる。笑つちまったのが悪かったのか、いつの間にかヘイトが此方を向いていた。

助けてアツサちゃん。さつきは笑つて悪かったよ。謝るからさ、だからお願い助けて。

しかし、俺の視線の先でアツサはほくそ笑む。悪魔の笑いだ。さつきはよくも笑いものにしてくれましたねさまあみろ、と目が物語っている。

「貴方は日頃、人間が好きだと口にしていきますね」

「その通りでございます」

まさか人間が好きってだけで叱られることもあるまい。俺は胸を張つて答える。

「確かに貴方の行動はその理念に沿ったものでしょう。人のためと紅い霧を出す館に赴き、亡霊から春を取り戻し、宴会好きの鬼を討つて、永遠に続く夜を終わらせた。

恩に着せる態度も取ることなく、大したものです。称賛いたしましょう。あつ、頭なでなでしてあげましょうか？」

「いえ、結構です」

映姫様の提案を丁重にお断りする。赤面しているところを見るに、冗談のつもりだったのだろう。凄く可愛らしい。こんな上司を持つて小町さんは幸せものだね。

アツサのように散々叱られると思えば、何故だかめっちゃ褒められた。逆に不気味である。

「コホンっ、そう、本当に素晴らしいのです。だからこそ一つ、貴方に言っておきたい」わざとらしい咳払いで、映姫様は場の雰囲気を引き締め直そうと試みる。でもそれは逆効果で、引き締まるどころか映姫様のこほんっで咳払いが可愛すぎて和んでしまった。

だからこそ、その口からあんな言葉が紡がれるとは思わなかったし、目つきがガラリと変わったことにも驚きを隠せなかった。

その瞳を見てしまった瞬間、悟る。この人が閻魔様なのだ、と。

どこまでも、何処までも透き通った瞳。俺の胸の内は全て見透かされている。隠し事など、この人にできやしない。

「本当は貴方は——人間のことなど、好きではないでしょう？」

その言葉が、俺の耳の中でずつと反復横跳びをしているかのように、頭から離れない。手強い魚の小骨のように、胸に刺さってなかなか取れない。

諭えが絶望的に下手つぴだけれど、要するに、俺の心は揺らいでいた。

## 罪と罰

え……？ あの禍津神碎過さんが人間好きじゃない……だと……？ いやいや、あんなにも善人オーラがある人が？ いやいやまさかあ……

「とりあえず、この事に関してはそちらの世界の私が詳しく言うでしょうし、ここまでとします」

「は、はあ……」

「あそこまで雰囲気が変わるとは……流石闇魔様ですね」

若干うわ言のような感じに褒めてしまったが、実際そう思っている。

まあとはいえ、お預けというか一生聞けないと考えるととても悔しいですけどね!!

悔しいデスツ！（某芸人）

「お説教はここまでかね。まあ珍しく短い方だったね。良かったねアツサ」

「え、あ、まあ……そうですね……？ なんか複雑なんだよなあ（ボソツ）」

「あら、あなた達には今、大事な用事があるので？」

「うーんと……。あ、そうでしたね……風見幽香さんを退治しなければでしたね」

すっかり忘れてたって言うか……思っていたよりも説教の方が短かったから意表を

突かれたというか？ まあ忘れてたつちやあ忘れてたので、忘れてたつてことにしときましようかね。

「まだ怒られ足りないと思ってるんですか？ でも時間が無いですしね……また今度ですね。貴女達が風見幽香のところに行っている間、小町を叱りますかね」

「ええ?! 私がですか?! こりやまたなんでですかね……?」

「分かっているとは思いますが、貴女はサボり過ぎている。その件で——」

今の内に太陽の畑ヘレッツラゴーしちゃった方がよさげですねこれ。

「第一ですね、貴女のそのサボり癖のせいでこの間も霊が溢れかえりそうになっていたんですからね。それに——」

「……小町さん、絞られてんな」

「なんかまだ離れてはいけない気がしてきた……」

「ちよつと、アツサさん。碎過さん、さつさと行きますよ?」

「はい……」

結局私達は小町さんが怒られているのを横目に、無縁塚を後にするのだった……

ごめんなさい、小町さん。あなたの犠牲は忘れません（記録三步）



「それで……太陽の畑に来てみれば」

「まさかあんなに沢山あつたひまわりが……」

「妖怪化してるとは思いもありませんでしたよ!？」

本当……なんででしょうね（白目） 途中から弾幕を張ってくる花達に出会いながら  
まさかまさかと思つたらこの有様……私より大罪じゃないですか?!

何やつてるんですか、風見幽香さんは?! 花が好きって聞いたことはありませんけ  
ど、全部妖怪化させる程に嫌いになつたわけじゃないですよね?!

つて、あつ、待つてくださいよ彼岸花さん。あなたを妖怪化させたのは枯れて欲しく  
なかつたからで……。

え?! 私の髪を出ていく?! そんなご無体なあ……ふえ? 冗談? よ、良かった  
……

「アツサ、どうしたんだそんなに顔をコロコロ変えて? 百面相の練習か?」

「いや、違いますよ……。ただ彼岸花さんと話してたんですよ」

「そういえば、その彼岸花も妖怪だったな。声出せるの?」

「んー……。大きな声は無理ですけど、ギリギリ聞き取れるくらいの声なら出せますよ」

「はえ、〜」

……なんでこんな状況でこんなマヌケな会話してるんだ私達は。まあいいけども！  
気が楽になったけども！ でもやつぱり妖怪化しているとはいえ、植物は植物だ。出来れば綺麗なまま残しておきたい。

そんな考えを殺さんとばかりに無慈悲に攻撃してくる、ひまわり。まあひまわり以外にもあるんですけど、何故か攻撃してこないんですよ。

……そろそろひまわりゾーンも抜け——ツ!?

「なんですかこの妖気は!？」

「それも尋常じゃないゾ〜?」

「(このままで) 死んじやうんじやないの☆(某コック)」

「あらあ、あなた達もチョコを買いに——」

「それ以上はいけない!!」

私と碎過さんはほぼ同時に蹴りを入れた。

蹴りを入れたはずだった。

なのにそこにはひまわりがあった。

「!?!」

「そこまで驚くことじゃないんじゃない? まあ、昔の私だったら、殺す勢いで怒るだろうけど……今の私では怒るも何も、感情が抱けないわね」

「貴女は、なんでそこまで力に執着してるんですか……?」

「簡単、花を守るため……だったわ」

「だっただったことは……力に溺れたってことですかねこりや。ていうかなんでひまわりをあの某早口オバサンと見間違えたんでしょかね……?」

「まあいいとして。今にも首が飛んでっちやうんじゃないかってほどの殺気ですねクオレは……自分、チビっていいですか?」

「ダメです (某先生)」

「ああああああああ (某以下略)」

「なんでこうなってるんですかね…… (放心)」

「怖すぎて漏らしたのかしらね? まあそれも私の強さあってこそね」

「違いますねえ?! (某先輩) 確かに貴女の妖力はとんでもないんですが、ちびる程じゃないんですよ。」

「チビったのはその殺意にですよはい……。うん、素直に操るか……」



風見幽香さんがしたのも、私がしたのも単純なこと。風見幽香さんは私に対して拳で挑んできた。私はそれを握り潰すように止めた。

「確かに貴女は強くなつたのかもしれない」

「クソ！ 離せ！」

「しかしですね、妖怪としての位的な意味ではそもそも私より下なんですよ貴女は」

「離しなさいよ！」

「話聞けやオラア！」

「グエツ！」

そう言つて私がやったのは腹蹴り。膝で思いつきりやったので、かなりの威力かと。というか話を聞かなければ殺すくらいでもいいって言う、スカーレット家の家訓に従いましたまる

「それ……嘘ですよね？」

「まあもちろん嘘ですよ？ そんな家訓ある家なんて潰れてしまえばいい」

「話を聞いてれば随分と舐められたもの……ねツ!!」

「グヘエ!! 頭突きは卑怯ですって！」

「なら膝で腹を蹴り飛ばそうとしたのも卑怯よね！」

「うわつと。手刀が簡単に頭に入りますかっつてんだよ！」

「きゃあ!!」

最後に一発入れたのはパンチ一発。まあある有名な人が言っていましたね。

「パンチは必ず一発だけだ」

「それじゃあ私を倒せな——」

「ただし蹴りは何発も入れるんですの!!」

「なッ!」

「まあとはいえ、何回も蹴るのも面倒です」

だから……うん。汚つたない方法だなこれ。考えたのは……私か。うん、今後絶対使わないようにしよう。

「その一発のパンチで貴女の改良された部分を治殺したしたら?」

「なっ?!」

「それ、ありがよ……」

「まあ、今やアツサさんの能力は言わば森羅万象を殺す程度の能力……らしいですよ」

「それも、程度の能力じゃないんじゃないの?」

アイアグリー。いやまじ本当、なんでここまでの怪物能力になったのやら……?

……あ、そつかあタナトスのせいだったわコンチキショー!!!!

「花が……これから私はどうすれば——」

「また、お花育てて下さい」

「でも、取り返しのつかないことをしてしまった……」

「それを分かっているなら……必ず罪を償うことは出来ますよ」

「……そうか、それもそうね。なら……」

その刹那、私はとんでもなく遠くまで殴り飛ばされていた。

……は？　なんで今の方が強いんですか?!　想い人（お花）がいれば最強ってことですかあ??!!

「後ついでに貴方も……」

「ちよつ待てよ（某キムタク）」

「あ、じゃあ私も……」

その日、幻想郷で三つの流れ星がお昼に見れたとの報告がありましたとき。

……はあああ、もうこの関係はこりこりですう。

## お手合わせ（禍津神碎過君視点）

異変は終わり……いや、アレを異変と表すのかも甚だ疑問であるが、とにかく風見幽香の暴走は収まり……収まったのか？ 最後に何故かぶん殴られた辺り非常に怪しいが、まあ、よしとしよう。

とりあえず異変と思しきものは無事解決され、一段落ついた我々は博麗神社に来ていた。元の世界に俺を返す為である。

結界の専門家と云えば、世界が違っててもやっぱり博麗の巫女なのだ。別に俺を攫った張本人の八雲紫でもよかったのだが、呼んでも来ねえ。

勝手にこんな世界に落としたから、姿を見せたら殴られるとでも思っているのだろうか。その通りだよ、先生怒らないから正直に出てきなさい。

「そつか。もう帰っちゃうですよね、碎過さん」

「あんまり長居してつと、あつちの霊夢が心配しそうだからなあ」

そんなことをアツサに言いながら、こつちの霊夢を一瞥する。

なるほど、あれは霊夢だ。気怠そうに此方を見ている感じがすごく霊夢みがある。霊夢といえば億劫・面倒・気怠げの三拍子。その条件さえ揃えていれば、それはもう霊夢



だよ。

「そうですよね。残してきた人達がいるのに、あんまり引き止めるのも悪いですよね……」

寂しげに気落ちするアツサ。そこにはないはずの耳や尻尾がしゅんと垂れ下がっているのを幻視する。

なあ、気付いてるかよ。お前ですよねっってもう三回も言ってるんだぜ？

「うーん、そうだな。じゃあ、最後に手合わせでもするか？ 思い出作りっことで」

「あつ、それ良いですよね！ 是非やりましょうですよね！」

「……さとり、お前の配偶者がおかしくなってるぞ」

「まあ、いつも通りですよね」

「か、感染してる……!?!」

恐怖でわなわなと唇が震える。

いやはやなんとも、さとりまでもがですよねの毒牙にかかってしまうとは。俺もいづれ感染してしまうのだろうか。恐ろしくってたまらないですよね。

閑話休題。なんやかんやありながらも、鳥居の前でアツサと向き合う。

「そんじゃ始めますか！」

「はい！ 『アダマスの鎌』！」

アツサが何処からともなく大鎌を取り出す。アダマス……征服されない鎌。

レミアアは槍、フランは剣——そして、未っ子のアツサは鎌ときた。姉妹でそれぞれ得物が被らないようにしたのかね？ じゃんけんで決めたとかエピソードがあつたら萌える。

俺は紐を解いて、背中に括り付けていた大太刀を前に持っていく。無論、鞘に入れたまんまだ。

「やつぱりその剣、抜かないんですか？」

「ああ、これは曰くつきの妖刀だな。お目にかかりたきや俺にコイツを抜かしてみな」  
「へえ、それは面白そうですね」

ニヤリ、といった効果音がつきそうな、吸血鬼らしい不敵な笑みをアツサが見せる。

このしたくもない縛りプレイにも最早慣れたものだ。ガチルノはこれで倒したし、元の世界では白玉楼の庭師とも鞘越しの刀で相手した。

アツサの実力を正確に測れているわけではないが、まあ問題ないだろ。（フラグ）

「先手必勝だ！ おいさあッ！」

「変な掛け声ですね!？」

石畳を蹴り、アツサに向かって突つ込む。

俺は基本、戦いでは先手を取るよう心がけている。相手が女の子だろうが関係ない。

レディーファーストなんて紳士の言葉には知らんぷりする。

理由は単純で、俺が五尺三寸の長物を使う以上、懐に入り込まれるのが嫌ってだけだ。

「はあっ！」

横に難いだ名月の下に潜り込むことで、アッサは俺の一刀を躲す。

避けられるとは予想していたが、なかなか鮮やかな身のこなしだ。箱入り娘だと思っていたけど、さては戦い慣れているな？

さておき、俺の初撃を躲したアッサは流れるように攻めに転換する。ぐるんと背後に持っていた鎌が、地面すれすれに振られた。

俺はそれに対して、縄跳びの要領でピョンと跳ねる。

「まだまだあー！ 私の相棒は曲者ですよー！」

ガゴンツ、と機械的な音がいきなりしたので、俺は何事かと目を見張る。

何処から音が発せられたのかは直ぐに分かった。

なんと、アッサの鎌が変形していたのだ。刃の部分が持ち手に這うように折りたたまれている。何故そんなギミックを施したのか。いや、俺の思考を一旦止めたのは間違いないけれど。

アッサがその奇妙な形状をした武器で切りかかってくる。俺は咄嗟に名月で防ぎ、コンツ、と小気味よい音が鳴った。

「まだ変形するのです!」

「そんなもんよく仕込みましたねえ!」

再びガチャガチャとメカニックな音を鳴らして、アッサの鎌だったものが変形する。

「今度は薙刀かよっ!」

お次は刃が持ち手の先に移動して、薙刀の形に変形した。その奇抜なアッサの追撃を、やはり名月を合わせて防いだ。

鎌使いとやり合ったことはあるが、流石にこんなヘンテコな武器を使う相手とは戦ったことがない。少なくとも動揺が、俺の動きを鈍くさせる。

だが、段々分かってきたぞ。俺は洞察力は意外に鋭い方だ。トリッキーな武器であるが、刮目すればその構造上の弱点が見抜ける。

「防戦は嫌いな性分だな、攻守交代だ!」

「なっ!」

鋭鋒を思いきり突き出し、薙刀の刃と持ち手の隙間に差し込む。

「刃を開けば薙刀、折り畳めば大? 刀——大層な鎌だが、ウィークポイントはその繋ぎ目だいさつとうだな?」

鏝に異物を差し込まれてしまつては、支つかえてトランスフォームすることができない。

深く、息を吸い込む。幼女の良い匂いを堪能しているのではない……。心を落ち着か

せているのだ。

これからほんの少し、災いを操るから。

「行くぜ、砲禍」

## リコリスラジアータが咲く頃に

## 始まり

とうとう決戦の日が決まった……というより、勝手に決められたんですよ、あのタナトスに。

曰く、リコリスラジアータが咲く頃……つまりは秋だそうです……早くね？ 今夏ですよ？ 馬鹿なんですか？ そういえば、○○なんすつて言う私の性癖にめっちゃ刺さる人がいたような……？

「アツサさん？ そんなこと考えてる場合ですか？」

「さとりん!! い、いやあ、でもまさか私だけしか来るなど言われるとは思いませんでしたねえ……」

「そうですね」

さとりんがそう言つて微笑む。なんだろう後で説教されそうなくらい、笑みに殺意がこもつてる気もする。

……後で能力使いますかね、説教は嫌ですし。と言うよりも、今不機嫌なさとりさんを見たくないつてもありますけども。残り残された時間ぐらいは笑つて過ごしてい

きたいですし。

「なら、なんで私よりも胸の大きい方を想像するんですか?!」

「いやあそれはね……母性? 感じちゃうんですよね」

「なんだろう、気持ち悪いのやめてもらっていいですか?」

さとりん、気持ち悪いってそこまで素直に言われると逆にスッキリしちゃうからやめよう? さとりん可愛いんだから。ね?

「スッキリってなんですか! スッキリって! 人が怒ってるんですよ!」

「ご、ごめんなさい!!」

私は綺麗に土下寝を披露する。こんな会話一度や二度だけじゃないし、お姉様達と一緒に訓練するようになってからもよくあったから、慣れてるのか端でにやにやしてる。

……そういえば碎過さんとの勝負の結末を覚えてないんですね。そこだけすつぱりと穴が空いたように記憶が無いんですよ。何故なんですかね?

「全く、なぜ土下座じゃないんですか……ていうかその姿勢、最早寝てますよね?!」

「そりゃ土下寝ですから……」

「もう……本当に馬鹿な方なんですから」

土下寝から起き上がった私がこういうことを言うのもなんですけど、その時のさとり

さんの顔……とても悲しそうに見えました。

「それで、何の用だい？」

「いえ、なんとなく……ですかね？」

「なんで君はそう適当なんだろうね」

そう言つて笑う一護さんは儂くそして何より、社畜さんと重なって見えた。

そうだ、あの人もそんなふうにいるも私が何かやらかしたりすると、苦笑いを浮かべたりしていた。

「なんで今日に限つて皆さん私に向けて儂い顔を見せるんですかね？」

「寂しいんだと思うよ。それに怖いんだよ」



「怖い？ 私は殺されたりしな——」

「君が誰かを殺すことが。だよ」

「でも今更私は殺したとしても狂気に飲まれることは無いですよ？」

「んー……神をも殺すとなると、その快感は計り知れないものになる。それに、君は前科持ちだからね」

苦笑いしながらそう言う一護さん。確かに私はそういう意味では前科持ちだ。確かに言い逃れはできない。

その上、またやらかすかもしれないとなると……あー、本当に言い逃れとか出来ませぬね私。こまっちゃんぐ！

「まあその必要はなさそうだけどね」(ボソ)

「？ 何か言いましたか？」

「いやなんでもないよ。ほら、自分の姉達のところに行きな」

「は、はい！」

「ありやダツシユで行つちやつたよ……。まあいいか、もしかすると最後の姉妹の会話かもしれないしね」

「それで、最後は私たちの所に来たってわけね」

「はい、レミリアお姉様！」

「うー……サイカを逃したのは痛かったわね」

「まだ言ってるんですかフランお姉様……」

　なんだかんだでお姉様達と話しているのが一番落ち着く。でも砕過さんを未だに狙ってるのは怖いですよフランお姉様……いやマジで。居なくなっただの一月くらい前ですよ？　流石に言い過ぎですよ……。

「でも変わりなさそうね。きつとあのタナトスを殺したとしても……ね？」

「そうだね。仮にあの憎いタナトスを殺したとしても、アツサはアツサだよ」

「レミリアお姉様、フランお姉様……ッ！」

　思わず涙が出てしまった。二人とも慈悲に溢れた満面の笑みを浮かべているのだから

ら。とても優しい、家族にしか向けられない笑みを私に向けてくれているのだから。

私は日本に流された後、しばらくは日本語しか喋れなかったのに、それでも何とか理解しようとしてくれたのはレミリアお姉様とフランお姉様だけだった。

お父様は気がついた時には死んでいた。いや、私がかつと殺したのだろう。あそこまでの酷い親は中々居ない。

つと、家族の話はまたいつか時間がある時にしますか。

「ふふ、懐かしいことを思い出してるのね」

「……やっぱりバレましたか」

「ええ。あの憎い憎いお父様のことを考えてたのでしよう?」

「そ、そこまで憎まなくてもいいんじゃない?」

「まあこの話はまたいつかしましょう。今は——」

「もつと楽しいお話しをしましょう、アッサ? つて言いそうだよねお姉様は!」

「そうね……楽しい話をしましょう」

そう言つて私達は三日三晩語り続けた。

……いや、さすがに寝たりしましたけどね?! なんならさとりんも入つてきましたけどね?!

そして来たる一月二十四日。

「嘘をつかない！」

「すんません！ すんません！ そうしろって一護さんが言ったんです！」

「闇乗式さん!？」

「違うよ、アツサ君が勝手に言ってるだけだよ」

「アツサさん?!」

「だから一護さんが——」

「だからアツサ君が——」

「そもそもアツサでしょ、心の中で意味わからないこと言い出したのは」

「ウグツ！ そうですけども……」

「適当なこと言ってたら、変なことになったんですけど（当然）」

もうやめちくり、くって感じですよ私的には。ていうかこれから決戦なんですから……まあ私はアンオンアン強いですからね。

「まあ取り敢えず、頑張ってください。これから勝負ですけど」

「まあ大丈夫ですよさとりさん。必ず、帰ってきますから」

兎にも角にも、やるしかありません……タナトスを。

「あら、本当に貴女一人なのね、バカ正直に来るとは思わなかったわ。

てつきり人に頼りがちな貴女のことだから泣いて喚いて、他の奴らを連れてくると思ってた」

「そんな訳ないじゃないですか！ どこまで人を小馬鹿にすれば気が済むんですか!」

「あら、元吸血鬼の貴女が人って名乗るとはね」

ウグツ……痛いところ突くなあ。まあでも、本当に「人」ですし、仕方ない……仕方なく無い？」

「取り敢えず、貴女の……が……欲しい！ で合っていましたっけ?」

「知らないわよ。とにかく、早く殺し合いを始めましょう?」

「ええ、殺つてやりますよ。ちなみにさっきの貴女が欲しいは、貴女の首が欲しいで正解です仲間違いない」

自己解決はレズの嗜み。まあとにかく、本気と書いてマジと読む、殺し合いが始まっ

た  
の  
だ。

髑られ、咲いて

「ほらほら、まだ終わってないわよ？」

「アガアアアア!!!」

「ただ鳴いてばかりじゃ困るわね。じゃあこれはどうかしら？」

「ツツツツ!!!」

「やつと黙ったかしらね？」

さつきから蹂躪されてばかりだ……なんでここまで強いのだナトス。

死ぬよ？ さつきから喘いでるけど死ぬよ？ まあ後は殺すだけですし、仕事自体は

楽です……楽ですけど、

「さつきから何度も私を殺してるようだけど無意味よ？ 私は死を司るのだから」

そう忘れていた。タナトスが死を司っていることを。忘れていた。彼女は、決して本気を出していた訳では無いということ。

数時間前……

「来た……のはいいけどここじゃ無駄に狭いだけね」

「狭い？ 結構ここ広いと思いますけど……」

「そういう問題じゃないわよ。まあとりあえず、神界に移動ね」

ちよつと女子イ?! 何勝手に決着の場所を変えた上にキモイ所に送ろうとしてるのオ?!

やめろー! (建前) やめろー! (本音)

「まあそんなこと考えてる間には着いてるのだけどね」

「しかも何ですかここ……コロシアムじゃないですか」

「折角、【人】を飛ばすのだからこの位はやらなきゃね?」

聞こえてくるのはタナトスを応援する声ばかり……その上、私を食べようとか話してる声も聞こえる。こっわ、神本当にこっわ。

「じゃあ始めましょうか……【人】を殺すショーを!!」

『ウオオオオオオオオオオ!!』



「なんとも連携が取れてる奴らですな……」

「あら、そんなこと言ってる場合かしら？」

そう言われた途端、私の体は宙に浮いていた……いや正確には、蹴り上げられた。

「グエ!!」

「まあこの程度じゃ死なないわよ……ね!」

「ハカツツ……さつきから黙って食らってりやあうるさい野郎ですね! オラア!」

一発。その攻撃で終わるはずだった。なのに、平然と立っていた。

「なっ!」

「この程度じゃ死ねないわね。ほら更に行くわよ?」

「くっそおおお!!」

それからというもの、私は何回もタナトスを殴った。その度に、殺す能力を上乗せしていた。なのに一切効いてない様子を浮かべていた。そんな中で思いつきりタナトスが私を蹴り上げた時のセリフがさつきのだ。

「さて、能力の格差つてやつを見せつけたところで……」

「ツ?! ガアアアア!!!」

「右腕、壊死したわね?」

「なんでバレて——」

「まあ、私の能力で……ね? やっぱり、死なすのはいいわね〜気分が楽になるわ」

「そんなこと言われても……カプツとな」

「あら、血を吸って大丈夫かしら?」

大丈夫大丈夫、一時的に身体を吸血鬼に戻しただけですし……ってなにこれ?! 人の味が殆どしない! 現人神って殆ど神に近いんですね。つてそりやそうか、人の状態のまま神になつてるんですからねつてまっず!

「だから言ってるじゃない。神の血を吸っても大丈夫かつて」

「な、なっ……イヤアアアアアアア!!!」

「死ぬかしら、これ。まだ死なれたら困るのだけどね? まあいいわ、食べるがいいわ

!」

そう言われて、私は神共の方へ投げられる。ポトツと音がするとそこへ、神共が群が

る。

「幼子じやのう！」

「食べ頃かどうかは別として、食うてやるか」

「いや、いやあ……」

まずい、このままでは食べられる。とはいえ飛べる訳じや……いや、飛べる。神力を使ってみるしかない。つーか気持ち悪いんだよなあ……いや本当、なんでここまで気持ち悪いんだコイツら。

「な、こやつ！ ワシらと同じ神力を!!?」

「やろうと思わなかっただけです。貴方がたと同じじや嫌ですからね」

「あら、壊死した部分が全て治ってるわね……?」

「吸血鬼に戻した時、貴女から血を吸った分、回復にまわしましたからね……危うく死ぬかと思いましたが」

やれやれ、死にかけましたが何とか生きてますね。それにしても神力を使う時が来るとは……まあ有り得る話ではありましたが、仕方が無いといえそうですね。

「さて、第二ラウンドと行きますかあ?」

「やってられないわね。また移動しようかしら?」

「させないですよ!!」

持っていたアダマスの鎌を振ると、どつかで見たことあるような衝撃波が飛んでいく。

「ちい！ 小賢しいガキね本当!!」

「小賢しくて結構、ガキで結構。だけど、小さいとか言うのヤメロウ！（本音）」

「あら、事実ではなくて……つてあらあら？ 貴女の彼岸花……咲いてるわね」

「元から咲いてますよ?! いや、最近枯れてたので……このタイミングで咲きますか!？」

「アツサ……」

「はい？ 何ですか彼岸花さん？」

「喋れるの?!」

「喋れますよ当然なこと言わないでくださいよ？ ねえ、彼岸花さん」

「そんなことはどうでもいい。既に呼んだ、後はお前次第だ」

「そ、それってどういう？」

「まあ、僕たちが来るって訳だよね」

「アツサく!!! 寂しかったよ!!」

「アツサ……いや、なんでもないわ」

「アツサさん、頑張ってますね。偉い偉い」

「アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ  
!!!! バブみが強い

よさとりん!!」

「気が付いたら居てね……まあいいや。君には天罰が必要らしいね、タナトス」

そういうと一護さんは今までにみせたことの無いほどの眼光をしていた。ギラッギラですね。まさに殺してやるって感じの眼ですね。

「ふ……ふふ、今更何が天罰よ!」

「え? 分かってないの? 僕の弟子を黽つた罰。それに色々あるけど……世界壊しすぎ。僕の労力無駄に使う羽目になるんだけど?」

「うわ、めっちゃ殺す気満々だけど、理由が割と適当だ」

「それ言われたら参っちゃうなあ……」

「やれやれですね……」

まあこれで形勢逆転。今度はこっちが黽つてやる番ですよコノヤロー!!!

「『想起』……へえこんなのが嫌なんですな 『破壊』」

「な、それは……ウワアアアアアアア!!」

「あ、死なないんですね。存在ごと破壊したつもりですが」

割と手加減なしだねさとりん……そんなところも可愛いよ!!

「じゃあ今度は私が処す番ね? 『スピア・ザ・グングニル』これが私の奥の手、そして

単純な手とも言うわね。ハア!!!」

「こんなもの……掴んで——」

「掴めば……死ぬわよ？」

レミリアお姉様がそういつた瞬間、タナトスは塵と化した。が、直ぐに復活する。

「これじゃあ罫が明かないわね」

「それが彼女の腹の立つところだよね」

「じゃあ私がやるわ！」

「フランお姉様?!」

確かにフランお姉様の破キユツとしてドカン壊は多分私達の中でも指折りの威力の技だ。だけど……

肝心のフランお姉様が少しだけ不安定というか。危なっかしいちや、危なっかしいトド

メだ。

「じゃあやるよく！ 『キユツとして』——」

「隙ありい！」

「なっ?!」

その瞬間、フランお姉様から目の光が無くなった。

## 本当の話

「フランお姉様?! タ、タナトス……貴様ア!!」

「あら、そちらが人を増やしてきたからそれを横取りした迄よ? まるで将棋ね。まあ、抵抗力が強過ぎて意識も無意識も死なす羽目になったのだけどね」

「よくも……よくもお!!」

感情に任せて大鎌を振りかぶった時、タナトスがフランお姉様を盾にするように後ろに隠れた。

「……っ!? き、汚いぞ!」

「だーかーらー、どっちの方が汚いって言うのよ? まああくまでも、その彼岸花が勝手にやった事だから、貴方を汚いって罵るのはお門違いかもしれないけれどね?」

「フランお姉様! 目を覚まして!! タナトスの言いなりになってはいけません!!!」

「フラン君くアツサ君を取っちゃうよ?」

一護さんがそう言った瞬間、フランお姉様は今までにないほどの速度で、一護さんに詰め寄る。

「わああ、これ本当は生きてるんじゃないの?」

「フラン、憶えてるんでしょ？ 死んではいけないのでしょ？！ 思い出してちょうだい！！」

フ ラ ン s i d e

ここはどこ……？ 私はどうなってるの？ さっき突然、タナトスに……ダメだ、この先を思い出そうとすると、頭に霧がかかる。

……？ 向こう側が光っている。行ってみようかな？

【アツサ？ アツサなの?! やつと会えたわ！】

☒ えつと……レミリアお姉様？ 何を言っているのかサツパリです☒

【アツサ？ アツサ？ どうしたのよ、早く喋ってよ?!】



これは……アツサが日本ってところから帰ってきた時の記憶？　なんでこんなものが今更……？　ま、まあ折角だし見ていこうかな……。

☒ えつと……これつてもしかして英語？☒

【アツサが喋っている言語が分からないわね……取り敢えず、家に帰りましょう？】

【お姉様、ハンドシグナルで伝えましょう？】

【それがいいわね！】

この頃の私達、ハンドシグナルが下手ねえ……アツサが困ってるじゃない。

まあでも少しだけ伝わってはいるみたいね……？

☒ えつと……飛ぶってことかな？☒（手をバタバタさせる）

【可愛い……】（レミリアから鼻血が出る）

【お姉様?!　ちよつアツサ、鼻血止めるの手伝って！】

☒ あわわ……さ、さすがにこの状況なら私でもハンドシグナル無しでも分かりますよ。レミリアお姉様、フランお姉様！☒

はあ……アツサは昔から可愛いわね。私まで鼻血出しちやいそうよ？　この時は大変だったわねえ……なんせお姉様が鼻血を出したせいで、血が足りなくなつたし。

それにしても私の姿は見えてるのかな？

「お〜い！」

試しに声をかけてみたけど……うん。誰も反応してないわね。ちょっと悲しいけど、声が届かないのはこれはこれで少しだけ楽だね。

☒ えっと……ティツシュ、持ってきました！☒

【ありがとう！ えっと……えい！】

☒ 鼻に直でいきましたねフランお姉様……☒

【うう、血が足りなくなってきたわ……誰か血を吸わせてくれないかしら？】

そういうった途端に確かお姉様は――

【はむっ】

☒ わあ……知らない人の首から血を吸ってるよレミリアお姉様☒

【案外誰でもよかったりするのかな、お姉様】

【ぶはあ。いや？ 匂いで判断したわ、美味しいかどうか。まあまあね】

【何か言ってるっぽいけど聞こえないわねえ……まあいいけど】

確か叫んでいたような気もするけど……だからこそ、うるさいと思って聞こえないよ  
うになってるのかしら？ そうしたら案外便利ねこども。

……というか、本当ここ何処なんだろう？ 自分の頭の中なのかな？

☒ そう、ここはフランお姉様の頭の中☒

【?! 私に話しかけてるの？！】

【そうに決まってるわ。で、どんな部分を見たいの？】

「私は……ツ！」

【そう、流石は私ね。じゃあ行きましよう？】

「ええ、行く」

そう言つて私達はアマゾンの奥地へと向かうのだった。

「ここは……ああ、アツサを連れて帰つたあとね」

周りを見渡すと、まるで墓場のような寂れた場所に、赤い、紅い大きな屋敷が建つていた。そう、紅魔館だ。

【えつとここは、家……ですか？】

☒ええそうよ。貴女のお家。それがこの紅魔館☒

☒ まずは、お父様に会いに行こう？ アツサ！☒

【えっと、分かりました。ついて行きます】

いつの間に、アツサは英語を。私とお姉様は日本語を習ったのかしら？ ああ、そう  
 だわ。飛んで帰る前に、アツサは英語がどうの言つて、私達に英和辞典。アツサ  
 は和英辞典を買つて、飛んで帰つてる時に読み込んでいたのだっけ？

よく分かるわね。よく見たら辞典、ガン見じゃん……やれやれね。

【中つて凄く迷路みたいですね？】

☒ まあね……かなりの人間とかが入り浸っているからかしら？☒

☒ お、お姉様……日本語の上達早いね！☒

☒ まあ、スカーレット家の名において、これ位は出来ないかね？☒

【わ、私出来損ないですかね……？】

☒ とんでもない！ よく喋れているわ☒

☒ そうだよ！ それに、アツサが出来損ないなら、私も出来損ないになつちやうわよ

？☒

☒ フランお姉様……！☒

意外とこの時から優しいものね。まあ、私ですしね！ この位は当然よね！

☒ それで、えっと……お父様に会うんですけどっけ？☒

☒ そうね。最悪、私とフランで殺すかもしれないからよろしくね？ ☒

☒ 物騒ですね?! ☒

☒ しょうがない、アツサを三十年も日本に放置していたんだもの! ☒

☒ っん……なら納得? ☒

アツサが小首をかしげてるわねえ……可愛い! うん、アツサのさとりさんに対しての愛情が異常だと言ったけど、私も大概ね……しつかりしないと。

【……お父様、失礼します】

【いいだろう。入ってきなさい】

相変わらずムカつく声だなあ……一回殺してあげようかな? いや、そんなことすると大変なことになりそうだから我慢我慢……。

【……! アツサか。どうだった日本は。お前でも簡単に支配出来ただろう?】

【……? どういうことですか、お父様?】

【その言い草……支配出来なかったのだな? この役立たずが!!】

【ヒッ!! ご、ごめんなさい!】

【お父様! そんな言い方は——】

【うるさいぞ、レミリア! こいつは所詮出来損ないだ!】

【……お父様?】

【なんだ、フラン】

すつごい機嫌悪そうだなあ……嫌な奴ね本当に。

【死んでください】（ニツコリ）

【なっ！】

でも私がそう、お父様に告げた後――。

☒ いや、嫌アア!!! ☒

【な、なん……だ……と】（バタツ）

【フラン?! 本当に殺ってしまったの?!】

【いや、私じゃないわ。恐らく……】

【アツ……サ? アツサがやったの?】

☒ ……またやってしまいましたか、私は ☒

☒ またって……前もこんなことが? ☒

☒ ……ええ。一番好きな人を、この手で。それでは、私はある人に会ってきますね ☒

その言葉を最後にアツサは……アツサは、地下に自ら籠もり始めたのだったわね。

## 死んだ最強

アツサ side

さつきから、フランお姉様がピクともしませんね……いや、言い方悪いですね。ピクリとも動かない、ですね。

……気味が悪いというかなんというか。確かに、意識も無意識も殺された。でもそれでも何も動かないのは操られてないってことなんだろうきつと。

「と、取り敢えず……」

『アダマスの鎌』

様子見ですかね、それでもしないとよく分からない……ですし」

「アツサさん、無理に冷静を装わなくても……」

「あまり、敵の前でカツカするのも良くないかなあ……と」

「さつきまで感情爆発！　って感じだったのにね」

「うるさいですねえ?!」

なんて会話をしながら、再びタナトスにアダマスの鎌から衝撃波を飛ばす……が、フ

ランお姉様によってかき消される。

……完全に操られてますねこりやあ。困ったな……というか、さつきからタナトスが何かを狙っているような？

「アツサ君」

「はい？　なんですか、一護さん？」

「いやさ、実は僕の周りにはバリアが張られてるんだよね」

「しれつと重要なこと言うな?!」

「それ、私は知ってるわよ？」

「タナトスが？　となると、さつきから様子を伺ってる状態にあるのはそのバリアを壊そうって魂胆ですね？」

「当たり前。だけど……さつきから、全くもって隙がないというね」

「……アホなんですか？」

でもなんだろう……？　それだけが理由な気がしない。バリアが具現化するとかあるんですかね……？　となるとそれを狙っている？

うーん……現状じゃ何が鍵なのか全くもって分かりませんね。取り敢えず攻撃しましょうか。

「そうと決めたらやるぞお！」



## 『雪月花』

「ちよつ……その技つてその武器じゃ出来ないはずじゃ!?」

「よく見るんですねタナトス！ 私のアダマスの鎌を！」

「ツ?! 薙刀……まさか?!」

「そのまさかじゃいいいい!!」

思いつきり体重をかけて、その上で振り回す。それだけでもかなりキツイと言うのに、雪月花となると身体を捻ったりした上でそれを一度止める、二度止める。

身体への負担はとんでもないが技としてはとてつもない威力を誇る。

本来なら、大太刀でやる技だけど……たまにはこういうそう言った括りを見殺した技を出すのもヨシ!

「うおらあああいい!! まずは一步目！」

「ぐツ……フラン！」

「……」

「フランお姉様を盾にしても無駄無駄無駄ア！」

フランお姉様ごと、タナトスを吹っ飛ばす。そのまま二歩目と参ろうか!!

「二歩目えええ!!」

「なっ!? ここのまで届かないはずじゃ?!」

「今回は飛べるんですよねえ!!」

「ですよね言いたいだけですよね?」

ヤメロオ! (建前) ナイスウ! (本音) F o o o ! (タナトスを切り刻むのは) 気

持ちがいい!

けど、フランお姉様を巻き込みかけてるのは反省しなきや (使命感)

「ラストおとおお!! 三步目ええええええええええええ!!!!」

「ちい!! フラン!!」

「無駄無駄ア! 何故なら、フランお姉様はさっきの風圧でこちらに来れなくなつてますからねえ!!」

「やめてええええええ!!」

「アハハツ!! やめませんよオ!」

「なあんちやつて!」

「なっ!」

気が付いたらフランお姉様が目の前にいた。何故? 確実にこちらに来れないはずなの!!

「……『雲湖朕鎮』」

「……フツ、決まったわね」

「ずこっく!!!」

いきなりの雲湖朕鎮は反則ですよオ!? ちよつ笑ったせいで身体を捻りすぎて……ッ!

「アラアー!!!」

某オワコンピエロのように、地面に落ちてしまった。傍から見たら、滑ったようにしか見えないんだろなあ……めつちや痛いんですけどね、遠心力がだいぶかかってましたし。

「笑ったわね? それが貴方の敗因よ!」

「……『キュツとしてドカン』」

「うわつと……つてえ?! バリアが……壊された?!」

一護さんのバリアが無くなってしまったらしい。いや、でも一護さんはバリアが無くても最強……つてアレ? 一護さんつてあんなに身長大きかったつけ?

「……ッ!? まさか、本当にそうだったとはね。闇乗弑一護いや……暇神様?」

「暇神……?! つて誰ですか?」

「闇乗弑一成さんが最初に作った神のことですよ、アツサさん……」

「ああ! ……でもなんでそんな方が? て言うか別に死なないのでは?」

「そんなことは無いわ。今や、神は限りなく【人】に近くなってるくらいには強くなって

る。所詮初期型なんて屁でもないわ」

「クソっ……舐めるなよオ!!」

そう言つて殴りかかつていく、一護さん……いや、暇神さん。でもその拳は届くことなく、あっさりとかウンターを取られて、ダメーヅを食らう暇神さん。

「ちい! クソがッ! 俺はここまで弱かったのかよ!?!」

「それが【人】の加護を過信した結果よ、暇神様? じゃあ死になさい。

『雪月花』

私の技をいとも簡単にコピーしたタナトス。いや待つてくださいいよ?! 私があれほど苦労して使えるようになった技を、いとも容易くやらないで?!

「グワアアア!!!」

「あら? 一撃目でもう限界? じゃあ少し様子見しましょうか」

いくら暇神さんだったとしても、今までは閨乗式一護さんとして接してくれた……いや、私の手で殺してしまった、社畜さんのように接してくれた。

そこは感謝しているし、それに私もだいぶ心が動いていた。暇神さんのお蔭で、私は……私は……

「おい、泣くなよ……アッサ」

「暇神さん!?! しゃ、喋っちゃダメですよ! 今は回復に努めなければいけないんです

から!？」

私はそういうが、なにか喋ろうとする暇神さん。より涙が出てしまう。そんな私の涙を、暇神さんは指で拭う。

「泣くなつて。なに、死にやしねえよ。この程度じゃな?」

「でも、でもお……」

「シャキツとしろ、シャキツと……後は任せたからな。お前が俺の跡の「人」だ」

「……分かりました」

暇神さんに言われて、ハツとする。そうだ、「人」はもう私しかない。ならば誰が跡を負うというのだ。もう私だけだ、だから私が継ぐしかない。だからこそ、これからは

「この私がナンバーワンだ!」

「フツ、それでこそだな……つと、もう時間らしい」

よく見ると、暇神さんの周りはキラキラと光り始めている。それが命の光だと判断するのは、容易い事だった。

「もう……逝くんですね」

「しゃあない。まあ、仲間とか親父が待ってっからな」

「では……」

「ああ。生きろよ、アツサー！」  
そういうと、暇神さんは消えていったのだった。

## リコリスラジアータ

あの人は……最後に託してくれました。暇神さんはとても重要なものを残してくれました。

「それがこの……バリアダヨーン！」

「……なによダヨーンって。アホ面にはちようどいい語尾ね」

「なんだあおめえ、ぶっ殺すぞ」（悟○風）

いや、いい感じにあの人みたいな顔になるかと思つてダヨーンって言つたんですよ。そもそも、闇乗式一護さんは概念だったようですね。それを確認するための暇神さんにかかつていたバリア。

そして確認した上で保護してるのが闇乗式一護本人。さつき破壊されたのは闇乗式一護さん本人。まあでも確認できなきや破壊なんて出来ない。だから本当は偽物を掴まされたのね！ フランお姉様は！

「でも、なんで私はあの人に護られないんでしょうかね……？」

「ちよつ……アツサさん。いきなり情報量が多すぎます。少しづつですね」

「簡単に言うと、闇乗式一護さんは見えないんですよ、誰にも。そして一護さんは他人に

なれる。見えないからこそ、見えるように実態が必要なんです」

「条件みたいなもので……バリアが必要と？」

「まあそういうことですな」

「騙されないわよ！ フランツ!! その小娘をさっさと汚い花火にしなさい！」

「嫌だね〜！ ベーッ！」

いつの間にやら目が覚めていた……訳ではなく、無意識的に動くフランお姉様。何故かかって？ そりゃ簡単ですよ。

「この、こいしちゃんも居たのだ！」（キラーン！）

「流石こいしちゃん！ 可愛いよ！ 最強だよ!!」

「馬鹿な?! その小娘の意識も、無意識も、死んだはずじゃ……」

「死んだんだけど〜また復活させたのら☆」

「……そう言えば、こいし嬢は無意識を司っていたね。タナトスのせいだ」

「げッ！ あの時の娘か!？」

「なんでもありだね、私って！ なんて罪な女の子〜！」

「可愛いよ！ 最強だよ!! こいしちゃん!!」

私がおたくみたいだつて？ 今更やる？ おたくな女子でも恋が出来る裏技があるんですよ！（某サボテン）



それがですね、女の子同士でって馬鹿野郎！　こんなこと考えてる場合かっての！

こいしちゃんはなあ……タナトスのせいじゃないんだよ！（多分）多分じゃダメじゃない？　ダメみたいですわ……（説明諦め）

まあでもフランお姉様はこれで動かせないはず……

「つまり、これで私の本気が見せられるって訳ですよ?！」

「くツ!?　貴女程度が本気を出したところで私が倒せるとでも?！」

「その顔、綺麗だな。ちよつと見させてくれ……おつと、その必要はなさそうですね。なにせ……その顔面今からパンパンに膨れあがるんですからねえ!!!」

そういうと私はかつて暇神さんが得意としていた、デトロイトスタイルを取ると、速攻でフリツカーを繰り出し始めた。

「オラオラ、死ねとまでは言わねえけど死ね!」

「ちよつ、へブツ!　どつちなのよ!」

「つまり死ね!」

『アダマスの鎌　薙刀　く雪月花く　』　くらいやがれええええええ!!!」

「や、やめろおとおお!!」

辞めるかバカヤロウ!!　まずは一步目じゃ!!

「まずは上から振り下ろす!!」

「そんな、そんなものお……」

次に二歩目ええええええええ!!

「次に左から薙ぎ払う!!!」

「そ、そんな……ものおお！」

ラストお!! 三歩目ええええええええええええええええええええええええ!!

「下から思いつきりッ！一回転して終わりッ！閉廷ッ!!」

「そんなものおおおおおおおおお?!」

最後まで見てなかったな？だからさっきのタナトスの雪月花じゃあ暇神さんにトドメまではいかなかったんですよ！

「お前の敗因はたったひとつ！私を……【人】にしたことだ。あ、違う！怒らせたことだ……」

「ノワアアアアアアアアア!!??」

「あれ？まだくたばってないんですか？じゃあ最後にフランお姉様と一緒にく？」

「『キュツとしてドカーン』」

「あ、ああ……」

最後の一撃は切なくて儂いとはよく言ったものですね。本当に悲しくなりそう……いや、ないわ。今のは無いわ。自分。

「タナトスが死んだし、これでフランお姉様も……?」

「戻ったよ、アツサ!」

「さっすがフランお姉様!!」

うん。これでハッピーエンド、多分。いや、もうちよつとだけ続くんじゃない!

「はあ?!」

「いや、あのですね、本当に申し訳ないというか。なんと言いますか……」

「闇乗式一護がまだ死んでないってどういうことよ!!?」

「いや、ですからね? 彼は概念であって……」

「だから生きてるって!? もうふざけてんのか(憤慨)」

「大真面目ですよ、フランお姉様」

いやあ……思ってた以上にフランお姉様激おこだね！（白目） まあ私の師匠って立場はある意味、フランお姉様の位置ではあったよね……。

まあ、まあでもフランお姉様が元祖だし?! 大丈夫でしょ?!

「まあ、そうだけどね。じゃあアツサはその彼岸花……捨てちゃうの?」  
「捨てませんよ。死んじやいましたけどね」

あの時、全ての力を使い切ったようであの戦い以降、一切喋らず、その上枯れてしまったのだ。

……まあ、召喚したの「一人」とか、神に近い人呼んでますからねえ、流石に無茶のし過ぎですよ? ゆっくり休んで……どうぞ（慈悲） でも悲しいですね、これからは常に一人ですよ私や。

「一人じゃないですよ、アツサさん」

「さとりん……」

「私が居ますからね。それに……義姉さん達ですよね?」

「ですよね言いたいだ——」

「もうそのネタに頼るのNGにしない?」

「それ言ったらアツサさんノリノリで悟○やってたじゃないですかあ!!?」

「そ、それはですね……えーと……そのにげるんだよろ!!」

後ろから待てやゴラアと言わんが如くの顔で迫りよつてくるさとりん。うん、だいぶさまになってきたじゃねえか……つてところでの作品はここまで! またいつか

!!!

???  
s i d e

「てえ訳よ。なんで俺があの時ぶつ殺されなきやいけねえんすか!?!」

「いやね、それは別になんてことは無い理由で……」

「でもよろ? 納得がいかねえんだよ。どうしてこの行動がダメなのか、これがどーし

でも知りたくてよお〜?」

「その言い方。N○Kのドラマの岸辺露伴○○○ないの【くしゃ○○】のセリフの一部に似てるね」

なんて冗談を言ったただけなのに、暇神はすぐにビビリ散らす。やれやれ、本当に誰に似たんだかねえ?

「親父に似たんだろがよ!? なんでそんなことも分かんねえかなあ……」

「それはこつちのセリフだよ。というか、別に死んでまでアツサちゃんに伝える必要はなかったでしょw」

「それはなあ……言われちゃ仕方ねえか。闇乗式一成にはお見通しつてか?」

「うるさいなあ、ぶつ殺すよ?」

まるで今死んだ後の世界にいるんだからもう殺せないだろって感じの顔をしたね?

僕には余裕で殺せるんだよね。まあ関係ないからこの話はここで終わりにしたいんだけどね〜?

まあ最終話だし、この回で次回作の伏線でも貼っておきたいんでしょ?

簡単に言えば僕らの――

「あー!! バカ親父!! 言うんじゃねえよ! これから楽しみにしてる可能性が僅かながらにもある読者の楽しみってやつを奪う気か親父!？」

「おっと、それはいけないことをしたね。まあ、ここではアツサちゃんの発言の一部を纏めておこうってね。そういう寸法だよ」

「文字数稼ぎの権化かコノヤロウ……」

まあまずは、闇乗式一護の話から。

あの子はアツサちゃんの言った通り、概念だ。闇乗式一護っていう概念。唯一無二の概念だから、誰にも認知することが出来ない。勿論、僕以外はだけど。

で、この子概念だから、色んなものになれるんだよ。闇乗式の家系の血のせいだね☆  
んで、フラン君が破壊したのは、偽物……では無くて、本物の闇乗式一護だよ。だけど概念までは破壊出来なかったみたいだね。実はあの時、何も壊せてないんだよ。

だって、【目】が無いもん、アレらには。いやあ、壊れた時は何してんだこのバカ息子  
(暇神) って思った (小並感)

ほいで、壊れた原因はさっき言おうとした通り、暇神のせい。あのバリアはかけられた人の意思で壊れるようにしといたからね。

んで僕の存在だけど、それはまたいつかね〜それじゃあごきげんよう!!